エール大学図書館所蔵S・ウェルズ・ウィリアムズの

自筆書簡の解読と活字化

（20520270）

2008年度科学研究費補助金

基盤研究（一般研究C）研究成果報告書

2011年3月

研究代表者　宮　澤　眞　一

（80109727）

（埼玉女子短期大学）

エール大学図書館所蔵S・ウェルズ・ウィリアムズの自筆書簡の解読と活字化

（20520270）

2008年度科学研究費補助金

基盤研究（一般研究C）研究成果報告書

2011年3月

研究代表者　宮　澤　眞　一

（80109727）

（埼玉女子短期大学）

2008 年度～2010 年度

科　研　費　報　告　書

エール大学図書館所蔵 S・ウェルズ・ウィリアムズの自筆書簡の解読と活字化

研究課題番号：　20520270

研究代表者　　宮澤眞一

研究代表者番号：　80109727

埼玉女子短期大学

目　　次

エール大学図書館所蔵S・ウェルズ・ウィリアムズの自筆書簡の解読と活字化

第一報　S・ウェルズ・ウィリアムズの自筆書簡の解読と活字化

（1）2011年2月2日作成、日文報告：　科研費研究の総括的報告　………………　9
（2）2011年2月2日作成、英文報告資料：　The Out Letters of S. Wells Williams at the Yale University Library　Archive---A List　………………………　29

第二報　研究成果（論文）

（3）2010年4月出版、拙著からの抜粋日文論文：　米国文書伝道師S・ウェルズ・ウィリアムズ　………………………………………　83
（4）2012年3月発行、日文紀要論文：　避暑地としての北京西山八大処1862～1868年　………………………………………………　99
（5）2010年9月発行、日文紀要論文：　アンソン・バーリンゲイム伝記研究（一）　………………………………………　143
（6）2010年8月国際学会発表、日文論文の中文訳：　19世纪初期旅居澳门·广东传教士对日语的研究　………………………………………　193
（7）2010年9月発行、日文紀要論文：日本開国に於ける澳門の歴史的位置に関する試論的考察　………………………………………　211
（8）2009年3月発行、英文紀要論文：A STUDY OF S. WELLS WILLIAMS' EARLY LETTERS　………………………………………　261

第三報　研究成果（学会発表・講演・書評・資料）

（9）2010年11 月講演会発表、日文講義資料：　国際理解の四重奏 ………… 289
(10) 2008年12月国際学会研究発表、英文原稿：　Americans in Macau and the Opening of Japan ……………………………………………………………… 307
(11)　2008年9月国際学会研究発表、英文原稿：The *Chinese Repository* (1832～1851, Canton & Macao) and Its Historical Significance ………………………… 311
(12)　2010年11月号雑誌掲載、日文書評：楠家重敏著『アーネスト・サトウの読書ノート』…………………………………………………………… 331
(13)　2011年3月国際研究会発行、日文原稿の中文翻译: 鲁迅翻訳雑感 ……… 337
(14)　2011年3月国際研究会発表、英文配布資料: The Letters of Dr. James C. Heburn and His Wife Clara to S.Wells Williams ………………………………… 375
(15)　2010年9月国際研究会発表、英文原稿: The Western Hills near Beijing …… 413
(16)　2011年3月国際研究会発表、英文配布資料: Morrison, Milne and Medhurst: A Note on Protestant Missionaries' Early Attempts at Forming and Applying the Metalic Moveable-Types in China ……………………………… 425

発表初出処一覧 ………………………………………………………… 435

第 一 報

S・ウェルズ・ウィリアムズの自筆書簡の解読と活字化

(1)　2011年2月2日作成、日文報告

科研費研究の総括的報告

はじめに

本研究の対象であるS・ウェルズ・ウィリアムズ (S. Wells Williams: b. 1812/ 09/ 02, Utica ~ d. 1884/02/ 16, New Haven; 以下で時にSWWと略す)を意識したきっかけは、今日から数えて40年前に遡る。大学院生の頃に、新刊書紹介欄（「クリスチャン新聞」1971年10月17日号）に書評した一冊が、保永貞夫著『七人の日本人漂流民』（小峰書店）という児童文学作品であったためである。同じ七名の漂流する運命について、後年に三浦綾子先生が、『海嶺』三巻本（角川文庫、平成21年）で取り上げているのを知った。そこでは歴史事実を掘り下げて書くというよりも、クリスチャン作家らしい内心の葛藤を独自のテーマとして展開していた。

モリソン号渡来劇それ自体は、希望と失意に終始した。日本の近代史に於いては、マカオへモリソン号が戻ってから日本国内で起きた騒動の方が、深刻な政治社会問題に発展した。一方には幕府による鎖国政策の強化があり、他方には進歩的な蘭学者の間に、事件の余波が襲いかかったからである。蛮社の獄。ここでも進歩的な知識人の希望と絶望の入れ替わる悲劇に終始した。吉村昭先生は、長編小説『高野長英』を著して、ウィリアムズ渡来劇の影響が、開国待望論者の側に残した悲惨な運命を夜明け前の日本的状況下に描き出し、克明に跡付けている。

1837年、マカオから日本へ七名の漂流民を帰還させるというこの壮大な希望に、モリソン号が使われ、ウィリアムズは日本語通訳として参加していた。不毛に終わった最初の日本渡航が、しかし、再びウィリアムズの再来を促すように時代は進行した。日本の近代史の節目に登場する契機を提供したわけである。

1853年と1854年にペリー提督が、日本開国のために艦隊を伴い渡来するの先立ち、マカオに立ち寄った。提督は即座にウィリアムズとの面会を

要請した。マカオ・広東在住のウィリアムズを抜擢して、主席日本語通訳の役目を引き受けてもらいたいと考えていた。シーボルトの強要に近い通訳就任の申し出までも断り、ウィリアムズをおいて他にないと確信しているペリー提督が、判断基準にしたものは、ことわるまでもなく、モリソン号による SWW の日本渡来という履歴にあった。一連のこうした流れが、本研究の対象にしているエール大学図書館所蔵する SWW コレクションの中のペリー書簡によって追跡できる。

幕府側との交渉場面は、文書だけでなく、日本側の絵師による絵画になんどか描かれていた。その中でも秀作の一点が、長野市松代町の真田宝物館の所蔵する「横浜応接場秘図」であろう。米国側使節団面々の列席するなかに、一人、サングラスをかけた人物が座している。居並ぶ日本側参列者の眼に映ったウィリアムズの姿とは、弱視者のそれであった。

一般の日本人読者の知るウィリアムズは、以上に述べてきたように、モリソン号とペリー艦隊の渡来の二つに尽きるであろうか。

科研費による本研究を申請するに至った経緯には、どちらかと言えば間接的な影響と言えるこうした一般的知識に加え、それとは別に、直接的な契機が存在した。十年ほど前に遡る。

マカオと広東に対する関心が、私のなかで次第に求心力を集めるきた時期にあたっていた。その頃、五回ほど現地滞在を繰り返していた。それにはそれなりの進展段階なり、研究パターンが先行したものと、今では思い出される。

老木研究者の回想を今回このように報告書の冒頭に記すことは、場違いであるかも知れない。定年一年前の現時点ともなると、どうしても回顧的な心境に陥りがちになるのを特にお許し願いたい。しかも過去二十年余りの間に、三度にわたり、今回同様の科研費による研究を認めていただき、支援されて実施し、無事に完了できたことに対しては、感謝する気持ちを抑えきれない。

最後と言えるこの機会に、私的な回顧を総括報告のなかに溶け込ませて

おきたい心の働きは、隠しておけないもののようである。

私の研究テーマが、日本と外国との関係と比較、という一つの側面ではいつも共通していた。最初に、近代英文学と近代日本文学、次に薩摩藩と英国もしくは近代日本と近代英米国、最後に近代中国・近代米国・近代日本、という段階で進んできた。二国間の影響や二国間の関係史の研究に終始せずに、中国・英米・日本という三角形の構図によって、調査研究を進めていくように変化したのも、自然な発展であったように今では思う。

三角形では三本の線が、トライアングルを形成するように、三つの二国間の関係で構成され、日・英米、中・日、中・英米、それぞれの直線に関係する資料を集めて読み進むことに、結果的に展開してきた。ライデン大学の Leon Blusse 先生が、追及した東アジアの三つの都市（バタビア・マカオ・長崎）の三角関係とか、また triangle approach という方法論もここで思い出す。

長崎・横浜の歴史や役割を考えているうち、上海との関係史を読むようになり、上海の歴史を調べているうちに、先行したマカオ・広東の歴史とその役割が、視野に入ってきた。そういう自然な流れであった。マカオの存在と重要性を意識するようになったこと。このことが、近代中国の開国史に関心を深める直接的な契機となった。鹿児島、長崎、横浜、東京、それと中国の上海、香港、広東、マカオそして北京という順番に、私なりの研究の視野が広がってきた。東アジア近現代の国際関係史の拠点をこうして集約的に勉強できたわけである。

マカオは日本の近世史それに近代史において重要な位置を占めている。そのなかでも、ポルトガルはもとより、英国ばかりでなく、新勢力としての米国が進出するようになる十九世紀以降には、この国際都市の持つ目覚ましい役割が直感できた。今でも東アジアの対外史に、マカオが中核的な位置を占めている、という私なりの信念に変わりない。それに、その中心人物の一人が、米国人宣教師のウィリアムズである、という確信にも変化はない。

ここで一例を挙げて説明しておきたい。ウィリアムズは謙虚な性格の宣教師であり、目立つことを嫌った。開国後の幕末から維新にかけての日本において、伝道畑の草分けとなって活躍したＳ・Ｒ・ブランウンやＪ・Ｃ・ヘボンは、日本近代史に役割を演じ、今日まで名前を残しているのと大きく異なる。

彼ら二人の米国人宣教師とウィリアムズとは、畑違いの人物のように、対照的に映る。日本開国に先立つ1830年代から1840年代にかけて、彼ら二人とそれぞれの家族が、マカオで文字通り同じ屋根の下で寝食を共にし、世話を受けた恩人的友人。その人物が、ほかならないウィリアムズであった。横浜、上海の先に、マカオがある、という意味は、単にこうした人物関係の伝記的事実からも証明できそうに思える。

１　Ｓ・ウェルズ・ウィリアムズの再評価

前出のヘボンやブラウンに比較して、日本に於けるウィリアムズの知名度は、きわめて低い。一般読者の間ばかりでなく、研究者の間でもそうなのである。中心的なテーマとして、研究者の焦点が集まったことは、最近までなかった。

ウィリアムズに言及している関連研究書からは、主に次の五点をあげておきたい。

(1) 相原良一著『天保八年米船モリソン号渡来の研究』(野人社、1954)
(2) 都田恒太郎著『ロバート・モリソンとその周辺——
　中国語聖書翻訳史』（教文館、1974年）
(3) 矢吹晋著『日本の発見——朝河寛一』（花伝社、2007年）
(4) 塩野和夫著『19世紀アメリカンボードの宣教思想＜１＞
　１８１０～１８５０』(新教出版社、2005)
(5) 富坂キリスト教センター編『原典現代中国キリスト教資料集
　プロテスタント教会と中国政府の重要文献1950ー2000』

（新教出版社, 2008）

以上五点のうちで、(1)相原は、終戦後まもなくの頃に、米国公文書館の保有する一次資料を探索・駆使している点で、資料的な価値は今日でも遜色を見せていない。ただ、ウィリアムズに関する限り、資料や言及が、同書の方々に拡散しているために、彼の役割に関する集約的な叙述と分析に欠けている。断片的な印象を残してしまう点では、(2)都田も(4)塩野も、同じである。

(3)矢吹の場合には、朝河寛一をテーマにしていて、エール大学に在学中に博士論文の指導を担当した指導教官が、ウィリアムズ (SWW)の一人息子にあたるフレデリック (FWW)であるところから、ウィリアムズへの言及には興味深いものがある。海外に留まって日本史研究に携わり、入来家文書を研究した朝河寛一と、やはり海外に留まって中国学に没頭したウィリアムズとは、どこか共通点がありそうに見える。

(4)富坂は、ユニークな研究資料の提供である。中国に於ける伝道活動が、日本の伝道に歴史的に先行している点を思い出すときに、近現代の両国で発展してきた伝道と現地教会の形成を比較する上で、欠かせない資料になっている。直接的でないにしても、ウィリアムズ研究の大事な関連基礎資料と言えるであろう。

こうした研究状況のなかで、マカオ・広東に関心を寄せて通ううちに、かっての英国系商人等の在住者によって書き残された滞在記・書簡・日記・中国文化論の多いのに気づいた。画家ではチナリーも多くの珍しい絵画作品を残している。最初のうちは、そうした英国系の資料を集めては読んでいたのである。なかなか初版本の入手は困難であり、ロンドンに行くようなときに、ストーントンの中国文化論、モリソンの二巻本伝記などを購入できた。神保町の洋書古書店では、ギュツラフとメッドハーストの中国滞在記を購入した。それにマカオのポルトガル系新刊書店と広東の大型書店洋書売り場にも、渡航のたびに足しげくかよい、新しい研究書や研究

資料を集めるように努めたので、それなりに資料収集の成果はあったと自分では考えている。

そうした英文の研究書や資料の中に、ウィリアムズが、中心的なテーマになっているものを発見できていない。英文の研究に関する限り、未刊の関連ドクター論文が、一本しかない事実も、徐々に分かってきた。Martin Rober Ring の書いた *Anson Burlingame, S. Wells Williams and China, 1861~1870: A Great Era in Chinese American Relations* (Tulane Univ., 1972)がそれである。アメリカでの研究それに再評価は、日本と同様に遅れているのであるから、とても洋書の伝記・書簡集・研究書などが、目の前に飛び込んでくるはずのない不人気振りである点を、今になって理解するようになったにすぎない。

米国ばかりでなく日本に於いても、ウィリアムズに焦点を当てた研究者は、陶徳民先生一人と言えそうな状況にあった。

陶徳民「日本の開国とアメリカ人宣教師—S・W・ウィリアムズと初期日米関係—」(科研費・基盤研究C、研究期間：2004 年度～2006 年度）は、日本や米国のウィリアムズ再評価に向けた実に開拓的な業績であり、高く評価できる。関西大学の陶徳民先生は、上海と大阪の大学で研究した後に、米国の大学で教鞭をとられた国際的な指導的学究である。どんな契機でいつ頃からウィリアムズ研究を一つのテーマにされたのか分からないものの、中国の近代史研究者のあいだに、急速に関心を集めてきていたウィリアムズの存在に、先生は、早くから気付いておられたようである。それに科研費研究の大きな成果として、本格的なウィリアムズ研究の始動に加え、吉田松陰と羅森に照明を当てる新資料の発掘も見られた。

再評価に向けた研究は、日本・米国でなく、顕著に中国で始動し台頭してきていたのである。単行する私の歩みは、そうした中国気流の動向を知らずに、まるで雲間からマカオ・広東の青空を眺めて歩いてうちに、十年ほど前からの独歩が、北京の方角に向いてきただけのことだ。こうした中国学者たちの間に流れる宣教師研究の隆盛に、引き寄せられ影響されていることに気づかないままであったと言える。

日本でのウィリアムズ研究において第一人者が、陶徳民先生であるように、中国での第一人者は、北京外国語大学の顧鈞先生であることをやがて知るようになった。いずれも中国国籍の研究者たちばかりである。今日の地点から振り返ってみるとき、2003 年という年が一つの目安になりそうに考えられる。

陶徳民先生の科研費研究は、2004 年から始まっているので、前年 2003 年は申請の年であたる。また、顧鈞先生によるフレデリック (FWW)のウィリアムズ伝 (SWW 伝記)が、出版されたのも 2004 年であり、前年 2003 年は翻訳・印刷作業の真っ最中であったように推測できる。

2003 年というウィリアムズ研究上の共通項が一つ見えてきたら、もう一つの共通項が閃き始める。名著の誉れ高い『方言と文化』の著者、周振鶴先生である。

顧鈞先生はウィリアムズ伝記を 2004 年に出版するのに続き、20 冊余りの SWW 編集の英文雑誌 *The Chinese Repository*、その復刻版を編集出版し、貴重な研究資料の復活に貢献した。さらに、一年サバティカルの米国大学滞在中に、ウィリアムズの研究書をまとめ上げてもいる。2009 年出版の『衛三畏及美国早期文学』こそ、中日米の三カ国のなかで、最初のウィリアムズ研究書の誕生となった。

2003 年前後の同じ時期には、関西大学の陶徳民先生と北京外国語大学の顧鈞先生によるウィリアムズ研究の始動化に加えて、もう一つの大事な動きが別にあった。杭州の浙江大学である。2006 年に孔陳焱先生が、「衛三畏及美国早期漢学的発端」を博士論文として発表した。最近になって一冊の書物にまとめられ出版する至った。『衛三畏及美国漢学研究』(2010 年 9 月、上海辞書出版)である。これもまた中国人学者の作品であり、中日米の三カ国のなかで、最初のウィリアムズ研究博士論文の誕生となった。

同書の巻頭には先ず、陳先生の博士論文研究が、もともと浙江省教育庁の 2003 年度科研資助、同じく 2003 年度の浙江省社会科学基金資金に採択された最終研究成果である、ことが記されている。同書自体の出版にも、やはり浙江省の今度は社研聯省級社会科学学術著作出版資金、浙江大学 211 工程「中国伝統文化及江南地域文化」課題資助出版として、出版補助

金を受けてもいる。

ここで注目したいのは、2003年という上記した同じ年号であり、また杭州という点でもある。こうして次々とSWW研究成果の発表のつづくようにみえる中国学会には、もうひとつの研究拠点が、杭州の浙江大学であって、その指導的な学究が、ほかでもない、『浙江早期基督教史』(杭州出版社、2010年)の著者、龔纓晏である、と考えるように至った。別の流れなのだ。

2　伝記研究の必要性

父親SWWの死後まもなく1888年に、フレデリック(FWW)が出版したウィリアムズ(SWW)伝記は、久しく陽の眼を浴びずにきた。上で述べたように、中国語訳の出版が2004年の顧鈞訳である。日本語訳の方は、2008年に拙訳『清末・幕末に於けるS・ウェルズ・ウィリアムズ生涯と書簡』と題し、北京で印刷し日本で出版できた。翻訳作業それに印刷・出版までに、どうしても二、三年を要するので、2005年あたりには取り掛かっているはずである。上記してきた2003年前後に本格化するウィリアムズ研究の中国動向を思い合わせてみるとき、邦訳は多少とも連動するように思えるであろうが、実際にはまったく別のところから始まっていた。詳しい事情や直接的な経緯については、「訳者前書き」に記してあるし、本報告書にも抜粋を再録してあるので、ここでは繰り返さない。

ただ、なぜ宣教師の研究なのか、ウィリアムズ伝の翻訳なのか、それに今回のウィリアムズ未刊書簡の調査・研究に進むのか、という一つの研究テーマに対する関心と深入りについては、少し述べておきたいことがある。

先に触れたロバート・モリソンの二巻本伝記、それにフランシス・ホール日記(F.G. Notehelfer edited: *Japan through American Eyes, the Journal of Francis Hall, Kanagawa and Yokohama 1859~1866*, published by Princeton Univ. Press, 1992)の二冊を読んでから、宣教師に関連する歴史資料に関心を深め

るようになった。ロンドン大学のSOASに残る膨大なモリソン関連資料のなかでは、砂粒ほどのほんのわずかな資料にすぎないものの、宣教師の残した資料に対する私なりの見方を一変させた。学生時代以来なんどか手にしてきた高谷道男先生の『ヘボン書簡集』『ブラウン書簡集』とは、一味違った資料性を上記二冊に感じたためである。

宣教師の残した私的な文書（日記・書簡）のなかから、周辺で起きている生活実態をつかめる、という新角は、後者のホール日記を読むにつれて確信へと変わった。ヘボンとその家族、とりわけ一途な信仰者ヘボン夫人クララの重大な存在に気づかせてくれた貴重な、それでいて楽しい読書が出来たことを今にも覚えている。

マカオ・広東、それに初期の中国開港地に在住した外国人のなかで、生活実態を感じさせる日記や書簡という種類の資料のなかに、宣教師関連のものは、比較的少なめである点についても分かってきた。信仰と伝道に明け暮れてする宗教家の敬虔な一面ばかりを思い込んでいたら、そうではないのである。彼らにも当然のことながら、私どもと同じ生活がある。そんな単純なことに築くのに時間がかかりすぎたようである。

ウィリアムズのように1833年から1876年に至る40年ほどの長い期間を中国の南部(マカオ・広東)で20年余り、中国北部（北京）で20年弱の年月を健康に過ごせた一点だけでも驚きではないであろうか。物事をseriousに考えるばかりでは、とうてい異国の土地での生活は成り立たないはずである。それでいて聖職として受け止めている宣教師の使命には、たえず忠実にseriousでありたいとする心が働いている。生活者の弱い肉体と聖職者の強い使命感の間の実際的バランス感覚に、ウィリアムズは、特に優れていたように思われる。

こうした生活者としての肉体的な外見の一面は、息子による伝記ばかりでなく、エール大学に寄贈された未刊の自筆書簡、それも膨大な数量の資料のなかに残されていた。

几帳面で実際的な性格を多く見出せる宣教師の間に、実は、このように沢山の私的な書簡や日記を残している人物がいる。信仰と教会史の文献と

して見るだけに終始することなく、歴史研究資料という広い視野のなかでも、彼らの残した膨大な資料が、貴重な情報・監察・判断を提供すると考えるに至った。SWW はその代表格的人物と言える。

3　エール大学図書館文書室所蔵 S・ウェルズ・ウィリアムズ家の自筆文書コレクションと、研究対象の特定

ウィリアムズの一人息子でエール大学の歴史學教師になったフレデリックは、1884 年の父親死後、早めに私的な文書、とりわけ父親発信の私的書簡 (Out Letters)を集めて整理する仕事に取り掛かった。伝記執筆に使用したあとも、収集と整理に努めていたようであるが、FWW 晩年となってそれら父親関連の私的文書を親子両者に馴染み深いエール大学図書館に寄贈した。それと同時に、自分自身の私的文書、それに一族に伝承されてきた他の家族の自筆文書類も一緒に、エール大学図書館文書部門に寄贈した。

本報告書で扱う研究対象は、これらウィリアムズ (SWW)、フレデリック (FWW)、それに家族を加えた三者の私的文書から構成されている。同コレクションの現所蔵者、正式な名称、それに分類番号は、以下の通りである。

Yale University Library: Manuscripts and Archives.
The Samuel Wells Williams Family Papers.
MS 547.　April 1980.　Revised December 2008.

また、同コレクションの資料分類は、以下のようになっている。

(1)　Series I.　Correspondence, 1824~1939.
(2)　Series II.　Samuel Wells Williams papers, 1828~1905.
(3)　Series III.　Frederick Wells Williams papers, 1876~1927.

(4) Series IV. Papers of others, 1831~1941.

(5) Series V. Oversize Folios, 1826~1886.

(6) Accession 2010-M-027. Additional materials

六つのグループに分類に整理されているコレクション全体のサイズは、(1) Series I から(5) Series V までで、28 箱それに 3 巻大判書類で構成する直線 20.25 フィートの長さである。この数量のなかで本科研費の研究対象は、自筆書簡であって（1）Series I. Correspondence, 1825~1939、および追加資料ひと箱分（6）Accession2010-M-027 に分類されているが、コレクション全体の半分を占める。

コレクション全体の約半分、約 10 フィートの自筆書簡類を 35mmマイクロフィルムに収すると、後述するように、10 本のリールとなった。一本のリールには、平均約 1300 コマ、つまり 1300 頁分の書簡が収録できている。

10 本の書簡マイクロフィルム・リールのうち、ウィリアムズ (SWW)に直接関連する書簡(Both the Out Ltters and the In Letters of SWW)は、全体で 8 巻にあり、残り 2 巻が、ウィリアムズ死後のフレデリック (FWW)に関連する自筆書簡である。

従って（1）Series I. Correspondence のうちで、ウィリアムズ関連の自筆書簡に限定するとき、約 10000 頁 (1300 pages per reel x 8 reels)という数量計算ができる。ウィリアムズ発信書簡と受信書簡の両方を含めた概算の頁数である。一通の自筆書簡が、平均して A5 判の 4 頁分（通常の書簡用紙 A4 判を半分に折ると、A5 判 4 頁となる）として概算したら、2500 通の書簡ということになる。実際には、6 頁以上の長文書簡となるケースが多い。なにしろ相互の意思疎通の手段が、自筆書簡に限られていた時代であるのだから、実際には長く長くなりがちであった。

そのほかに、ウィリアムズ関連の自筆書簡が、(2) Series II. Samuel Wells Williams papers にも多数含まれているので、見落としてはならない。もともとこの Series II の分類は、自筆原稿、それに新聞記事切り抜き・投稿記

事原稿等の ephemera を内容的に選んでいる。ここで特に注意したい自筆資料が、整理箱 30 番（「Box 30」）に入っている以下の二冊の遠征記原稿である。

Journal: trip to Japan with Commodore Perry, 1853~1854.
Journal: trip to Peking, 1858~1859.

もともと妻セイラに宛てて、二回の遠征の旅先から日々の様子を書き送った自筆書簡であるので、実際に小さく折って郵送した形跡が、用紙に残っている。後年にフレデリック (FWW)が、父親の伝記を書く際に、大幅に編集した上で使ってみたり、またそれぞれの遠征記を学会の出版物としても印刷発行した。

そうした執筆過程のさなかに、フレデリックの手によって、両者はともに合本・製本してしまっている。誠に残念である。資料の散逸を避けるためとか、効率的な執筆の方法としては、その方が、書簡のままに保管し使用するよるは、はるかに安全で便利であったものらしい。

問題は後年の私どもに至るまでの保管状態にある。合本してために、空気の流通を妨げ、湿気を保存してしまうから、現状では、ボロボロの状態に近くなってしまっている。とてもマイクロフィルムの収録作業に耐えられる状態にない。かろうじてデジカメ、それも二度の渡航によって、ようやく判読可能なコピー資料に整えられた。

エール大学図書館の分類では、Series II の各種文書類に入れているものの、日記体書簡という元来の執筆動機から判断して、Series I. Correspondence に入れてもよかった性格の資料なのである。本研究の対象にこれら二冊の遠征記を加えなければならない。両者ともに大部の遠征記である。

実際、北京遠征の終わった段階となり、1860 年 1 月 13 日の日付で妻セイラに宛てて次のような文面を綴っているのを見ても、それはわかる。1858~1859 年の北京遠征期間に、800 頁以上の日記体私信を妻に送ったと、以下の引用文で自ら明記しているからである。

If this paper could carry some new energy put into the words of desire to see you & the dear children, hope that I may soon be on the way, and faith that God in mercy will grant my wishes. I should be tempted to enlarge. I cannot close this 800th page of my letters better than by commending you and them to God, who has so far watched over us...

本研究報告書の（2）に掲載する自筆書簡の A List のうち、SWWOC という記号が入っているものが、数点ある。本研究によって Series I. Correspondence は、後述するようにウィリアムズに直接関連する 8 箱分 (Series I. Box 1~Box 7 & Box 18)を初めてマイクロフィルム化できた。これに先行して行われたマイクロフィルム化は、短いものが一つあるだけだった。1853 年～1854 年の日本遠征に関連する沖縄訪問の書簡 14 通 100 頁弱だけが、それにあたる。短いものではあるが、これも本研究の対象に加えないといけないと判断した。

書簡の時期としては、 [SWW to Nye: 1854/ 02/ 06; Napa; SWWOC]に始まり、[SWW to Nye: 1854/ 02/ 06; Napa; SWWOC]に終わる分である。このマイクロフィルム作りは、おそらく早稲田大学図書館からの依頼で作成されたように推測できる。

ウィリアムズ関連自筆書簡の最後は、2009 年末までに寄贈を受け、整理分類した後にの 2010 年から、閲覧可能になった次に挙げる新資料である。

(6) Accession 2010-M-027.　Additional materials

寄贈者のハンチングトン三世（Huntington III）が、ウィリアムズ（SWW)の弟 ロバート(Robert Stanton Williams)の子孫であるところから、新資料の内容は、ウィリアムズ宛てロバート自筆書簡が占有しているので、ウィリアムズ発信の自筆書簡を含んでいない。しかし本研究の対象に加えたい新しい資料であることに変わりない。

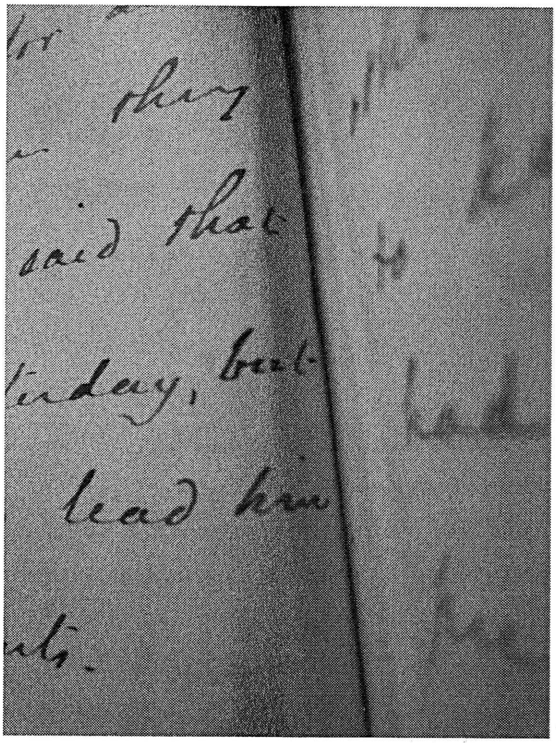

図 1 : 2010 年 8 月 10 日エール大学図書館文書部で F.M.氏の撮影。『SWW 日本遠征記』の一部

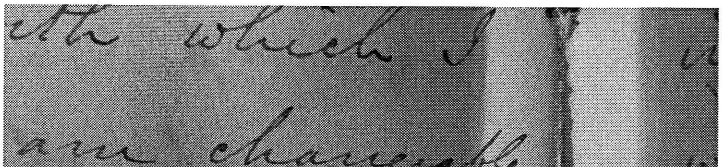

図 2: 2010 年 8 月 10 日エール大学図書館文書部で F.M.氏の撮影。『SWW 日本遠征記』の一部

以上のほかに、エール大学図書館以外に、ウィリアムズ関連の自筆書簡を所蔵する機関には、アメリカン・ボード (ABCFM)と米国公文書館(National Archive)がある。今回の研究対象としては、周辺的な参照資料に違いないものの、調査可能な範囲内で部分的に探索した。ABCFM の資料は、エール大学神学部の保有するマイクロフィルムを利用した。また、後者の外交文書は、北京の米国文化センター（美国駐華使館信息諮詢中心）の保有するマイクロフィルムを利用できた。

4　判読と活字化の手順と実績

研究対象を確定したあとに、実際の作業に取り掛かるのであるが、以下には、この研究期間に達成できた活字化の成果をリストしておきたい。

書簡年代	打ち込み総頁数 Out Letters)	打ち込み総英単語数 (Out Letters)
1830s	240 (233)	116693 (116448)
1840s	346 (344)	199764 (199819)
1850s	301 (245)	161404 (140621)
1860s	351 (261)	197387 (141651)
1870s	682 (552)	386251 (311714)
1880s	284 (209)	140979 (104838)
小計	3194 (1842)	1202478 (1008191)
Journals	505	278193(278193)
Accession	127	15116(15116)
合計 36x40	3824	1480671 (1480671)
合計 30x40	**5718**	**1480671(1480671)**

図 3:　SWW 発信および受信書簡の判読と活字化の実績

(2008/ 04/ 01~2012/ 03/ 31　3 年継続実施)

申請段階でのウィリアムズ書簡の判読・活字化は、初年度 2008 年度中に

1500頁、次年度にさらに1500頁、合計で3000頁を計画していた。上掲の図1で合計欄の 36 x 40は、通常のA4用紙に打ち出したときに、一頁あたり36行で一行あたり40文字として計算したら、3824頁分を打ち込んだという意味になる。これは目標の3000頁を超える枚数となり、下欄の一頁あたり30行、一行あたり40文字に換算すると、6000頁近くなった。目標の二倍ほどの英文を判読し、タイプして打ち出した結果である。英単語数は、百五十万近くに迫る分量となった。

5 SWW発信書簡（Out-Letters）のリスト作成

上掲の表「図3: SWW発信および受信書簡の判読と活字化の実績」に示したウィリアムズ関連の自筆書簡総数には、ウィリアムズ発信の書簡 (Out Letters)およびウィリアムズ受信書簡 (In Letters)の双方が含まれている。

後者のウィリアムズ受信書簡は、家族のみならず、知人・友人・仕事関係者等、多彩な人物による書簡を見ることができる。主だった書簡の書き手を単に以下に列挙するだけでも、興味津津というところであろう。

Bettleheim, Henry Blodgett (1825~1903), Williams Jones Boone (1811~1864), Sir John Bowring (1792~1872), E.C. Bridgman (1801~1861), Samuel Robbins Brown (1810~1880), Anson Burlingame (1820~1870), Edward L. Burlingame (1848~1922), Caleb Cushing (1800~1879), James Dwight Dana (1813~1895), Hamilton Fish, George Park Fisher (1827~1909), Daniel Coit Gilman (1831~1908), Asa Gray (1810~1888), Sophia Gardner Williams Grosvenor Gray (1855~1938), Henry Fletcher Hance (1827~1886), A.P. Happer (1818~1894), Robert Hart, James Curtis Hepburn (1815~1911), Chester Holcome (1844~1912), Samuel Reynolds House (1817~1899), Henry Ivison (1808~1884), John Glasgow Kerr (1824~1901), William Lockhart (1820~1892), Frederick Ferdinand Low (1828~1894), W.A.P. Martin (1827~1916), C.W. Mateer (1836~1908), John Robert Morrison (1814~1843), William Muirhead (1822~1900), Gideon Nye

(1812~1888), George Talbot Olyphant, Peter Parker (1804~1888), Sir Harry Parkes (1828~1885), Matthew Calbraith Perry (1794~1858), William B. Reed (1806~1876), Charles Scribner (1854~1930), William Henry Seward (1801~1872), Benjamin Silliman (1779~1864), Edward W. Syle, William K. Townsend (1849~1907), T.F. Wade (1818~1895), William Hayes Ward (1835~1916), Williams Family, M.T. Yates (1819~1888), Wing Yung (1828~1912)。

これらの人物たちから受け取った書簡 (In Letters)が現存していても、その逆の方向のウィリアムズ発信書簡 (Out Letters)が、エール大学図書館の当該コレクションに含まれているわけでない。

現存するウィリアムズ発信書簡は、前述した二冊の遠征記のほかには、本報告書第一報の「(2)2011年2月2日作成、英文報告資料:The Out Letters of S. Wells Williams at the Yale University Library Archive---A List」で、ほぼ全てを網羅できている。上に列挙した大勢の人物と、このOut Lettersのリストを比較するときに、大きな違いがあることに気づく。断るまでもなく、ウィリアムズ発信の書簡 (Out Letters)は、受信たちの手に一度渡ってから、ウィリアムズ死後に、フレデリック (FWW)のもとに返却されたものと推測できる。

二冊の遠征記を除く、ウィリアムズ発信の自筆書簡の総数は、ほぼ1267通と判断できる。

6 研究成果について

1) SWW自筆書簡の出版計画

これら二冊の遠征記とウィリアムズ発信自筆書簡は、今後一年間をかけて、最後検証し、注や索引を作る等の編集作業を経て、中国の広西と雲南の二箇所の出版社から別々に出版する計画が、2012年3月中旬の段階で進行中である。出版の暁には、断るまでもなく、科研費による研究の成果の

一部であることを明記しなければならない。

ウィリアムズ誕生から 130 年にあたる 2012 年には、北京外国語大学海外漢学研究中心の主催する国際シンポジューム、そして折りよく上記のような記念出版物が、企画検討されているためである。

科研費の研究成果の公表は、もとより望ましいことであり、これからの一年ほどの時間をかけ、上記のように成果を出版できるように、これまでと同様に最大限の努力を傾注してみたい。

2）第二報　研究成果（論文）

約一年後の 2012 年に、上記のように、英文の転写テキストを公表するために、中国で出版できれば、当該科研費の成果としては最高のものになろう。他方、たとえ一年先とは言え、将来計画であることに変わりない。計画の頓挫はありえることだ。

ところで、この 3 年間の継続期間のあいだに、判読と活字化の作業を進めるかたわらで、その都度、研究成果の一部を論文にまとめていけるようにも努力してみた。第二報にはそれらすでに公表した論文を再録した。

3）第三報　研究成果（その他）

論文のほかに研究成果の一部を学会発表、講演、書評、研究資料として、適宜発表してきたが、これらを三報にまとめて報告しておきたい。

本研究報告書でこうして再録したもののほかに、論文（2 点）、講演（2 点）があるものの、内容的に再録したものと重複する箇所が多いので、本報告書に収録していない。

(2)　2011 年 2 月 2 日作成資料

The Out Letters of S. Wells Williams

at the Yale University Library Archive

A List

["B" with numbers in the following list stands for the **B**iography of S.W.W. written by Frederick, the number referring the related page in the book.]

["n.y." in the following list indicates no year being given in the corresponding letter, just as "n.m." stands for no month, and "n.d." sometimes means no day being given as well as no date inclusive of no year, no month, and no day. Also "n.p." indicates no place-name being given by SWW when he wrote the corresponding letter. The editor's tentative attempts are made in the following list for such a missing information of dates and places.]

[SWWOC: SWW Okinawa Correspondence; Yale University Library; Williams Family Papers; Correspondence and related papers 1853-1854, in English and Chinese, of Samuel Wells Williams, missionary, diplomat, and sinologue, concerning his service as interpreter on Commodore Matthew C. Perry's expedition to Japan. 96 frames, ca. 28 items; Microfilmed at Yale University Library, September 1970.]

1831

SWW-0001 [SWW to Dana: 1831/ 01/ 27; Utica; B28-9]

SWW-0002 [SWW to Father: 1831/ 11/ 23; Troy; B33-34]

SWW-0003 [SWW to Father: 1831/ 12/ 24; Troy; B36]

1832

SWW-0004 [SWW to Father: 1832/ 01/ 21; Troy; B36-38]

SWW-0005 [SWW to Father: 1832/ 03/ 07; Troy]

SWW-0006 [SWW to Father: 1832/ 04/ 23; Troy; B39-40]

SWW-0007 [SWW to Dana: 1832/ 04/ 25; Troy]

SWW-0008 [SWW to Father: 1832/ 06/ 01; Troy]

SWW-0009 [SWW to Father: 1832/ 06/ 18; Troy; B41-43]

SWW-0010 [SWW to Father: 1832/ 07/ 03; Troy]

SWW-0011 [SWW to Father: 1832/ 07/ 12; Troy; B43]

SWW-0012 [SWW to American Board: 1832/ 07/ 20; Troy; B43-45; a coy]

SWW-0013 [SWW to Father: 1832/ 10/ 29; Utica]

1833

SWW-0014 [SWW to Parents: 1833/ 04/ 12; Utica; B48-49]

SWW-0015 [SWW to Parents: 1833/ 06/ 15; On board the Morrison; B51]

SWW-0016 [SWW to Friend Tubbs: 1833/ 06/ 26; On board the Morrison]

SWW-0017 [SWW to Father: 1833/ 09/ 24; On board the Morrison; B51-53]

SWW-0018 [SWW to Friend unidentified: 1833/ 10/ 24; Lintin]

SWW-0019 [SWW to Father: 1833/ 11/ 06; Canton; B64-65]

SWW-0020 [SWW to Father: 1833/ 11/ 12; Canton]

SWW-0021 [SWW to Mother: 1833/ 11/ 13; Canton]

SWW-0022 [SWW to Father: 1833/ 11/ 14; Canton]

SWW-0023 [SWW to Father: 1833/12/16; Canton]

SWW-0024 [SWW to Mrs. Whittelesy: 1833/ 12/ 29; Canton]

1834

SWW-0025 [SWW to Father: 1834/ 01/ 01; Canton]

SWW-0026 [SWW to Father: 1834/ 01/ 24; Canton]

SWW-0027 [SWW to Father: 1834/ 02/ 23; Canton: B67-8]

SWW-0028 [SWW to Mother: 1834/ 02/ 23; Canton; B68-69]

SWW-0029 [SWW to Father: 1834/ 02/ 28; Canton]

SWW-0030 [SWW to Father: 1834/ 03/ 04; Canton]

SWW-0031 [SWW to Father: 1834/ 03/ 26; Canton]

SWW-0032 [SWW to Mother: 1834/ 04/ 18; Canton]

SWW-0033 [SWW to Parents: 1834/ 04/ 20; Canton]

SWW-0034 [SWW to Father: 1834/ 05/ 12; Canton]

SWW-0035 [SWW to Father: 1834/ 05/ 31; Canton]

SWW-0036 [SWW to Father: 1834/ 06/ 18; Canton]

SWW-0037 [SWW to Mother: 1834/ 07/ 01; Canton]

SWW-0038 [SWW to Sister Sophia: 1834/ 07/ 04; Canton]

SWW-0039 [SWW to Father: 1834/ 07/ 14; Canton]

SWW-0040 [SWW to Father: 1834/ 08/ 08; Macao; B71-72]

SWW-0041 [SWW to Father: 1834/ 10/ 11; Canton]

SWW-0042 [SWW to Parents: 1834/ 10/ 30; Canton]

SWW-0043 [SWW to Brothers & Sister: 1834/ 11/ 12; Canton]

SWW-0044 [SWW to Father: 1834/ 11/ 20; Canton]

SWW-0045 [SWW to Mother: 1834/ 12/ 06; Canton]

SWW-0046 [SWW to Father: 1834/ 12/ 11; Canton]

SWW-0047 [SWW to Father: 1834/ 12/ 20; Canton]

1835

SWW-0048 [SWW to Mother: 1835/ 01/ 19; Canton]

SWW-0049 [SWW to Father: 1835/ 01/ 24; Canton]

SWW-0050 [SWW to Mother: 1835/ 02/ 18; Canton]

SWW-0051 [SWW to Brother Frederick: 1835/ 02/ 19; Canton]

SWW-0052 [SWW to Father: 1835/ 02/ 21; Canton]

SWW-0053 [SWW to Father: 1835/ 03/ 21; Canton]

SWW-0054 [SWW to Mother: 1835/ 04/ 28; Canton]

SWW-0055 [SWW to Father: 1835/ 06/ 02; Canton]

SWW-0056 [SWW to Family: 1835/ 06/ 15; Canton]

SWW-0057 [SWW to Father: 1835/ 07/ 06; Macao]

SWW-0058 [SWW to Mother: 1835/ 07/ 22; Macao]

SWW-0059 [SWW to Anderson: 1835/ 08/ 20; Canton; unsigned; a draft]

SWW-0060 [SWW to Father: 1835/ 08/ 20; attached to the draft letter to Anderson]

SWW-0061 [SWW to Parker: 1835/ 08/ 27; Canton]

SWW-0062 [SWW to Family: 1835/ 09/ 12; Canton]

SWW-0063 [SWW to Father: 1835/ 09/ 25; Canton]

SWW-0064 [SWW to Mother: 1835/ 09/ 26; Canton]

SWW-0065 [SWW to Father: 1835/ 10/ 29; Canton]

SWW-0066 [SWW to Father: 1835/ 11/ 23; Canton; B78-79]

SWW-0067 [SWW to Brother Frederick: 1835/ 11/ 24; Canton]

SWW-0068 [SWW to Father: 1835/ 12/ 10; Canton]

SWW-0069 [SWW to Brother Frederick: 1835/ 12/ 17; On board a chop-boat]

SWW-0070 [SWW to Stevens: 1835/ 12/ 31; Macao]

1836

SWW-0071 [SWW to Father: 1835/ 12/ 31, 1836/ 01/ 02, 1836/ 01/ 04, 1836/ 01/ 09 &1836/ 01/ 19; Macao]

SWW-0072 [SWW to Brother Frederick: 1836/ 01/ 15; Macao]

SWW-0073 [SWW to Stevens: 1836/ 01/ 21; Macao]

SWW-0074 [SWW to Father: 1836/ 02/ 12; Macao]

SWW-0075 [SWW to Mother: 1836/ 02/ 12; Macao]

SWW-0076 [SWW to Parker: 1836/ 02/ 15; Macao]

SWW-0077 [SWW to Father: 1836/02/27; Macao]

SWW-0078 [SWW to Father: 1836/ 03/ 17; Macao]

SWW-0079 [SWW to Brother Frederick: 1836/ 04/ 02; Macao]

SWW-0080 [SWW to Mother: 1836/ 04/ 02; Macao]

SWW-0081 [SWW to Father: 1836/ 04/ 09; Macao]

SWW-0082 [SWW to Unidentified Recipient: 1836; B]

SWW-0083 [SWW to Unidentified Recipient at Home: 1836/ 06/ 25: B83-84]

SWW-0084 [SWW to Brother Frederick: 1836 /07/ 13; Macao]

SWW-0085 [SWW to Father: 1836/ 08/ 24; Macao]

SWW-0086 [SWW to Brother Frederick: 1836/ 08/ 31; Macao]

SWW-0087 [SWW to Father: 1836/ 09/ 01; Macao]

SWW-0088 [SWW to Father: 1836/ 10/ 11; Macao]

SWW-0089 [SWW to Parker: 1836/ 10/ 03; Macao]

SWW-0090 [SWW to Anderson, ABCFM: 1836/ 11/ 29; Macao; B87-91]

SWW-0091 [SWW to Mother: 1836/ 11/ 30; Macao]

SWW-0092 [SWW to Father: 1836/ 12/ 01; Macao]

SWW-0093 [SWW to Father: 1836/ 12/ 10; Macao]

1837

SWW-0094 [SWW to Parents: 1837/ 01/ 01; Macao]

SWW-0095 [SWW to Unidentified Recipient: 1837/ 01/ n.d.; n.p., Macao; B91-92]

SWW-0096 [SWW to Mother: 1837/ 01/ 31; n.p., Macao]

SWW-0097 [SWW to Father: 1837/ 02/ 12; Macao]

SWW-0098 [SWW to Brother Frederick: 1837/ 02/ 22; Macao]

SWW-0099 [SWW to Father: 1837/ 03/ 14; Canton]

SWW-0100 [SWW to Sister: 1837/ 03/ 16; Macao]

SWW-0101 [SWW to Mother: 1837/ 04/ 05; Macao]

SWW-0102 [SWW to Father: 1837/ 04/ 10; Macao]

SWW-0103 [SWW to Father: 1837/ 04/ 27; Canton]

SWW-0104 [SWW to Brother Frederick: 1837/ 05/ 15; Macao]

SWW-0105 [SWW to Father: 1837/ 07/ 02; Macao]

SWW-0106 [SWW to Father: 1837/ 07/ 15; Lewchew]

SWW-0107 [SWW to Anderson: 1837/ 09/ 10; Canton; B94-8]

SWW-0108 [SWW to Father: 1837/ 09/ 10; Canton]

SWW-0109 [SWW to Father: 1837/ 09/ 30; Canton]

SWW-0110 [SWW to Father: 1837/ 10/ 08; Macao]

SWW-0111 [SWW to Mother: 1837/ 11/ 12; Macao]

SWW-0112 [SWW to Father: 1837/ 11/ 12; n.p., Macao]

SWW-0113 [SWW to Father: 1837/ 11/ 12; n.p., Macao]

SWW-0114 [SWW to Brother Dwight: 1837/ 11/ 12; Macao; a copy]

SWW-0115 [SWW to Father: 1837/ 11/ 19; Macao]

SWW-0116 [SWW to Parker: 1837/ 12/ 26; Macao]

1838

SWW-0117 [SWW to Father: 1838/ 01/ 21; Macao; B107-9]

SWW-0118 [SWW to Father: 1838/ 03/ 15; Canton]

SWW-0119 [SWW to Father: 1838/ 04/ 10; n.p., Macao]

SWW-0120 [SWW to Mother: 1838/ 04/ 29; Macao]

SWW-0121 [SWW to Brother Frederick: 1838/ 05/ 12; Macao]

SWW-0122 [SWW to Father: 1838/ 07/ 21; Macao]

SWW-0123 [SWW to Brother Frederick: 1838/ 08/ 31; Macao]

SWW-0124 [SWW to Father: 1838/ 09/ 17; Canton]

SWW-0125 [SWW to Father: 1838/ 11/ 12; Macao]

SWW-0126 [SWW to Mother: no date, 1838; no place]

1839

SWW-0127 [SWW to Father: 1839/ 01/ 26; Macao; B109-110]

SWW-0128 [SWW to Parker: 1839/ 02/ 01; Macao]

SWW-0129 [SWW to Mother: 1839/ 02/ 02; Macao]

SWW-0130 [SWW to Parker: 1839/ 02/ 26; Macao]

SWW-0131 [SWW to Father: 1839/ 03/ 20; Macao]

SWW-0132 [SWW to Father: 1839/ 04/ 03; Macao]

SWW-0133 [SWW to Father: 1839/ 05/ 09; Macao]

SWW-0134 [SWW to Brother Frederick: 1839/ 05/ 17; Macao]

SWW-0135 [SWW to Mother: 1839/ 06/ 13; Macao]

SWW-0136 [SWW to Brother Frederick: 1839/ 06/ 21; Canton]

SWW-0137 [SWW to Parker: 1839/ 07/ 10; n.p., Macao]

SWW-0138 [SWW to Mother: 1839/ 07/ 20; Macao]

SWW-0139 [SWW to Parker: 1839/ 07/ 24; n.p., Macao]

SWW-0140 [SWW to Parker: 1839/ 08/ 01; n.p., Macao]

SWW-0141 [SWW to Parker: 1839/ 08/ 12; n.p., Macao]

SWW-0142 [SWW to Parker: 1839/ 08/ 21; n.p., Macao]

SWW-0143 [SWW to Father: 1839/ 08/ 28; Macao; B116-117]

SWW-0144 [SWW to Brother Frederick: 1839/ 08/ 29; Macao]

SWW-0145 [SWW to Parker: no date, ca. Aug., 1839; n.p., Macao]

SWW-0146 [SWW to Parker: n.d., 1839/ 09/ 12; n.p., Macao]

SWW-0147 [SWW to Father: 1839/ 09/ 20; Macao]

SWW-0148 [SWW to Father: 1839/ 09/ 28; Macao]

SWW-0149 [SWW to Parker: 1839/ 09/ 28; Macao]

SWW-0150 [SWW to Mother: 1839/ 11/ 02; Macao]

SWW-0151 [SWW to Father: 1839/ 11/ 02; Macao]

SWW-0152 [SWW to Parker: no date; 1839/ 11/ 16; n.p., Macao]

SWW-0153 [SWW to Brother Frederick: 1839/ 11/ 30; Macao]

SWW-0154 [SWW to Father: 1839/ 12/ 03; Macao]

SWW-0155 [SWW to Peter: 1839/ 12/ 17; Macao]

SWW-0156 [SWW to Parker: no date, 1839; n.p., Macao]

1840

SWW-0157 [SWW to Parker: 1840/ 01/ 05; Macao]

SWW-0158 [SWW to Parker: 1840/ 01/ 17; n.p., Macao]

SWW-0159 [SWW to Parker: 1840/ 01/ 25; Macao]

SWW-0160 [SWW to Parker: 1840/ 02/ 12; n.p., Macao]

SWW-0161 [SWW to Father: 1840/ 03/ 06; Canton]

SWW-0162 [SWW to Parker: 1840/ 03/ 18; Macao]

SWW-0163 [SWW to Parker: 1840/ 03/ 21; Macao]

SWW-0164 [SWW to Parker: 1840/ 03/ 25; Macao]

SWW-0165 [SWW to Parker: 1840/ 03/ 31; n.p., Macao]

SWW-0166 [SWW to Parker: 1840/ 04/ 04; Macao]

SWW-0167 [SWW to Nye: 1840/ 04/ 04; Macao]

SWW-0168 [SWW to Brother Frederick: 1840/ 04/ 05; Macao]

SWW-0169 [SWW to Parker: 1840/ 04/ 08; Macao]

SWW-0170 [SWW to Father: 1840/ 04/ 16; Macao]

SWW-0171 [SWW to Parker: 1840/ 04/ 18; Macao]

SWW-0172 [SWW to Parker: 1840/ 04/ 22; Macao]

SWW-0173 [SWW to Brother Frederick: 1840/ 04/ 28; Macao]

SWW-0174 [SWW to Father: 1840/ 04/ 30; Macao]

SWW-0175 [SWW to Parker: 1840/ 05/ 23; Macao]

SWW-0176 [SWW to Unidentified, Father; no date, 1840/ 06; no signature; Enclosure, newspaper cutting; a circular]

SWW-0177 [SWW to Frederick: 1840/ 06/ 15; Macao]

SWW-0178 [SWW to Father: 1840/ 06/ 15; Macao]

SWW-0179 [SWW to Father: 1840/ 06/ 22; n.p., Macao]

SWW-0180 [SWW to Brother Frederick: 1840/ 06/ 22; Macao]

SWW-0181 [SWW to Frederick: 1840/ 07/ 29; n.p., Macao]

SWW-0182 [SWW to Father: 1840/ 08/ 06; Macao]

SWW-0183 [SWW to Father: 1840/08/20; n.p., Macao; B119-121]

SWW-0184 [SWW to Father: 1840/ 10/ 24; n.p., Macao]

SWW-0185 [SWW to Brother Frederick: 1840/ 10/ 26; Macao]

SWW-0186 [SWW to Brother Frederick: 1840/ 11/ 30; Macao]

SWW-0187 [SWW to Father: 1840/ 12/ 01; Macao]

1841

SWW-0188 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 01/ 02; Macao]

SWW-0189 [SWW to Father: 1841/ 01/ 02; Macao]

SWW-0190 [SWW to Mother: 1841/01/ 02; Macao]

SWW-0191 [SWW to Father: 1841/ 01/ 09; Macao]

SWW-0192 [SWW to Father: 1841/ 03/ 01; Macao]

SWW-0193 [SWW to Father: 1841/ 03/ 07; Macao]

SWW-0194 [SWW to Father: 1841/ 03/ 29; Macao]

SWW-0195 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 03/ 29; Macao]

SWW-0196 [SWW to Mother: 1841/ 04/ 12; Macao]

SWW-0197 [SWW to Father: 1841/ 04/ 26; Macao; B121-122]

SWW-0198 [SWW to Father: 1841/ 05/ 10; Macao]

SWW-0199 [SWW to Father: 1841/ 05/ 15; Macao]

SWW-0200 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 05/ 15; Macao]

SWW-0201 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 05/ 31; Macao; probably copied by Dwight]

SWW-0202 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 05/ 21; Macao]

SWW-0203 [SWW to Father: 1841/ 06/ 15; Macao]

SWW-0204 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 07/ 01; Macao]

SWW-0205 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 07/ 28; Macao]

SWW-0206 [SWW to Father: 1841/ 09/ 02; Macao]

SWW-0207 [SWW to Mother: 1841/ 09/ 15; Macao]

SWW-0208 [SWW to Father: 1841/ 09/ 21; Macao]

SWW-0209 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 09/ 29; n.p., Macao]

SWW-0210 [SWW to Father: 1841/ 11/ 20; Macao]

SWW-0211 [SWW to Brother Frederick: 1841/ 12/ 10; Macao]

1842

SWW-0212 [SWW to Mother: 1842/ 03/ 26; Macao]

SWW-0213 [SWW to Brother Frederick: 1842/ 05/ 25; Macao]

SWW-0214 [SWW to Brother Frederick: 1842/ 06/ 25; Macao]

SWW-0215 [SWW to Brother Frederick: 1842/ 09/ 02; Macao]

SWW-0216 [SWW to Mother: 1842/12/16; Macao]

1843

SWW-0217 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 01/ 20; Macao]

SWW-0218 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 02/ 28; Macao]

SWW-0219 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 03/ 20; Macao]

SWW-0220 [SWW to Mother: 1843/ 04/ 19–1843/ 06/ 03; Macao]

SWW-0221 [SWW to Nye: n.d., 1843/ 04/ 27; n.p., Macao]

SWW-0222 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 05/ 29; Macao]

SWW-0223 [SWW to Nye: n.d., 1843/ 06/ 10; n.p., Macao]

SWW-0224 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 06/ 15; Macao]

SWW-0225 [SWW to Mother: 1843/ 09/ 21; Macao]

SWW-0226 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 09/ 27; Macao]

SWW-0227 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 11/ 20; Macao]

SWW-0228 [SWW to Mother: 1843/ 12/ 10; Macao]

SWW-0229 [SWW to Brother Frederick: 1843/ 12/ 18; Macao]

SWW-0230 [SWW to Nye: no date, 1843; no place, Macao]

SWW-0231 [SWW to Nye: no date, 1843; no place, Macao]

1844

SWW-0232 [SWW to Brother Fredeick: 1844/ 01/ 24; Macao]

SWW-0233 [SWW to Mother: 1844/ 01/ 24; Macao]

SWW-0234 [SWW to Mother: 1844/ 03/ 12; Macao]

SWW-0235 [SWW to Brother Frederick: 1844/ 03/ 19; Macao]

SWW-0236 [SWW to Brother Frederick: 1844/ 03/ 31; Macao]

SWW-0237 [SWW to Brother Frederick: 1844/ 05/ 01; Macao]

SWW-0238 [SWW to Nye: no date, July-August, 1844; no place, Macao]

SWW-0239 [SWW to Cousin Harriet Wood: 1844/ 09/ 10; Macao]

SWW-0240 [SWW to Nye: 1844/ 09/ 03; Macao]

SWW-0241 [SWW to Mother: 1844/ 09/ 21; Macao; B130-131]

SWW-0242 [SWW to Parker: 1844/ 11/ 01; Macao]

SWW-0243 [SWW to Parker: 1844/ 11/ 25; Hongkong]

SWW-0244 [SWW to Bridgman: 1844/ 12/ 06; Singapore]

SWW-0245 [SWW to Parker: 1844/ 12/ 06; Singapore]

1845

SWW-0246 [SWW to Bridgman: 1845/ 01/ 13; Bombay]

SWW-0247 [SWW to Bridgman: 1845/ 01/ 29; Bombay]

SWW-0248 [SWW to Bridgman: 1845/ 02/ 17; Suez;
misplaced in the microfilming, see No. 0341, Reel 4, for 1865]

SWW-0249 [SWW to Brother Frederick: 1845/ 03/ 10; River Nile]

SWW-0250 [SWW to Bridgman: 1845/ 03/ 12, 14, 20, 21 & 1845/ 04/ 05, 16; River Nile]

SWW-0251 [SWW to Parker: 1845/ 04/ 14; Cairo]

SWW-0252 [SWW to Bridgman: 1845/ 04/ 24; Cairo]

SWW-0253 [SWW to Parker: 1845/ 05/ 11; Jurusalem]

SWW-0254 [SWW to Bridgman: 1845/ 05/ 12; Jurusalem; B134-136]

SWW-0255 [SWW to Bridgman: 1845/ 05/ 30; Acre; B137-8; & 1845/ 06/ 19]

SWW-0256 [SWW to Bridgman: 1845/ 06/ 13 & 1845/ 06/ 19; Beirút]

SWW-0257 [SWW to Unidentified Recipient: no date, no place given,
(June 30, 1845); perhaps copied by Frederick]

SWW-0258 [SWW to Bridgman: 1845/ 06/ 30 & 1845/ 07/ 07; Malta; B139-40]

SWW-0259 [SWW to Bridgman: 1845/ 07/ 27 & 1845/ 08/ 6; Rome]

SWW-0260 [SWW to the Director of the Imprimiere Royale: 1845/ 08/ 13;
Paris; attached with its French version dated 1845/ 08/ 14]

SWW-0261 [SWW to Bridgman: 1845/ 08/ 18; B140; & 1845/ 08/ 25; B141-2;
& 1845/ 09/ 01; Paris]

SWW-0262 [SWW to Bridgman: 1845/ 09/12 & 1845/ 09/18; London]

SWW-0263 [SWW to Bridgman: 1845/10/18; New York; B144-145]

SWW-0264 [SWW to Dana: 1845/ 12/ 06; New York]

SWW-0265 [SWW to Brother Frederick: 1845/ 12/ 22; Utica]

1846

SWW-0266 [SWW to Mother: 1846/ 03/ 03; Cleveland; B147-148]

SWW-0267 [SWW to Parker: 1846/ 05/ 19; New York]

SWW-0268 [SWW to Mother: 1846/ 09/ 15; New York; B149-150]

SWW-0269 [SWW to Mother: 1846/ 10/ 24; New York; B150]

SWW-0270 [SWW to Mother: 1846/ 11/ 17; New York; Johnbury]

1847

SWW-0271 [SWW to Fiancee Sarah Walworth: 1847/ 05/ 29; New York; B152-154]

SWW-0272 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 06/ 09; New York]

SWW-0273 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 06/ 21; New York]

SWW-0274 [SWW to Parker: 1847/ 06/ 30; New York]

SWW-0275 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 07/ 14; New York]

SWW-0276 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 08/ 02; New York]

SWW-0277 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 08/ 10; New York]

SWW-0278 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 08/ 13; New York]

SWW-0279 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 08/ 19; New York]

SWW-0280 [SWW to Sarah: 1847/ 08/ 23; New York; B155-156]

SWW-0281 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 08/ 30; New York]

SWW-0282 [SWW to Sarah Walworth: New York; 1847/ 08/ 31 & 1847/ 09/ 01]

SWW-0283 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 09/ 04; New York]

SWW-0284 [SWW to Sarah: 1847/ 09/ 06; New York; B156-157]

SWW-0285 [SWW to Wife: 1847/ 09/ 13; New York; B157]

SWW-0286 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 09/ 16; New York]

SWW-0287 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 09/ 20; New York]

SWW-0288 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 09/ 21 & 1847/ 09/ 22; New York]

SWW-0289 [SWW to Sarah: 1847/ 09/ 27; New York; B157-158]

SWW-0290 [SWW to Mother: 1847/ 09/ 28; New York]

SWW-0291 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 09/ 29 & 1847/ 10/ 01; New York]

SWW-0292 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 04; New York]

SWW-0293 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 08; New York]

SWW-0294 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 11; New York]

SWW-0295 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 18; New York]

SWW-0296 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 22; New York]

SWW-0297 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 25; New York]

SWW-0298 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 10/ 28; New York]

SWW-0299 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 01]

SWW-0300 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 05; New York]

SWW-0301 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 08; New York]

SWW-0302 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 11; New York; B158-159]

SWW-0303 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 15; New York]

SWW-0304 [SWW to Sarah Walworth: 1847/ 11/ 17; New York]

SWW-0305 [SWW to Mother: 1847/ 12/ 01; Saratoga]

SWW-0306 [SWW to Wife Sarah: 1847/ 12/ 13; Charlestown; B159-160]

1848

SWW-0307 [SWW to Mrs. Martin: 1848/ 03/ 14;
not available on the microfilm, Reel No. 2, p.0098]

SWW-0308 [SWW to Brother George: 1848/ 08/ 12; Palmer]

1849

SWW-0309 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 02/ 24; Canton]

SWW-0310 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 03/ 26; Canton]

SWW-0311 [SWW to Frederick's Wife, Sarah Pon Williams: 1849/ 04/ 21;
Canton]

SWW-0312 [SWW to Mother: 1849/ 05/ 23]

SWW-0313 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 06/ 22; Canton; B170-171;
missing on the microfilm, Reel 2, p.0147]

SWW-0314 [SWW to Wife: 1849/07/14; n.p., Canton;
misplaced on the microfilm for the year 1869, Reel 4, 1068-70]

SWW-0315 [SWW to Wife: 1849/07/19; Canton;
misplaced on the microfilm for the year 1869, Reel 4, 1072-3]

SWW-0316 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 07/ 24; Canton]

SWW-0317 [SWW to Wife: 1849/ 07/ 27; Canton; misplaced on the microfilm, Reel 2, p. 0152, on account of misreading 1849 for 1869]

SWW-0318 [SWW to Wife: 1849/ 08/ 04 & 1849/ 08/ 06; n.p., Canton]

SWW-0319 [SWW to Wife: 1849/08/11; Canton; misplaced on the microfilm, Reel 2, p. 0155]

SWW-0320 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 09/ 12 & 1849/ 09/ 27; Macao; B171-173]

SWW-0321 [SWW to Brother Frederick: 1849/ 10/ 28; Canton; B172-173]

1850

SWW-0322 [SWW to Brother Frederick: 1850/ 03/ 29; Canton]

SWW-0323 [SWW to Frederick: 1850/ 05/ 22; Canton]

SWW-0324 [SWW to Dana: 1850/ 06/ 22; Canton; B173-174]

SWW-0325 [SWW to Brother Frederick: 1850/ 07/ 20; Canton; B174-6]

SWW-0326 [SWW to Mother: 1850/ 09/ 26; Macao; B176-177]

1851

SWW-0327 [SWW to Brother Frederick: 1851/ 01/ 28; Canton]

SWW-0328 [SWW to Brother Frederick: 1851/ 02/ 25; Canton]

SWW-0329 [SWW to Brother Frederick: 1851/ 04/ 23; Canton]

1852

SWW-0330 [SWW to Mother: 1852/ 04/ 22; Canton]

SWW-0331 [SWW to Dana: 1852/ 04/ 22; Canton; B179-180]

SWW-0332 [SWW to Frederick: 1852/ 06/ 21; Canton; B180-181]

1853

SWW-0333 [SWW to Brother Frederick: 1853/ 01/ 26; Canton]

SWW-0334 [SWW to Dana: 1853/ 02/ 23; Canton]

SWW-0335 [SWW to Brother Frederick: 1853/ 04/ 16; Canton]

SWW-0336 [SWW to Dana: 1853/ 04/ 30; Canton]

SWW-0337 [SWW to Wife: 1853/ 05/ 07; Macao]

SWW-0338 [SWW to Wife Sarah: 1853/ 05/ 09; Macao]

SWW-0339 [SWW to Wife Sarah: 1853/ 05/ 10; On board ship]

SWW-0340 [SWW to Wife Saraha: 1853/ 05/ 11; Ship Saratoga]

SWW-0341 [SWW to Wife Sarah: 1853/ 05/ 12; Ship Saratogra]

SWW-0342 [SWW to Wife Sarah: 1853/ 05/ 16, 05/ 20, 05/ 25, 05/ 30, 06/ 01 & 06/ 02; n.p., on board ship]

SWW-0343 [SWW to Wife Sarah: n.d., 1853/ 06; n.p., on board ship; B187; missing on the microfilm, Reel 2]

SWW-0344 [SWW to Wife Sarah: n.y., 1853/ 06/ 06; n.p., Lewchew; B188-189; missing on the microfilm, Reel 2, p.601]

SWW-0345 [SWW to Wife Sarah: 1853/ 06/ 08; Napa]

SWW-0346 [SWW to Wife Sarah: n.y.,1853/ 06/ 1; n.p., Bonin Islands; B189-190]

SWW-0347 [SWW to Wife Sarah: n.y., 1853/ 06/ 18; n.p., Bonin Islands]

SWW-0348 [SWW to Sarah: n.y., 1853/ 06/ 23; n.p., Lewchew]

SWW-0349 [SWW to Wife: n.y., 1853/ 06/ 27; n.p., Lewchew]

SWW-0350 [SWW to Parker: 1853/ 06/ 27; Lewchew]

SWW-0351 [SWW to Nye: 1853/ 06/ 30; Napa]

SWW-0352 [SWW to Sophia: no date given, 1853/ 06/ ; n.p., Bonin Islands; Mr. Savory; B191-192]

SWW-0353 [SWW to Sophia: 1853/ 07/ 04; n.p. Japan; B192-193]

SWW-0354 [SWW to Frederick: 1853/ 07/ 16; Yedo Bay; B193-198; missing on the microfilm, Reel 2]

SWW-0355 [SWW to Children: 1853/ 07/ 16; Yedo Bay]

SWW-0356 [SWW to Wife: 1853/ 08/ 17; Canton]

SWW-0357 [SWW to Wife: 1853/ 08/ 18; Canton]

SWW-0358 [SWW to Brother Frederick: no date, 1853/ 08/ 20; n.p., Canton; B200-201; the main body of the letter missing

on the microfilm, Reel 2]

SWW-0359 [SWW to Wife: 1853/ 08/ 29; n.p., Canton]

SWW-0360 [SWW to Wife: 1853/ 09/ 06; n.p., Canton]

SWW-0361 [SWW to Wife: 18353/ 09/ 15; n.p., Canton]

SWW-0362 [SWW to Brother Frederick: 1853/ 09/ 24; Canton]

SWW-0363 [SWW to Brother Frederick: 1853/ 12/ 06; Canton; B203-204]

1854

SWW-0364 [SWW to Wife: n.y., 1854/ 01/ 13; Ship Susquehanna; Friday evening]

SWW-0365 [SWW to Wife: 1854/ 01/ 13; no place given; SWWOC 14]

SWW-0366 [SWW to Brother Frederick: 1854/ 01/ 30; Lewchew]

SWW-0367 [SWW to Parker: 1854/ 02/ 04; Napa; SWWOC 12]

SWW-0368 [SWW to Nye: 1854/ 02/ 06; Napa; SWWOC 13]

SWW-0369 [SWW to Mother: 1854/ 09/ 09; Macao]

SWW-0370 [SWW to Wife Sarah: 1854/ 09/ 22; Canton]

SWW-0371 [SWW to Brother Frederick: 1854/ 10/ 09; Canton]

1855

SWW-0372 [SWW to Brother Frederick: 1855/ 03/ 12; Canton]

SWW-0373 [SWW to Dana: 1855/ 05/ 08; Canton]

SWW-0374 [SWW to Dana: 1855/ 06/ 08; n.p., Canton]

SWW-0375 [SWW to Wife Sarah: n.y., 1855/ 06/ 15; n.p., Canton; Friday evening]

SWW-0376 [SWW to Wife Sarah: 1855/ 06/ 21; Canton]

SWW-0377 [SWW to Walworth Son: n.y., 1855/ 07/ 10; n.p., Canton]

SWW-0378 [SWW to Frederick Brother: 1855/ 08/ 08; Canton]

SWW-0379 [SWW to Walworth Son: 1855/ 08/ 10; n.p., Canton]

SWW-0380 [SWW to Walworth Son: 1855/ 08/ 20; Canton; a drawing of sailing ship]

SWW-0381 [SWW to Dana: 1855/ 09/ 01; Canton]

SWW-0382 [SWW to Frederick Brother: 1855/ 10/ 12; Canton]

SWW-0383 [SWW to WL Marcy; 1855/ 11/ 01; Canton]

SWW-0383a [SWW to Robert Brother: 1855/ 12/ 13; Canton]

SWW-0384 [SWW to Frederick Brother: 1855/ 12/ 13; Canton]

1856

SWW-0385 [SWW to Mother: 1856/ 01/ 12]

SWW-0386 [SWW to Frederick Brother: 1856/ 02/ 13; Canton]

SWW-0387 [SWW to Dana: 1856/ 04/ 02; Canton]

SWW-0388 [SWW to Dana: 1856/ 04/ 12; Canton]

SWW-0389 [SWW to Dana: 1856/ 05/ 07; Canton]

SWW-0390 [SWW to Frederick Brother: 1856/ 05/ 08; Canton]

SWW-0391 [SWW to Brother Robert: 1856/ 07/ 07; Canton]

SWW-0392 [SWW to Mother: 1856/ 07/ 08; Canton]

SWW-0393 [SWW to Sarah Wife: 1856/ 07/ 18; n.p., Canton]

SWW-0394 [SWW to Brother Robert: 1856/ 07/ 22; Canton]

SWW-0395 [SWW to Wife Sarah: n.y., 1856/ 07/ 28; n.p., Canton]

SWW-0396 [SWW to Daughter Kate: 1856/ 08/ 05; n.p., Canton]

SWW-0397 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 08/ 27; n.p., Canton]

SWW-0398 [SWW to Wife Sarah; 1856/ 09/ 03; Pagoda Island]

SWW-0399 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 09/ 09; Shanghai]

SWW-0400 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 09/ 09; Shanghai]

SWW-0401 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 09/ 17; Shanghai]

SWW-0402 [SWW to Brother Dwight:1856/ 10/ 07; Shanghai]

SWW-0403 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 10/ 07; Shanghai]

SWW-0404 [SWW to Brother Frederick: 1856/ 10/ 07; Shanghai]

SWW-0405 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 10/ 14; Shanghai]

SWW-0406 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 10/ 21; Shanghai]

SWW-0407 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 11/ 14; Canton]

SWW-0408 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 11/ 17; Canton]

SWW-0409 [SWW to Wife Sarah: 1856/ 11/ 22; n.p., Canton]

SWW-0410 [SWW to James M. Beebe, President of Board of Trade: 1856/ 12/ 10; Canton]

1857

SWW-0411 [SWW to Dana: 1857/ 01/ 14; Macao]

SWW-0412 [SWW to Brother Robert: 1857/ 01/ 13; Macao]

SWW-0413 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 01/ 27; Macao]

SWW-0414 [SWW to Brother Robert: 1857/ 01/ 28; Macao]

SWW-0415 [SWW to Dana: 1857/ 02/ 07; Macao]

SWW-0416 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 03/ 13]

SWW-0417 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 04/ 25; Macao]

SWW-0418 [SWW to Brother Robert: 1857/ 06/ 08; Macao]

SWW-0419 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 06/ 22; Macao]

SWW-0420 [SWW to Brother Robert: 1857/ 07/ 08; Macao]

SWW-0421 [SWW to Brother Robert: 1857/ 07/ 20; Macao]

SWW-0422 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 07/ 23; Macao]

SWW-0423 [SWW to Brother Robert: 1857/ 07/ 31; Macao]

SWW-0424 [SWW to Mrs Harriet C. Wood: 1857/ 08/ 06; Macao]

SWW-0425 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 08/ 20; Macao]

SWW-0426 [SWW to Brother Robert: 1857/ 08/ 22; Macao]

SWW-0427 [SWW to Brother Robert: 1857/ 09/ 08; Macao]

SWW-0428 [SWW to Brother Frederick: 1857/ 11/ 11; Macao]

SWW-0429 [SWW to Dana: 1857/ 12/ 29; "Minnesota," Hongkong]

SWW-0430 [SWW to Brother Robert: 1857/ 12/ 30; "Minnesota," Hongkong]

1858

SWW-0431 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 01/ 26; Macao]

SWW-0432 [SWW to Brother Robert: 1858/ 02/ 24; Macao]

SWW-0433 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 03/ 10; Macao]

SWW-0434 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 03/ 19; Hongkong]

SWW-0435 [SWW to Cousin Mrs Harriet C. Wood: 1858/ 04/ 10; Shanghai]

SWW-0436 [SWW to Wife: 1858/ 04/ 17/1858; n.p., on board the Mississipi; B254]

SWW-0437 [SWW to Wife: n.y., 1858/ n.m., 04/ 19; n.p., board ship; B254]

SWW-0438 [SWW to Wife: n.y., 1858/ n.m., 04/ 24; n.p., on board ship; B254-255]

SWW-0439 [SWW to Bridgman: 1858/ 04/ 28; On board the U.S.S. Minnesota]

SWW-0440 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 04/ 30; On board the U.S.S. Minnesota, Gulf of Pichili]

SWW-0441 [SWW to Daughter Kate: 1858/ 05/ 15; On board the U.S.S. Minnesota, Gulf of Pichili]

SWW-0442 [SWW to Bridgman: 1858/ 05/ 22; On board the Minnesota; presumably later edited for some publication]

SWW-0443 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 05/ 25; Peihili Gulf]

SWW-0444 [SWW to unidentified recipient, B, Bridgman; 1858/ 06/ 18; Tientsin; Small type"; presumably later edited for publication]

SWW-0445 [SWW to Eliah C. Bridgman: n.y., 1858/ 06/ 19; no place]

SWW-0446 [SWW to unidentified, Bridgman: 1858/ 06/ 25-26; Tientsin; Extract from a letter]

SWW-0447 [SWW to Daughter Kate: 1858/ 07/ 01; Tientsin]

SWW-0448 [SWW to Frederick: 1858/ 07/ 09 & 1858/ 07/ 28; "Minnesota," Yellow Sea]

SWW-0449 [SWW to Brother Robert: 1858/ 08/ 12; Shanghai]

SWW-0450 [SWW to Daughter Kate: 1858/ 09/ 01; Shanghai]

SWW-0451 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 09/ 22; Nagaski, on board "Minessota"]

SWW-0452 [SWW to Edward W Syle: 1858/ 09/ 30; Nagasaki]

SWW-0453 [SWW to Daughter Kate: 1858/ 09/ 15; U.S. Ship "Minnesota"]

SWW-0454 [SWW to Brother Robert: 1858/ 10/ 12; Shanghai]

SWW-0455 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 10/ 22; Shanghai]

SWW-0456 [SWW to Daughter Kate: 1858/ 11/ 03; Shanghai]

SWW-0457 [SWW to Brother Robert: 1858/ 11/ 04; Shanghai]

SWW-0458 [SWW to Brother Frederick: 1858/ 12/ 07; Hong Kong, on board "Minnesota"]

SWW-0459 [SWW to William B. Reed: 1858/ 12/ 07; On board "Minnesota"]

SWW-0460 [SWW to William B. Reed: 1858/ 12/ 08; Hongkong Habor, on board "Minnesota"]

SWW-0461 [SWW to Brother Robert: 1858/ 12/ 22; Macao]

1859

SWW-0462 [SWW to Unidentified, Baron Gross: 1859/ 01/ 10; Macao]

SWW-0463 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 01/ 11; Macao]

SWW-0464 [SWW to Nye: 1859/ 01/ 15; no place, Canton]

SWW-0465 [SWW to Nye: 1859/ 03/ 07; Canton]

SWW-0466 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 03/ 12; Canton]

SWW-0467 [SWW to Williams B. Reed: 1859/ 03/ 28; Macao

SWW-0468 [SWW to Williams Bradford Reed: 1859/ 04/ 22; Macao]

SWW-0469 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 04/ 24; Macao]

SWW-0470 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 06/ 13; Shanghai]

SWW-0471 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 07/ 05; Off Peiho, on board "Powhatan"]

SWW-0472 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 07/ 29; Peking]

SWW-0473 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 09/ 02; Shanghai]

SWW-0474 [SWW to Cousin Harriet: 1859/ 09/ 17; Shanghai]

SWW-0475 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 10/ 11; Kiahing fu]

SWW-0476 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 11/ 05; Kwanshau]

SWW-0477 [SWW to Brother Frederick: 1859/ 12/ 28; Macao5]

1860

SWW-0478 [SWW to Brother Frederick: 1860/ 03/ 06; Hong Kong]

SWW-0479 [SWW to Nye: 1860/ 06/ 04; San Francisco]

SWW-0480 [SWW to Dana: 1860/ 08/ 15; Oswego]

SWW-0481 [SWW to Brother Frederick: 1860/ 09/ 07; St. Albans Vt.]

SWW-0482 [SWW to Reed: 1860/ 09/ 17; St. Albans Vt.]

SWW-0483 [SWW to Huntington: 1860/ 10/ 26; Fordham]

SWW-0484 [SWW to Nye: 1860/ 12/ 10; Utica]

SWW-0485 [SWW to Brother Frederick: 1860/12/22; Scheneetady]

SWW-0486 [SWW to Parker: Christmas/1860; St. Albans]

SWW-0487 [SWW to Son Walworth: Christma/1860; Albans]

1861

SWW-0488 [SWW to Brother Robert: 1861/ 01/ 05; St. Albans]

SWW-0489 [SWW to Parker: 1861/01/12; St. Albans]

SWW-0490 [SWW to Brother Robert: 1861/ 01/ 16; St. Albans]

SWW-0491 [SWW to WH Seward: 1861/ 03/ 13; no place given]

SWW-0492 [SWW to Nye: 1861/ 03/ 27; New York]

SWW-0493 [SWW to Parker: 1861/ 04/ 11; New York]

SWW-0494 [SWW to Parker: n.y., 1861/ 04/ 22; Rutland]

SWW-0495 [SWW to Brother Robert: 1861/ 04/ 29; St. Albans]

SWW-0496 [SWW to Parker: 1861/ 05/ 20; St. Albans]

SWW-0497 [SWW to Brother Robert: 1861/ 05/ 25; Jersey City]

SWW-0498 [SWW to Brother Robert: 1861/ 06/ 01; New York]

SWW-0499 [SWW to Dana: 1861/ 06/ 07; New York]

SWW-0500 [SWW to Brother Robert: 1861/ 10/ 10; Macao]

SWW-0501 [SWW to Bridgman: 1861/ 10/ 19; Macao]

SWW-0502 [SWW to Brother Robert: 1861/ 10/ 26; Macao]

SWW-0503 [SWW to Cousin Mrs. Harriet: 1861/ 10/ 29; Hongkong]

SWW-0504 [SWW to Son Frederick: n.y., 1861/ 11/ 07; no place given]

SWW-0505 [SWW to Brother Frrederick: 1861/ 11/ 15; Macao]

SWW-0506 [SWW to Mrs. Bridgman: 1861/ 11/ 16; Hongkong]

SWW-0507 [SWW to Parker: 1861/ 11/ 28; Macao]

SWW-0508 [SWW to Dana: 1861/ 11/ 28; Macao]

1862

SWW-0509 [SWW to Brother Frederick: 1862/ 01/ 13; Macao, the Legation of the United States]

SWW-0510 [SWW to Mrs. Bridgman: 1862/ 01/ 24; Macao]

SWW-0511 [SWW to Brother Robert: 1862/ 01/ 28; Macao]

SWW-0512 [SWW to Parker: 1862/ 02/ 26; Macao]

SWW-0513 [SWW to Mrs. Bridgman: 1862/ 02/ 27; Macao]

SWW-0514 [SWW to Nye: n.y., 1862/ 03/ 04; n.p., Macao]

SWW-0515 [SWW to Brother Frederick: 1862/ 03/ 13 & 1862/ 04/ 10; Macao]

SWW-0516 [SWW to Brother Frederick: 1862/ 04/ 05; Macao]

SWW-0517 [SWW to Brother Robert: 1862/ 04/ 15; Macao]

SWW-0518 [SWW's Wife Sarah to Brother Frederick: 1862/ 04/ 15; Macao]

SWW-0519 [SWW to Brother Frederick: 1862/ 04/ 18; Macao]

SWW-0520 [SWW to Wife: 1862/ 04/ 18; Hongkong]

SWW-0521 [SWW to Wife: 1862/ 04/ 23; Amoy]

SWW-0522 [SWW to Wife: 1862/ 05/ 15; n.p., Shanghai]

SWW-0523 [SWW to Wife: 1862/ 05/ 16; Shanghai]

SWW-0524 [SWW to Wife: 1862/ 06/ 11; Shanghai]

SWW-0525 [SWW to Brother Robert: 1862/ 06/ 14; Shanghai]

SWW-0526 [SWW to Mrs. Bridgman: 1862/ 07/ 08; Tientsin]

SWW-0527 [SWW to Wife: 1862/ 07/ 09; Tientsin]

SWW-0528 [SWW to Wife: 1862/ 07/ 24; Peking]

SWW-0529 [SWW to Brother Robert: 1862/ 08/ 01; Peking]

SWW-0530 [SWW to Wife: 1862/ 08/ 07; Peking]

SWW-0531 [SWW to Wife: 1862/ 08/ 23; Peking]

SWW-0532 [SWW to Wife: 1862/ 09/ 03; Peking]

SWW-0533 [SWW to Wife: 1862/ 09/ 24; Peking]

SWW-0534 [SWW to Wife: 1862/ 09/ 25; Peking, Legation of the United States]

SWW-0535 [SWW to Brother Robert: 1862/ 10/ 13; Peking]

SWW-0536 [SWW to Wife: 1862/ 11/ 07; Tientsin]

SWW-0537 [SWW to Wife: 1862/ 11/ 10; Tientsin]

SWW-0538 [SWW to Brother Frederick: 1862/11/16 & 1862/11/27; On board "Shanghai"]

SWW-0539 [SWW to Brother Robert: 1862/12/ 11; Macao]

1863

SWW-0540 [SWW to Parker: 1863/ 01/ 13; Canton]

SWW-0541 [SWW to Brother Robert: 1863/ 01/ 13; Canton]

SWW-0542 [SWW to Brother Frederick: 1863/ 02/ 12; Macao]

SWW-0543 [SWW to Brother Robert: 1863/ 02/ 24; Macao]

SWW-0544 [SWW to Brother Frederick: 1863/ 02/ 27; Macao]

SWW-0545 [SWW to Sister: 1863/ 03/ 28; Macao]

SWW-0546 [SWW to Daughter Sophia: 1863/ 04/ 23; Hongkong]

SWW-0547 [SWW to Cousin Harriet: 1863/ 05/ 25; Shanghai]

SWW-0548 [SWW to Brother Robert: 1863/ 05/ 28; Shanghai]

SWW-0549 [SWW to Cousin Harriet: 1863/ 06/ 22; Peking]

SWW-0550 [SWW to Brother Robert: 1863/ 07/ 08; Peking]

SWW-0551 [SWW to Brother Frederick and Caroline: 1863/ 07/ 23; Peking]

SWW-0552 [SWW to Dana: 1863/ 08/ 10; Peking]

SWW-0553 [SWW to Parker: 1863/ 09/ 05; Peking]

SWW-0554 [SWW to Brother Frederick: 1863/ 09/ 12; Peking]

SWW-0555 [SWW to Brother Robert: 1863/ 09/ 21; Peking]

SWW-0556 [SWW to Nye: 1863/ 09/ 26; Peiho, Legation of the United States]

SWW-0557 [SWW to Brother Frederick: 1863/11/ 24; Peking, Legation of the United States]

SWW-0558 [SWW to Parker: 1863/12/02; Peking]

SWW-0559 [SWW to Cousin Wood: 1863/ 12/ 14; Peking]

1864

SWW-0560 [SWW to Dana: 1864/ 01/ 12; Peking]

SWW-0561 [SWW to Brother Robert: 1864/ 02/ 26; Peking]

SWW-0562 [SWW to Cousin Harriet: 1864/ 04/ 02; Peking]

SWW-0563 [SWW to Brother Robert: 1864/ 05/ 07; Peking]

SWW-0564 [SWW to Dana: 1864/ 05/ 14; Peking]

SWW-0565 [SWW to Brother Frederick: 1864/ 06/ 01; Peking]

SWW-0566 [SWW to Cousin Harriet: 1864/ 07/ 11; Peking]

SWW-0567 [SWW to Brother Robert: 1864/ 07/ 11; Peking]

SWW-0568 [SWW to Brother Robert: 1864/ 08/ 01; Peking, Western Hills]

SWW-0569 [SWW to Brother Frederick: 1864/ 08/ 12; Peking, Western Hills]

SWW-0570 [SWW to Parker: 1864/ 09/ 01; Peking]

SWW-0571 [SWW to Dana: 1864/ 10/ 08; Peking]

SWW-0572 [SWW to Brother Robert: 1864/ 10/ 18; Peking]

SWW-0573 [SWW to Brother Frederick: 1864/ 12/ 01; Peking]

SWW-0574 [SWW to Brother Frederick: 1864/ 12/ 05; Peking]

1865

SWW-0575 [SWW to Brother Robert: 1865/ 01/ 17; Peking]

SWW-0576 [SWW to Brother Robert: 1865/ 02/ 18; Peking]

SWW-0577 [SWW to Burlingame: 1865/ 03/ 15; Peking]

SWW-0578 [SWW to Brother Robert: 1865/ 06/ 23; Peking]

SWW-0579 [SWW to Burlingame: 1865/ 06/ 26; Peking]

SWW-0580 [SWW to Cousin Harriet: 1865/ 07/ 15; Peking, Tremont Monastery]

SWW-0581 [SWW to Brother Robert: 1865/ 07/ 17; Peking, Tremont Monastery]

SWW-0582 [SWW to Brother Frederick: 1865/ 08/ 29; Peking]

SWW-0583 [SWW to Anderson: 1865/ 09/ 06; Peking]

SWW-0584 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 09/ 06; Peking]

SWW-0585 [SWW to Anderson: 1865/ 09/ 08; Peking]

SWW-0586 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 09/ 16; Peking]

SWW-0587 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 09/ 27; Peking]

SWW-0588 [SWW to Messrs. Olyphant & C^{o}., Hongkong: 1865/ 10/ 04; Peking]

SWW-0589 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 10/ 05; Peking]

SWW-0590 [SWW to Parker: 1865/ 10/ 17; Peking]

SWW-0591 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 10/ 18; n.p., Peking; an illegible letter on account of wet ink]

SWW-0592 [SWW to Brother Frederick: 1865/ 10/ 25; Peking]

SWW-0593 [SWW to Brother Robert: 1865/ 10/ 26; Peking]

SWW-0594 [SWW to WP Jones: 1865/ 10/ n.d.; n.p., Peking; almost illegible]

SWW-0595 [SWW to Olyphant & C^{o}.: 1865/ 11/ 04; Peking]

SWW-0596 [SWW to G^{l}. Seward: 1865/ 11/ 17; n.p., Peking; partially legible]

SWW-0597 [SWW to Unidentified: 1865/ 12/ n.d.; n.p., Peking]

SWW-0598 [SWW to G^{l}. Seward: 1866/01/20; an illegible letter, except a few passage]

SWW-0599 [SWW to G.F. Seward: 1866/ 02/ 02; Peking]

SWW-0600 [SWW to Brother Robert: 1866/ 03/ 03; Peking]

SWW-0601 [SWW to G.F. Seward: 1866/03/29; Peking]

SWW-0602 [SWW to G.F. Seward: 1866/ 04/ 03; Peking]

SWW-0603 [SWW to G.F. Seward: 1866/ 04/ 12; Peking]

SWW-0604 [SWW to Maclay: 1866/ 04/ 25; Peking]

SWW-0605 [SWW to ET Sandford: 1866/ 05/ 05; Peking]

SWW-0606 [SWW to FP Knight: 1866/ 05/ 18; Peking]

SWW-0607 [SWW to Brother Frederick: 1866/ 05/ 26; Peking]

SWW-0608 [SWW to the S.S. of 1st Presby. Church, Utica: 1866/ 05/ 31; Peking]

SWW-0609 [SWW to F.P. Knight: 1866/ 06/ 02; Peking]

SWW-0610 [SWW to Dana: 1866/ 06/ 08; n.p., Peking]

SWW-0611 [SWW to Brother Robert: 1866/ 06/ 11; Peking]

SWW-0612 [SWW to F.P. Knight: 1866/ 06/ 12; Peking]

SWW-0613 [SWW to Seward: 1866/ 06/ 23; Peking; an illegible letter]

SWW-0614 [SWW to Brother Frederick: 1866/ 06/ 28; Peking]

SWW-0615 [SWW to Brother Robert: 1866/ 07/ 11; Peking]

SWW-0616 [SWW to Brother Frederick: 1866/ 08/ 17; Peking]

SWW-0617 [SWW to Brother Robert: 1866/ 10/ 18; Peking]

SWW-0618 [SWW to de Mas: 1866/ 11/ 24; Peking]

SWW-0619 [SWW to Brother Robert: 1866/ 12/ 11; Peking]

SWW-0620 [SWW to Kerr: 1866/ 12/ 18; Peking]

SWW-0621 [SWW to Anderson: 1866/ 12/ 21; Peking]

SWW-0622 [SWW to Martin: 1866/ 12/ 29; Peking]

1867

SWW-0623 [SWW to Brother Frederick: 1867/ 01/ 12; Peking]

SWW-0624 [SWW to Cousin Talcott: 1867/ 01/ 18; Peking]

SWW-0625 [SWW to Dana: 1867/ 02/ 11; Peking]

SWW-0626 [SWW to Holdich: 1867/ 02/ 18; Peking]

SWW-0627 [SWW to Cousin Harriet: 1867/ 03/ 18; Peking]

SWW-0628 [SWW to Brother Robert: 1867/ 03/ 20; Peking]

SWW-0629 [SWW to Jones: 1867/ 03/ 27; Peking]

SWW-0630 [SWW to Sandford: 1867/ 04/ 25; Peking]

SWW-0631 [SWW to Pauthier: 1867/ 05/ 15; Peking]

SWW-0632 [SWW to G.T. Olyphant: 1867/ 06/ 10; Peking, Tremont Temple]

SWW-0633 [SWW to Brother Robert: 1867/ 07/ 08; Peking, Tremont Temple]

SWW-0634 [SWW to Brother Robert: 1867/ 08/ 21; Peking, Tremont Temple]

SWW-0635 [SWW to Brother Robert: 1867/ 10/ 25; Peking]

SWW-0636 [SWW to Dana: 1867/ 11/ 17; Peking]

1868

SWW-0637 [SWW to Brother Robert: 1868/ 01/ 24; Peking]

SWW-0638 [SWW to Brother Robert: 1868/ 03/ 04; Peking]

SWW-0639 [SWW to C.A. Saint: 1868/ 03/ 21; Peking]

SWW-0640 [SWW to Cousin Harriet: 1868/ 06/ 29; Peking, Tremont Temple]

SWW-0641 [SWW to Brother Robert: 1868/ 06/ 30; Peking, Tremont Temple]

SWW-0642 [SWW to Brother Robert: 1868/ 08/ 24; Peking, Tremont Temple]

SWW-0643 [SWW to Brother Robert: 1868/ 09/ 29; Peking]

SWW-0644 [SWW to Brother Robert: 1869/ 10/ 28; Peking]

SWW-0645 [SWW to C.A. Saint: 1868/ 11/ 10; Peking]

SWW-0646 [SWW to Brother Robert: 1868/ 11/ 24; Peking]

1869

SWW-0647 [SWW to Brother Robert: 1869/ 03/ 03; Peking]

SWW-0648 [SWW to Nye: 1869/ 03/ 12; Peking]

SWW-0649 [SWW to Brother Robert: 1869/ 04/ 29; Peking]

SWW-0650 [SWW to Brother Robert: 1869/ 06/ 30; Peking, Tremont Temple]

SWW-0651 [SWW to Brother Robert: 1869/ 08/ 02; Peking, Tremont Temple]

SWW-0652 [SWW to Brother Robert: 1869/ 09/ 01; Peking, Tremont Temple]

SWW-0653 [SWW to Brother Robert: 1869/ 10/ 08; Peking]

SWW-0654 [SWW to G.T. Olyphant: 1869/ 11/ 06; Shanghai]

SWW-0655 [SWW to Wife: 1869/ 11/ 09; n.p., Shanghai,; Tuesday]

SWW-0656 [SWW to Brother Robert: 1869/ 11/ 10; Shanghai]

SWW-0657 [SWW to Brother Robert: 1869/ 12/ 22; Peking]

SWW-0658 [SWW to Cousin Harriet: 1869/ 12/ 25; Peking]

1870

SWW-0659 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 01/ 14; Peking]

SWW-0660 [SWW to Son Frederick: 1870/ 01/ 15; Peking]

SWW-0661 [SWW to Brother Robert: 1870/ 01/ 19; Peking]

SWW-0662 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 02/ 08; Peking]

SWW-0663 [SWW to Son Frederick: 1870/ 02/ 16; Peking]

SWW-0664 [SWW to Brother Robert: 1870/ 02/ 24; Peking]

SWW-0665 [SWW to Brother Robert: 1870/ 03/ 24; Peking]

SWW-0666 [SWW to Wife and children: 1870/ 04/ 01; Peking]

SWW-0667 [SWW to Minister of State and of Foreign Affaires, Stockholm: 1870/ 04/ 01; Peking]

SWW-0668 [SWW to Brother Rober: 1870/ 04/ 23; Peking]

SWW-0669 [SWW to Brother Robert: 1870/ 05/16; Peking]

SWW-0670 [SWW to Wife: 1870/ 05/ 20; Peking]

SWW-0671 [SWW to US Treasury: 1870/05/20; Peking]

SWW-0672 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 05/ 23; Peking]

SWW-0673 [SWW to Son: 1870/ 05/ 25; Peking]

SWW-0674 [SWW to Mrs. Burlingame: 1870/ 05/ 26; Peking]

SWW-0675 [SWW to Wife: 1870/ 06/ 12; Peking]

SWW-0676 [SWW to Cousin Harriet: 1870/ 06/ 16; Peking]

SWW-0677 [SWW to Brother Robert: 1870/ 06/ 18; Peking]

SWW-0678 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 06/18; n.p., Peking]

SWW-0679 [SWW to Daughter: 1870/ 07/ 10; Peking, Tremont Temple]

SWW-0680 [SWW to Wife: 1870/ 07/ 26; Peking, Tremont Temple]

SWW-0681 [SWW to Brother Robert: 1870/ 07/ 26; Peking, Tremont Temple]

SWW-0682 [SWW to Son Frederick: 1870/ 07/ 26; Peking, Tremont Temple]

SWW-0683 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 08/ 11; Peking, Tremont Temple]

SWW-0684 [SWW to Brother Robert: 1870/ 08/ 15; Peking]

SWW-0685 [SWW to Son Frederick: 1870/ 08/ 23; Peking, Tremont Temple]

SWW-0686 [SWW to Wife: 1870/ 08/ 24; Peking, Tremont Temple]

SWW-0687 [SWW to Wife: 1870/ 09/ 18; Peking]

SWW-0688 [SWW to Brother Robert: 1870/ 09/ 29; Peking]

SWW-0689 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 10/ 20; Peking]

SWW-0690 [SWW to Son Frederick: 1870/ 10/ 24; Peking]

SWW-0691 [SWW to Brother Robert: 1870/ 10/ 26; Peking]

SWW-0692 [SWW to Wife: 1870/ 10/ 27; Peking]

SWW-0693 [SWW to Wife: 1870/10/28; Peking]

SWW-0694 [SWW to Wife: 1870/ 11/ 22; Peking]

SWW-0695 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 11/ 22; Peking]

SWW-0696 [SWW to Brother Robert: 1870/ 11/ 24; Peking]

SWW-0697 [SWW to Mateer: 1870/ 12/ 01; Peking]

SWW-0698 [SWW to Daughter Sophia: 1870/ 12/ 19; Peking]

SWW-0699 [SWW to G.T. Olyphant: 1870/ 12/ 21; n.p., Peking]

SWW-0700 [SWW to Wife: 1870/ 12/ 24; Peking]

SWW-0701 [SWW to Son Frederick: 1870/ 12/ 27; Peking]

SWW-0702 [SWW to Brother Robert: 1870/ 12/ 29; Peking]

1871

SWW-0703 [SWW to Children Sophia & Frederick: 1871/ 01/ 01; Peking]

SWW-0704 [SWW to Wife: 1871/ 01/ 07; Peking]

SWW-0705 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 01/ 21; Peking]

SWW-0706 [SWW to Wife: 1871/ 01/ 24; Peking]

SWW-0707 [SWW to Son Frederick: 1871/ 01/ 25; Peking]

SWW-0708 [SWW to Brother Robert: 1871/ 01/ 26; Peking]

SWW-0709 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 02/ 01; Peking]

SWW-0710 [SWW to Wife: 1871/ 02/ 20; Peking]

SWW-0711 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 02/ 21; Peking]

SWW-0712 [SWW to Brother Robert: 1871/ 02/ 21; Peking]

SWW-0713 [SWW to Son Frederick: 1871/ 02/ 22; Peking]

SWW-0714 [SWW to Cousin Harriet: 1871/ 03/ 30; Peking]

SWW-0715 [SWW to Wife: 1871/ 03/ 30; Peking]

SWW-0716 [SWW to GT Olyphant: 1871/ 03/ 30; Peking]

SWW-0717 [SWW to Brother Robert: 1871/ 03/ 30; Peking]

SWW-0718 [SWW to Son Frederick: 1871/ 03/ 30; Peking]

SWW-0719 [SWW to Abby: 1871/ 04/ 18; Peking]

SWW-0720 [SWW to Brother Robert: 1871/ 04/ 24; Peking]

SWW-0721 [SWW to Son Frederick: 1871/ 04/ 25; Peking]

SWW-0722 [SWW to Wife: 1871/ 04/ 26; Peking]

SWW-0723 [SWW to GT Olyphant: 1871/ 04/ 27; Peking]

SWW-0724 [SWW to GT Olyphant: 1871/ 05/ 24; Peking]

SWW-0725 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 05/ 24; Peking]

SWW-0726 [SWW to Brother Robert: 1871/ 05/ 25; Peking]

SWW-0727 [SWW to Wife: 1871/ 05/ 26; Peking]

SWW-0728 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 05 / n.d. & 1871/ 05/ 10; Peking]

SWW-0729 [SWW to Wife: 1871/ 06/ 18; Peking]

SWW-0730 [SWW to Cousin Harriet: 1871/ 06/ 22; n.p., Peking]

SWW-0731 [SWW to Brother Robert: 1871/ 06/ 22; Peking]

SWW-0732 [SWW to Son Frederick: 1871/ 06/ 27; Peking]

SWW-0733 [SWW to Wife: 1871/ 06/ 29; Peking]

SWW-0734 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 07/ 25; Peking, Tremont Temple]

SWW-0735 [SWW to Wife: 1871/ 07/ 26; Peking, Tremont Temple]

SWW-0736 [SWW to Son Frederick: 1871/ 07/ 26; Peking, Tremont Temple; misplaced on the film, Reel 5 1048-51]

SWW-0737 [SWW to Brother Robert: 1871/ 07/ 27; Peking]

SWW-0738 [SWW to Son Frederick: 1871/ 08/ 29; Peking]

SWW-0739 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 08/ 29; Peking, Tremont Temple]

SWW-0740 [SWW to Wife: 1871/ 08/ 30; Peking, Tremont Temple]

SWW-0741 [SWW to Brother Robert: 1871/ 08/ 30; Peking, Tremont Temple]

SWW-0742 [SWW to Brother Robert: 1871/ 09/ 27; Peking

SWW-0743 [SWW to Wife: 1871/ 10/ 22; Peking]

SWW-0744 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 10/ 26; Peking]

SWW-0745 [SWW to Wife: 1871/11/08; attached note to the 2 pages & a half farewell letter of Blodget to SWW]

SWW-0746 [SWW to Blodgett: 1871/ 11/ 15; Taku]

SWW-0747 [SWW to Wife: 1871/ 11/ 26; Shanghai]

SWW-0748 [SWW to Blodgett: 1871/ 11/ 30; Shanghai]

SWW-0749 [SWW to Son Frederick: 1871/ 12/ 08; Shanghai]

SWW-0750 [SWW to Daughter Sophia: 1871/ 12/ 08; Shanghai]

SWW-0751 [SWW to Brother Robert: 1871/ 12/ 11; Shanghai]

SWW-0752 [SWW to Blodgett: 1871/ 12/ 12; n.p., Shanghai]

SWW-0753 [SWW to Daughter Sophia: **1872**/ 01/ 07; Shanghai]

SWW-0754 [SWW to Brother Robert: 1872/ 01/ 08; Shanghai]

SWW-0755 [SWW to Son Frederick: 1872/ 01/ 08; Shanghai]

SWW-0756 [SWW to Cousin Harriet: 1872/ 01/ 09; Shanghai]

SWW-0757 [SWW to Wife: 1872/ 01/ 10; Shanghai]

SWW-0758 [SWW to Blodgett: 1872/ 01/ 13; n.p., Shanghai]

SWW-0759 [SWW to Blodgett: 1872/ 01/ 25; Shanghai]

SWW-0760 [SWW to Son Frederick: 1872/ 02/ 12; Shanghai]

SWW-0761 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 02/ 12; Shanghai]

SWW-0762 [SWW to Blodgett: n.y., 1872/ 02/ 14; Shanghai]

SWW-0763 [SWW to Brother Robert: 1872/ 02/ 15; Shanghai]

SWW-0764 [SWW to Blodgett: 1872/ 02/ 22; n.p., Shanghai]

SWW-0765 [SWW to Wife: 1872/ 03/ 14; Shanghai]

SWW-0766 [SWW to Brother Robert: 1872/ 03/ 14; Shanghai]

SWW-0767 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 03/ 14; Shanghai]

SWW-0768 [SWW to Son Frederick: 1872/ 03/ 14; Shanghai]

SWW-0769 [SWW to Sister-in-law Abby: 1872/ 04/ 10; n.p., Shanghai]

SWW-0770 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 04/ 10; Shanghai]

SWW-0771 [SWW to Wife: 1872/ 04/ 11; Shanghai]

SWW-0772 [SWW to Son Frederick: 1872/ 04/ 11; Shanghai]

SWW-0773 [SWW to Wife: 1872/ 04/ 27; Shanghai]

SWW-0774 [SWW to Brother Robert: 1872/ 05/ 01; Shanghai]

SWW-0775 [SWW to Son Frederick: 1872/ 05/ 09; Shanghai]

SWW-0776 [SWW to Wife: 1872/ 05/ 10; Shanghai]

SWW-0777 [SWW to Brother Robert: 1872/ 05/ 10; Shanghai]

SWW-0778 [SWW to Blodgett: 1872/ 06/ 04; Shanghai]

SWW-0779 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 06/ 07; Shanghai]

SWW-0780 [SWW to Brother Robert: 1872/ 06/ 10; n.p., Shanghai]

SWW-0781 [SWW to Wife: 1872/ 06/ 11; Shanghai]

SWW-0782 [SWW to Son Frederick: 1872/ 06/ 11; n.p., Shanghai]

SWW-0783 [SWW to Parker: 1872/ 06/ 12; Shanghai]

SWW-0784 [SWW to Wife: 1872/ 06/ 24; Shanghai]

SWW-0785 [SWW to Brother Robert: 1872/ 06/ 24; n.p., Shanghai]

SWW-0786 [SWW to Blodgett: 1872/ 07/ 09; Shanghai]

SWW-0787 [SWW to Son Frederick: 1872/ 07/ 10; Shanghai]

SWW-0788 [SWW to Wife: 1872/ 07/ 10; Shanghai]

SWW-0789 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 07/ 11; Shanghai]

SWW-0790 [SWW to Brother Robert: 1872/ 07/ 11; Shanghai]

SWW-0791 [SWW to Wife: 1872/ 07/ 26; Shanghai]

SWW-0792 [SWW to Wife: 1872/ 08/ 24; Shanghai]

SWW-0793 [SWW to Brother Robert: 1872/ 08/ 24; Shanghai]

SWW-0794 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 08/ 24; Shanghai]

SWW-0795 [SWW to Son Frederick: 1872/ 08/ 24; Shanghai]

SWW-0796 [SWW to Wife: 1872/ 09/ 21; Shanghai]

SWW-0797 [SWW to Brother Dwight: 1872/ 09/ 21; Shanghai]

SWW-0798 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 09/ 21; Shanghai]

SWW-0799 [SWW to Dana: 1872/ 09/ 21; Shanghai]

SWW-0800 [SWW to Son Frederick: 1872/ 09/ n.d.; Shanghai]

SWW-0801 [SWW to Brother Robert: 1872/ 10/ 11; Shanghai]

SWW-0802 [SWW to Nye: no date, 1872/ 10/ 21; no place, Shanghai; Nye's note]

SWW-0803 [SWW to Wife: 1872/ 10/ 26; Shanghai]

SWW-0804 [SWW to Brother Robert: 1872/ 10/ 26; Shanghai]

SWW-0805 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 10/ 26; Shanghai]

SWW-0806 [SWW to Son Frederick: 1872/ 10/ 31; Shanghai]

SWW-0807 [SWW to Wife: 1872/ 11/ 11; Shanghai]

SWW-0808 [SWW to Brother Robert: 1872/ 11/ 11; Shanghai]

SWW-0809 [SWW to Wife: 1872/ 11/ 25; Shanghai]

SWW-0810 [SWW to Daughter Sophia: 1872/ 11/ 26; Shanghai]

SWW-0811 [SWW to Brother Robert: 1872/ 12/ 11; Shanghai]

1873

SWW-0812 [SWW to Daughter Sophia: 1873/ 01/ 01 & 1873/ 01/ 10; Shanghai]

SWW-0813 [SWW to Brother Robert: 1873/ 01/ 10; Shanghai]

SWW-0814 [SWW to Son Frederick: 1873/ 01/ 12; Shanghai]

SWW-0815 [SWW to Wife: 1873/ 01/ 13; Shanghai]

SWW-0816 [SWW to Wife: 1873/ 01/ 24; Shanghai]

SWW-0817 [SWW to Brother Dwight: 1873/ 01/ 25; Shanghai]

SWW-0818 [SWW to Wife: 1873/ 02/ 11; Shanghai]

SWW-0819 [SWW to Brother Robert: 1873/ 02/ 11; Shanghai]

SWW-0820 [SWW to Daughter Sophia: 1873/ 02/ 11; Shanghai]

SWW-0821 [SWW to Blodgett: 1873/ 02/ 14; n.p., Shanghai]

SWW-0822 [SWW to Son Frederick: 1873/ 02/ 24; Shanghai]

SWW-0823 [SWW to Wife: 1873/ 02/ 28; Shanghai]

SWW-0824 [SWW to Brother Robert: 1873/ 02/ 28; Shanghai]

SWW-0825 [SWW to Brother Robert: 1873/ 03/ 11; Shanghai]

SWW-0826 [SWW to Wife: 1873/ 03/ 25; Shanghai]

SWW-0827 [SWW to Blodgett: n.y., 1873/ 04/ 04; Shanghai]

SWW-0828 [SWW to Wife: 1873/ 04/ 13; Shanghai; cable message]

SWW-0829 [SWW to Wife: 1873/ 04/ 25; Shanghai]

SWW-0830 [SWW to Son Frederick: 1873/ 05/ 01; Shanghai]

SWW-0831 [SWW to Brother Robert: 1873/ 05/ 09; Shanghai]

SWW-0832 [SWW to Daughter Sophia: 1873/ 05/ 09; Shanghai]

SWW-0833 [SWW to Son Frederick: 1873/ 05/ 10; Shanghai]

SWW-0834 [SWW to Nye: 1873/ 05/ 20; Shanghai]

SWW-0835 [SWW to Brother Robert: 1873/ 06/ 11; Shanghai]

SWW-0836 [SWW to Brother Robert: 1873/ 07/ 14; Peking]

SWW-0837 [SWW to Brother Robert: 1873/ 08/ 15; Peking, Tremont Temple]

SWW-0838 [SWW to Son Frederick: 1873/ 08/ 15; Peking, Tremont Temple]

SWW-0838 [SWW to Brother Dwight: 1873/ 08/ 15; Peking, Tremont Temple]

SWW-0840 [SWW to Son Frederick: 1873/ 08/ 28; Peking, Tremont Temple]

SWW-0841 [SWW to Brother Robert: 1873/ 09/ 13; Peking]

SWW-0842 [SWW to Brother Robert: 1873/ 09/ 23; Peking]

SWW-0843 [SWW to Son Frederick: 1873/ 09/ 29; Peking]

SWW-0844 [SWW to Brother Dwight: 1873/ 09/ 29; Peking]

SWW-0845 [SWW to Brother Robert: 1873/ 10/ 27; Peking]

SWW-0846 [SWW to Brother Robert: 1873/ 11/ 01; Peking]

SWW-0847 [SWW to Brother Robert: 1873/ 11/ 15; Peking]

SWW-0848 [SWW to Son Frederick: 1873/ 12/ 02; Peking]

SWW-0849 [SWW to Brother Dwight: 1873/ 12/ 05; Peking]

SWW-0850 [SWW to Robert: 1873/ 12/ 24 &1874/ 01/ 06; Peking]

1874

SWW-0851 [SWW to Brother Robert: 1874/ 01/ 28; Peking]

SWW-0852 [SWW to Son Frederick: 1874/ 01/ 28; Peking]

SWW-0853 [SWW to Brother Dwight: 1874/ 03/ 11; Peking]

SWW-0854 [SWW to Son Frederick: 1872/ 03/ 28; Peking]

SWW-0855 [SWW to Brother Robert: 1874/ 03/ 28; Peking]

SWW-0856 [SWW to Brother Robert: 1874/ 05/ 01; Peking]

SWW-0857 [SWW to Son Frederick: 1874/ 05/ 01; n.p., Peking]

SWW-0858 [SWW to Brother Robert: 1874/ 05/ 15; n.p., Peking]

SWW-0859 [SWW to Son Frederick: 1874/ 06/ 09 & 1874/ 06/ 12; n.p., Peking]

SWW-0860 [SWW to Brother Robert: 1874/ 06/ 15; n.p., Peking]

SWW-0861 [SWW to Nye: no date, 1874/ 06/ 18; no place;
Nye gives a hint; misplaced on the microfilm, Reel 6, 0285-6]

SWW-0862 [SWW to Brother Robert: 1874/ 06/ 29; Peking, Tremont Temple]

SWW-0863 [SWW to Brother Robert: 1874/ 07/ 16; Peking, Tremont Temple]

SWW-0864 [SWW to Son Frederick: 1874/ 08/ 06; n.p., Peking]

SWW-0865 [SWW to Brother Robert: 1874/ 08/ 06; Peking, Tremont Temple]

SWW-0866 [SWW to Son Frederick: 1874/ 08/ 08; Peking, Tremont Tempple]

SWW-0867 [SWW to Brother Robert: 1874/ 09/ 17; n.p., Peking]

SWW-0868 [SWW to Brother Robert: 1874/ 09/ 22; Peking]

SWW-0869 [SWW to Brother Dwight: 1874/ 09/ 29; Peking]

SWW-0870 [SWW to Son Frederick: 1874/ 10/ 03; Peking]

SWW-0871 [SWW to Brother Robert: 1874/ 10/ 14; Peking]

SWW-0872 [SWW to Son Frederick: 1874/10/31; Peking]

SWW-0873 [SWW to Brother Dwight: 1874/11/12; Peking]

SWW-0874 [SWW to Brother Robert: 1874/11/13; Peking]

SWW-0875 [SWW to Brother Robert: 1874/ 12/ 09; Peking]

SWW-0876 [SWW to Son Frederick: 1874/ 12/ 09; Peking]

SWW-0877 [SWW to Brother Robert: 1874/ 12/ 15; Peking]

SWW-0878 [SWW to Brother Robert: 1874/ 12/ 23; Peking]

1875

SWW-0879 [SWW to Parker: 1875/ 01/ 06; Peking]

SWW-0880 [SWW to Brother Robert: 1875/ 01/ 26; Peking]

SWW-0881 [SWW to Son Frederick: 1875/ 01/ 26; Peking]

SWW-0882 [SWW to Brother Robert: 1875/ 02/ 10; Peking; fragmentary]

SWW-0883 [SWW to Son Frederick: 1875/ 02/ 18 & 1875/ 02/ 24; Peking]

SWW-0884 [SWW to Brother Robert: 1875/ 02/ 24; Peking]

SWW-0885 [SWW to Brother Robert: 1875/ 03/ 06; Peking]

SWW-0886 [SWW to Brother Robert: 1875/ 03/ 20; Peking]

SWW-0887 [SWW to Brother Dwight & his wife: 1875/ 03/ 20; Peking]

SWW-0888 [SWW to Son Frederick: 1875/ 04/ 10; Shanghai]

SWW-0889 [SWW to Protestant Missionaries in China: 1875/ 04/ 15; Shanghai; pp. 3; printed letter and signed by SWW]

SWW-0890 [SWW to Brother Robert: 1875/ 04/ 15; Shanghai]

SWW-0891 [SWW to Thomas George Grosvenor: 1875/ 04/ 21; Shanghai]

SWW-0892 [SWW to Blodgett: 1875/ 04/ 24 & 1875/ 04/ 26; Saigon]

SWW-0893 [SWW to Mateer: 1875/ 05/ 08; on board the Str. Pei-ho]

SWW-0894 [SWW to Brother Robert: 1875/ 06/ 23 & 1875/ 06/ 25; Brussels]

SWW-0895 [SWW to Brother Robert: 1875/ 07/ 21; Paris]

SWW-0896 [SWW to Blodgett: 1875/ 08/ 02; London]

SWW-0897 [SWW to Son Frederick: 1875/ 08/ 04; London]

SWW-0898 [SWW to Daughter Sophia: 1875/ 08/ 20; on board the Republic]

SWW-0899 [SWW to Blodgett: 1875/ 09/ 02; Utica]

SWW-0900 [SWW to Dana: 1875/ 09/ 10; Utica; pp. 4]

SWW-0901 [SWW to Brother Dwight: 1875/ 09/ 18; Utica]

SWW-0902 [SWW to Daughter Sophia: 1875/ 09/ 24]

SWW-0903 [SWW to Brother Robert: 1875/ 10/ 06; Chicago]

SWW-0904 [SWW to Brother Robert: 1875/ 10/ 13; Washington]

SWW-0905 [SWW to Hamilton Fish: 1875/ 10/ 14; Washington]

SWW-0906 [SWW to Brother Robert: 1875/ 10/ 27; New Haven]

SWW-0907 [SWW to Brother Robert: 1875/ 11/ 02; St Albans]

SWW-0908 [SWW to Brother Robert: 1875/ 11/ 12; Plattsburgh]

SWW-0909 [SWW to Brother Robert: 1875/ 11/ 09; St Albans]

SWW-0910 [SWW to Brother Robert: 1875/ 11/ 26; St Albans]

SWW-0911 [SWW to Brother Robert: 1875/ 12/ 03; New Haven]

SWW-0912 [SWW to Daughter Sarah: 1875/ 12/ 17; Utica]

SWW-0913 [SWW to Blodgett: 1875/ 12/ 18; Utica]

1876

SWW-0914 [SWW to Brother Robert: 1876/ 01/ 15; Washington]

SWW-0915 [SWW to Hamilton Fish, Sec. of State: 1876/ 01/ 17; Washington; Asks for repayment to substitute, Jan. 18, 1876]

SWW-0916 [SWW to Brother Robert: 1876/ 01/ 27; Washington]

SWW-0917 [SWW to Brother Robert: 1876/ 02/ 02; Washington]

SWW-0918 [SWW to Brother Robert: 1876/ 02/ 12; Pennsylvania]

SWW-0919 [SWW to Blodgett: 1876/ 02/ 19; Utica]

SWW-0920 [SWW to Dana: 1876/ 02/ 29; Utica]

SWW-0921 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 03/02; Utica]

SWW-0922 [SWW to Dana: 1876/ 03/ 15; Utica]

SWW-0923 [SWW to Brother Robert: 1877/ 03/ 19; n.p., Utica; misplaced on the microfilm, Roll 6, 0767]

SWW-0924 [SWW to Brother Robert: 1876/ 04/ 24; Yokohama]

SWW-0925 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 05/ 06; Shanghai]

SWW-0926 [SWW to Brother Robert: 1876/ 05/ 12; Shanghai]

SWW-0927 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 05/ 15; Shanghai]

SWW-0928 [SWW to Brother Robert: 1876/ 05/ 20; Shanghai]

SWW-0929 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 05/ 26, Peiho river; & 1876/ 05/ 31, Peking]

SWW-0930 [SWW to Brother Robert: 1876/ 06/ 05; Peking]

SWW-0931 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 06/ 07; Peking]

SWW-0932 [SWW to Thomas George Grosvenor, Son-in-Law: 1876/ 06/ 13; Peking]

SWW-0933 [SWW to Brother Robert: 1876/ 06/ 20; Peking]

SWW-0934 [SWW to Hamilton Fish: 1876/ 06/ 20; Peking]

SWW-0935 [SWW to Hamilton Fish: 1876/ 06/ 20; Peking]

SWW-0936 [SWW to Brother Robert: 1876/ 07/ 04; Peking; an enclosure, a poem “Centennla”, by Chester Holcombe]

SWW-0937 [SWW to Thomas George Grosvenor: 1876/ 07/ 10; Peking]

SWW-0938 [SWW to Brother Robert: 1876/ 07/ 17; Peking, Tremont Temple]

SWW-0939 [SWW to Mrs Eliza E. Yates: 1876/ 07/ 17; Peking, Tremont Temple]

SWW-0940 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 07/ 17; Peking, Tremont Temple]

SWW-0941 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 07/ 31; Peking, Tremont Temple]

SWW-0942 [SWW to Daughter Sophia: 1876/ 07/ 31; Peking, Tremont Temple]

SWW-0943 [SWW to Grosvenor: 1876/ 08/ 08; Peking, Tremont Temple]

SWW-0944 [SWW to Brother Robert: 1876/ 08/ 15; Peking, Tremont Temple]

SWW-0945 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 08/ 28; Peking, Tremont Temple]

SWW-0946 [SWW to Brother Robert: 1876/ 08/ 29; Peking, Tremont Temple]

SWW-0947 [SWW to Nye: 1876/ 09/ 01; Peking, Tremont Temple]

SWW-0948 [SWW to John L. Nevius and others: 1876/ 09/ 17; Peking]

SWW-0949 [SWW to Brother Robert: 1876/ 10/ 04; Peking]

SWW-0950 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 10/ 04; Peking]

SWW-0951 [SWW to Ernest J. Eitel: 1876/ 10/ 06; Peking]

SWW-0952 [SWW to Nye: 1876/ 10/ 16; Peking]

SWW-0953 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 10/ 20; Peking]

SWW-0954 [SWW to Hamilton Fish: 1876/ 10/ 24; Peking; fragmentary; misplaced on the microfilm, Roll 6, 0931]

SWW-0955 [SWW to Wife Sarah: 1876/ 10/ 26; Peiho]

SWW-0951 [SWW to Blodgett: 1876/ 11/ 05; Shanghai]

SWW-0952 [SWW to Blodgett: 1876/ 11/ 13; Shanghai]

SWW-0953 [SWW to T. G. Smith, Secretary, North China Branch of the Royal Asiatic Society: 1876/ 11/ 22; no place]

1877

SWW-0954 [SWW to Blodgett: 1877/ 01/ 06; Utica; pp. 4]

SWW-0955 [SWW to Chester Holcombe: 1877/ 01/ 22; Washington]

SWW-0956 [SWW to Brother Robert: 1877/ 01/ 24; Washington; pp. 4]

SWW-0957 [SWW to Blodgett: 1877/ 02/ 02; New Haven]

SWW-0958 [SWW to Blodget, Edkins and others: 1877/ 02/ 02; New Haven]

SWW-0959 [SWW to F.F. Ellinwood: 1877/ 02/ 14; New Haven]

SWW-0960 [SWW to Mrs. Cornelia W. Martin: 1877/ 02/ 26/ New Haven]

SWW-0961 [SWW to Brother Robert: 1877/ 03/ 03/ New Haven]

SWW-0962 [SWW to Brother Robert: 1877/ 03/ 24; New Haven]

SWW-0963 [SWW to Brother Robert: 1877/ 03/ 28; New Haven]

SWW-0964 [SWW to Brother Robert: 1877/ 04/ 02; n.p., New Haven]

SWW-0965 [SWW to Brother Robert: 1877/ 04/ 04; New Haven]

SWW-0966 [SWW to Brother Robert: 1877/ 04/ 09; New Haven]

SWW-0967 [SWW to Grosvenor: 1877/ 04/ 13; New Haven]

SWW-0968 [SWW to Cousin Mrs Harriet Wood: 1877/ 04/ 17; New Haven]

SWW-0969 [SWW to Brother Dwight: 1877/ 04/ 19; New Haven]

SWW-0970 [SWW to Brother Robert: 1877/ 04/ 25; New Haven]

SWW-0971 [SWW to Brother Robert: 1877/ 05/ 01; n.p., New Haven]

SWW-0972 [SWW to Blodgett: 1877/ 05/ 07; New Haven]

SWW-0973 [SWW to Brother Robert: 1877/ 06/ 06; New Haven]

SWW-0974 [SWW to Blodgett: 1877/ 06/ 14; New Haven]

SWW-0975 [SWW to Blodgett: 1877/ 07/ 03; New Haven]

SWW-0976 [SWW to Brother Robert: 1877/ 07/ 12; n.p., New Haven]

SWW-0977 [SWW to Franklin B. Dexter: 1877/ 07/ 13; New Haven; misplaced on the microfilm, Reel 6, 1277 & 1279]

SWW-0978 [SWW to Sophia: 1877/ 08/ 31; Utica]

SWW-0979 [SWW to Brother Robert: 1877/ 09/ 10; New Haven]

SWW-0980 [SWW to Nye: 1877/ 09/ 12; New Haven]

SWW-0981 [SWW to Blodgett: 1877/ 09/ 17; New Haven]

SWW-0982 [SWW to Brother Dwight: 1877/ 09/ 22; New Haven]

SWW-0983 [SWW to Brother Robert: 1877/ 09/ 26; n.p., New Haven]

SWW-0984 [SWW to Blodgett: 1877/ 10/ 09; New Haven]

SWW-0985 [SWW to Brother Robert: 1877/ 12/ 04; n.p., New Haven]

SWW-0986 [SWW to Daughter: 1877/ 12/ 06; New Haven]

SWW-0987 [SWW to Blogett: 1877/ 12/ 13 & 1877/ 12/ 22; New Haven]

SWW-0988 [SWW to Brother Dwight: 1877/ 12/ 17; New Haven]

SWW-0989 [SWW to Brother Robert: 1877/ 12/ 27; n.p., New Haven]

1878

SWW-0990 [SWW to Brother Robert: 1878/ 01/ 09; New Haven]

SWW-0991 [SWW to Brother Dwight: 1878/ 01/ 14; n.p., New Haven]

SWW-0992 [SWW to Brother Robert: 1878/ 02/ 01; New Haven]

SWW-0993 [SWW to Brother Robert: 1878/ 02/ 06; New Haven]

SWW-0994 [SWW to Blodgett: 1878/ 02/ 07; New Haven]

SWW-0995 [SWW to Brother Robert: 1878/ 02/ 16; New Haven]

SWW-0996 [SWW to Brother Robert: 1878/ 02/ 21; New Haven]

SWW-0997 [SWW to Nye: 1878/ 02/ 21; New Haven]

SWW-0998 [SWW to Brother Robert: 1878/ 02/ 23; n.p., New Haven]

SWW-0999 [SWW to Brother Robert: 1878/ 03/ 07; New Haven]

SWW-1000 [SWW to Brother Robert: 1878/ 03/ 11; New Haven]

SWW- 1001 [SWW to Blodgett: 1878/ 03/ 21; New Haven]

SWW-1002 [SWW to Daughter Sophia: n.y., 1878/ 03/ 23; New Haven; a long note enclosed]

SWW-1003 [SWW to Brother Robert: 1878/ 04/ 22; n.p., New Haven]

SWW-1004 [SWW to Daughter Sophia and her husband: 1878/ 04/ 24; New Haven]

SWW-1005 [SWW to Blodgett: 1878/ 05/ 18; New Haven]

SWW-1006 [SWW to Brother Robert: 1878/ 05/ 24; n.p., New Haven]

SWW-1007 [SWW to Sophia: 1878/ 06/ 07; New Haven]

SWW-1008 [SWW to Brother Robert: 1878/ 06/ 14; New Haven]

SWW-1009 [SWW to Blodgett: 1878/ 06/ 22; New Haven]

SWW-1010 [SWW to Brother Robert: 1878/ 06/ 29; n.p., New Haven]

SWW-1011 [SWW to Brother Robert: 1878/ 07/ 06; New Haven]

SWW-1012 [SWW to Blodgett: 1878/ 07/ 20; Utica]

SWW-1013 [SWW to Blodgett: 1878/ 08/ 20; New Haven]

SWW-1014 [SWW to Brother Robert: 1878/ 08/ 28; n.p., New Haven]

SWW-1015 [SWW to Brother Robert: 1878/ 09/ 11; n.p., New Haven]

SWW-1016 [SWW to Grosvenor: 1878/ 09/ 21; n.p., New Haven]

SWW-1017 [SWW to Brother Robert: 1878/ 09/ 28; n.p., New Haven]

SWW-1018 [SWW to Blodgett: 1878/ 10/ 21; New Haven]

SWW-1018 [SWW to Son Frederick: 1878/ 10/ 31; New Haven]

SWW-1019 [SWW to Brother Robert: 1878/ 11/ 01; n.p., New Haven]

SWW-1020 [SWW to Brother Robert: 1878/ 11/ 07; n.p., New Haven]

SWW-1020 [SWW to Nye: 1878/ 11/ 08; New Haven]

SWW-1021 [SWW to Blodgett: 1878/ 11/ 18; New Haven]

SWW-1022 [SWW to Brother Robert: 1878/ 12/ 10; New Haven]

SWW-1023 [SWW to Brother Robert: 1878/ 12/ 13; n.p., New Haven]

1879

SWW-1024 [SWW to Brother Robert: 1879/ 01/ 06; n.p., New Haven]

SWW-1025 [SWW to Dwight: 1879/ 01/ 09; New Haven]

SWW-1026 [SWW to Brother Robert: 1879/ 01/ 15
& 1879/ 01/ 16; Washington; fragmentary?]

SWW-1027 [SWW to Brother Robert: 1879/ 01/ 31; New Haven]

SWW-1028 [SWW to Brother Robert: 1879/ 02/ 14; New Haven]

SWW-1029 [SWW to Brother Robert: n.y., 1879/ 02/ 19; New Haven]

SWW-1030 [SWW to Brother Robert: 1879/ 03/ 01; New Haven]

SWW-1031 [SWW to Brother Robert: 1879/ 03/ 05; n.p., New Haven]

SWW-1032 [SWW to Blodgett: 1879/ 03/ 21; New Haven; copy;
"the press at Canton & Macao; Chinese Repository"]

SWW-1033 [SWW to Brother Robert: 1879/ 03/ 31; n.p., New Haven]

SWW-1034 [SWW to Brother Robert: 1879/ 04/ 09; n.p., New Haven]

SWW-1035 [SWW to Brother Robert: 1879/ 04/ 30; n.p., New Haven]

SWW-1036 [SWW to Brother Robert: 1879/ 05/ 10; n.p., New Haven]

SWW-1037 [SWW to Brother Robert: 1879/ 06/ 09; n.p., New Haven]

SWW-1038 [SWW to Brother Robert: 1879/ 06/ 16; New Haven]

SWW-1039 [SWW to Brother Robert: n.y., 1879/ 06/ 17; n.p., New Haven]

SWW-1040 [SWW to Blodget: 1879/ 07/ 03; New Haven]

SWW-1041 [SWW to Brother Robert: 1879/ 07/ 29; New Haven]

SWW-1042 [SWW to Brother Robert: 1879/ 08/ 04; New Haven]

SWW-1043 [SWW to Brother Robert: 1879/ 08/ 06; New Haven]

SWW-1044 [SWW to Son Frederick: 1879/ 08/ 06; New Haven]

SWW-1045 [SWW to Grosvenor: 1879/ 08/ 13; New Haven]

SWW-1046 [SWW to Blodgett: 1879/ 09/ 05; New Haven]

SWW-1047 [SWW to Brother Robert: 1879/ 09/ 22; New Haven]

SWW-1048 [SWW to Brother Frederick: 1879/ 09/ 29; New Haven]

SWW-1049 [SWW to Brother Robert: 1879/ 10/ 13; New Haven]

SWW-1050 [SWW to Brother Robert: 1879/ 10/ 23; n.p., New Haven]

SWW-1051 [SWW to Brother Robert: 1879/ 10/ 27; New Haven]

SWW-1052 [SWW to Blodgett: 1879/ 11/ 2; New Haven]

SWW-1053 [SWW to Brother Robert: 1879/ 11/ 07; New Haven]

SWW-1054 [SWW to Brother Robert: 1879/ 11/ 14; New Haven]

SWW-1055 [SWW to Brother Robert: 1879/ 11/ 24; New Haven]

SWW-1056 [SWW to Grosvenor: 1879/ 12/ 05; New Haven]

SWW-1057 [SWW to Blodgett: 1879/ 12/ 16; New Haven]

SWW-1058 [SWW to Nye: 1879/ 12/ 18; New Haven]

SWW-1059 [SWW to Grosvenor: 1879/ 12/ 26; n.p., New Haven]

SWW-1060 [SWW to Brother Robert: 1879/ 12/ 30; New Haven]

1880

SWW-1061 [SWW to Brother Robert: 1880/ 01/13; New Haven]

SWW-1062 [SWW to Brother Robert: 1880/ 01/ 28; New Haven]

SWW-1063 [SWW to Blodgett: 1880/ 01/ 29; New Haven]

SWW-1064 [SWW to Brother Robert: 1880/ 02/ 02; New Haven]

SWW-1065 [SWW to Cousin Harriet: 1880/ 02/ 08; New Haven]

SWW-1066 [SWW to Brother Robert: 1880/ 03/ 13; New Haven]

SWW-1067 [SWW to Brother Robert: 1880/ 03/ 15; New Haven]

SWW-1068 [SWW to Brother Robert: 1880/ 03/ 23; New Haven]

SWW-1069 [SWW to Brother Robert: 1880/ 04/ 09; n.p., New Haven]

SWW-1070 [SWW to Brother Robert: 1880/ 04/ 15; New Haven]

SWW-1071 [SWW to Son Frederick: 1880/ 04/ 16; New Haven]

SWW-1072 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 04/ 22; New Haven]

SWW-1073 [SWW to Son Frederick: 1880/ 04/ 23; New Haven]

SWW-1074 [SWW to Brother Robert: 1880/ 05/ 10; n.p., Newhaven]

SWW-1075 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 05/ 12; New Haven]

SWW-1076 [SWW to Blodgett: 1880/ 05/ 18; Newhaven]

SWW-1077 [SWW to Brother Robert: 1880/ 05/ 31; New Haven]

SWW-1078 [SWW to Parker: 1880/ 06/ 08; New haven]

SWW-1079 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 06/ 08; New haven]

SWW-1080 [SWW to Blodgett: 1880/ 06/ 09; New Haven]

SWW-1081 [SWW to Brother Robert: 1880/ 06/ 14; n.p., New Haven]

SWW-1082 [SWW to Brother Robert: 1880/ 06/ n.d.; New Haven]

SWW-1083 [SWW to T.B. Dexter: 1880/ 07/ 05; New Haven]

SWW-1084 [SWW to Brother Robert: 1880/ 07/ 05; New Haven]

SWW-1085 [SWW to Blodgett: 1880/ 07/ 07; New Haven]

SWW-1086 [SWW to Nephew John Camp Williams: 1880/ 07/ 13; n.p., New Haven]

SWW-1087 [SWW to Brother Robert: 1880/ 07/ 19; Rye Beach]

SWW-1088 [SWW to Nye: 1880/ 07/ 21; Postmark Rye Beach]

SWW-1089 [SWW to Nye: 1880/ 07/ 21; Postmark Rye Beach]

SWW-1090[SWW to Daughter Sophia: 1880/ 08/ 06; Utica]

SWW-1091 [SWW to Blodgett: 1880/ 09/ 08; New Haven]

SWW-1092 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 09/ 23; New Haven]

SWW-1093 [SWW to Brother Robert: 1880/ 09/ 28; n.p., New Haven]

SWW-1094 [SWW to Nye: 1880/ 10/ 20; New Haven]

SWW-1095 [SWW to Thomas George Grosvenor: n.y., 1880/ 11/ 23; n.p., New Haven]

SWW-1096 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 12/ 08; n.p., New Haven]

SWW-1097 [SWW to Daughter Sophia: 1880/ 12/ 23; New Haven]

SWW-1098 [SWW to Brother Robert: 1880/ 12/ 27; New Haven]

1881

SWW-1099 [SWW to Brother Robert: 1881/ 01/ 03; Newhaven]

SWW-1100 [SWW to Blodgett: 1881/ 01/ 12; Newhaven]

SWW-1101 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 01/12; Newhaven]

SWW-1102 [SWW to Brother Robert: 1881/ 01/15; Newhaven]

SWW-1103 [SWW to Mrs. Parker: 1881/ 01/15]

SWW-1104 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 16 & 1881/ 01/ 17; Newhaven]

SWW-1105 [SWW to Brother Robert: 1881/ 01/ 18; Newhaven]

SWW-1106 [SWW to Son Frederic: 1881/ 01/ 19; n.p., New Haven; a postal card]

SWW-1107 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 20; a postal card]

SWW-1108 [SWW to Brother Robert: 1881/ 01/ 20; Newhaven]

SWW-1109 [SWW to Cousin Harriet: 1881/ 01/ 21; Newhaven]

SWW-1110 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 22; n.p., New Haven; postal card]

SWW-1111 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 23; n.p., New Haven; postcard]

SWW-1112 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 24; n.p., New Haven; postcard]

SWW-1113 [SWW to Brother Robert: 1881/ 01/ 24; Newhaven]

SWW-1114 [SWW to Son Frederick: 1881/ 01/ 25; Newhaven]

SWW-1115 [SWW to Brother Frederick and his wife: 1881/ 01/ 26; Newhaven]

SWW-1116 [SWW to Son and Daughter: 1881/ 01/ 31; Utica]

SWW-1117 [SWW to Brother Robert: 1881/ 02/ 05; Newhaven]

SWW-1118 [SWW to Son Frederick: 1881/ 02/ 07; Newhaven]

SWW-1119 [SWW to Friend Parker: 1881/ 02/ 08; Newhaven]

SWW-1120 [SWW to Son Frederick: 1881/ 02/ 11; Newhaven]

SWW-1121 [SWW to Daughter Sophy: 1881/ 02/ 11; New Haven]

SWW-1122 [SWW to Son Frederick: 1881/ 02/ 13; Newhaven]

SWW-1123 [SWW to Mrs Yates: 1881/ 02/ 13; New Haven]

SWW-1124 [SWW to Son Frederick: 1881/ 02/ 15; New Haven]

SWW-1125 [SWW to Edward W. Gilman: 1881/ 02/ 15; New Haven]

SWW-1126 [SWW to Brother Robert: 1881/ 02/ 19; n.p., New Haven]

SWW-1127 [SWW to Ebury: 1881/ 02/ 19; Newhaven]

SWW-1128 [SWW to Son Frederick: 1881/ 02/ 22; Newhaven]

SWW-1129 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 02/ 26; Newhaven]

SWW-1130 [SWW to Nye: 1881/ 02/ 26; Newhaven]

SWW-1131 [SWW to Brother Robert: 1881/ 02/ 28; n.p., New Haven]

SWW-1132 [SWW to Son Frederick: 1881/ 03/ 04; Newhaven]

SWW-1133 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 03/ 07; Newhaven]

SWW-1134 [SWW to American Bible Society: 1881/ 03/ 08; New Haven]

SWW-1135 [SWW to Son Frederick: 1881/ 03/ 11; Newhaven]

SWW-1136 [SWW to Cousin Mrs. Harriet Wood: 1881/ 03/ 15; New Haven]

SWW-1137 [SWW to Abby: 1881/ 03/ 19; Newhaven]

SWW-1138 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 03/ 21; Newhaven]

SWW-1139 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 03/ 25; Newhaven]

SWW-1140 [SWW to Son Frederick: n.y., 1881/ 03/ 28; Newhaven]

SWW-1141 [SWW to Brother Robert: 1881/ 03/ 30; Newhaven]

SWW-1142 [SWW to Brother Robert: 1881/ 04/ 04; n.p., Newhaven]

SWW-1143 [SWW to Son Frederick: 1881/ 04/ 04; Newhaven]

SWW-1144 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 04/ 08; New York]

SWW-1145 [SWW to Brother Robert: 1881/ 04/ 11; Newhaven]

SWW-1146 [SWW to Children Sophia & Thomas: 1881/ 04/ 15; New Haven]

SWW-1147 [SWW to William Muirhead: 1881/ 04/ 16; New Haven]

SWW-1148 [SWW to Son Frederick: 1881/ 04/ 18; New Haven]

SWW-1149 [SWW to Brother Robert: n.y. , 1881/ 04/ 18; New Haven]

SWW-1150 [SWW to Son Frederick: 1881/ 04/ 26; New Haven; post card]

SWW-1151 [SWW to Brother Robert: 1881/ 04/ 26; n.p., New Haven]

SWW-1152 [SWW to Blodgett: 1881/ 04/ ?30; New Haven]

SWW-1153 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 05/ 09; New Haven]

SWW-1154 [SWW to Son Frederick: n.y., 1881/ 05/ 10; New Haven]

SWW-1155 [SWW to Brother Robert: 1881/ 05/ 17; New Haven]

SWW-1156 [SWW to Son Frederick: 1881/ 05/ 20; Newhaven]

SWW-1157 [SWW to Son Frederick: 1881/ 05/ 23; n.p., New Haven; post card]

SWW-1158 [SWW to Son Frederick: 1881/ 05/ 2; n.p., New Haven]

SWW-1159 [SWW to Trübner: 1881/ 05/ 27; Newhaven; perhaps dictated

and signed by SWW, but handwritten by some other person, maybe Charlette]

SWW-1160 [SWW to Son Frederick: 1881/ 05/ 31; Newhaven]

SWW-1161 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 06/ 09; Newhaven]

SWW-1162 [SWW to Brother Robert: 1881/ 06/ 10; Newhaven]

SWW-1163 [SWW to Son Frederick: 1881/ 06/ 20; Newhaven]

SWW-1164 [SWW to Son Frederick: 1881/ 06/ 10; Newhaven]

SWW-1165 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 06/ 22; Newhaven]

SWW-1166 [SWW to Brother Robert: 1881/ 06/ 23; Newhaven]

SWW-1167 [SWW to Blodgett: 1881/ 06/ 27; Newhaven]

SWW-1168 [SWW to Son Frederick: 1881/ 06/ 27; Newhaven]

SWW-1169 [SWW to Brother Robert: n.y., 1881/ 06/ 27; New Haven]

SWW-1170 [SWW to Son Frederick: 1881/ 06/ 30; New Haven]

SWW-1171 [SWW to Sister-in-law Abby: 1881/ 07/ 01; n.p., New Haven]

SWW-1172 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 07/ 06; Newhaven]

SWW-1173 [SWW to Brother Robert: 1881/ 07/ 21; Saratoga Spring]

SWW-1174 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 07/ 21; Saratoga Spa]

SWW-1175 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 07/ 26; Saratoga Spa]

SWW-1176 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 07/ 29; Saratoga Spa]

SWW-1177 [SWW to Cousin Harriet: 1881/ 08/ 08; Saratoga Spa]

SWW-1178 [SWW to Brother Robert: n. y., 1881/ 08/ 10; St Albans]

SWW-1179 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 08/ 12; St Albans]

SWW-1180 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 08/ 22; Utica]

SWW-1181 [SWW to Daughter Sophia: n.y., 1881/ 08/ 24; Fayetteville]

SWW-1182 [SWW to Brother Robert: 1881/ 09/ 08]

SWW-1183 [SWW to Brother Robert: 1881/ 09/ 15; Newhaven]

SWW-1184 [SWW to Brother Robert: 1881/ 09/ 21; Newhaven]

SWW-1185 [SWW to Brother Robert: 1881/ 09/ 27; Newhaven]

SWW-1186 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 09/ 28; Newhaven]

SWW-1187 [SWW to Gideon Nye: 1881/ 09/ 28; Newhaven]

SWW-1188 [SWW to D^{r}. Damou: 1881/ 10/ 12; Newhaven;
copy made in perhaps Mrs Graham's handwriting]

SWW-1189 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 10/ 14; Newhaven]

SWW-1190 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 10/ 31; Newhaven]

SWW-1191 [SWW to Brother Robert: 1881/ 11/ 07; Newhaven]

SWW-1192 [SWW to Brother Dwight: 1881/ 11/ 07; Newhaven]

SWW-1193 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 11/ 14; Newhaven]

SWW-1194 [SWW to Brother Robert: 1881/ 11/ 16; Newhaven]

SWW-1195 [SWW to Daughter Sophia: 1881/ 11/ 23
& 1881/ 11/ 25; Newhaven]

SWW-1196 [SWW to Sophia: 1881/ 12/ 01; Newhaven]

SWW-1197 [SWW to Brother Robert: 1881/ 12/ 10; Newhaven]

1882

SWW-1198 [SWW to Blodgett: 1882/ 01/ 02; Newhaven]

SWW-1199 [SWW to Daughter Sophia: 1882/ 01/ 17; Newhaven]

SWW-1200 [SWW to Brother Robert: 1882/ 01/ 18; Newhaven]

SWW-1201 [SWW to Brother Robert: 1882/ 01/ 24; Newhaven]

SWW-1202 [SWW to the Board of Managers, American Bible Society:
1882/ 02/ 28; New Haven]

SWW-1203 [SWW to Brother Robert: 1882/ 02/ 09; Newhaven]

SWW-1204 [SWW to Brother Robert: 1882/ 02/ 27; Newhaven]

SWW-1205 [SWW to Son Frederick: 1882/ 08/ 11; Litchfield]

SWW-1206 [SWW to Brother Robert: 1882/ 10/ 17; New Haven]

SWW-1207 [SWW to Brother Robert: 1882/ 11/ 01; New Haven]

SWW-1208 [SWW to Mrs Parker: 1882/ 11/ 21; New Haven]

SWW-1209 [SWW to Daughter Sophia: 1882/ 12/ 09]

SWW-1210 [SWW to Son Frederick: 1882/ 12/ 12; New Haven]

SWW-1211 [SWW to Brother Robert: 1882/ 12/ 15; New Haven]

1883

SWW-1212 [SWW to Brother Robert: 1883/ 01/ 01; New Haven]

SWW-1213 [SWW to Brother Robert: 1883/ 01/ 15; New Haven]

SWW-1214 [SWW to Brother Robert: 1883/ 02/ 03; New Haven]

SWW-1215 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 02/ 14; New Haven]

SWW-1216 [SWW to Brother Robert: 1883/ 02/ 15; New Haven; enclosing an a/c]

SWW-1217 [SWW to Brother Robert: 1883/ 02/ 22; Newhaven]

SWW-1218 [SWW to Blodgett: 1883/ 02/ 27; New Haven]

SWW-1219 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 03/ 08; New Haven]

SWW-1220 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 03/ 20; New Haven]

SWW-1221 [SWW to Mrs Parker: 1883/ 03/ 23; New Haven]

SWW-1222 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 03/ 31; New Haven]

SWW-1223 [SWW to Brother Robert: 1883/ 04/ 11; New Haven]

SWW-1224 [SWW to Brother Robert: 1883/ 04/ 24; New Haven]

SWW-1225 [SWW to Parker: 1883/ 04/ 26; New Haven]

SWW-1226 [SWW to Parker: 1883/ 04/ 26; New Haven]

SWW-1227 [SWW to Blodgett: 1883/ 04/ 27; Newhaven]

SWW-1228 [SWW to Brother Robert: 1883/ 05/ 01; New Haven]

SWW-1229 [SWW to Cousin Harriet: 1883/ 05/ 10; New Haven]

SWW-1230 [SWW to Blodgett: 1883/ 05/ 26; New Haven]

SWW-1231 [SWW to Mrs Eliza E Yates: 1883/ 05/ n.d.; New Haven]

SWW-1232 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 06/ 05; New Haven]

SWW-1233 [SWW to Brother Robert: 1883/ 06/ 13; New Haven]

SWW-1234 [SWW to Parker: 1883/ 06/ 30; New Haven]

SWW-1235 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 07/ 07; New Haven]

SWW-1236 [SWW to Son Frederick: 1883/ 07/ 14; Holderness]

SWW-1237 [SWW to Brother Robert: 1883/ 07/ 16; Holderness]

SWW-1238 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 07/ 26; Holderness]

SWW-1239 [SWW to Brother Robert: 1883/ 07/ 25; Holderness]

SWW-1240 [SWW to Son Frederick: 1883/ 07/ 31; Holderness]

SWW-1241 [SWW to Blodgett: 1883/ 08/ 09; Holderness]

SWW-1242 [SWW to Son Frederick: 1883/ 08/ 10; Holderness]

SWW-1243 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 08/ 23; Holderness]

SWW-1244 [SWW to Brother Robert: 1883/ 08/ 27; Holderness]

SWW-1245 [SWW to Son Frederick: 1883/ 08/ 28; Holderness]

SWW-1246 [SWW to Parker: 1883/ 09/ 01; Holderness]

SWW-1247 [SWW to Brother Robert: 1883/ 09/ 10; New Haven]

SWW-1248 [SWW to Blodgett: 1883/ 09/ 17; New Haven]

SWW-1249 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 09/ 18; New Haven]

SWW-1250 [SWW to Cornelia Martin: 1883/ 09/ 21; New Haven; copy; pp. 2]

SWW-1251 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 10/ 03; New Haven]

SWW-1252 [SWW to Brother Robert: 1883/ 10/ 13; New Haven]

SWW-1253 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 10/ 16; New Haven]

SWW-1254 [SWW to Brother Robert: 1883/ 10/ 17; New Haven]

SWW-1255 [SWW to Perry Davis & Son: 1883/ 10/ 22; New Haven; an enclosure]

SWW-1256 [SWW to Brother Robert: 1883/ 10/ 27; New Haven]

SWW-1257 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 10/ 30; New Haven]

SWW-1258 [SWW to Brother Robert: 1883/ 11/ 25; New Haven]

SWW-1259 [SWW to Daughter Sophia: 1883/ 12/ 03; New Haven]

SWW-1260 [SWW to Brother Robert: 1883/ 12/ 18; New Haven]

1884

SWW-1261 [SWW to Brother Robert: 1884/ 01/ 01; New Haven]

SWW-1262 [SWW to Daughter Sophia: 1884/ 01/ 02; New Haven]

SWW-1263 [SWW to Francis H (Lindsley) Washburn: 1884/ 01/ 11; New Haven; an enclosure]

SWW-1264 [SWW to Brother Robert: 1884/ 01/ 14; New Haven]

SWW-1265 [SWW to Brother Robert: 1884/ 01/ 22; New Haven]

SWW-1266 [SWW to Mark Williams: 1884/ 01/ 24; New Haven; copy but signed by SWW]

第 二 報

研究成果（論文）

(3)　2010年4月出版、拙著からの抜粋日文論文

『国際理解の四重奏』「第二章　米国文書伝道師　S・ウェルズ・ウィリアムズ」

米国文書伝道師　S・ウェルズ・ウィリアムズ

本論のウィリアムズに入る前に、再びここで西村孝次先生の著作に戻ってみたい。宇野浩二の「たびたび枝路に入るのを許していただきたい、云々」の言葉通りに、私の「取り止めのない話」も許していただき、もういちど西村孝次先生に戻りたいのである。

西村孝次先生の興味深い著作の一冊は、『休み時間の英文学』である。そこに登場する英国のみならず米国の作家たち、それも十六人との関わり方が、一人の読者そして英文学の専門家として語られている。英文学というタイトルが付いているものの、イギリスの文学者だけが登場するわけでない。戦後日本の大学で大勢いの学生が学んだ英文学も、このところスッカリ衰退気味となり、英語科・英語学科・英米文化学科・国際コミュニケーション学科に様変わりしてきた。即戦力養成や資格取得機関のように、短期的に英語学習に集中する人気の学科だけでは、本当の意味での深い英語理解を達成できない。言葉は命なのであり、魂の洗練であるのだから、ゆっくりと時間をかけ、熟成の時を待たないといけない。英文学の作品をじっくりと鑑賞し楽しみながら、英語の言葉とのお付き合いを深めていきたいものである。急がば廻れなのだ。

それにしても英文学科の大学教授となると、勉強がたいへんなことになる、とは西村孝次先生の前掲書を読んでの率直な感想であった。

扱っている作家の名前を羅列しても、あまり意味のないことを承知しながら、昔、英文学科で学んで知った懐かしい作家十六名をそのまま挙げておきたいのである。エドガー・ポウ、カーライル、ハクスリー、ストレイチー、プリーストリー、ディケンズ、ディラン・トマス、ヴァージニア・ウルフ、ジョージ・オーウェル、キャサリン・マンスフィールド、スティーブン・スペンダー、それにアーサー・シモンズ、ワイルド、サマセット・モーム、ジョン・ウェイン、エドウィン・ミュア。

むろん先生の愛読された作家、詩人、評論家は、この数倍もの作家数になるであろう、と推察できる。英文学科の戦後教授職とは、本当に御苦労様な仕事なのである。いくら好きな文学の読書と言っても、以上の十六名

の作家について、それぞれ主要作品と研究書を読み上げていく。気の遠くなるような、時間量と意気込みを想定させる仕事だ。作品三冊、研究書一冊、それに伝記一冊を各作家について熟読精読するだけでも、すでに八十冊に達するのであるから、そのほかに読みかけのもの、参考のために集めて積読だけの分を加えたら、更に作家ごとに容易に五冊は追加できるであろう。その結果、再び八十冊増える計算となる。

イアン・フレッチャー宅の書架、ストークスの研究室書架、それに恩師須藤信雄先生の自宅と研究室書架、どの先生のところに伺ってみても、書架の数と蔵書の規模に圧倒された。そんな経験も手伝い、つい上記の冊数計算を試みたわけである。

昔の英文学「唯野」教授は、誰しも良く集め、良く読み、良く勉強された。こんなことを言うのも、先の西村先生による書き込み入りのシモンズ研究書が、座右に今あるからである。マーカートの『シモンズ論』は、一九八八年の発行である。恐らく老齢に達していたはずの先生は、高齢になってもシモンズに関心をお持ちであったらしい。鉛筆でびっしりと書き込みをしながら精読された跡が残っている。下線ばかりか、要所要所に縦線も加わり、その左脇に更にチェック記号Vが入っていたり、それもVVと二重の記号に発展している箇所もある。長年にわたり培ってきた本人開発の記号法であるのだろうが、こうした書き込みを目の前にするとき、先行者の読書にかけた熱意を感じる。それに洋書を読み進めていく迫力が、自然と伝わってくるようだ。

巻末の文献目録には、本文のときと同じように、下線・縦線・V・VVなどを要所に記していて、そこから先生のシモンズ作品の蔵書範囲を推測できそうある。これまた面白かった。マーチン・セッカーの出版した『シモンズ選集』全九巻版だけに二重のVV記号が入っているのは、最も重要な蔵書という意味なのであろうか。シモンズ作品リストのうちで、先生の所蔵を推定させるV記号の付いたものには、ちなみに以下のものがある。ブラウニング論、自伝「告白」、文学におけるデカダンス運動、ヴァーノン・リー論、ペーター論、英詩におけるロマン派運動、自伝「心の冒険」、文学における象徴派運動、である。研究書や伝記のうちでV記号の付いた

ものには、ロジャー・ロンブロァによる伝記と、ジョン・ムンロの研究書があり、博士論文は入っていない。

この記号付けは一人のシモンズ学者の長年かけた研究足跡を知る上で、貴重な情報を提供してくれている。二つの点で気になった。一つには、研究書・伝記・論文などをリストした第二次資料のなかに、先に言及した幾つかのシモンズ自筆書簡コレクションが、マーカートによって列記されているのに、そこには西村先生によるVサインを見かけない、という点である。著者のマーカートが、それら本来なら第一次資料として分類すべきものを探索・判読していることは、本文中の引用を見れば明らかである。西村先生はそれに興味を示されていない。研究のアプローチや関心の先が、私と違うのである。

それからもう一点。

どうしてか著者マーカートは、シモンズのオスカー・ワイルド論を文献目録にあげていない。そのために西村先生のV記号もない。索引でもワイルドの項にVサインは付されていない。首を傾げたくなる不思議な一件なのである。ヴェルレーヌ、ウィスラー、ジョイスなどの項目に下線を引いていても、不思議とワイルドには、索引のみならず、二カ所の本文該当頁にも下線がほどこされていない。もっともこのワイルド記述は、単なる短い言及に過ぎず、ワイルド論をまったく展開できていないためかも知れない。

不思議に思えたのは、実は、ここ二、三年前の話になるが、神田神保町で、英文学の作家全集などセットものを得意とする小川書店で、どういう流れでそうなったのか知らないが、西村先生の旧蔵書をたくさん購入したもようである。定期的に発行される目録に、西村孝次先生旧蔵のセットもの二本が、掲載されていた。セットの一つが、オスカー・ワイルド関連研究書の英古書百冊である。

どこかの英文学系の大学図書館なり、大学の現役個人研究者が、一括で購入するには、便利なセットの内容であると思えた。それが一年経過し、二年目になっても、同じように目録に再録されているのを知った。シモンズのワイルド論や、アーサー・ランサムのワイルド論が、リストに含まれ

ていることは言うまでないが、これら二冊に限定しても、すでに私の書架に並んでいた。ただ不思議でならないのは、百冊二十万円、一冊平均五千円という比較的安いと思われるセットものであり、若い研究者からすれば、書籍収集の時間とか手間が相当に省けそうに思えるのに、購入希望者が出てこない。そんな不思議な現状に驚いた次第である。

さすがに三年目に入ってからは、他界したと思われる『休み時間の英文学』の著者が、愛用してきた旧蔵書をこのままにしておけない気持ちになった。傍らの良き相談相手に事情を話して、購入するはこびとなった。段ボールで三箱分のコレクションが、私の手元に今はある。洋書の古書店に限らないけれど、学者の他界したあとに、大学教授や専門研究者の遺族から、旧蔵書の売却依頼を受ける。それは良く耳にする話であり、この場合もそうなのであろう。そうした場合に、大抵は、珍しい古書や貴重資料を身近なお弟子さんが、形見として分けてもらったり、大学図書館で受け取ってもらったりしたあとに、言わば残り物が、古書店組合の市場に廻ってくる。そんなケースが多いように思われる。

ワイルド・コレクション百冊もその一つと思われて、先生所蔵と推測できる豪華本・限定本・初版本などの貴重本は、すでに抜かれた後の残り物という印象を持った。ワイルド研究関連の雑本。でも、残り物に福あり。私としては、これで良いのである。愛読した先生の手元にあった古書をしばらく自分の傍らに置き、少しずつ読んでいく日々を楽しみにしている。

『休み時間の英文学』「あとがき」のなかで西村孝次先生は、こう述べている。ここでもやはり洋書の入手が困難であった終戦直後の時代相を感じた。

まず、わたし自身の過去を掘り起こして現在を洗い直してみたい、という極めて個人的な願いと、ついで、わたしが、なんらかの形で、いささか触れてきたそのころの時代と社会と人間の風景を、わたしの主として読んでいた英文学の視点から切りとって、これを今日の映像と重ね合わせてみたら、どういうことになるか、それを考えたい望みから、あえてこの本を出すことにしたのである。

これらの素描は、新刊の——なんと僅かなものしか当時は手に入らなかったこと

か！——紹介であり書評であり随筆であり傍白であり方言であり閑話であり冗談でありたわごとであり——つまり、ごった煮であって、いわば英文学的へどである。もとより美しかろうはずはない。だが、これらはすべて一度はわたしという人間の体のなかを通って喉から吐き出されたものである。

そう記したあとで「あとがき」をこう結ぶのである。「わたしはなにも強いない、なにも求めない。ただ語るだけである、ちっぽけな、いやらしい、しかしかけがいのない、ちょっぴり無邪気な自分というものを。」

本書自体の「まえがき」か「あとがき」に、そのまま拝借したくなる特異な文章であると思う。

それに詩人ディラン・トマスについての文章の書き出しなども、「あとがき」での先生の姿勢を感じさせる一文であるので、以下に引用を続けさせていただく。これを読んで、ワイルド・コレクションの購入は、良いことをしたと実感した。

ある夜、ひどく酔っぱらって家に帰り、水を飲みながら卓袱台の新聞をとりあげた。どうせもう読めはしない。しかし、ふと片隅に片仮名の横に黒い棒を引いたのが目についた。ちいさな死亡記事である。なんとなく座り直し、目を据えてみると、ディラン・トマス死去、とあった。

内外人とも死亡記事なら大抵ひとつくらいは毎日の新聞に出ている。大勢の、無数の人間がたえず死んでいるのである、時々刻々生まれているように。そんな死も生も、ぼくらの身近かに起こらないかぎり、さほど悲しみも喜びもしないようにぼくらはほんとうは出来ているのだ。ひとごとなのである。ふうん、死んだか、ディランは、と呟くともなく、ぼくは呟いた。すると、ふいに、どっと涙が溢れてきた。

アーサー・シモンズがマイナーな詩人であれば、アーネスト・サトウもマイナーな外交官であり、この章のウィリアムズもまたマイナーな宣教師と言えそうである。次の牧野義雄にしてもマイナーな水彩画家、それにバーリンゲイムもマイナーな政治家と呼べそうである。本書の各章で扱う四人の内外の人物と、序章と終章で扱うシモンズとバーリンゲイム、合わ

せて六名のなかで、メジャーな人物はただ一人、中国国民作家の魯迅だけに、落ち着きそうである。

マイナーとは言え、なかには評価の高まりを見せていて、今後にメジャーとして再評価され、歴史に残る人物がいないわけでない。ウィリアムズはそうした再評価の一人である。日本においてのウィリアムズは、一八三七年のモリソン号による日本人漂流民の送還劇、それに一八五三年と五四年のペリー艦隊による日本開国の首席通訳、これら二つの重大な出来事に関連して、少しは日本近代史で知られる人物なのだ。日本語の伝記や研究書はない。ところが最近の中国では、事情がかなり違って見える。再評価に向けた動きが、年々、急速にピッチを上げている、と思われる。

二〇〇四年に早くも、北京外国語大学の新進気鋭の学者、顧鈞先生によるウィリアムズ伝記の中国語訳書『衛三畏生平及書信』が出版されて、ウィリアムズを中国で復活させた。

二〇〇五年になると、同じ北京外国語大学の張西平教授が、欧米の宣教師による中国研究の歴史を論じた『伝教士漢学研究』のなかで、ウィリアムズ再評価と研究に向けて先鞭を付けている。

二〇〇六年には、孔陳炎先生の博士論文「衛三畏及美国早期漢学的発端」（浙江大学）が発表された。それに、再び北京外国語大学顧鈞先生の編集により、丸善版『「中国叢報』二十一巻の復刻版（広西師範大学出版）が発刊されたのにつづき、彼の長年の成果が二００九年に、『衛三畏与美国早期文学』としてまとめられた。

それに、ウィリアムズ生誕二百年にあたる二〇一二年には、北京外国語大学の企画による国際シンポジュームと関連図書出版に向けた準備が、顧鈞先生によって精力的に進行中である。

ウィリアムズ伝の中国語訳出版に遅れること四年、二００八年に、日本語訳書『清末・幕末に於けるＳ・ウェルズ・ウィリアムズ生涯と書簡』を出版できた。先行する顧鈞先生の中国語訳書を手元におき、中国の人名や地名などを参照できたので、私は大いに助かった。出版までのそうした事情は、日本語訳書の「訳者前書き」に述べてあるので、そのまま以下に引用する。

本書の主人公、ウィリアムズを知ったのは、かれこれ三十五年も前のことである。院生の頃、クリスチャン新聞の新刊書紹介欄（一九七一年十月十七日号）に、保永貞夫著『七人の日本人漂流民』（小峰書店）を書評させていただいた。以来、気になる存在になった。モリソン号来航ゆかりの土地、鹿児島の山川町では、五人番に通い、庭先から鶴の港を眺望させていただいた時期もある。最近では、澳門、広東、北京に足をのばしたくなって、なんどか中国での足跡を追ってみた。なかでも北京の東交民巷である。友人の山本周先生に案内していただき、大きな街路樹の下で、旧米国公使館の跡地を眺めたときのこと、あの夏休みの一日は、なぜか心に沁みて、楽しい思い出になった。

こうして、あのときこのとき、巡ってきたチャンスを活かしながら、ウィリアムズの生涯を思い出すように、現場の空気を呼吸しようとした。それが今回、翻訳の文字を通し、ウィリアムズの内心に迫る機会に恵まれ、ずいぶんと四苦八苦したものの、一つの区切りを付けられたことに、感謝すると同時に満足している。

翻訳のキッカケは、星野昌三氏である。それも二十年ほどのひと昔前。当時、月刊雑誌『歴史と旅』の編集長をされていた星野氏に、鹿児島から上京した寺尾政一郎氏の案内によって、紹介されたときのことである。話題にのぼったウィリアムズについて、星野氏は、熱心に語られた。結構なことと思うと同時に、わたしなりにも原書を読んでおきたい気持ちに駆られた。立教大学の図書館や北京の中国国家図書館で、初版の所在を確認できたものの、なかなか原書は入手しにくかった。珍しい書物なのだ。神保町の洋古書店で、「四十年間に初めて見ましたよ」と言いながら、店主の北沢一郎さんは、奥の特別室からブルー表紙の立派な古書を取り出してきた。こうして彼の手から譲り受けられたのは、星野氏との話からさらに、四、五年後のことだった。

日本でのウィリアムズの知名度は低い。中心的な研究テーマとして、焦点が合わされたことがない。一八三七年のモリソン号事件、一八五三年と一八五四年のペリー艦隊の日本渡来、ヘボンやブラウンによる日本伝動活動、など幕末維新に起きた竜巻的な新機運との絡みに於いて、ウィリアムズの名前と貢献が、言及されているに過ぎない。翻訳と印刷に取り組んでからのここ、五、六年の期間に、十回ほど中国へ行く合間に、急速に中国で高まってきているウィリアムズや初期宣教師に関する研究の新しい動向に触れた。なにしろ、鎖国の時から開国に至る中国の実情を自分の目で見て、

たくさんの書簡・日記・報告書・著作に書き残しているだけに、最近の清末歴史研究者には、最高の現場資料を提供しえているからであろう。彼ら若い研究者のあいだに、ウィリアムズのみならず、初期プロテスタント伝教師に関する研究調査と再評価が、盛んに進行していると思われる。喜ばしいかぎりである。

本書の中国語版訳者、顧鈞先生による（北京外国語大学）に、二度お目にかかり、多くの点で直接お世話になった。彼にしても、一年の予定で、ハーバード大学に留学中であり、この同一テーマ、初期宣教師に関する自筆文書を現地で調査研究している。これも一例に過ぎない。北京の社会科学院の近代史研究者たちも、中国における初期プロテスタント伝道史を一つのテーマに掲げて熱心である。

本書の翻訳と印刷刊行を誘発した背景には、こうした近年の中国に於ける研究動向が、一つにはある。もう一つ別に、日本の鎖国・開国・維新・伝道の歴史を東アジアの視野のなかに置いて、理解してみたいという年来の気持ちが働いている。数年前、鹿児島県立図書館の所蔵する『明治二年・薩摩辞書』を復刻する際に痛感したことではある。別冊の解説で詳しく書いてみた視点なのだ。

横浜よりも先に上海の公共租界が形成しており、とりわけヘボンやブラウンの日本伝道に先き立って、上海のみならず、広東や澳門まで視野に取り入れたいと考えながら、別刷りの解説文を書き上げた。その意味で言えば、今回のウィリアムズの伝記は、格好の視野と資料を提供しているように思われる。日本基督教団の信者の方々にも、ヘボン、ブラウン、明治学院の先達として、中国伝道に一途に生きたウィリアムズの存在と生き方をもっと知っていただきたい、と切に願っている。

中国における文書伝道の開拓者であるウィリアムズの歩いた道を今に忍びつつ、現代的に歩いてみたい気持ちを抑え切れなかった。北京の印刷所で製版することにした。また、印刷と製本は、北京の中国印刷学院にお願いした。

五百四十一頁の分厚い本ができあがり、受け取りに北京まで渡航した。それまでの約半年間に、北京市の麦子店街にある印刷所に何度足を運んだことか。百五十年以上も前に澳門・広東の伝道印刷所で、中国人や日本人漂流民の助手を使いながら、もっぱら手話で仕事の指示を与え、英文の月刊雑誌を発行すること二十年。その辛苦生活を英文伝記で読んで知ってい

るだけに、今回のウィリアムズ伝の邦訳書を同じ中国で、私なりの現代的な手法を駆使して、製版・印刷・製本までの一切にチャレンジしてみたくなった。

予想外にたいへんな苦労が待ち受けていたものの、中国での印刷完了にいたる過程を一部始終見届けられたのは、かけがえのない経験と友情を得たと思う。なにしろ私は中国語を話せない。相手の中国人編集者は、英語も日本語も分からないという状況にあった。通訳が必要なとき、どうにかこうにか、日本語か英語のできる中国人をそのつど探し出し、同行してもらわなければならない。

一般的な感想であるけれど、中国の大学生は、誰でも英会話を得意にしていると思った。学部の専攻に関係なく、どの学生も集中的に、そして猛烈に、英語の訓練を受けているはずである。ほとんどの学生さんが、教室の外国人教師を別にして、外国人相手に英語を使うのは、私が初めての経験であるというので、この臨時通訳のアルバイトを随分と喜んでもらえた。日本の英語教育はどうなっているのだろうか、と比較しながらも、常に彼らの英語力に驚嘆するばかりであった。楽しかった。

それにしても何度も繰り返し北京へ通うために、印刷費用とは別に、渡航費という高い授業料を支払うことになった。

アーサー・シモンズ、アーネスト・サトウ、そしてＳ・ウェルズ・ウィリアムズ、というステップを踏みながら、文科省の科研費を三回受けた。十年刻みで進んできたが、いずれも二年間、ないし三年間の継続研究として、未刊の自筆書簡か自筆日記の判読と活字化に精を出した。今回のウィリアムズ研究については、自筆書簡の所在場所がエール大学図書館である。翻訳した原書の著者は、ウィリアムズの息子であり、後にエール大学の歴史学教授を勤めたフレデリックである。父親の死後に伝記をまとめるにあたり、父親から受け継いだ自筆書簡のほかに、多くの人から父親の書簡を返却してもらったりして、相当量のウィリアムズ自筆書簡コレクションを集めていた。伝記執筆後に、それら全てと他の相続した自筆文書や資料を一括してエール大学図書館に寄贈した。書簡だけで十箱あり、恐らく総数で五千通近くに達すると推測している。

几帳面で丁寧、落ち着いたウィリアムズの性格は、書簡の筆跡によく表れていると思う。どれも気持ち良く読めて、ほとんど判読に苦しむことはない。よしんば判読困難な箇所があるときには、百五十年近くも前に書かれているので、インクの色が霞んで見えないとか、便箋の品質や保存状態が悪くて、読みにくくしているケースである。しかし、そんな書簡は数少ない。もっとも悩ましいケースは、昔の航空便の便箋のような薄紙を使い、裏にも書き続けているときなどである。

一八三〇年代の書き始めから、晩年の一八八〇年代に至るまで、ほとんど書体が崩れていない。とにかく読み易い。シモンズ書簡では、発狂した一九〇八年の前と後では、筆跡が一変していた。滑るように大きな字で書いていたものが、宇野浩二の文体に似て、細くなりせっかちに見える書き方に変貌する。それで後年の夫人宛書簡などは読みにくい。アーネスト・サトウの日記にしても、それほど一定した筆跡でなく、ときどき読みにくくなる場合が生じた。その点でウィリアムズは、信仰・信念・生活、どの点でも一貫性を保ち、そんな人生態度が、読み易い、まるで真面目な中学生の書くような筆致を保持させたのかも知れない。

几帳面な性格は、夫人に宛てた書簡の一つで、「透明なマント」について述べた言葉にも覗えると思う。いつも謙虚に振る舞い、つつましくあろうと努力していたら、身体に纏う外套が限りなく透明になっていき、寒さから内なる魂を守りながらも、魂の輝きはより鮮明に外に向かって輝き出る、と語っている。自筆書簡を読んでいると、こうした真実の肉声に接する稀な体験が起きる。

バーリンゲイムの筆跡は、以上の人物たちと大きな違いを見せている。書きなぐったかのようにさえ見えて、判読の極めて困難な筆跡となっている。ペンの使い方にもその人ごとに、人柄とか心境が現れるものらしい。

一八五八年の夏にウィリアムズは、長崎を訪問した。そのときに澳門で留守宅をまもる妻セイラに向けて、何通かの私信を送り、様子を知らせている。次の書簡日記もその一つである。フレデリックによる伝記では、一八五八年十月とだけ日付を記しているが、これは編集の手を加えた結果なのだ。実際の自筆書簡にあたって確かめてみると、十月六日書簡の末尾と、

翌日七日のものとを合成したいために、単に十月とだけ記したようである。更に他にも伝記作家による加筆・削除・変更など、編集されている箇所が認められる。ここでは、編集されている箇所に、私の[注]を加え、伝記の訳文を引用する。

十月。[中略]

四度目になる僕の日本訪問は、こうして終幕しました。これまで以上に、幾つかの点で楽しい旅になりました。なんと言っても、将来の希望が、すべてを圧倒します。神の民が、信念と忍耐のなかで、この地で布教を始めましたら、神は、ご自身の計画を続行するために、これから先も、援助の手を差し延べて下さることと、僕は確信しています。[以上が十月六日分の末尾。以下が十月七日分であるが、編集されている部分を多く含んでいるので、注意が必要である。]

日没後すぐに、ミネソタ号は、蒸気エンジンの稼働を始め、錨をあげました。艦内の人は誰もかれも、甲板に出て来ました。湾内からゆっくりと出航していくあいだ、美しい長崎港の最後の一瞥を楽しみました。僕だってそうなのです。[湾内の景色を描く文章二つがここで省略されている。] ここ四、五年、あちこちを旅しているうちに、様々な景観の様相に、すこしは慣れてきたと思うのですが、長崎の港と近郊の美しさに勝る景勝の地は、ほかにはありません。長崎の坂道や谷間を眺めたり、散策したときの楽しさは、これから先も心に温めておき、大切にしたいものです。

長崎湾のそとに点在する島々。その辺りに進んだところで、入港してくるミシシッピー号が、視界に入ってきました。先週のあいだ、ずっと到着を待っていた船です。しだいに接近するにつれて、奇妙な気配が感じられ、すくなからず呆気にとられてしまいました。水兵たちが、最上甲板に群がっています。舷檣はみな下ろされ、そこから大きな船先砲が突き出しているのです。それに、まだ八時になるかならないのに、全乗組員が、各部署に配置されています。僕たちは相互に呼び交わせる距離に接近しましたけれど、外輪の旋回する音や蒸気機関の騒音に邪魔されて、相手の声が聞き取れません。

そこで、ニコルソン艦長が、こちらに乗船してきて、一部始終を説明してくれました。函館から真っ直ぐに南下したところだそうです。カルフォルニア経由の最新情報が函館に届き、米国船を砲撃した英国船の行動について、論議が高まっている最中で

した。そこで、艦長としては砲撃に先行して、大英帝国が宣戦を布告したに違いない、と早合点してしまったようです。とにかく、艦長としては、居眠りの最中に、英国軍艦の襲撃を受けたくないと決心しました。その結果、僕たちの船が、米国船を偽装した英国海軍の巡洋艦であるのなら、手当たりしだいに敵艦を捕まえよう、と待ち構えているのかも知れないと、そう考えたそうです。当方のデュポン艦長が、ミネソタ号の船籍番号を旗棹に掲げ、標示した段階になっても、完全に安心できずに、船首の向きを変えさせています。もしかしたら敵艦かも知れず、そんな危険に舷側を曝さないためでした。ニコルソン艦長の話によれば、函館を出港してから、南下の危険を犯すよりも、(彼の発音では、ペテロパウロスキーとなったが) パウロスキーに立ち寄り、食料品を確保した方が得策である、とも考えたそうです。そんなことを実際にしていたら、まったく滑稽な行動となってしまい、艦長と彼の将校たちは、おびただしい回数で繰り返し、酒の肴にされていたことでしょう。[(茂木近くで見た海面に孤立する小さな岩の形状が、彼に異常に似ているのを思い出したりすると、実際そっくりさんでしたので、僕は、どうにも笑いをとめられません。) この丸括弧内の原文が、前掲書簡文末の(酒の肴、云々)に変更されている。]

一通の書簡を引用しただけでも、以上のように、三カ所に大幅な変更をしていることが、自筆書簡との比較対照を通して明らかになる。やはり原文を正確に再現したタイプスクリプト作成の意義は、ここでも、それなりにありそうに思われる。

このウィリアムズ研究は、未だ途中であるので、総括的な考えを本書で述べることは適切でない段階にある。ペリー提督の二度にわたる黒船騒ぎでは、すでに言及したように、ウィリアムズは首席通訳を務めた。そのときに書き綴った書簡体の自筆日記は、エール大学図書館に寄贈され公開されている。『一八五三年〜一八五四年、日本遠征記』と題して、すでに判読を終え、タイプスクリプトの草稿を作成できた。

それにもう一つは、天津条約の締結と中国皇帝謁見を求めた連合軍の英国・仏国、および中立国の米国・露国による遠征には、米国全権公使の下で中国語通訳を務めたウィリアムズである。このときにも綿密に日々の動きと観察を綴り、記録を残そうとしたことは言うまでもない。こちらは、

日記体の妻宛自筆書簡と呼べるものであり、実際に何日分かをまとめて、妻に送った形跡が、書簡のように折り目のついた便箋からも分かる。それに、家族に宛てた私的な安否の知らせを多く含んでいる。『一八五八年〜一八五九年、北京遠征記』と題して、こちらの方も判読結果をタイプスクリプトに打ち出してある。一八三〇年代から一八八〇年代までのウィリアムズ自筆書簡の方は、約五十年間に及ぶので、未だ判読と活字化を完了できていない。

二本の遠征記原稿については、いずれも一冊に合本してあるものの、破損が進んでいて、図書館に依頼してマイクロフィルム化するにせよ、長い日数が要するものと予想された。三十年前の事情と今は違い、パソコン使用が、多くの特別室で認められるようになってきた。以来、作業の能率化は極めて高まっている。それにエール大学図書館の自筆文書部門では、デジカメの使用まで認められている。大助かりである。遠征記二本の資料は、デジカメで撮影したあと、持参したノート・パソコンに移送した。帰国してからは一台目のノート・パソコン画面で映し出し、別の一台に判読結果をタイプする、という両刀使いによって効率化をはかってきた。

書簡の方は、十箱に達する数量であるから、マイクロフィルム化を図書館に依頼した。最初の依頼者となる場合には、長い日数と経費を計算に入れておかないといけない。担当する専門家を特別に雇って作業するために、人件費に対する経費負担が、最初の依頼者に期待されるためである。三十五ミリ・マイクロフィルム一本に、約一千三百コマが収録されているので、経費は一本あたり五万円ほどになる。それによって図書館側としては、保管用のマスター・フィルムを作成できる。私たち利用者が、実際に購入したり、特別室で使えるリールは、そのマスター・プリントから複製したコピーである。いったんマスター・フィルムが用意されれば、後から注文する研究者は、一本のリール・コピーを五千円ほどで購入できる。最初の依頼者となった私は、結果的に十本のリールに対して、五十万円近く支払って、作成してもらえたことになった。後続する研究者たちは、五万円で同じものを購入できる。ウィリアムズ再評価の進行している中国若手研究者にとって、同じ関心を持つ日本人としては、ささやかな形であれ、学術的

な国際貢献ができたと考えている。

それにマイクロフィルム・リーダーの方も、大きく変化してきたようである。最近発行された津田塾大学の同窓会報に、米国議会図書館で長年勤務した英文卒五回生の吉村敬子さんが、寄稿された一文「米国議会図書館蔵マイクロ化日本語資料チェックリストの作成」を興味深く読ませていただいたばかりである。そのなかで述懐されているように、戦後の中核的図書館では、マイクロフィルムなりフィッシュによる資料保存を大幅に進めてきた。

フィルムに納められた資料は実に膨大であるのに、フィルムの劣化は避けられない。それで結局、近年ではデジカメやスキャナーを利用する場合のように、コンピューターに取り込む技術が開発された。マイクロフイルム画像をスキャナーで取り込むのである。エール大学では、神学部図書館のマイクロフィルム室で、自由に、それに無料で利用できた。アメリカン・ボードの書簡類が、大量にマイクロフィルム化されているので、マイクロフィルム・スキャナーの登場は、実に便利で効率的であると感じた。アーサー・シモンズ自筆書簡を鉛筆で転写するのからすれば、研究や調査の方法が、大きく様変わりして、隔世の感がある。しかしこの形態にしても、すぐに新しい技術に代わるのであろうかと、しきりに思案している。どうなることか。

(4) 2011年3月発行紀要論文

避暑地としての北京西山八大処：1862～1868年[1]

―― 駐北京英使館の全権公使と公使館員による最初期滞在を中心として ――

A Study on the Patachu[2] as the Summer Resort for the Early British Residents in Beijing

---

[1] 本稿は、科研費基盤研究（C）[2008年度～2010年度] の研究成果の一部として発表する。なお、本年度の夏も北京の中国国家図書館で調査している合間に、昨年度2009年夏に続き博士論文作成のために杭州から上京して調査に没頭中の田力氏に、本稿の文献検索や調査のうえで、時間を割いていただき、親身な助力を得た。

[2] In the western part of Beijing, there is a range of hills, among whose trees and dales are hidden many temples, monasteries and nunneries. In the 1860s the area became a popular summer resort for foreign representatives and their staff residing in Beijing. S. Wells Williams actually spent many summers there with his family, whose favourite nunnery was 三山庵, "Tremont Temple."

In Beijing almost summer in the 1860s saw groups of residents coming up to the Western Hills (八大処西山: the Patachu); most of them were foreign diplomats, their families and attaché. American and British missionaries, their families and colleagues used to haunt there as well. All of them wanted to escape, as they said, the summer heat, the dust, the mosquitos and the squalor of the city. Up to 1900 the eight temples, Patachu, of the Hills had become a summer resort for diplomats like Sir Rutherford Alcock, a retreat for intellectuals like S. Wells Williams, and a santorium for ill-healthed missionaries like Mrs. Bridgman. In this paper I should like to focus on the very initiation and early years of the summer resort, particularly using the writings, published and unpublished, of the British diplomats and attachés.

1. 北京西山の遠望

百五十年ほど前の清末北京。こんもりと茂る樹木の梢を通し、落日に染まる小高い山並みが見え隠れする。その紫色の静かな佇まいは、北西の方向に北京郊外を縁取るかのように、北京に在住する市民に、昔も今も安心感を与え、一日の終わりを告げる。ビルの谷間を歩きながらの今日では、どこにいて見上げても、変わらぬ西山の山影が見える。

夕焼けのなかで眺めたら紫色に見えるのに、西山に接近するについて、それほど緑の多くない岩肌が視界に入ってくるようである。裸山だ、とはなんどか外国人訪問者によって、実際に使われてきた表現の一つなのである。最初にそんな印象の一つを英国人旅行家・地質学者ラファエル・パァンプリーの回想録から引用しておくのも無駄ではないであろう。

> To the west [of Beijing], over some ten or twelve miles of intervening country, arise the barren mountains which form the western limit of the great delta plain, and the transition from the

> lowlands of the coast to the elevated plateau of Central Aisa[3].

北京西山は、遠くヒマラヤに至る山岳地帯の始まり、山際にあたるのであり、同時に北方のゴビ砂漠に淵源する北方の砂漠化は、その触手の先端を伸ばしている場所でもある。

英国政府による最初の外交使節の任務が、1792 年、マッカートニー 卿 (Lord George Macartney: 1737~1806) に与えられた。中国から英国に帰国するのは、1794 年になったが、旅先の出来事を日々に細かく書き留めている。天津到着は 1793 年 8 月 11 日日曜朝である。大型帆船による沿岸での海上輸送、天津からの小型ヨットによる運河と、輸送手段を換えながらも、いずれにせよ水路による旅は、陸路による長旅と比べたら快適な旅程を想像したくなる。しかし、夏場は夏場なのであり、暑さに変わりないし、雨が少ない。東洋に特有する猛暑の苦痛から逃れられるものではないのである。

一つの悩みの種は、蚊であった。もう一つは、食材の劣化であった。

1793 年 8 月 12 日の記述は、天津から北京に向かう運河の快適なはずの船上にありながらも、最初の被害を次のように述べる。

> We are much troubled with mosquitoes, or gnats, and other insects, among which is a phatana or moth of a most gigantic size, no less than a humming-bird, and we are stunned day and night by the noise of a sort of cicada who lodges in the sedgy banks and is very obstreperous.[4]

最初の英国使節を夏場に悩ませた蚊の攻撃と対策は、後述するように、1860 年代の北京在住欧米人にとって共通する問題となる。もう一つの猛暑被害は食材の劣化であり、翌日 8 月 13 日の記述には次のように見える。

---

[3] Raphel Pumpelly: *My Reminiscences* (Henry Holt, New York, 1919, in two volumes). Vol. I, p. 392.

[4] *An Embassy to China: Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung, 1793-1794*, Edited with an Introduction and Notes by J.L. Cranmer-Byng (Longmans, London, 1962). p. 82.

> Some of the provisions which were brought for us this morning being found tained (which was not to be wondered at, considering the extreme heat of the weather, Fahrenheit's thermometer being at 88), the superintending Mandarins were instantly deprived of their buttons, and their servants bambooed, before we knew nothing of the matter. So sudden and summary is the administration of justice here.[5]

不慣れな東洋特有の猛暑に悩まされながら、北京に近づくにつれて、北西の方向に霞む西山の遠望ができた。8 月 15 日、マッカートニーの口調は一変して明るくなった。これまでの旅のあいだ、海岸線を辿るか、大河か運河を使ってきただけに、河川の流域に広大に延びる平坦な地面ばかりが視界に入った。どこまで進んでも平らに見え、起伏の少ない風景に飽きてきていた。そんなときに英国人の眼底に初めて印象された北京西山の姿は、清々しく映り、その後につづく英米の北京訪問者が、繰り返しエールするほどの安堵感を伴った。北京は近い。それに青い山並みの遠望は、緑の茂みや清流の涼しさを意味したからである。

> We now observe with pleasure some picturesque blue mountains at thirty or forty miles distance. They contribute a good deal to enliven our prospects, which have hitherto been confined to the level uniformity of the cicumjacent country.[6]

使節一行の初日の滞在先に予定されていた場所は、北京城内になく、一行は、そのまま西山の方角に向かって進んでいく。北京から北西に約十キロほど離れた圓明園が、宿舎として用意されていた。英語では The Summer Palace と呼ばれる夏宮であり、そこは文字通り、夏場の北京猛暑を避ける

---

5 同上書、p. 83.
6 同上書、pp. 84-5.

別荘庭園という趣や利用法があったらしい。圓明園から二十キロあまり、更に山道を左手に辿れば西山に入るし、別の右手の山道は香山温泉に通じる。

久方振りの西洋人の到着、それも英国からの使節である。宗派は異なるものの、同じ白人として、北京に長年暮らしてきたカトリック教会僧侶たちの訪問を次々に受ける運びとなった。北京政府からマッカートニー使節との交渉係を命じられていた。ポルトガル、フランス、イタリア出身のジェスイット派やオーガスト派所属の宣教師たちである。8月23日の訪問者として、Joseph-Bernard d'Almeida 以下の面々の名前を記している。

> Joseph-Bernard d'Almeida [1728~1805; astronomer], André Rodrigues [1729~96; the president of the Board of Mathematics] and another Portuguese; Louis de Poirot [1735~1814; painter and linguist], Joseph Panzi [1733~1812; painter] and Peter Adeonato [d.?~1822; watchmaker and interpreter], Italians; Joseph Paris [1738~1804; watchmaker], a Frenchman and or two others.[7]

圓明園に数日滞在したあと、マッカートニー卿の入京は、8月26日に実現した。三時間ほどの旅程の後に辿りついた北京城内の宿舎には、内庭の数だけで十一を数え、広い屋敷が当てられていた。広々していて通風も良かったらしく、夏場の暑さや空気に関する苦情を述べていない。

マッカートニー卿の日記は、なんども出版を計画されながら、実現したのは最近のことになる。それに対して余りに対照的に思えるのは、使節団に同行したストーントン卿 (Sir George Staunton) による遠征記である。使節の終了直後、1797年にロンドンで出版され、長く親しまれてきたためである。[8]

両者は文体の上でも違っている。書き手の性格上の違いが手伝っている

---

[7] 同上書、p. 93.

[8] Sir George Stauton: *An Historical Account of the Embassy to the Emperor of China* (Printed and Published by G. Cawthorn, British Library, London, 1798).

のであろうか。高潔の人 ("a man of strong principles and firm character") [9]と言われるマッカートニー卿は、重要な公職に任命されても、私益を肥やすことが一切なかったという。それに、日記と遠征記とでは、もともと叙述の構え方に、差異を生じる性格のものである。感情をおさえながらも、私的な関心や観察を淡々と述べる口調は、マッカートニーの日記の方に色濃く読み取れそうだ。ストーントンの方が、記録的で一般的な、乾いた書き方をしているものの、北京城内宿舎の詳しい叙述に、かえって効果的に発揮されていると思われる。

> Through the interference of the Governor of the palace of Yuen-min-yuen, the embassy removed to Pekin immediately. Here the whole was lodged in a large palace, consisting of several buildings, built by a former collector of the customs at Canton, who raised an immense fortune by extortions on the English; and in consequence of oppressing the natives in another office, the edifice was seized by the crown.
>
> It was built in the usual manner of the houses of the great Mandarins, and the whole was in the form of a long square, surrounded by a brick wall, the surface of which was a mere blank, except near one of the angles, where there was a gateway. This wall supported the top ridge of roofs, the lower edges of which resting on an inner wall, parallel to the first, composed a range of buildings divided into offices. In the other part of the inclosure were quadrangular courts of different sizes. In each of these were buildings, on platforms, of granite, surrounded by a colonnade.[10]

北京特有の四合院造りである。これだけの詳しさはマッカートニーにない。後者は単に、この立派な屋敷を一歩出たら、狭い通りの胡同 (*futon*) に囲まれた街並みがある、とだけ述べるに止まっている。猛暑下の北京生活、

---

[9] Ibid., *An Embassy to China: Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung, 1793-1794.* p. 22.
[10] 前掲書、p.322.

そのなかでも、降雨のあとに残される泥道、汚れたたまり水、そのほかの不便さとか非衛生の面については、マッカートニーにもストーントンにも触れられておらず、後の使節や滞在者による記述を待たなければならない。

ストーントン卿は息子連れで初回北京遠征に参加していた。同じジョージ・ストーントンと呼んでいるけれど、父親のミドルネームが、レオナードであり、この Sir George Leonard Staunton は、英国東印度会社の幹部役員として広東に勤務するあいだに、中国語と中国文化に通じていた。使節団では正使につぐ副使の重責を担った。息子のミドルネームの方は、トーマスといい、若い George Thomas Staunton は、遠征隊の仲間から "young Staunton"と呼ばれ、マッカートニーの給仕役として参加していたが、通訳の手助けをするくらいにまで、中国語の知識を多少とも持ち合わせていた。使節団の帰国後は広東にとどまり、在広東の英国東印度会社の通訳として中国語に熟達するようになった。後年の 1807 年 8 月 6 日金曜日の夕方、澳門でストーントンを初めて訪問したロバート・モリソン (Robert Morrison: 1782~1834) は、ロンドン宣教師會から中国に派遣された第一号の宣教師であった。中国語に熟達した現地の先輩として、新来者に対して、現地情報を伝え、最初から援助を惜しまなかった人物は、同じジョージ・ストーントンでも、こしらの息子の方なのだ。

2. 第二次英国使節アムハースト卿と通訳ストーントンによる圓明園到着

英国政府は、初回のマッカートニー使節派遣で期待した大きな成果をあげられなかったことから、第二回目の使節団を送ることとし、アムハースト卿に託した。広東に在住してきた息子の方のストーントンは、使節通訳の 依頼を受け、約二十年振りの北京再訪の幸運をつかむ。会社や広東の仲間たちに次のように別れの挨拶を送っている。

My public service abroad terminated with Lord Amherst's embassy.

Having held the highest place in… the service of the East India Company to which I was attached; having accomplished my favorite object, of revisiting Peking in a diplomatic capacity; and having accumulated a competent fortune… I gladly abandoned the prospect of increased wealth… and I rejoiced to find myself able to terminate the period of my banishment, at the early age of six and thirty."[11]

アマーハースト卿使節団の帰国後、息子ストーントンは、上掲引用文のなかで自ら期待していたように、英国に戻って英国議会の議員となる。中国通として英国政府の中国政策を大いに批判した。また、ロンドンの王室アジア協会を設立に尽力して、たとえば自分の書斎から多くの中国関係書籍を寄贈し、同協会図書室の蔵書を充実させている。先を急ぎ過ぎたようである。ここでアマーハーストによる入京についての言及を済ませておかなければならない。

再び夏場の圓明園が舞台となる。それにしても、なんという予期せぬ悲劇が、そこで演じられたことであろう。1860 年の大惨事を予兆するかのような出来事が、アマーハーストに起きた。

1816 年 8 月 28 日の早朝 6 時 30 分に、中国皇帝は、謁見のために訪れるはずの使節一行を待っていた。早朝の 6 時半という一日の仕事始めの時間は、皇帝によるお勤め開始の通常時刻であって、この場合に驚くことではない。使節一行の到着が少し遅れているとの通知を受けた皇帝は、面会を延期した。丁度その決断の時刻には、大慌てのアマーハースが、正面の門に到着していて、乗物から転がり落ちたばかりであった。なにしろ昨夜は徹夜で旅路を急いできたので、寝不足であった上に、洗面とか着替えする間取りの余裕がなく、玄関先での転倒によって英国紳士の帽子も凹んでいる始末。汚れきった哀れな使節の姿を迎えたのは、皇帝以外の重役たちばかりであり、皇帝の姿はなかった。

---

[11] Nigel Cameron: *Barbarians and Mandarins---Thirteen Centuries of Western Travellers in China* (Oxfor Univ. Press, 1970). pp. 322-3.

北京滞在も許されず、せっかく英国から運んできた荷物の紐を緩める暇もなく、使節一行は退去を命じられた。徹夜のあとの激しい疲労と空腹に耐えて、帰路につこうという落胆の段階。思いがけず皇帝からの豊富な食事の差し入れがあった。一行の喜びはこの上なかった。圓明園に十時間滞在しただけで、夕方の四時までに使節一行は、帰路につき、完全に不毛に終わった。このときに良い成果を恵まれたのは、帰国後に議員となるストーントン一人であったかも知れない。

われわれの期待する北京、圓明園、それに西山に関するアマーハースト使節団の印象記を見かけないのは、短時間に終始した使節の失敗に起因するためと言えるのであろうか。

3．エルギン卿特使による入京

英国政府による前後二回の使節派遣は、こうして結果的に全て不毛に終わった。使節派遣を計画する背後には、増加する中国茶の輸入の必要性と、その支払いに当てるインド産鴉片輸出のバランス問題が潜んでいた。ジャーディン・マセソン商会を代表格として成長著しい広東の英国系個人商人、それに彼らを後押しする英国東印度会社と英国政府は、鴉片禁圧の政策を厳守したい中国政府とのあいだに、対立構造を深化させていく。皇帝から派遣された欽差大臣の林則徐は、英国商人の輸入した阿片を没収したうえに焼却する事件が起きる。第一次鴉片戦争の勃発であり、勝利する英国政府は、1842 年、中国政府とのあいだに南京条約を結んだ。

敗戦処理のために南京条約を結び、それにその後、英国側から逐一履行の要求を受けるものの、中国事情は、すんなりと条約項目を実行に移せないでいた。条約上の難題には、外国人による広東市内の自由往来のほかに、全権公使の北京駐在という外交課題（「公使駐京問題」[12]）があった。

鴉片戦争のあとに再び、英国軍と中国軍とが、戦火を交えるようになっ

---

12 夏笠著『第二次鴉片戦争史』（上海図書出版、2007 年）。pp. 60-71.

た直接の原因は、1856 年 10 月 8 日に勃発したアロー号事件である。しかし事件背後には、条約の完全履行問題と英国商人の利権拡大が潜んでいたと言える。事件の発展は、広東十三行街に設置されていた外国系商館や、市内の外国人住宅等への放火と広東大火災、その被害に対する賠償要求に起因する英仏連合軍の北京侵攻作戦、と随伴する中立国の露国と米国、これら四カ国による天津条約と瑷琿条約の交渉と調印にまで進んだ。いわゆる第二次鴉片戦争の戦火が、1860 年の夏には北京にまで迫る勢いとなった。

われわれの関心の的にある北京西山が、こうして再び英国人の眼前に姿を現す。1860 年夏場の圓明園は、再び歴史的な舞台となった。このときの滞在者は皇帝自身である。すでに引用したカメロンの歴史物語には、つぎのような描写がある。

> In the year 1860 the late summer in Peking was a fine one. The worst of the humid heat and the drenching showers that made nonsense of the drainage system were dying out. Another weeks and it would be autumn.... But in the fine late summer of 1860 it was generally known that the emperor was not in Peking but at the Summer Palace outside the city, with, among others, the concubine Yi; and that he was in some apprehension for his own safety.[13]

強力な武装と多数の兵士を投入して、外国軍が、首都北京に迫りつつあるという大事なときに、病臥していた咸丰帝は、一時的に圓明園に滞在したあと、更に北方の Jehol（熱河: rèhé）に避難するものの、間もなく同地で他界する運命にあった。

天津から北京を目指し侵攻する英仏連合軍は、皇帝の避難先という圓明園に向かって進んだ。10 月 7 日朝、連合軍は、圓明園を攻め込み手中に収めた。皇帝や重臣たちはすでに逃亡していて、貴重な骨董品や豊富な宝物だけを残し、園内は蛻の殻の状態にあった。

---

[13] 前掲書、*Barbarians and Mandarins.* pp.345-7.

圓明園襲撃劇の背景には、皇帝の避難先だけでなく、もう一つの重大な要因があった。このときから数週間前の出来事である。中国側との交渉役に派遣されていたハリー・パークス等英国側と、それに仏国側にも、思いがけない逮捕と投獄という悲運が、通州で発生した。

チャールス・ギュツラフやオルコックの庇護のもとに広東・澳門・アモイ・上海で暮らすあいだに、中国語に堪能になったパークスはともかく、中国のできないエルギン卿の私設秘書ロック(Henry Brougham Loch)などは、幽閉された牢屋のなかで、中国人罪人との同居を余儀なくされながらも、持ち前の才気を生かして、いかにして生き延びるか日々刻々に思案し工夫した。そのサバイバル劇を後年の回想録に詳細に綴っている。このときの投獄生活に関するかぎり、これ以上に生々しい記録はない。9月18日に投獄された英国側の二十六名のうち、圓明園までは、幽閉された牢屋のなかで、中国人罪人との同居を余儀なくされながらも、持ち前の才気を生かして、いかにして生き延びるか日々刻々に思案し工夫した。このときの投獄生活に関するかぎり、ロック以上に生々しい記録はない。

実際に、英国側では死者が半数に達した。ロンドン・タイムズの特派員にしても虐殺された一人である。仏国側にしても変わりない。十三名の投獄者のうち、生還できたのは、わずか五名だけとなった。[14] 投獄されていると思われる同国人たちの救出が、圓明園襲撃の重大な目的の一つになった。

後述するパークスは、すでに北京まで連れて行かれ、圓明園で救出できなかった。このときの一連の動きは、エルギンの記録に次のように記されることになる。特に、占拠につづいて起きる更に一連の動き、略奪・放火・破壊、についての背景知識を提供していると思われる。

> Sunday, October 7th.---- We hear this morning that the French and our cavalry have captured the Summer Palace of the Emperor. All the big-wigs have fled, nothing remains but a portion of the household.

---

14 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p. 443.

We are told that prisoners are all in Pekin… Five P.M.--- I have just returned from the Summer Palace. It is really a fine thing, like an English park---numberless buildings with handsome rooms, and filled with Chinese curios, and handsome clocks, bronzes, &c. But, alas! such a scene of desolation. The French General came up full of protestations. He had prevented looting in order that all the plunder might be divided between the armies, &c. &c. there was not a room that I saw in which half the things had not been taken away or broken to pieces. I tried to get a regiment of ours sent to guard the place, and then sell the things by auction; but it is difficult to get things done by system in such a case, so some officers are left who are to fill two or three carts with treasures which are to be sold… Plundering and devastating a place like this is bad enough, but what is much worse is the waste and breakage. Out of 1,000,000l. worth property, I daresay 50,000l. will not be realized. French soldiers were destroying in every way the most beautiful silks, breaking the jade ornaments and porcelain, &c. War is hateful business. The more one sees of it, the more one detests it.[15]

---

[15] *Letters and Journals of James, Eight Earl of Elgin*, edited by Arthur Penryn Stanley (John Murray, London, 1872). pp. 361-2. See also Henry Brougham Loch: *Personal Narrative of Occurences during Lord Elgin's Second Embassy to China, 1860* (John Murrary, London, 1870), p. 178, "The gaolers and prisoners evinced great curiosity at my appearance, crowding round to examine my clothes, jack-boots, and skin. My acquaintance with Asiatic character taught me that not only my comfort while in prison would depend, but possibly my future safety, upon the position which from the first I should assume, and the deference I might be able to exact, both from my gaolers and my fellow-sufferers. My being unable to speak Chinese made me feel all the more the necessity of supplying, by my manner, my inability to communicate with them by words. When, therefore, both the officers of the prison and the convicted criminals began touching my hands, face, and hair, I at once made them understand their curiosity and

後述するように、アロー号事件後に制圧した広東の管理運営を一任され、重要な立場にあったハリー・パークス監督官は、使節のエルギン卿に懇願されて断れず、渋々、今回の北京遠征に通訳として参加したという特殊事情にあった。エルギン卿のお気に入りであるばかりか、右腕として有能な働きをしてきただけに、エルギン卿しては、彼を失うわけにいかず、救出に全力を尽くして成功する。エルギン卿による 10 月 9 日付書簡には、パークスが、前日 10 月 8 日の帰還を記す次のような文面が見える。

> October 9th.--- Yesterday at 4 P.M., Parkes, Loch, and one of Fane's Irregulars arrived... Parkes and Loch were very badly treated for the first ten days; since then, conciliation has been the order of the day, and, I have no doubt, because I stood firm. If I had wavered, they would have been lost... Parkes and Loch have behaved very well under circumstances of great danger. The narrative of their adventures is very interesting...[16]

エルギン卿は、憤怒する感情と報復心を抑えながらも、英国人不当逮捕の再発防止のために、対抗処置や処罰の方法をアレコレと考えるが、結局、皇帝の潜伏先と噂され、それに投獄と虐待の場所と聞く圓明園の破壊を手段の一つに選んだわけである。

---

familiarity were displeasing to me, and moved, as well as my chains would admit, towards a small wooden bench, the only one within the prison, on which at the time two men were seated. I mentioned hem to rise, and, to make my meaning fully understood, at the same time gently shoved them; they instantly rose, their face expressing the utmost astonishment. I seated myself on the bench, and signed that I wished the space in front of me."

16 同上書、p. 362.

> Camp near Pekin.---- October 14th.---- We have dreadful news respecting the fate of some of our captured friends. It is an atrocious crime, and, not for vengeance, but future security, ought to be severely dealth with.[17]

圓明園の誇る「大量金玉珍宝」[18]を略奪したのにつづき、10 月 18 日には、園内の二百棟以上を数える建造物を焼却せよ、というエルギン卿の命令が通達され、ホープ・グラント将軍率いる英軍は、圓明園に火を放った。[19] こうして先行した二回の英国使節が訪れた夏宮の圓明園は、一気に灰塵と帰して、かつて中国皇帝お抱えのカトリック系僧侶や彫刻家の設計建造した石柱の廃虚だけが、今に栄華の名残を伝えるだけである。

4. *FOREIGNERS WITHIN THE GATE* [20]：駐北京外国使館の設置

ローレンス・オリファントの著したエルギン卿使節による中国・日本遠征記は、1857～1859 年を扱っており、これまで見てきた 1860 年の北京進攻に触れることなく終わっている。[21] 同じことは、フランス皇帝の派遣したグロス使節に関する同一テーマ、中国・日本遠征記についても言える。[22] 更に、中立国の米国政府が派遣した全権公使使節に随行した後述する美国使館の通訳・書記官ウィリアムズ (S.Wells Williams: 1812~84) の北京遠征

17 同上書、p. 365.
18 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p.434.
19 Hosea Ballou Morse: *The International Relations of the Chinese Empire.* Vol. 1: the Period of Conflict, 1834~1860 (Longman, Green, and Co., London, 1910). p. 611.
20 Michael J. Moser and Yeone Wei-chih Moser: *Foreigners within the Gates---the Legations at Peking* (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1993).
21 Laurence Oliphant: *Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59* (William Blackwood, Edinburgh, 1859, in two volumes).
22 The Marquis de Moges: *Recollections of Baron Gros's Embassy to China and Japan in 1857~58* (Richard Griffin and Co., Glasgow, 1860).

記もまた、1857〜1859 年を扱うのみである。[23] したがって資料的には、ここで再び、エルギン卿の前出日記書簡集に戻るしかない。

圓明園の破壊につづき、10 月 24 日に北京に入ったエルギン卿は、これまで相互の論争点に決着をつけて、北京協約を結ぶと同時に、天津条約を批准した。交渉の相手は、道光皇帝の第六子にあたる進歩派の恭親王 (Prince Kung)であり、こうした交渉過程のなかから、やがて外務省に発展する中国最初の外務窓口役所 (Tsung-li Yamên) が誕生する。このときに確認した次項をまとめて、英語では Convention（協約）と呼んでいるが、前出の夏笠の研究書七章では、「北京条約」という表現を使って論じ、外国軍の軍事的強圧に屈した中国の近代史に於ける「重大屈辱的一頁」と述べている。[24] フランス使節グロス男爵も、翌日に北京城内に入り、英国使節と同様の手続きを速やかにすませている。

各条約締結国の求める在北京外交代表部の設置交渉については、マイケル・J・モーザー (Michael J. Moser) と娘 (Yeone Wei-chih Moser) による郷土史的な調査をまとめた『北京城内の外国人』に詳しい。副題として「北京の外国公使館」が付いている。香港のオックスフォード大学出版が、1993 年に出版した百五十頁あまりの父と娘による珍しい共著本であり、おそらく北京研究とか、中国の外交関係史とか、いずれの研究分野であるにせよ、われわれの日頃手にする学術書の文献リストには載りそうにない性格の一冊と思われる。学術的でないアマチュア的に受け取られがちでありながら、学術研究のヒントとか最初の手掛かりを与えてくれるこの種の資料や読み物は、毎日の新聞記事に似て、それなりに興味深く読めるだけでなく、貴重な情報源となりうる。

モーザー親子によれば、最初に提案された設置場所は、放火して焼き放った圓明園跡地であったという。北京城内に外国人の居住を認めたくない

---

[23] S. Wells Williams: *JOURNAL OF VISIT TO PEKING, 1858~1859* (MS). The Yale University Library Archive.

[24] 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、pp. 386~476.

とする中国政府側の本心が感じられて、条約国はこの提案を拒絶する。[25] そこで次に提案されたのが、崇文門近くに位置している東交民巷 (“Dongjiaomin Xiang or ‘Eastern Lane of the Mingling of Peoples”[26]である。最終的にそこに決まった。その名前の通り、交易のために諸民族の集まる場所として栄えてきており、安南、ビルマ、朝鮮、モンゴール 等の王室から貢物を携えて毎年訪れる使節のために、宿泊先の迎賓館 (Siyiguan) も用意されていた。北京城内にあって古くから、最も外国人を迎えるのに慣れている場所と言えた。すぐ横を走る城壁の上部の道路は、高さ 15 メートル、11 メートルの幅があり、後年の若いアーネスト・サトウ (Ernest Satow) のように、乗馬や散歩を楽しむのに十分な広さと眺めを備えていた。

外交使館街 (Legation Quarter)のうち、英国政府は、梁公府 (宗室奕棟梁住宅[27]) を借りることになり、1900 年迄 40 年余り、中国の正月になると、馬車仕立ての賑々しさで、500 ポンドの借地料を近くの中国外務省まで届けたそうである。[28] その後も英国政府は、周囲の土地を借り受け、使館の敷地を広げていくが、書記官用の快適な住居まで新築している。フランスもまた元満州貴族の屋敷 (原景公府) を借り受けたが、古い建物を壊してフランス・スタイルの使館を新築することとなる。

東交民巷のなかで一番乗りしていたのが、ロシア使館であろう。すでに 1727 年からロシア正教の牧師と中国語見習いの小集団が、東交民巷のモンゴール街に居住を許されていて、1858 年の天津条約締結後には、彼らが別の場所に移り、跡地にロシア使館が設置された。

ロシア使館と道を挟み、向かい側、もともと貢国使者の迎賓館があった跡地に、米国使館が設置されることになる。1エーカーの広さがあった。この土地購入の資金調達や交渉、それに使館の改築計画は、通訳書記官のS・ウェルズ・ウィアムズが担当した。前出の夏笠によれば、ウィリアム

---

25 前掲書、*Foreigners within the Gates*---*the Legations at Peking*, p. 15.
26 同上書、p.16.
27 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p. 456.
28 同上書、 *Foreigners within the Gates*---*the Legations at Peking*, p. 21.

ズ担当の米国使館が、「中国首都出現了第一此外国使館」[29]であるという。

5．八大処とハリー・パークス

すでに二度にわたって派遣された英国使節が味わった夏場の北京については、暑さと蚊の被害に触れた。実際に北京の使館で暮らすようになる1861年の夏場から、北京在住を許された公使館員と宣教師たちは、どのようにして慣れない異郷の地で夏場を過ごそうとしたのであろうか。短期間に終始する使節訪問ではなくて、その後は、一年、二年、十年、二十年と住み続けるあいだに、猛暑と蚊に加えて、後述するように、黄砂や埃、泥道、不衛生、伝染病等についての悩みが、日記や書簡に追加されるようになる。

二巻本のオルコック伝記を書き残しているアレクサンダー・ミッチーは、主として上海在住の長い、有能なインテリ商人であったが、北京在住の外国人にとってやがて必要となる夏場の避暑地もしくは保養地としての北京西山八大処について、以下のような興味深い総括的記述を残している。その意味でもミッチーは貴重な存在であると言える。また、長文の引用文になってしまうけれど、避暑地確保の交渉を記した唯一の資料であるので、当該個所を以下に文引用しておきたい。

> The lives of the foreign residents were by no means confined within the four walls of the city. The environs without fences or trespass notices made charming excursion grounds for riding parties. For longer expeditions there are the never-failing attractions of the Ming Tombs, the Great Wall, the passes into the Mongolia, and the various other distant points. The city is beautifully situated in the centre of a mountain crescent, whose nearest point is thirteen miles distant. The first object of quest when the Legations had

29 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p. 459.

been established was a sanatorium [保養地] or summer retreat [避暑地]---the thermometer reaches 100° Fahr in June---and the Western Hills [西山] were explored. Some of the most beautiful spots there were occupied by Buddhist temples or monasteries, whose builders have shown as nice a taste in the selection of their site s as their brethren the monks of the West have always done. These religious houses, laid out with a view to the accommodation of pilgrims and strangers are regularly used by Chinese grandees as health-resorts or shelters from political storms. The Russian mission, while it was alone in Peking, had set the example twenty years before of resorting to the hills temples in the dog-days. Arrangements with the priests for the occupation of certain portions of the temples were soon made by Mr Parkes, who was on a visit to the capital, and ever since official Peking, with one notable exception, has on the approach of summer migrated bodily from the oppressive atmosphere of the great city to the exhilarating air of the Western Hills. The social life of the city was reproduced at the temples, but in a less conventional form, every one residing there being considered on a holiday. The country round offered many temptations to excursions, and amateurs of geology, botany, and natural history were never at a loss for something to interest them in their rambles among the hills. Residence so far from town brought the foreigners into friendly contact also with their rustic neighbours, whose innate good qualities, moderation, contentment, and kindliness were displayed in a very favorable light.

But the sojourn at the hills also brought the foreigner into occasional contact with Chinese of higher rank, who welcomed such opportunities of showing civility to the strangers. At other times disagreeable collisions with the retainers of a great personage were experienced. So popular were the temples of the Western Hills as a summer resort that they were always full, and consequently disputes about accommodation were liable to occur, especially when some grasping priest would let the same

> premises to two different occupants, leaving them, or rather their servants, to fight for the possession.[30]

すでに上記したように、北京城内に 20 年も前から駐在全権公使を派遣できてきたのが、ロシア帝国であったように、北京郊外の避暑地確保も、ロシア使節が一番乗りしていた
らしい。ロシアの先例に従って夏場避暑地の確保に向けた交渉をパークスに託した、とミッチーは述べている。北京に上洛した 1860 年秋の間に、早々と交渉したものと思われる。エルギン卿使節から駐在北京全権公使を引き継ぐことになる弟のブルース卿 (Frederick William Adolphone Bruce)が、外務大臣格の恭親王に引き合わされた日、1860 年 11 月 8 日の通訳はパークスであった。翌日には上海へ向かうエルギン卿一行に同行するパークスが、北京に戻ってくる日は、1861 年 4 月に入ってからとなり、しばらく書記官・通訳の役職に就任した。ブルースや英国使館の八大処使用が、1861 年の夏場からであるから、書記官就任後の初仕事として、恭親王と中国外交部役人との交渉をするのには十分な時間的余裕を感じる。

パークスの 1861 年北京使館滞在は、しかしながら、4 月から 5 月末までの短期間に終始した。一つにはブルース初めとする英使館の面々が、彼のような真剣さを感じさせない、とする失望感に起因するようである。

> The Legation struck him as badly managed, the establishment 'dirty and ill dressed,' and whole effect 'mean.' The duties of the Chinese Secretary did not attract him, and he was not sorry that he had not to perform them. In spite of the interest he took in riding about Peking and the neighbourhood, he was glad to leave. If he stayed in China it was for work, not amusement.[31]

---

30 Alexander Michie: *The Englishman in China during the Victorian Era* (Blackwood, Edinburgh, 1900, in two volumes). Vol. II, pp. 154-5.
31 Stanley Lane-Poole: *The Life of Sir Harry Parkes* (Macmillan, London, 1894, in two volumes). Vol. I, p. 442.

旅先から妻に宛てて消息をたえず書き送るパークスは、この点で前出ウィリアムズによく似ている。すでに北京を発って、上海経由で広東に戻る旅先にあった6月1日の妻宛書簡のなかで、植物採集の趣味について述べたときに、二度にわたる北京八大処探訪に言及している。

> At Peking, too, we have a vegetation that is much akin to our own, and many wild flowers also. I went twice to hills about twelve miles from the city, and derived as much delight from this particular, as from the charm of the general view. The blue iris is a very common flower, and in the place of cowslips we have oxlips, a flower of the same character but a brownish hue instead of bright yellow. Dandelions and thistles are plentiful, but I discovered nothing like a daisy or buttercup, for which I would have given any money.[32]

鷹の眼のような鋭い視線を肖像写真に残りしており、行動する領事として強い意志力を感じさせてきたパークスが、このように名もないような雑草に興味を持っていたり、妻に自分の発見をたえず私信で語り伝えようとする優しさの一面を持ち合わせていたことが分かる。二度の八大処探訪の合間、1861年5月あたりが、実際の使用許可を得た時期と推定してよいであろう。

6. ブルース卿および日本語通訳見習アーネスト・サトウ：1862年

上掲引用文でミッチーの指摘している英国全権公使と駐北京英使館員による1861年八大処滞在について、実際の滞在に触れた英文資料を発見できていない。ここでは1862年から1868年までに資料的に限定せざるをえず、年次ごとに検証しておきたい。

---

[32] 同上書、 *The Life of Sir Harry Parkes*、vol. I, pp. 442-3.

ただ、1861 年滞在については、ミッチー著オルコック伝記と、レイン・プール著パークス伝記、これら二冊における記述以外の資料がないけれど、ブルースの滞在はほぼ推定できそうである。

1862 年夏場には、同じブルースと駐北京英国使館員による滞在が、アーネスト・サトウの自筆未刊日記で、以下のように言及及されている。

> Fri. 27. [June, 1862]
> This morning ten of us on horseback & Murray in a cart, with three other carts containing boys & grooms started at 5 o'clock for Pi Yun Sze [碧雲寺] or the Jasper-cloud Monastery situated in the hills; [blank space] miles from the Ping Chi Men in a [blank space] direction. The road led us thro[ugh]' Palichwang, & about a mile beyond, turns off by the side of an almost dry stream, flanked on one side by a continuous mound. After proceeding along this for some distance, the road divided into two a bridge affording to one branch the means of crossing the streambed, while the other still continued along the bank. Taking the left, over the bridge, we got into rather a bad road, but still cantered on, passing thro[ugh]' a village, till we came to a shaded enclosure with tombs & memorial tablets. Here we waited for the carts, & when they arrived turned to the N[orth]. Up to this time I had fancied that we were going to Patachu, but from the slight knowledge I had gained fr[om]. the map I soon perceived myself to be mistaken. Mr. Bruce having rented the temple at Patachu, & sent things up there, we did not consider that we had any right to intrude there, & so the destination of our excursion was changed. [33]

ブルース全権公使が、八大処に八つある寺院の一つ、碧雲寺を借り受け

[33] Ernest Satow Dairies PRO/30/33/15, June 27, 1862 (The National Archive, Kew Gardens, London).

ており、ベッド等の家具を荷馬車で送りこんでいる、とサトウは述べている。元気で若々しい通訳見習生のサトウの方は、乗馬好きであり、方々に遠出しているけれど、1862年6月末の頃までに噂で聞いていたと思われる八大処を目的地にして乗馬で向かったものらしい。

他方、早くから北京入りを果たしていたロシア、それに英国とフランスにつづき、公使館設置の最後に廻ってしまった駐北京美国使館の方は、もっぱらウィリアムズが、公使館用地の確保と建築に余念がなかった。公使館に入居できるまでのあいだ、フランス使館の好意によって、そこに仮住まいをしている頃、ウィリアムズは、澳門で待機している妻に宛てた1862年8月7日の書簡のなかで、次のように事情を伝えている。

> We are still living at the French Legation, but Mr. Burl[ingam]e. intends to going up to the Hills to relieve Kleczkowski of some of us for a few weeks, while I stay to look after the repairs; however, I think B. will never go there, he is too inert. As soon the house is habitable, I shall leave, if I am alive & well, and go south [to Macau]. I have every inducement to hurry the workmen therefore. The cholera is nearly gone, and all foreigners have been spared, of whom there are 80 in Peking.[34]

上掲引用文でウィリアムズの言うように、1862年夏場の北京には、すでに八十名の外国人が暮らしているとしたら、そのなかのどれほどの人数が、八大処へ向かったのであろうか。避暑地らしい賑わいが予想される人数に違いないのである。

7. ラファエル・パンペリーと駐北京外交官の交流：1863年

---

34 SWW to wife Sarah, dated Peking 1862/ 08 / 07; SWW Family Papers (Yale Univ. Lib. Archive).

旅行家のパンペリーは、世界各地の地質調査をつづけながら、1862 年になると日本に現れる。横浜、東海道、北海道まで探訪の足を伸ばした。その後 1863 年に入り、上海から北京まで旅を続けた。北京の手前で遠望した西山八大処の印象は、そのときに記したものであろう。彼の回想録には正確な日付が記入されておらず、いつ北京に到着したかも正確に判明しない。1863 年の春先であろうと推測するのみである。「北京に於けるアンソン・バーリンゲイム夫妻と娘、1863 年」というキャプションのある庭先の写真が、掲載されていたり、北京滞在中は、バーリンゲイムの好意を受けて、美国使館に宿を得たと感謝しているところから判断して、1863 年春先の到着というのが適切であるようだ。

その後に、本稿テーマに関連する興味深い記録を読むことができる。バーリンゲイム夫妻に加えて、英国全権公使ブルースと英使館付文官・武官たち一行に案内されるままに、西山八大処までの遠出に参加している。国柄の違いを超えた外交官達の異郷に於ける社交の具体例が、早くも 1863 年夏場のこの時点で見受けられるのである。

> On one excursion to this temple our party included Mr. and Mrs. Burlingame, Sir Frederick Bruce, and several of his *attaches*. Our way lay at first along the outer side of the city wall. I was riding in advance with some others when we saw a number of pigs ahead of us and many crows all fighting over something which we soon saw was human leg sticking up out of the land. We fell back and managed to surround Mrs. Burlingame and prevent her from seeing the horrid sight.[35]

8. 八大処社交界の賑わい: 1864 年

[35] Raphael Pumpelly: *My Reminiscences* (Henry Holt, New York, 1918, in two volumes). Vol. I.

前出のウィリアムズは、前後10回、八大処で避暑をしている、と自ら記しているが、1864年夏がその初回であったと思われる。白松で知られる長安寺で過ごした。八大処の八寺院のなかでも、一番下手の大きな寺である。後年には三山庵をすっかり気に入ってしまい贔屓にした。

弟の宣教師フレデリックに宛てた1864年8月12日付書簡に於いて、各国の公使たちが、それぞれ八大処の好きな寺院を選んで、夏場を過ごしていることが分かる。

> We are spending a month or two at a temple about 14 miles W. of Peking, situated at the base of the Hills, which commence the plateau of central Asia. It forms one of a group of eight separate monasteries cared for by 20 priests or more in all, and in the lowest down; the Russian, Am. & French ministers occupy others higher up the hill, embosomed in groves of trees and affording extensive views of the plain toward Peking. Ours is spacious & clear, but not so new as some of the others; it contains three terraces within the wall, & has 8 or 10 different buildings altogether arranged around two courtyards that contain many trees…
>
> Among the trees in the compound, are six specimens of the white pine, of which is, I am told, over 500 years old; this tree is covered with a white bark nearby in the outmost branches, as white as if the whole trunk had been white washed like the bit I send you; the bark flakes off like the shellark hickory, & this keeps the tree constantly white, and fresh. It is truly a fine tree, & has been introduced into England & France, where I am inclined to think it will not show such a white trunk, because of the humid climate compared to this. [36]

[36] SWW to brother Frederick, dated 1864/ 08/ 12; SWW Family Papers.

1864年夏の段階に於いて、英国、ロシア、米国、フランスの各国全権公使が、八大処に勢ぞろいしていることが分かる。どのような交流を相互に持ったからについては、この書簡に語られていないが、家族や若い公使館員ぐるみで、相互のあいだに社交の機会が、年々、増えて行き緊密になったものと推測できる状態にある。

この引用文に白松のことをウィリアムズが詳しく伝えているのは、彼の植物採集の趣味に基づいてのことである。1864年夏、八大処の山野を探索しては、北京蕨や他の幾つかの新種（*Sambucus Williamsii* と *Panicum Williamsi*）を発見するまでに発展した。[37] 十年前にペリー提督に伴い、通訳として日本に遠征したときにも、余暇に下田の山を歩き回って、植物採集に夢中なウィリアムズの姿が、今度は、北京の八大処の山野で見かけるようになったわけである。1854年4月20日下田では、新種 *Clementis Williamsi* を採集したほどの専門家並みの研究熱を感じされる。以下に引用するミッドフォードが、アマチュアの植物学者について言及しているのも、こうしたウィリアムズの実在と実績を念頭に置いてのことと思われる。

9. ミットフォードの八大処滞在記録: 1865～1866年

1865年夏場の資料を提供するのは、ミットフォード (A.B. Freeman-Mitford)である。文才に恵まれた青年貴族であり、駐北京英使館付文官として赴任するために、1865年4月に香港に到着して以来1866年9月まで、香港・広東・北京というように推移する滞在先から本国に宛てて、長文の私信29通を書いており、後年にそれらを編集して一種の紀行記にまとめた。八大処発信の書簡は、全部で三通あり、書簡7号 Pi Yün Ssü 発信1865年7月7日付[38]、書簡27号 Ta-chio-Ssü 発信1866年7月23日付[39]と、

[37] Emile Bretschneider: *History of European Botanical Discoveries in China*, 2 vols. (Sampson Low, Marston Co., London, 1898). Vol. 2, p.680.
[38] A.B. Freeman-Mitford: *The Attache at Peking* (Macmillan, London, 1900). pp. 87-94.
[39] 同上書、 pp. 313-329.

書簡 28 号 Ta-chio-Ssü 発信 1866 年 8 月 4 日付[40]である。

発信地の寺院は二か所になり、内容的にも大きな違いを見せている。二番目に書かれている 1866 年 7 月 23 日付書簡は、モンゴール紀行を主な内容にしており、本稿のテーマとの資料的関わりでは、単に発信地だけに限られている。最初の第 7 号書簡は、1865 年に最初に滞在したときに書かれており、当然のことながら、資料的な内容は、八大処滞在の理由と魅力、滞在先の寺院の生活環境、近くに滞在するロシア使館員との交友に詳しく伝えてようとしており、先に引用したミッチーの概括的記述を裏書きしている。なかでも「北京西山の小高い山並みは、中国北部のスイスである」という一言に、好印象を集約している文章等、数か所からの抜粋にここでも限定せざるを得ない。

You will see by the date of this that we have beaten a retreat from the dust, head and filth of the city, and that our "villegiatura" has begun. Indeed, Peking was becoming insupportable. The thermometer when we left was standing at 108° in the shade, the highest degree when it has reached for these three years, and I was heartily glad to turn my back upon the Legation gates.

The plain between these hills and the town is very beautiful. It is thickly studded with farmsteads, knolls of trees, and tombs, which are always the prettiest spots in China, for as a balance between against the dirt and squalor in which they pass their lives, the Chinese choose the most romantic and delightful places for their final habitations. The soil is wonderfully fertile, and yields two crops in the year, so that usually the plain bears every appearance of prosperity…

The hills west of Peking are the Switzerland of Northern China. They are not very high nor extraordinarily beautiful, but they are some

---

40 同上書、 pp.330-346.

very pretty gorges and valleys, richly wooded, and at any rate the air is fresh and pure. Every gorge has a perfect nest of temples, built by the pious emperors of the Ming dynasty and the earlier Tartars, for which good deeds the *Corps diplomatique* at Peking cannot be too grateful. Properly speaking, according to the rules of their order, the Buddhist monks are forbidden to receive any money for the hospitality which they offer to strangers, so when the Chinese go to stay at a temple they restore or beautify some part of it as a return; but we prefer paying a few dollars, and in spite of their statutes the arrangement seems to suit the monks as well as it does us....

Our temple is called "Pi Yün Ssü," "the temple of the azure clouds," a romantic name, and certainly the place is worthy of it. It is built on terraces ascending the hill to a length of about half a mile, and on every terrace is shrine, each more beautiful (if that is the proper word to apply to the grotesque buildings of this country) than the last.... At the top is a small temple more in the Indian than the Chinese style, and here there is a very curious idols with ten heads, three large ones at the bottom, from which three smaller ones spring, in their turn carrying three lesser ones surmounted by a single very small head. The hands are in proportion. This little place commands a panoramatic view over the plain, with the walls and towers of Peking in the distance....

Our habitation consists of several little houses on one side of the temple; we dine on an open pavilion, surrounded by a pond and artificial rockery, with ferns and mosses in profusion; high trees shade it from the sun, and close by us a cold fountain pours out of the rock into the pond, in which we can ice our wine to perfection....

We rise at any hour after daybreak, breakfast at eight, dine at three; after dinner we go for a walk, or a scramble over the mountain, and come home to tea at about eight or nine. We sit smoking our

> cheroots for perhaps an hour, talking always about home and watching the fire-flies, that, according to the Chinese tradition, served as lamps to Confucius and his disciples. A visit from or to the Russian Legation, who have got a temple at about an hour and a half's ride from here, is the only break to the monotony of our daily life. I have my teacher with me here, and work with him at the language from breakfast to dinner; that is my serous occupation, and about as hard a task as one could wish for. I carry about my lessons for the rest of the day written on paper fans---a capital dodge for keeping one's work before one. We are rather bothered by mosquitoes, and a most venomous little insect called the sand-fly, yellow in colour, and smaller than a midge, which is lucky, for if he were of the size 6f a blue-bottle I should think his bite would be fatal…[41]

夏場北京の生活環境的苦痛として、猛暑と蚊が、これまでの訪問者によって指摘されていたが、ここでは新たに、砂塵とむさ苦しさ ("dirt and squalor") が追加されており、訪問者と違って長期の滞在者の眼に、夏場の北京は生活困難と映ったようである。それと比較して、谷川と緑に囲まれた八大処の空気は新鮮に感じられたものらしい。

ミットフードの書簡には、むさ苦しさを詳述していない。後で引用する他の北京滞在者の文章でも短く語られているにすぎないので、ここで最も端的に表現した 1890 年代の旅行者ヘンリー・ノーマンの観察を以下に引用しておくことも無駄ではないであろう。

> Above all t he characteristics of Peking one thing stands out in horrible prominence. Not to mention it would be willfully to omit the most striking feature of the place. I mean its filth. It is the most horribly and indescribably filthy place that can be imagined. Indeed,

[41] 同上書、 pp. 87-9.

> imagination must fall far short of the fact. Some of the daily sights of the pedestrians in Peking could hardly be more than hinted at by one man to another in the disinfecting atmosphere of a smoking room. There is no sewer or cesspool, public or private, but the street; the dog, the pig and the fowl---in sickening succession---are the scavengers; every now and then you pass a man who goes along tossing the most loathsome of refuse into an open-work basket on his back; the smells are simply awful; the city is one colossal and uncleansed *cloaca*. [42]

翌年の 1866 年には別の寺院に滞在したことがわかる。1866 年 8 月 4 日付の書簡においては、再び八大処で過ごすつもりのミットフォードは、1866 年の 2 月に予約をした、とわざわざ記すほどに避暑地としての人気が上がってきたようである。二年目であるから、八大処の各寺院の持つメリットについて熟知する立場になったためか、今回の選択は、社交の賑わいを避けるために、他の寺院からかなり離れた場所を考慮した上での決断だったらしい。

> When I returned from Mongolia three weeks ago I found that all t he world, that is to say, the three or four diplomats who compose our world, had very wisely taken itself off to the country. So early as last February I had secured this "Temple of Great Repose," and I lost no time in coming out here. It is too far from Peking to be very convenient; but it is well worth the extra ride, and the advantage of being feeting miles from the other temples inhabited by Europeans is incalculable; one is not subject to perpetual interruptions by people who, being bored themselves, come in and inflict their boredom upon others. It is a great undertaking moving out to the hills. We are obliged to take absolutely our whole *ménage* , and almost all our

---

[42] 前掲書、*Foreigners within the Gates---the Legations at Peking*, p. 32.

furniture with us. I think you would have laughed at my procession; there were fourteen carts full of every kind of movable---our whole poultry-yard clucking and cackling out of coops and baskets, and a cow with her calf. This must seem strange to you, who would certainly not dream of taking your hens, ducks, and cows with you from town to the country; it is only another instance of the universal topsy-turviness of things in China, again demonstrated by the fact that the farer one gets from town the dearer everything becomes, there being no market and no competition, so that the owner of a leg of mutton can just change what he pleases for it, knowing that you must either buy at his price or go without it altogether. It is a beautiful tide out here, past Hai Tien, a little village with a small inn at which the Pekinese may be seen by scores, naked to the waist, and enjoying an outing, after their fashion, with chopsticks and rice, tea and infinitesimal pipes, past Yuen Ming Yuen and Wan Shao Shan, or rather its ruins, past flourishing cornfields and picturesque hamlets, past temples and shrines innumerable, along stony roads which the rains have turned into canals so deep that the carters are obliged to cast lots for which shall strip his very dirty body and go in to see whether the carts can pass or not. It was quite dark before I reached the temple, after eight hours' ride under the hottest son I ever remember to have felt. Indeed I had a sad proof of its strength the next day, for my brown pony, Ho-o'-my thumb, who carried me so well over so many hundred miles, died of sunstroke after a few hours' illness. Poor little beast![43]

上掲引用文中に語られているように、快適な避暑地の生活を確保しようとしたら、このときのミッドフォードと同じくらいに、相当大量の準備を

---

[43] 同上書、 pp. 330-2

しなければならないように思われる。料理人や使用人を伴い、まるで北京私邸の家具をみな運んでいき、引越しするようかのような物々しさではないだろか。１４台もの荷車から編成される大行列となってしまい、しかも家具ばかりでなく、何種類もの家畜・家禽まで運んでいるから、英国国内ではとても眼に出来そうにない遊牧民の珍キャラバン光景になった。生卵を確保するために鶏を連れていく。籠に入れた数羽の鴨は、いつか鴨料理を楽しむつもりなのであろうし、日々の牛乳も欲しいので牝牛親子まで連れている。ロンドンのマンションから田舎の屋敷に避暑に行くのに、誰が、こうした家畜・家禽の一連隊を同行されるというだろうかと述べて、英国と中国とでは、なにもかも逆さまの世界だと、ミットフォードは弁解につとめている。

10. 中国語通訳見習ポーターの八大処発信書簡 (1): 1866年初夏

同じ年 1866 年の夏には、もう一人の有能な青年が、八大処の滞在と印象を家族宛書簡に記している。これらを編集して出版されたのは、書簡執筆時から百三十年後になった[44]。筆者のポーター (Francis Knowles Porter: 1845~1869) は、ベルハーストの有力な長老派教会牧師 (Rev. John Scott Porter) を父親に持ち、ロバート・ハート (Robert Hart) の母校でもある地元のクリーンズ・コレッジを 1865 年 10 月 11 日に卒業するとほぼ当時に、1865 年 11 月 2 日に駐北京英使館の通訳見習に推薦された。

乗船は 1866 年 1 月 4 日となった。中国に向かう船上で母親に宛てて書いた 1866 年 1 月 7 日日曜日の書簡に始まり、やはり母親宛に駐寧波英国領事館発信の 1869 年 3 月 27 日付書簡に至るまで、全書簡 59 通を書いている。これらの転写テキストを読むことが可能になったわけである。特に本稿のテーマにとって、貴重な資料の発掘といえる注目すべき点は、八大処発信

---

44 Francis Knowles Porter: *From Belfast to Peking, 1866~1869, A Young Irishman in China* (edited with an introduction by J.L. McCracken, Irish Academic Press, Dublin, 1996).

の書簡7通を含んでいて、避暑地の生活ぶりが、随所にユーモアを交え、若々しいタッチで描写されていることである。これだけ多数の八大処発信書簡は、前出ウィリアムズ以外に他に例をみない。

すでに上で見てきた人物や事柄に触れている興味深い記述が、随所に散見できるので、最初にそれらについて述べておこう。1866年2月21日水曜日の第11書簡には、1866年3月2日金曜日付の追伸があり、上海から天津行の乗船切符を購入できたので、日曜日3月5日に乗船予定であると知らせている。次の1866年3月20日、第12書簡にも1866年3月25日の長い追伸が付いている。この第12書簡では、駐北京英使館の発信となっていて、天津から上海までの行程を前出ミットフォードと共にした、とまず記している。更に、北京到着後ただちに全権公使の前出オルコックに挨拶に行ったところ、再婚相手の故ラウダー牧師未亡人、それに夫人の連れ子の娘と、評判の悪い息子[45] (後年、日本宣教師S・R・ブラウンの娘と結婚)を紹介されている。

ミットフォードやオルコックばかりでなく、他の公使館員との挨拶のなかで、2月、3月という早い段階でありながら、夏場の過ごし方が話題に出たように推測できそうな二、三の根拠を見受ける。一つには外交界の社交であろうが、北京に常駐する各国使館を実際に訪問している点にある。駐北京使館のこうした交流は、夏場の二カ月ほどのあいだ、八大処に移るのであるから、どこかの使館での儀礼的挨拶の一つとして、早めに八大処の宿坊を予約しておいた方がよい、と助言される可能性は高い。後に見るように、実際にポッターの予約は意外に早い時期になった。

もう一つの根拠として、冬場の北京で生活を開始しながら、生活環境に関する夏場特有の悩みをはやくも伝えているからである。朝はまだ冷え込んでいるが、日中は暖かく晴れていると述べて、天気に関するかぎり満足

---

45 "Self-inflicted incapacity was far too common too. Drink was the usual case. 'When a junior in China begins to go downhill', said an 1870 Foreign Office minute, 'debt, drink and disgrace soon hurry him to the bottom.' Like Egan, Howlett, and Lowder, Payne and Murray were victims of the bottle." P.D. Coates: *The China Consus, British Consular Officers, 1843~1943* (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1988). pp. 357~8.

気であるように見える。ところが、雨が少ないために、乾燥した空気は、砂塵（"the dust"[46]）を撒き散らす、と夏場に頻繁に語られはずの悩みが、すでにこの時期に口にされている。そればかりなく、街路の悪臭や汚物にも、この冬場の段階で言及されているのであるから、夏に入った北京で暮らそうとするなら、深刻な問題に発展しそうに予感されたことと思われる。避暑地の必要性は、こうして北京到着まぎわから話題にされ、考慮されたものと推測できる。

これまで夏場に劣化しがちな生活環境については、英国人の間の頭痛の種となった猛暑・蚊、むさ苦しさ、それに砂塵を加えて見てきたが、更に悪臭と汚物の追加を避けられないようである。"The filth and stench of the streets are most abominable and render walking in them quite impossible."[47] 下水道やゴミ処理法など、近代的なシステムが、大都市に完備させるまでに、どの国も長い苦難の道を歩んできた。北京ばかりの特殊事情ではない。

八大処行きの計画が、実際に書簡で述べられるのは、次の第 13 書簡 1866 年 4 月 11 日である。"We are all going off to the hills in the summer time to avoid the heat and the perfumes of the city, but of this more, when more is arranged."[48] 八大処行きの目的を述べているが、先の 3 月 25 日付第 12 書簡追伸で話題にしたことを受けてことであろうと思われる。

次の第 14 書簡は、2 週間後の 1866 年 4 月 25 日に水曜日に書かれている。二、三日前の 1866 年 4 月 22 日土曜日に八大処へ行き、週末に二泊して北京に月曜日 4 月 23 日に戻ったと伝えた。駐北京英使館の若い会計係マリー (J. G. Murray: 1842~1875) と一緒である。わずかな週末旅行に過ぎないのに、荷車に寝具を積み、料理担当の給仕を伴っていた。宿泊先は、上司のオルコックがすでに、この夏に滞在する予定で借り受けていた寺院であったという。

I have either a walk or a ride every day, and we have a gymnasium where we

46 同上書、 p. 56.
47 同上書、 p. 56.
48 同上書、 p.63.

exercise in the morning at about seven o'clock; a cold sponge bath completes the process. On Saturday last I rode out with Murray, the accountant and private Secretary , to Sir Rutherford Alcock's temple, which he has taken for the summer but has not yet occupied, so we had the whole place to ourselves. We sent out bedding out by a cart and took our boys to cook. We stayed there all Sunday and came in on Monday morning. It was almost the only breath of fresh air; for at this season the season the dust is flying and covering everything. On our way home, we passed a place called Yuen-Ming-Yuen---a summer temple or place of the Emperor which was sacked and fired by Lord Elgin some six years ago. You recollect the account of the fearful wanton havoc made by our soldiers among the cost ornaments and furniture. I am going through it next week and shall then give you an account of it.[49]

1866年5月8日火曜日には同日中に、父親宛の第15書簡と母親宛て第16書簡の二通を書いている。先の4月25日書簡のなかで、八大処再訪れを予告した通り、同じくマリーに同行して土曜日5月5日北京を発ち、二泊三日の滞在の後、5月7日月曜日に戻ることになっていたらしい。思いがけない事故は起きるものである。同行者のマリーが、八大処に向かう途中で落馬事を起こし、北京に戻らざるをえない深刻な事態となった。不幸中の幸いは、もともと外科出身の軍医オルコックが、治療にあたってくれた点にある。高熱を併発したために、ポーターは、三日三晩付き切りで看護した。深酒の悪癖が直らず、外交官人生を無駄に終わらせるマリーは、このときすでに、飲酒しながらの乗馬であったのかも知れず、それで落馬事故を引き起こしたとも想像できるそうである。[50]

---

[49] 同上書、 p.64.

[50] 前掲書、*The China Consus, British Consular Officers, 1843~1943* (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1988). pp. 357~8.

> …but for the last three nights I have not been in bed. Murray of whom you have heard, (or rather *seen*) me speak, got a severe fall from his horse on Saturday, as we were all going to the temple in the hills. Sir Rutherford, who is by profession a surgeon, not a diplomat, attended to his wound (on the head) and we took it in turns, to sip up day and night to watch him, and to put cold cloths on his head to keep down his brain fever which was apprehended. He is now better and able to go about a little.[51]

八大処に行きたい二人の青年の勇み足という事故であったのであろう。二度目の週末宿泊が中断されたことは言うまでもない。五月初めの北京では降雨もあって涼しく、気持ちのよい天候に恵まれたようである。夏場の滞在先を予約して、準備に余念なかったことだけは確かである。上司のオルコックとは別の寺院にした事情は、他の寺院をすでに各国の公使クラスなどの賓客による恒例滞在によって、或る意味で一年前から塞がってしまっている、という選択の余地のない盛況ぶりを物語っているようである。

> I don't (know) that I mentioned in my last letter, that we had taken a temple for the summer months. The arrangement about payment is deferred till we leave the place, and then a present of a small sum of money is given to the head priest. There is a large hall in our temple [本堂] containing five hundred images of the mighty Buddha, in different positions.[52]

母親に宛てた第 17 書簡は、五月末の 1866 年 5 月 26 日土曜日に書かれていて、そこにはすでに上司のオルコックが、家族連れですでに八大処に出かけたことを伝えている。まだそれほどの暑気もなく、蚊に悩まされるのも、少ない快適な生活であるので、休暇の前半組に入るつもりであったけれど、後半組の順番が来るまで北京城内で過ごすつもりであると伝えた。

---

51 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.67.
52 同上書、p. 68.

Sir Rutherford and his household have removed to the temple in the hills; and we have taken a temple and at present there were two of our men out, looking after the repairing of roofs, and sweeting out of rooms, I expect to join them Monday next. I am afraid that we are going out too soon; for the violent heat and no less violent mosquitos have not yet come forth in full vigour, and we should enjoy the temple much then. We must however stay there the longer. The last fortnight has been perfectly heavenly. We have had very severe rain, almost every night and morning, and the day is so cool and fresh after it… I had intended going to the hills among the first; but the present weather is so cool here that I am inclined to stay in the city now, to escape the hot months. [53]

5月 26 日の段階では、このように快適な生活を報告しながら、数日後の 1866 年 5 月 31 日の第 18 書簡になると、生活環境に関する二つの悩みを訴えている。さすがに 6 月が近づいている。一つには、むさ苦しさの点で言及した悪臭である。更に、酷く苦しめられたのは、蚊の猛襲であったという。体中を刺されて腫れあがってしまい、中国語の勉強を中断して三日間もベッドから離れられないほどの激しい痒みを味わったようである。

For myself I am getting along well. Study of the language is progressing. I have not much amusement except what I derive from sauntering through the city, and in order to do so, it is necessary to leave at home all your sense of smell or to make use of that sense as little as you can…. I have been laid up the last three days---mosquito bites!

The cool weather suddenly disappeared; and in one night the mosquitoes appeared in swarms. I had not put up mosquito curtains, and was totally unprepared for a midnight attack I was bitten and sucked dry

[53] 同上書、pp. 69~72.

> from head to foot. Face, hands and legs are in a terrible state. The bites all rise in large lumps, with an almost intolerable irritation. I was in bed the whole of the day before yesterday, as my clothes irritated me so much that I could not keep them on.[54]

悪臭に関してはすでに引用したヘンリー・ホーマーの観察が、最も端的に表現しているのに対して、蚊の被害については、この時のホーマーの体験と記述以上に、激しい苦悩を語ったものを見かけない。

11. 中国語通訳見習ポーターの八大処発信書簡 (2): 1866年盛夏

ポーターによる八大処碧雲寺 (Pi-Yün-sü) 滞在は、7通の両親宛私信のなかで詳しく報告されているように、1866年6月末から9月中旬までの2カ月余りという長期間にわたっており、本格的な避暑になった。第19書簡から第25書簡に至る7通は以下のものである。母親宛6月24日、父親宛6月25日、父親宛7月8日、母親宛7月22日、母親宛8月4日および追伸8月9日、父親宛8月9日、母親宛8月19日。本稿のテーマに、こうして、豊富な資料を提供することになった。

最初の書簡6月24日には、この寺院の位置が、八大処のなかでも一番高い所にあって、一層新鮮な空気と良好な眺めに恵まれていたという。それに高所まで登ってくる他寺院の滞在者は少ないところから、社交的にやや孤立していて、中国語の勉強をしたいポーターには好都合であったようである。蚊対策のために窓や天井に、薄いガーゼ製のカーテンを張り巡らしたので、酷い被害に会わずにすんだようである。

日常生活を支えるために、身の回りの世話をする中国人給仕と料理人、それに中国語の中国人教師が同行している。八大処についてポーターの一番気に入った点はなにか。寺の脇を走る渓流には、狭いけれど或る場所に、

---

54 同上書、pp. 74-76.

石畳を敷いたプールが完備していたことあった。

> The temple is situated about half-way up a very high hill to the west of the city… Below us there is a little village where we can get our eatables to buy. The beautiful stream runs through the grounds; and at one part of its coures [*sic* / courses] is received into a stone-built basin where we bathe every day. There are I suppose more than one hundred different buildings in the place, which occupies a very large area. My room is the highest upon the hill, and form its position is the coolest of the lot. I got it as having the last choice; for the other men took rooms in better repair.[55]

よほど避暑地としての八大処に魅了されたようであり、"As far as as I have yet seen the climate of this place suits me well in health: I wish the whole of China were healthy."[56] と結論づけている。同じように快適な生活ぶりは、次の6月25日付父親宛書簡に於いても繰り返され、"My mother will let you know how I am getting on at the temple. I find it a delightful life, and shall be sorry to return again to the city."[57]、それ以降も滞在中の変わらない基調となる。7月22日に "Still at the temple, and enjoying its cool shade and retirement."[58]、更に1866年度最後の八大処最後の発信となる8月19日書簡でも同じく、"The weather has set in quite cool and delicious; and though we could not enjoy ourselves much more than when the heat lasted, living in the Legation is endurable."[59] と結んでいる。

静寂のなかでの中国語習得、新鮮な空気と果物、渓流での清々しい入浴、それに同宿する若い公使館員との友情、ポーターにとっては、1866年の八

---

55 同上書、pp.77.
56 同上書、pp.78.
57 同上書、pp.79.
58 同上書、pp.82.
59 同上書、pp.89.

大処行きは､事前の小旅行も手伝って好印象に終始したようである｡ただ、問題は、社交の賑わいから完全には独立できなかった点である。単なる避暑や保養のための滞在というよりも、英国の貴族階級のあいだで発達していた鉱泉地で社交習慣が、八大処にも移入されていたと指摘できる。

A.B. Granville 医師の英国鉱泉地探訪記 *The Spas of England*[60]は、1841 年に発行されており、レミントン・スパやバックストンを初めとする鉱泉水飲料の保養地が、貴族の加護によって、急速に片田舎の村からオシャレな街に変貌する過程を報告している。"There is a fragrance of aristocracy in the very air of this Spa [Buxton]…"[61] エルギン卿、弟ブルース卿、それにオルコック卿は、高い低いの違いを見せながらも、貴族階級に属しているのであり、中国南部からの旅行者が、次々に北京を訪れており、パトロン・ホストの立場からの接待に、八大処へ案内するオルコックたちの事情は、年々増えこそする減ることなかったらしい。

> During the last three weeks we have had a good many Europeans from the south up here. In the month of August., the hottest in the year at the southern parts, those who wish to escape fever and sunstroke take up a trip north, and generally end the tour by an excursion into Mongolia. The Legation and the Alcock's temple are at the disposal of all such visitors.[62]

ポーターの 1866 年八大処滞在は、満足すべきものであったらしいが、以下に見るように後二回の夏を八大処で過ごしながらも、初回のように長期間にはならなかった。

12. 結びにかけて: ポーターと 1867・1868 年夏場の八大処

---

60 A.B. Granville: *The Spas of England* (Henry Colburn, London, 1841).
61 同上書、p.24.
62 前掲書、*From Belfast to Peking.* p.90.

美国使館通訳・書記官の前出ウィリアムズは、10 回の夏場を過ごした自ら述べているように、八大処愛好者の筆頭的人物である。なかでも三山庵(Sa-shan-ngan)を好み、通い詰めるようになるが、ニューヨークのオリファント商会宛書簡のなかで、1867 年の滞在を次のような言葉で描き出している。

> We have called the old monastery, where I am spending a few weeks with my family, the Tremont Temple, because its Chinese name has that meaning, the *San-shan-ngan* exactly corresponding to Tremont Monastery. It forms one of eight Buddhist establishments which the devotion of former generations has left on this hillside, rising one above the other to a height of 600 or 800 ft. above the plain….. and this year & last every every available room has been taken up by foreigners, who escape the dust & heat of the city. Mr. Burlingame occupies the large one above this, & Alcock the one below, while the Spanish minister de Mas has taken another…. The few repairs needed are done usually by foreigners, and we pay something for rents besides. Altogether, the advantages of these secluded retreats are numerous, and we are happy to avail ourselves of them.[63]

北京に常駐する各国全権公使とその家族、それに使館の公使館員と客人が、こぞって八大処に集うようになった 1866 年夏場という年は、これまでにない賑わいを見せており、避暑地として発展に向かう転機の夏場と言えるであろう。

すでに上で見てきたように、オールコック、ミッドフォード、ポーター

---

[63] SWW to Olyphant, dated Tremont Temple among the Hills West of Peking, 18672/ 06 / 10; SWW Family Papers (Yale Univ. Lib. Archive).

等の英使館関係者に加え、美国使館のバーリンゲイム一家とウィリアムズ一家、それに新任のスペイン全権公使まで入り、おそらくフランスとロシアの全権公使一行も、この避暑地の仲間に加わっていたはずである。宮廷外交ならぬ八大処外交が、避暑地の清々しい空気のなかに憩う家族ぐるみの付き合いのなかで、快適に展開した様子を想像したくなる。バーリンゲイムを中心とするこうした日常的友好関係の形成と信頼感が、中国に対する国際協調路線の下敷きとなり、やがてバーリンゲイム条約に結実していく過程をここ八大処の夏場外交に辿れそうに思われる。

他方、英使館の実施する現地中国語試験に備えるために、中国語の勉強に余念のない若い通訳見習生のポーターなどは、中国人の中国教師の常駐を必要としており、初回のときにも教師の同行に苦心したが、翌年 1867 年と翌々年 1868 年には、的確な中国人教師の八大処同行を断念したものと思われる。たしかに両年ともに 2 週間程度は、やはり八大処で避暑しているものの、初回のような長期間の楽しさを味わえなかったようである。

> The Peking for the time being is converted into an oven, which resembles as much anything can, the dry stifling heat of the place .... The Alcock family has gone to its temple; rather late in the season when we have only another month of heat. I am thinking of going in September when the evenings and mornings are cooler...(Porter to Mother： Peking, 1867/ 07/ 05).[64]
>
> The weather now is hot; and I am accordingly going off to the hills this week; in fact as the Mail is despatched. Charley Andrews is there now, and the Chief has been out for some time (Porter to Mother: Peking, 1868/ 08/ 18).[65]

上で言及した『英国の鉱泉地』には、1841 年の発行段階で海水の医療的

---

64 前掲書、*From Belfast to Peking.* p.119.
65 前掲書、*From Belfast to Peking.* p.136.

効果に言及して、海水浴場という新たな保養・避暑地として、リバプール近くの New Brighton の開発を伝えている。

> After this account it will be readily admitted, that sea-water is in fact a mineral water to all its intents and purposes; and that we may, therefore, look with as much confidence for beneficial effects from its employment, whether eternally or internally、provided it be judiciously recommended, as from the employment of other mineral waters---proportions to and in accordance with their respective chemical composition. [66]

若い中国語見習生は、中国語の現地試験に合格したあと、欠員の生じがちな沿岸開港地の領事館に、通訳として派遣されることとなる。1867 年の夏に入った北京で中国語の修得に没頭するポーターは、1867 年 6 月 15 日母親に宛てて第 42 書簡を書いているが、そのなかで海水浴への渇望を次のような言葉で述べた。

> Not that I don't like this place, but I should prefer being near the sea, especially in the summer time. The dust here is the drawback, and while I am writing it it is flying in clouds as thick as a Long fog; (which I never saw!) The society here is of course much better than at any other place in China; and good society make up even for excessive dust.[67]
>
> A summer would not seem summer at all, without the sea-side.[68]

1841 年発行の『英国の鉱泉地』が伝える鉱泉水としての海水の医療的価

---

66 前掲書、*The Spas of England*, pp. 6-7.
67 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.119.
68 同上書、*From Belfast to Peking*

値、それに保養・避暑地としての海水浴場の開発という動きを思い出すとき、ポーターは時代の申し子なのであり、彼の海水浴好きが原因となり、1869年春先、赴任先の寧波付近の川で溺れて客死した。

ウィリアムズの八大処滞在については、家族と主に米国人の宣教師仲間を連れ立ち、前後十回の八大処滞在を満喫している点で、本稿で見てきた英国外交官の滞在の仕方も意味を異なっているので、別稿で詳述することにしたいと思う。

(5)　2010年9月発行紀要論文

アンソン・バーリンゲイム伝記研究　(一)

――S・ウェルズ・ウィリアムズ自筆書簡に見る初代在北京米国全権公使アンソン・バーリンゲイムの生活と意見――

A Biographical Study of Anson Burlingame,
the American Minister in the early 1860s' Beijing:
His Life and Opinions

Anson Burlingame was the first American Minister resident in Beijing, in the 1860s. This is the first instalment of the biographical study of him in three parts, written for the purpose of giving him a decent reburial in the historical perspective by using both his official letters to Washington and the personal ones of S. Wells Williams to his family and friends. All these autograph letters have not been published, so that in quoting them for the discussion here in this paper I have tried transcribing and giving a full transcription text.

1. 再評価をめぐって

アンソン・バーリンゲイム(1820－1870: Anson Burlingame; 中国名・浦安臣)の名前と功績は、中国および母国米国の双方において、すっかり忘れられた存在にあった。近代中国史関係の書物に、その名前が登場する例は、もっぱら The Burlingame Mission で知られる使節団の団長という役割に関連してであった。1868 年から二年間のスケジュールに沿って、近代中国が初めて欧米諸国に使節団を派遣する際に、米国人でありながら、名誉ある団長に抜擢された稀有な人物なのだ。後述するように近代日本政府の派遣した岩倉具視の遣欧使節団の中国版と位置付けられるものである。

バーリンゲイムおよびその使節派遣については、当時から情報不足や誤解、誤った解釈等が横行したようである。その一つは、早くも A.R. Colquhoun の著わした中国近代史 *China in Transformation* （1898）における次のような史実解説に現れている。「アンソン・バーリンゲイム氏は、米国政府を代表する公使であったが、前もって本国政府に電信を送って辞職したのち、中国政府の特使として西洋諸国に派遣されることを受け入れた。二名の中国人高官が同行したけれど、彼らこそ明らかに使節なのであり、

バーリンゲイム氏は随行者にすぎない。」[69]

後述するように、The Burlingame Treaty と呼ばれる中美外交の基本方針を打ち出せたのは、もっぱら使節団長のバーリンゲイムによる最大の功績であるのだから、「随行員」という見方は誤謬である。それにしてもこうした誤解の源は、当初から内外で話題を誘ったように、なぜ外国人の使節が抜擢されたのか、「バーリンゲイム遣欧米使節団」の謎に包まれた成立過程と目的そのものに淵源する[70]。 成立過程の解明は、バーリンゲイム研究の重要テーマの一つになった。

Colquhoun から半世紀以上経過した 1960 年代。すぐれた米国の中国近代史研究家たち、Fairbank、Reischauer、Craig の三者による共著 *East Asia The Modern Transformation* (1965)が発表された。「後年しばしばそうであったように、西洋文明と直に接触する機会が増えていけば、自国の文明を改造したい中国人の支援策としては、最良の方法の一つになるはずだ、と多くの人たちが考えた。この直接交渉という目的のために、海外諸国に外交使節団を派遣するようにと強く勧められ、1868 には退任予定の米国公使バーリンゲイムが、中国最初の遣欧米使節として送り出される運びとなった。バーリンゲイムは、1861 年以来、『合作政策』(“cooperative policy”) の中心的存在であった。」[71] 使節団長に外国人のバーリンゲイムが抜擢される背景、使節団の成立過程や目的に関する前出 Colquhoun の疑問に答えるヒントは、どうやらこの引用文のなかにも窺えそうである。

「中国文明を改造したい中国人」とは、中国政府内部に萌芽してきた進歩派を指している。外務大臣・首相格の恭親王奕訢 (Prince Kung: 1831-1898)[72]が、その代表である。バーリンゲイムと恭親王の信頼関係と友

---

69 Archibald R. Colquhoun: *CHINA IN TRANSFORMATIOM* (London & New York: Harper & Brothers, 1898), p.220.
70 Ibid., pp.221-2. “The genesis of the Burlingame mission is somewhat obscure, its precise object scarcely less so; but its putative parents and actual sponsors are believed to have depreciated its consequences as having gone beyond what was hoped or intended when it was dispatched.”
71 John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer, Albert M. Craig: *East Asia The Modern Transformation* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1965), p. 336.
72 『清代人物生卒年表』(北京: 人民文学出版社、2005) p.577.

情がなければ、この使節団派遣という構想も実行もみなかった点について、本稿で明らかにしていきたいと考えている。この「合作政策」こそ、近年におけるバーリンゲイム再評価の起点にあると考えるからである。本稿において、この点についても詳論する予定である。

更に、三人の共著は、先に触れた The Burlingame Treaty について、条約締結に言及したあとに、次のような評価を示している。「ワシントンにおいて、両国間の平等主義に立った条約を締結させたバーリンゲイムは、同時に雄弁家なのである。西洋文明とキリスト教にとって新しい夜明けが、古風な中華王国　(The Middle Kingdom[73]) に始まった、とする彼の声明は、未熟であり、かつ誤解を招いた。彼の使節団は、1870 年ロシアにおける彼の急死をもって終息した。」[74]

三者の共著に具体的な条約名は出てこない。それだけの価値をバーリンゲイム条約に認めていない、と解釈すべきであろうか。同様に、条約締結国の双方が、このとき初めて平等主義の方針に立ったことを評価しながらも、時期早尚の声明、という判断を下している。平等主義の方針にもとづく外交が、当然の前提として受け入れられている現実を考えたら、三者の記述から約半世紀経過した今日、同条約それに立役者のバーリンゲイムに対する評価は、変わらざるをえないと考えられる。時期早尚に見えた声明の基本構想は、市場開放政策の波に乗って発展する昨今の中国実情を予告する基本方針ないしはイデアの提示、というように見直す必要がないのだろうか。

雄弁家のバーリンゲイムは、預言者と言えないであろうか。預言者とは、あるべき姿や基本的な方針を「雄弁に」提示する存在、それだけに終始してよいのかも知れない[75]。提示されたもの、そのイデアに向って、リアリ

---

[73] The Middle Kingdom は、本稿の論考で基本資料に使う自筆書簡の筆者、S. Wells Williams の主著である。衛三畏著・陳倶訳『中国総論』(全二冊、上海古籍出版社、2004)。

[74] Ibid, John K. Fairbank and others (1965), p.336.

[75] 「聖書辞典」による預言者の定義。[超越的次元との媒介」『i 岩波キリスト教辞典』(岩波書店、2002 年)、pp.1154-5。

ティーが後追いするからである。

このようにバーリンゲイムについての再評価に向けた動きが、近年、進行しているものと思われる。このことを示唆する二つの事例が、ごく最近になって、以下のように見られた。一つは米国発信である。諸外国の大使館が集中している北京市内朝陽区の一角に、美国大使館の大規模な施設が、建築進行中である。新美国使館建設にあたって、祝賀記念品の小冊子が、中国版と英語版の両方で、2008 年 8 月に発行されている。米国国務省歴史文献辦公室の編集した『共同走過的日子---美中交往両百年 (*A Journey Shared: The United States & China*)』である。完備した新使館の完成する数年後には、大部の詳細な書物が発行されるはずであり、今回発行の小冊子では、膨大な米中外交史資料のなかから、key points に的を絞っただけに、歴史人物の公的再評価としての意義を感じさせる記述といえるであろう。

まず、同小冊子のなかの一章「19 世紀的美国伝教士」において、S・ウェルズ・ウィリアムズ(Samuel Wells Williams: 1812-1884) が、米国から中国に渡来した宣教師の「第一人者」であるとして特化する。1833 年以来、広東に在住し、「流利的広東話和日語」であり、とりわけ上下二巻の *The Middle Kingdom* (『中国総論』) については、今日に至るまで 19 世紀の中国生活を精査活写できた優れた観察の書物であるとして、高く評価している[76]。

次に肝心のバーリンゲイムについては、19 世紀初期の外交往来と題する一章のなかで、肖像画と共に一頁を費やし、詳しく紹介している。なかでも「浦安臣条約」批准後に実行に移された条約項目のうち、在米中国公使館の設置、両国民の往来と居住の自由、中国人による移民と米国留学の奨励、中国政府の主権と自治を尊重した領土不可侵、に言及している[77]。中国政府にとっては、国際法に沿った平等主義に立脚する最初の国際条約の誕生・締結を意味しただけに、今日の歴史的視点から見ても、国際社会に中国を対等に招き入れたバーリンゲイムの功績は大きく、再評価すべき

---

[76] 『共同走過的日子---美中交往両百年 (A Journey Shared: The United States & China)』(美国公務院、2008)、pp.14-16.
[77] 前掲書、p.19.

好機が到来したといえるであろう。

再評価の動きを示唆する事例のもう一つは、中国発信である。日本のセンター試験にあたる中国統一試験のうち、各省で作る二次試験では、歴史の問題にバーリンゲイム使節団の中国近代化に与えた影響について、次のような出題があったという。長崎新聞に掲載されたユニークな研究ノート、「岩倉使節団とバーリンゲイム使節団」で以下のように報告されている[78]。

「中国では今年６月に大学統一試験が実施されたが、安徽省の歴史の試験に次のような問題が出された。（１）中日両国使節団の派遣目的と団員の構成にどのような違いがあったか。この点に言及しながら、両国政府の近代化に対する姿勢を述べなさい。（２）両国が使節団派遣で得た成果をどう運用したか。その時期の中日両国の近代化の主な差異を述べなさい。「読者の皆さんは、この問いにどのような答案をお書きになるでしょうか。」

試験終了後に受験生の高校生に向けた模範解答の一つが、書英(曲阜師範大學)によって「周刊考試」紙上で公表されている。

このように出題されている事実を裏返せば、前提として、高校の歴史授業や教科書が、バーリンゲイム使節団を教材に取り上げていることになる。日本近代史における岩倉使節団の意義と同様に、中国近代史における第一回の遣欧米使節団の持つ歴史的意義を再評価する動きは、ここにも感じられる。

２．　先行研究について

前述したように最新の動向は、再評価に向かっている、と観測できるものの、近年の先行研究となると米国では皆無に近いようである。バーリンゲイムの死後まもなく執筆発行されたバーリンゲイム使節団に関する英文研究書、それに死後 40 年ほどして執筆発行された英文の伝記のほかに

---

[78] 周国強著「岩倉使節団とバーリンゲイム使節団…近代史の隠されたキーワード」(長崎新聞、2009 月 10 月 21 日号文化欄)、p.18.

は、ここ100年余りの間、バーリンゲイムに関する研究書・伝記・書簡集等の研究資料は、英文で出版されていないようである。

前者の使節団に関する研究書とは、1872年上海出版のDr. Baron Johannes von Gumpachによる*The Burlingame Mission*を指しているが、全891頁のなかに、使節団派遣当時の資料を豊富に揃えている。それでも、どこか執筆動機に或る種の偏見や意図が潜入しているように思われて、ほぼ各頁に批判めいた論述が列記されている[79]。そのため読者の判断は、その都度、振り廻されてしまい、結果的に扱いにくい難解な書物に終始してしまう。著者のように1800年代半ばの中国で生活した欧米人は、国柄を問わず、なにかにつけて野望や疑惑に満ちた苦渋の日々を多く味わったことであろう。こうしたexileの屈折や苦渋が同書に多すぎるということか。

この大部の書物が、バーリングゲイム使節団のみならず、当時の英米全権公使、それに有力者Robert Hart[80]や中国政府外交部の高官たちについても、その虚像と実像を解明する上で貴重な資料であることを否定するものではないにせよ、本稿のテーマとするバーリンゲイム再評価にかかわるかぎり、それほど有益な研究対象とは考えにくい。

但し、以下の二点において評価すべき側面があるので、注目しておきたい。一つには、同書の特色の一つとして、条約文や書簡等の公的文書の訳文を丹念に検証してみせている点にある。一例を挙げてみよう。第五章で詳論しているバーリンゲイム首席使節の携えることになった中国皇帝による信任状の訳文がそれにあたる。訪問予定国の国家元首に宛てた中国皇帝の書簡としては、今回が最初のものになるだけに、中華思想を払拭できずにいる中国高官によって作文されて黄色の紙に記されることとなる、例えば、皇帝の立場一つにしても、英文でどのように訳出表現されているか、確かに気になるところではある。

---

79 北京発信1870年4月1日妻子宛て私信のなかに、GumpachがRobert Hartを裁判に訴えたことを次のように伝えている。" Gumpach has now sued Hart for fraud and treachery, pretending to be an agent for a University that had no existence."

80 *Entering China's Service---Robert Hart's Journals, 1854-1863*, edited by Katherine F. Bruner, John K. Fairbank and Richard J. Smith (Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press, 1986).

英国公使館通訳であり、使節団の副使として随行したJ.M.L. Brownは、英文の訳者であるけれど、先に1866年、中国人使節 "Pin-Chun (addressed Pin-tajin)[81]を欧州諸国へ無事に案内した短期訪問の実績がある。更に、訳文の校閲をした三人の証人の名前が連記された。

いずれも中国に長く在住して、現地で中国語を独学した学者肌の努力家ぞろいで、いずれも公的な機関に在職していた。中国語に堪能な訳者であることに疑問の入る余地はなさそうに思われるが、以下の引用に見るように、Gumpackはそう簡単に鵜呑みにしない。彼らの仲間に加えられなかった個人的な怨みの感情が、文面に潜んでいるのでなければ幸いである、とさえ思う。

三人の訳文校閲者のうち先ず、S. Wells Williamsは美国公使館の代理公使、次に英国人のRobert Hartが中国政府の設置した上海の中国海関所長、最後にW.A.P. Martinは北京の外国語帝大教授という肩書で署名している。直訳体を旨とするGumpack自身の英文訳と、Brown等による公的な訳文とを比較して、「どうして、このような異例とも言える差異が生じたのであろうか」と自問自答しながら論を進めていき、読者の疑惑感情を深めてから、以下のような断定を下すのである[82]。

> The Chinese missionary may be able to translate, with native aid, both the Old and New Testament into readable Chinese; yet, without a previous and special study, he will be unable to read a chapter even on the cognate themes of Buddhistic or Taotai liturgy. The Inspector-General of Chinese Maritime Customs may succeed in framing a Chinese code of pilot-regulations, or a set of rules for the revival of a defunct College; but he will fail to decipher so much as the title-page of the official Peking Almanac. And the diplomatic Interpreter, though he be competent to construe the Chinese text of a treaty of peace or commerce, will be found

---

[81] Frederick Wells Williams: *Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers* (New York: Charles Scribner's Sons, 1912)。p.58.

[82] Gumpach、 前出書、p.68.

> incompetent to explain either the construction or the sense of a native treatise on any scientific subject. To a distinguished "sinologue" of this class it has happened, upon a rare and far-framed work on Astronomy being submitted to him for examination, he has announced it to be "some old law-book, hardly worth purchasing."[83]

よほど苦い思いや屈折を体験した人物でなければ、このような個人的な批判を公表するものではない[84]。それだけに本書の記述から想像できるタイプの著者でなければ、とうてい言及しそうにない些細な事柄、例えば最後の「中国学者」についての書物購入のエピソードなどは、S・ウェルズ・ウィリアムズの伝記研究者にとって、一つの小さな情報になりえる可能性を含んでいる。随所にそんな些細な個人情報を散見するので、見落とさずに注意して読破しなければならない一冊に違いないのである。

バーリンゲイムの英文伝記は、Frederick Wells Williams によって執筆され、New York で 1912 年に出版された *Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers* が、一冊ある切りである[85]。全体で 370 頁という適切な分量であるが、エール大学の歴史学者の書き物らしく、安定した記述で展開する本文 272 頁は、バーリンゲイムと使節団についての全体像を読みやすく提供できている。それに、五本の付録資料、さらに参考文献と索引が、巻末に付いている。

安定し読みやすい叙述になったことの背景には、伝記対象についての個人的な親交も役立っているに違いない、と思えるのである。著者の Frederick は、S・ウェルズ・ウィリアムズの長男にあたり、主に 1861 年から 1868 年にかけては、米国公使館の書記官・通訳である父親のもとで暮らす少年時代に、父の上司である全権公使バーリンゲイムとは、家族ぐる

---

83 Ibis., p.70.
84 心理的にバランス感覚を失ってしまったのか、精神に異常をきたした Gumpack は狂死した。
85 Frederick Wells Williams: *Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers* (New York: Charles Scribner's Sons, 1912).

みで親交する機会に多く恵まれていた。首席使節に選ばれる際の有力な推薦条件となったバーリンゲイムの人柄、彼の humanism について、こうして少年時代から身近に見聞できていたわけである。それにもう一つの執筆理由として、上で言及したような Gumpack 等による父親に対する、特に中国語の能力に関する揶揄等には、子息なりに正当な弁護や評価を表明しておきたい気持ちが、内面に働いていたであろう[86]。

バーリンゲイム研究にあたっては、この Frederick による総括的な伝記こそ、現在の私どもの手元に手渡された唯一の典拠であるから、本稿でもたびたび言及・引用することになろう。ここでは、同書の特色、それも一点にだけ絞って触れておきたい。本文の叙述のみならず、脚注、それに巻末の参考文献を見ても分かるように、当時の雑誌や新聞の関連記事を精査している点である。バーリンゲイムについては、「合作政策」「バーリンゲイム条約」「バーリンゲイム使節団派遣」など主要な業績の三点に限って見ても、それに中国政府のお雇い外国人傭兵部隊 (Frederick Townsend Ward 隊長の遺産問題と後任 Henry Andrea Burgevine)、所謂 Lay-Osborn Flotilla の処理問題等を追加してみても、Gumpack を待たずとも当時から、賛否両論に分かれてジャーナリズムを賑わしていた。それだけに、雑誌・新聞に載った関連記事も多く、Frederick による先行調査研究は、今日的視点からみて意義深い。

米国での先行研究こそ、このように少ないものの、他方、近代史研究が盛んになってきている近年の中国で、バーリンゲイム関連の論文が、ポツポツと発表されるだけの昨今である。米国国務省発行の記念小冊子に、バーリンゲイムとともに登場した S・ウェルズ・ウィリアムズに関する優れた研究と再評価とは、とうてい比較にならない。SWW については、北京外語大学を中心として進んでおり、顧鈞の著わした『衛三畏与美国早期漢

[86] この点を推測させる根拠は、以下のような注釈を FWW が記しているからである。"Emphasis was laid chiefly upon the unwarrantable freedom of Mr. Williams's translation and on the derogatory terms employed for foreign countries and for envoy." Gumpack、前出書 pp.99-100 n1.

学』[87]は、その一つの優れた成果といえる。

バーリンゲイムに関連して、古くは、中外交渉事務大臣として派遣された志剛と孫家谷が、それぞれ報告書を書いている。前者による『出使泰西記』（全 123 頁）と、後者の『使西述略』（1000 字弱）は、いずれも簡単な報告にすぎない[88]。

近年になってからは、博士論文が一本書かれているのは、SWW と同じである[89]。学術雑誌の論文は三点を確認し入手できた。そのうち、李宗敏（聊城大学）の「浦安臣及晩清朝中国外交史」(2008)と、李暁蓉（揚州大学）の「略論浦安臣使団」(2007)の二点は、執筆当時院生の研究論文である[90]。更に、執筆当時助教授の劉華（広州）による「評 1868 年中美＜浦安臣条約＞」（2003）がある[91]。また、関西大學文学研究科で博士論文を書いている中国留学生の陸旭は、統一試験出題に先立つ 2008 年に、論文「関干晩蒲安臣使団両個問題：以与岩倉使節団的比較為中心」を書き上げており、出題にあたってのヒントになったかも知れず、後続する別稿のテーマに関連するので後述する予定である[92]。

劉華の力作は、中国人の移民権に焦点を合わせている。懸案となっていたアヘンの輸入が、南京条約で合法化されたあと、もう一つの懸案事項だった中国人の人身売買(the coolie trade)や移民が、それまでの悪徳欧米商人の間に横行していた誘拐や詐欺的確保によらずに、本人の意思による海外渡航の自由と権利を第五条で認め、六条において移民の待遇を米国市民と同等にする、こととした。この点における浦安臣条約の持つ国際貢献に注目している。この論文の特に優れた点は、バーリンゲイム条約の下敷きになったバーリンゲイムによる「合作政策」の八項目を見落としていないこ

---

87 顧鈞著『衛三畏与美国早期漢学』（北京：外語教学及研究出版社、2009）。

88 周国強、前出研究ノート。

89 博士論文。中国語のタイトルほか、中国語の漢字を入手して次回、二行ほど追加させてください。

90 李宗敏著「浦安臣及晩清朝中国外交史」（聊城大学学報、2008 年第 2 期）pp.326-7.
李暁蓉著「略論浦安臣使団」（江鮮科技大学学報、Vol. 7 No.1, 2007） pp.69-73.

91 劉華著「評 1868 年中美＜浦安臣条約＞」（華僑華人歴史研究、2003、No.1）pp.47-53.

92 『千里山文学論集』（関西大学、2008 年 9 月）、pp.161-180。

とにある。

李暁蓉による「略論浦安臣使団」では、使節団の成立過程から説き起こし、カリフォルニア・ニューヨーク・ワシントン等、米国からはじまる使節活動の日程と内容を述べたあとに、英国など欧州での動きについて概観する。最後に同使節団についての再評価を試みているが、なかでも宣教師たちの設立したミッション・スクールの役割、それに中国人学生の米国留学や中国官員の米国派遣による文化交流に着目しながら、条約のもつ中国近代史、とりわけ文化教育面での意義を指摘している。この点でユニークな視線を提示できている。

李宗敏の「浦安臣及晩清朝中国外交史」では、後述する『万国公法』の中国語訳本とバーリンゲイムを最初に関連づけて論じている。更に、対中国外交ではどの欧米諸国にとっても、頭痛と災いの種になってきた伝統的な儀礼、とりわけ叩頭 (kowtow)について、首席使節に米国人が抜擢された事情の背後に、いくら中国皇帝の使者であろうとも、バーリンゲイムであれば諸外国の君主に対し旧来の中国流儀礼をしなくて済みそうだ、とする計算が働いていた点に言及しながら、中国礼儀の近代化に焦点を絞っている点が、独創的なアプローチといえる。

3. 基礎資料としてのS・ウェルズ・ウィリアムズの未刊自筆書簡

前述したFrederick W. Williamsの著わしたバーリンゲイム伝記研究は、現在のところ、バーリンゲイムの人生と活躍を包括的に扱ったほぼ唯一の信頼できる基本資料である。このことは、先行研究を一覧してみて、そう判断できる結論に違いない。

FWWには、この伝記のほかに、父親SWWの伝記 (1889)を書き上げている[93]。更に、父親の残した自筆文書を転写・編集して、二冊の遠征日記

---

[93] Frederick Wells Williams: *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, Missionary, Diplomat, Sinologue* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1889).
中国語訳書。前出の顧鈞・江莉共訳『衛三畏敬生平及書信・一位美国来華伝教士的心路歴程』(桂林市: 広西師範大学出版社、2004)。

にも纏め上げている[94]。父親の書き残した遠征日記の自筆原稿、それに父親の伝記で使用した豊富な自筆書簡。これらは、いずれも長男FWWが自ら、収集・整理にあたったけれど、これら三冊の著述後にそのまま、エール大学の Sterling Library に寄贈している。膨大な The Samuel Wells Williams Family Papers のコレクション。今日の私どもが、同書館の自筆部門でこれを利用できるのは、FWW のお陰である。彼は母校エール大学で歴史学、それも西洋史を専門に教授した。彼に先立って父親のSWWもまた、40年あまりの中国滞在に終止符を打ったのち帰国し、エール大学中国学の初代教授職をつとめている。中国学の研究分野で優れた学者を輩出させることになるエール大学のスタートラインに、老いたSWWの姿がある。

前出の顧鈞が、米国初期中国学の開拓者という高い評価をSWWに与えているのは、単に中国滞在中に実現させた中国語研究、辞書編纂、それに月刊誌 *The Chinese Repository* の編集・執筆・発行や、名著『中国総論』だけを根拠にしているわけでない。

FWWによるバーリントンゲイム伝では、当然のことながら、SWWの自筆書簡が豊富に使われることになった。SWW自筆書簡以外の資料として、前述したように新聞雑誌の記事を精査して使用するほか、米国公文書館の保有する外交文書、それも自筆公的書簡を多く使っている。こちらの公的文書に関しては、今日、私どもは公文書館作成の膨大なマイクロフルムで読むことが可能である[95]。

日本語訳書。筆者訳『清末幕末におけるS・ウェルズ・ウィリアムズ・生涯と書簡』(高城書房、2008)。

94 S. Wells Williams: *The Journal of the Perry Expedition to Japan 1853-1854*, edited by Frederick Wells Williams (Asiatic Society of Japan, 1910).

S. Wells Williams: *The Journal of S. Wells Williams, L.L.D., Secretary and Interpreter of the American Embassy to China during the Expedition to Tientsin and Peking in the Years 1858 and 1859*, edited by Frederick Wells Williams (n.d.).

95 かつて学生時代に、芝公園近くに設置されていたアメリカ文化センターを頻繁に利用させていただいた筆者にとっては、北京に設置されている施設「美国文化教育交流中心 (American Center for Educational Exchange)」(北京市朝陽区呼家楼京広中心2801房間)は、アメリカ文化センターの北京版と思い込んでいるけれど、新刊中心の蔵書数は、かつての東京版と段違いに少ない。但し、この貴重なマイクロフィルムを全巻揃えて所蔵しているのには、実に驚きであった。公使、大使、外交代表部、それに

本稿では、研究の基礎資料として、SWWの自筆書簡を中心的に利用し、更に外交文書の自筆文書を必要に合わせて随時、活用したいと思う。いずれも未刊の第一次資料であるので、テキストの判読と転写 (transcription) の作業が、事前準備として欠かせない。それに、判読した結果を日本語の訳文に直すよりも、転写テキストのまま英文で提示する方が、資料的により有益であろうと考えた。

転写テキストの掲載に関連して、ここで指摘しておきたい一点がある。SWW の手稿は、丁寧な筆致で綴られているので、判読にあたって全く困難を感じたことがないのに対して、バーリンゲイムの自筆はどれも、大きな文字で走り書きしたかのように乱雑で、判読に困難を伴う箇所がときどき発生する。判読困難なケースでは、一つには筆者なりの推測する単語を括弧 [ ] 内に提示してみたり、絶望的な場合には [an illegible word] のように表記することを予めお断りしておきたい。

4. 初代駐北京美国特命全権公使バーリンゲイムの任命

バーリンゲイムは駐北京米国全権公使の第一号に任命された。これまでの美国全権公使は、南部のマカオ・広東、沿岸の上海等の地方都市を転々としていて、首都に公使館を常設するまでに至っていなかった。中国とのバーリンゲイムの関わりは、最初の任命からして変則的であったし、使節訪問先のペテルブルグにおける最後の客死まで、終始変則的な展開となってしまったようである。

全権公使の立場で米国国務省のシワード長官に書き送った以下引用の

各地に置かれた領事館の外交文書の分まで、マイクロフィルムで利用できるからである。私的な事柄になるが、北京滞在の目的の一つが、ACEE のマイクロフィルム利用にあることを記して感謝しておきたいと。バーリンゲイムに関する外交文書は、主に、次のマイクロフィルムに収められている。RG059/M92: Despatches from U.S. Ministers to China, 1843-1906. 美国駐華公使対華照会、1843－1906. 131 rolls; 35mm. このうち特に、以下の約 10 本のリールが、直接間接に、バーリンゲイムに関連する。 Roll 20, Feb. 13, 1860 –July 26, 1861 から、Roll 30, Nov. 15, 1870-March 20, 1871.

公的書簡には、No.1 と記されてあり、発信地はマルセイユである。以下に全文を転写して引用しておきたい。

No. 1. (Recd. 27th Sept.)

Marseilles, Sept.11th, 1861

Sir

I have the honor to inform you that I received my Commission and instructions from the hands of Mr Porter, our Consul to Tripoli, on the twentieth of August last. I proceeded at once to London, for my outfit, and secured my passage for Hong Kong, China, by the first Steamer, which left Southampton Sept. fourth. I meet it at Marseilles and shall leave in the morning. I shall reach Hong Kong in about four weeks later.

I did not draw on the Barings for my salary, on my Austrian letter of credit, after the last of June, I shall draw for the next quarters salary on the China letter, and regret to write that it will nearly all be required to pay the expenses of myself and family to my post.

I occupied my time whilst waiting for my instructions in procuring such informations as I could touching the singular people I am about to visit, and in doing, what was possible to strengthen our cause in Europe. Permit me to write that I have found a most valuable aid, in Chinese affairs, in H.M. Buckurth Esq., a gentleman, now residing in Paris, who was for a long time the head of the great American House of Russell & Co. in China. I have also received many valuable hints from Russell Sturgis Esq. of the House of Baring Brothers & Co. who resided twelve years in China. These gentlemen are particularly pleased with the removal by the Gov. of certain American Consuls in China. It is nor for me to suggest the necessity for great care in the

selection of these. In this connexion I hope I shall be pardoned if I mention the name of Wm. Breck Esq. now Consul at Swatow. Winter before last as a member of the Com. of Foreign Affairs in the House, I had the honor, at the suggestion of the Hon. Gilmour Murston of N.Y. now Col. Murston, who was wounded at Beillo Run, to secure the establishment of that Consulship for Mr. Breck, because of its necessity to my Commerce and his special fitness for the place. He is a man of most excellent character and fine capacity. I proceed to my new post with diffidence but still with pleasure, for there is a fine field and I am yet a young man.

Your Obedient Servant

Burlingame

Mr. Wm. M. Seward

Secretary of State

この最初の公文から、私どもは、多くのことを学びとれるが、最初に、そこに言及されているオーストリアに関連して、生い立ちに始まるこの間の経緯をここで概観しておこう。

熱心な米国メソジスト教会員の父親 Joel は、本来の職業であるはずの農地開拓に精を出すよりも、近隣の農家を訪問して、持ち前の雄弁と紳士的な容姿によって、キリスト教を説き廻る方が、好みに合っていたらしい。生活者として頼りない、こうした非実際的な夢想家タイプの父親の、貧しい農家に育ちながら、バーリンゲイムもまた、父親譲りの力強い雄弁を得意として成長し、同時に朗らかな楽天的性格と情熱的な理想主義とを身に着けていったようである。バーリンゲイムの人柄について指摘された以下のような幾つかの特色的ラベルは、こうした性格形成と家庭環境に起因すると思われる。楽天家、性善説、理想主義、ヒューマニズム、平等主義、熱血漢、雄弁家等々。

苦学して通ったミシガン大学のデトロイト分校でも、すでに若き雄弁家として頭角を現して、ハーバード大学法学院の 1843 年入学にまで発展さ

せる。1846年にハーバード大学を卒業してのち、ボストンの法律事務所に籍を置き、法廷のみならず、共和党の青年部においても、「とにかく集まった多くの人の面前で、抜群の効果を発揮できるバーリンゲイム氏は、magnetismを発揮していた」、と後年に回顧されるほどに、繊細微妙でありながら力強く、聞き手を圧倒できる人間的魅力が、備わってきていたと思われる[96]。

自然な成り行きによって、マサチュセッツ州選出の下院議員に選出され、三期つとめているが、上掲引用書簡に出ているように外務委員会に所属した。引用書簡にみるHouseのForeign Affairs Committeeはそのことを指している。下院議員時に起きた大きな事件の報道によって、彼の名前は全国に知れ渡ることになる。奴隷解放演説と暗殺行為、それに果たし合い、という事件の連鎖は、英国推理小説家 Wilky Collinsの物語を地でいくようなものであったからだ。

上院議員のSumnerによる奴隷解放のための議会演説が行われたとき、南部諸州選出議員の間に耐えがたい怒りや屈辱を招いてしまい、米国議会史上、前代未聞の暴力事件を引き起こす。南部出身の下院議員 Preston Brooks が、南部に対する汚名を返上するつもりで上院に侵入し、部屋の片隅で執筆中だった例のSumner 上院議員を背後から襲いかかり、いきなり自分の手にしたステッキを振りあげ強打したという[97]。あやうく暗殺されるところであった。

神聖な討論の場で起きたこの暗殺行為は、下院議員のバーリンゲイムを演壇に登場させたばかりか、熱血漢の彼としては、Brooksとの決闘を申し入れるまでに発展した。それだけでなく、彼の言動の正しさを選挙民に問うために、バーリンゲイムはいったん議員を辞した。ブカーナン大統領の政権下の間、二度、下院議員に返り咲くものの、次の 1860 年選挙では、リンカーンを支援して熱心に運動したけれど、落選する。その後、外国駐在の全権公使に任命される運びとなる背景には、以上に概観してきた議員

---

96 Frederick Wells Williams 前掲書、pp.4-5.
97 Ibid, pp.8-9.

時代の功労が、好意的に評価されたためである。

先の引用書簡に、先ずAustriaやParisが登場する事情は、ウィーンへ全権公使として赴任するつもりで、途中で滞在していたパリに、オーストリア政府からバーリンゲイムの信任状を受け取れない、とする就任拒否の連絡が入ったということなのである。熱心な奴隷解放主義者であるバーリンゲイムの人類平等主義が危険すぎるとする見解は、オーストリアのみならず、米国や中国でも、時に大きな声で唱えられた時代なのである。

パリまで渡来しながら立ち往生してしまったバーリンゲイムには、1861年6月17日付けの公式通知が届けられ、代替地として北京が提案された。北京行きを承諾したバーリンゲイムの書簡には、1861年7月6日の日付が入っている。従って、7月初めから先の引用書簡の9月11日までの約二ヶ月間をパリやロンドンで過ごしながら、中国行きの準備に取り掛かったものと想像できる。引用書簡のなかで、中国での任務に「自信がない」と自認しながらも、「この珍しい国民（the singular people）」と接触できるわけで、素晴らしい仕事の分野であるから自分もまだ若いので楽しみだとする、いつもの楽観的な前向きの姿勢を垣間見せている。40歳の時点で、北京に在住する初代の美国全権公使に任命されたことで、未知の国で始まる未知数の仕事に、チャレンジする意欲を感じたものと思われる。本稿の冒頭で言及した米国国務省発行の小冊子において、バーリンゲイムが大きく登場してくる再評価の背景には、北京に在住する最初の米国特命全権公使という歴史的分岐点、という意義づけも作用しているはずである。

5.　着任当初1861－2年の中国状況

予定通り10月24日に香港に到着したバーリンゲイムの最初の公式書簡には、香港発1861年11月1日の日付がついている。赴任後に書いた最初の公式文書であるので、当時の情勢分析を以下のように詳しく伝える内容になった。

(No. 2: Rec. Dec. 30)

HongKong Nov. 1st, 186

Sir

I have the honor to inform you that I arrived at this place on the 24th of Oct. last.

I found the Archives of the Legation , in the keeping of Dr S. Wells Williams, at Macao, within a few hours of this place. I immediately communicated with Dr Williams, who, from his long residence in China and his experience as Interpreter and Secretary was able, at once, to give me such information as would facilitate the business of the Legation.

I addressed notes to the representatives of England, France, Russia &c. informing them of my arrival and that I had entered upon the duties of my office.

It is too late to visit Peking on account of the cold weather---the streams are already closing and besides there are no accommodations there for us and the business of the Legation does not require such visit at present. The Govt. of China, for our purposes, is most easily communicated with from the sea coast, and there are questions, which require my presence in the sea ports and I shall go today to Canton for the purpose of having an interview with the Chinese authorities. As at present advised I shall establish the Legation at Shanghai, which is the centre of our commerce in China. I shall visit Peking as soon as I can or whenever the interests of the Gov. may require it. In this connexion permit me to call your attention to the fact that my predecessors Messrs McLane, Parker, and Reed and Ward, each, had a letter of credit for extraordinary expenses in the Barings, for ten thousand dollars. If the U.S. Legation shall go to Peking either to reside or [stay there] in a short visit, it will require more money than

the Legation has as salary if all were used, judging from the expenses of my predecessors as found in the files of the Legation of which there are sufficiently vouched.

The allies evacuated Canton on Monday the 21st of Oct. and all remains quiet in the city.

I received a dispatch dated Shanghai Oct. 28th from our Consul W.L.Y. Smith, containing the alarming intelligence that the Rev. H.M. Parker and Rev. J.L. Holmes American Missionaries, had been killed about thirty miles from Chefoo, China. Chefoo is one of the ports opened by the British Treaty, about five hundred miles north of Shanghai under the name of Panyahoe in the Province of Shunting. The Rebels were approaching Chefoo in force when Messrs Parker and Holmes went out for the purpose of trying to persuade them from approaching further towards Chefoo and were killed by order of the Rebel Chief. Their bodies were subsequently recovered and buried in the English burial ground near Chefoo. Mr. Parker was from South Carolina and has left a wife and child who are at the Shanghai.

Mr. Holmes was from the District of Columbia and has left a wife who remains at Chefoo.

There is some apprehension that the Rebels may try to capture Shanghae and signals and alarms have been agreed upon by the Foreign residents under the direction of the English and French military authorities.

The little Sagmaw, Commander Schenck, is the only vessel we have in the Chinese seas, so that if there should be occasion for force, we should not have much.

The report which was sent out that Privateers were fitting out in Shanghai has no foundation in fact, still there is a feverish apprehension and our commerce is suffering. There are fears for the safety of the "Al-mena," on board of which, are out newly appointed

Consuls Carpenter and Mangam. It is now fifty three days since the ship passed Anger.

I have just learned of a brutal murder at Poklo, about fifty miles north west of this place. Dr Legge a distinguished Missionary purchased a house for a Chapel which he dedicated in person and then left. The Catechist whom he left was murdered, after refusing to abjure the Christian religion. Subsequently a reward of fifty dollars was offered by the Chinese for the head of any foreigner.

I have the honor to be / Sir / Your obedient Servant

Burlingame

Secretary of State / Washington

FWW によるバーリンゲイム伝記は、着任した当時の中国情勢を次のように概括している。「1861 年の中国は内外の二重の苦しみに喘いでいた。一つには国内の反乱軍である[98]。もう一つには、北京に間近に迫る場所で、外国侵略軍によって中国軍が敗北した最近の出来事である。この戦争の結果、中国の長い歴史のなかで、外国諸国の全権特使の北京永住を初めて認めることとなった。そうではあるが、中国人の心中には、可能なかぎり早い機会に外国人特使を開港地まで追い払いたい感情がくすぶっている。」[99]

前掲引用書簡にも同じ状況が伝えられている。それに着任早々に二件の外国人殺害事件が発生するほど、目の当たりにする実情は危険極まりなかった。最初に報告されている殺害事件は、太平天国の乱に巻き込まれた米国人宣教師二名の場合である。両者ともにバーリンゲイムよりも約一年先に、中国に赴任したばかりの青年牧師たちであった。米国監督教会（The

98 10 年余り前から中国南部に端を発した長髪族の「太平天国の乱」は、このころまでに南京を制圧して反乱軍政府を設置するまでに大きくなっていたが、その他にも Pathan と呼ばれたイスラム教徒の反乱が、中国北西部の広範囲に勢力を拡大していて、1881 年に至るまで制圧されなかったばかりか、Nien-fei と呼ばれた別の盗賊集団的な反乱軍も頭を持ち上げていたという。権力の衰退した中国政府を圧倒する勢いで、こうして中国地方各地に新しい民衆運動が展開して時代である。参照：ibid, p.15n.

99 Ibid, p.14.

Board of Foreign Mission of the Protestant Episcopal Church）が派遣したH.M. Parker牧師は、新婚の夫人を伴い、1859年7月13日にニューヨークを出港、12月22日に上海に到着した。単独派遣ではなく、同派中国伝道の先駆者ブーン（William Jones Boone）[100]の率いる多数の1859年伝道団の一員であった。また、兄弟が次々に中国伝道に携わることになる伝道師一家でもある。

もう一人のJ.L. Holmesは、バプティスト教会系の派遣宣教師（The Board of Foreign Missions of the Southern Baptist Convention)であり、夫人と弟を伴い、1859年後半に上海に到着したあと、1861年になると蘇州から南京にかけての地域に陣を進めた太平天国の乱の野営地を何度となく、訪問し始めていた。Chefooでの伝道を開始したのは、同年9月からである。事件の起きた10月6日に、Parkerと一緒に野営地まで馬を進めたものの、消息を絶ってしまい、友人と共に捜索に乗り出したHolmesの弟が、10月15日に遺体を発見した[101]。

---

[100] Booneは、夫人を伴い、Bataviaへ1837年初頭に到着、現地の中国人の間で伝道したあと、1840年11月 からはMacaoに移り、W.C. Milne宣教師と共同で、とりわけ、校長B.R. Brownの不在期間中、1841年4月1日から9月10日まで、現地のモリソン教育協会の学校運営にあたったりもしている。1842年8月30日、当時蔓延していた熱病のために、夫人は他界する。そのために米国にBooneは一時帰国をするが、滞在中に神学博士号を授与されたり、宣教師総督に任命されるなどして、再婚相手とともに中国に戻る。香港到着は1845年4月24日であった。1850年代には、聖書の中国語翻訳に関連して、中国在住の宣教師間で盛んに論議された用語問題の委員会においても、他の宗派の代表であるMedhurstやBridgmanと共に、上海の会議に参加している。1853年に一時帰国。着任以来、中国で何度も健康を害しているBooneは、再び1857年に帰国を余儀なくされるが、大量の宣教師団を伴い1859年の再来を実現させている。二番目の夫人も健康を害したために、上海からマカオに移って療養してみたりするが、1863年夏には静養のために夫人が一足先に日本に渡っている。転地療養の甲斐もないところから、10月には夫人を迎えに日本を訪れるものの、結局、同年11月9日に上海を立ち、ヨーロッパに向かうものの、1864年1月20日に同地で夫人は他界する。その後のBooneは、英国、ドイツを廻って、上海に6月13日に戻ってくるものの、7月17日に死亡し、上海墓地に埋葬された。参照：*Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese (Shanhae: American Presbyterian Mission Press,* 1867).

[101] 参照：Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese (Shanhgae: American Presbyterian Mission Press, 1867). Holmes, pp.251-2; Parker, p.253. この貴重な資料、それに前出のバーリンゲイム使節団や条約に関する最近の中国語論文

殺害の理由や真相はよく分からないが、何度も野営地を訪れているHolmesには、1860年9月1日号のNorth China Heraldに書いた太平天国の乱に関する記事があり、それが反感を買ったのかも知れない。

前掲引用書簡で認めているように、バーリンゲイムにとってのSWWは、文字通り転ばぬ先の杖となる。外交交渉や公使館の雑務処理から私生活に至るまで、なにかにつけて頼らざるをえない、そして信頼できる直属の部下であった。上記殺害事件に関する情報や見方についても、SWWから教えられたことであろう。同じく前掲書簡に列挙されている特命全権公使の前任者たちは、SWWがたびたび私信のなかで溜め息交じりにこぼしているように、赴任先の中国の滞在期間が一、二年と短かいうえに、後任者の着任を見届けず、まして十分な引き継ぎをしないまま、離任地してしまっても平気。こうした状況が慣例になってしまえば、新任者の到着するまでの空白を埋める公使館業務は、書記官通訳のSWWに廻される。公使も代理公使もその他の館員もいない、という異常な事態さえ起きることが、以下に引用するSWWのマカオ1861年10月1日の公式書簡から判明する。

代理公使をなんどか体験し、公使館の雑務を処理してきたSWWの眼に、今度の新任者バーリンゲイムは、どのように映ったであろうか。前掲引用書簡の中で、米国公使館の公文書を保管するマカオのSWWというのは、彼の重要な代理役割を伝えるだけでなく、或る一定の場所に常設された公使館の所在地がない、という未熟な状態を物語っている。特命全権公使の居る場所が、公使館なのであり、この間の二年間は、書記官と通訳官、時に代理公使を務めたSWWの自宅に米国公使館を預かってきた。

バーリンゲイムの香港到着日が、1861年10月24日と伝えているけれど、

は、すべて田力氏の提供による。田力氏は、浙江大学の大学院博士課程後期に在籍する新進気鋭の近代史研究家であるが、2009年の夏休みを活用して、北京の国家図書館で米国人宣教師に関する調査研究を進めるために、北京に長期滞在中であった。彼の他にもモンゴール大学の大学院に学ぶ院生が、やはり宣教師に関する調査研究のために、国家図書館に通っていた。たまたま調査先の図書館で知り合いになったわけであるが、特に筆者の関心と敬意を集めたのは、彼らが、第一次資料の英文自筆文書を解読タイプしている点にあった。出版物のみならず、こうした地道な調査研究を行う若手研究者が、育ってきている中国の研究態勢に、大きな驚きと期待を覚えた。

このころSWWもまた中国に戻ってきたばかりであった。米国に残している妻子を連れ帰るという私的目的のほかに、公的な目的としては、締結されたばかりの南京条約に大統領の署名を求めるという任務を与えられていた。以下のSWWによる国務大臣Seward宛て公式書簡には、中国に戻った日を10月1日としているし、書簡のマカオ日付が10月11日であるのだから、バーリンゲイムの着任にようやく間に合った格好になる。

Legation of the United States,
Macao, Oct. 1st, 1861

Sir,

I have the honor to inform you of my arrival in China on the 1st inst.; and that, finding no minister or other officer here; I have taken charge of the archives as left by Commodore Engle, and other property of this Legation, most of which has remained in this city during the past two years. The only document which I find among the records of unfinished business, is a dispatch from Sieh, the Commissioner of Foreign Commerce, dated July 16th, addressed to Flag Officer Stribling. Similar communications have been sent to the other Foreign Treaty powers, explaining the action of the Chinese Government in relation to levying duties on native produce carried from one port to another, and showing that it is not in contravention of treaty stipulations. Its acknowledgement and action can await the arrival of the Minister.

The demise of the Emperor Hienfung, at his summer residence at Te-ho in the northern part of the province of Chihli, about the 25th of last August, and the accession of his eldest son, a boy of nine years, under the style of Ki-siang, has been announced in the papers, but no official information of the event has been received by the Legation. The Government at Peking is administered by a regency of several Manchu and Chinese officers; and hitherto no

disturbances have been reported in consequence of the change. The deceased monarch was 32 years old, and had reigned eleven years; he was the seventh emperor of the present Manchu dynasty.

The British, French and Russian Legations are at Peking, but the general admission and visits of foreigners to the capital has been discouraged by the Ministers there. Many merchants have settled at Tientsin, which is likely to become a commercial centre for the region connected with the Pei-ho river. The Allied troops still remain there in garrison.

The details of evacuating the city of Canton are now being carried out; and by the end of this month, the city and all its public offices and property in the hands of the Allies will be returned to the Chinese authorities, except two places for their Consulates. The former site of the Governor general's office has been taken by the French for the Roman Catholics in lieu of land and buildings claimed as belonging to them, and confiscated in the reign of Yungching about 1735, when their missionaries were abolished. The number of troops to be withdrawn is stated to be about 4000 of all arms, the French have sent nearly their whole force to Saigon and Annam.

The people of Canton have become so well used to the presence and protection of the English in their city, that a large portion of them rather regret their departure, and a few feel doubtful about the maintenance of peace. The officials and gentry have expressed their dissatisfaction at the occupation of the provincial capital by foreigners; and some of the former have kept aloof since its capture in December, 1857, holding their courts at Fuhhohan, a large town 12 miles to the westward. The country within a few tens of miles, and indeed the whole province of Kwangtung is now more quiet and free from organized banditti, than at any times during the last ten years.

The indemnity to be paid to the Allies by the Chinese

Government is being regularly collected at the ports; and there is every reason to believe that the whole sum of about twenty millions of dollars will be rapidly paid up.

This collection has not interfered in the least with the regular payments on account of the American indemnity.

I have the honor to be, / Sir, / Your obedient Servant

S. Wells Williams

To Hon^ble William H. Seward / Secretary of State / Washington

SWW の上掲引用書簡で報告のあるように、英国・フランス・ロシアの公使館は北京にすでに設置されており、米国は、この点で数歩遅れていた。北京の英国公使館生活を実際に若き Ernest Satow は、自筆日記のなかで活写している[102]。

なにしろ南京条約の批准が未だ片付いていない。また、万一の危機に晒されかねない米国人の保護のために、中国沿岸に配置されている軍艦や軍隊が、規模のうえで、これら欧米諸国と比較にならないほど少なかった。この点でも遅れていた。奴隷解放運動に続く南北戦争という国内社会の危機を迎えている時期に、海外に派遣する軍艦や兵士、それに政府予算に、大きな限界があった。

同じ遅れは対日政策にも現われている。日本開国を果たしたペリー提督、それに随伴した首席通訳の SWW、また下田に留まり孤軍奮闘したハリス、西洋諸国の中で先陣を切って進めた彼らの友好条約や通商条約の早期締結にもかかわらず、なのである。単に国内情勢の影響だけでなく、米国政府の採用していた平和外交、中立主義、他国の主権や領土の不侵略等の政策も、このような遅れと見える展開になって現出した、として見るべきであろう。

エール大学スターリング図書館の所蔵する SWW 書簡コレクションは、

[102] *Ernest Satow Diaries*, Vol.1, PRO/30/33/15/1, National Archive, Kew Gardens, London.

主として家族に宛てた私信であるから、内容的にも書き方にも、公式文書と異なる性格のものである。着任早々の頃から北京で始まる公使館生活を伝える書簡の時期、1861年末から1863年までの同SWW書簡を見るかぎり、バーリンゲイムについての話題はそれほど頻繁でない。しかし随所に短い言及を散見できるので、そこからバーリンゲイムの私的な横顔が、垣間見られるであろう。一通のSWW書簡全体の中で、どれほど短い言及であるか、以下に一例を挙げ、私的な関心の範囲のなかに入っていない実態を最初に確認しておきたいと思う。

Macao, Nov. 15, 1861

My dear brother Fredric,

Your kind and particular letter of June last, giving all the items of the division of the estate, and the various shares, did not reach me as soon as it ought, but it kept on the way & I was glad to get it. But the notices you give of Wally recalls the last time I saw him standing near you, and the pang of blank disappointment at not having you both go down to the Narrows with us, which you could all have done just as well as half a dozen others id, a pang now deepened in the remembrance, that it was the last sight I s hall ever have of the dear boy, my first born and the hope of my heart.

But let us speak first of your letter. I do not quite agree with you in the appointment of 2/5 of the commissions to your share, & only 1/5 to Edward & me, reducing your share really below others. I suppose the division otherwise as completely fair as I am entirely satisfied with it, taking all things together, the people we had to deal with, and the nature of the property in question. It is gratifying to have had you to help Robert in the last part, both for him & the absent ones, Edward & I, but chiefly for Robert. Poor fellow, he is now out of his bramble-bush, and glad enough too. Mr. Huntington

has given, so far as I can see, such sort of property as would be as valuable to us as the general run of his own diversified possessions is to himself; & this is all we could look for. As to the under current & feeling connected with the division, to part of which you refer, I need not advert; all that has gone, and need not be brought to the surface again. I have written Mr. G. About the reasons for giving my power of atty. to Robert, and further than that I shall say nothing. I have told Robert to pay all the income from my share to the Am. Board till the end of next year; it will not be very much.

I don't exactly know whether the picture you speak of as having been given to Kirk in my behalf, & the $6.50 paid to Bill, & the $1.30 to Wally, were all defrayed by money you got of Talcott, or otherwise. I intended the $13 to be paid to Mr. Smith to furnish it, & the balance handed to him, but in the departure it went awry a little. No great matter, if you did not pay it yourself. You have my best, & brotherly thanks for looking after Wally, and taking him to Utica. How pleasantly we passed the last week at Talcott's, how fresh the memory of those fleet moments, like the pure light on the photograph paper, their traces are clear and cheery, and unsullied as earthly, earth born pictures can be. The record of my whole visit to faderland in memory's tablets is as happy and bright as any such record can be. Your presence comes up often, associated with Jersey City friends, Sunday schools, and other places & people, all in good keeping. I was highly favored in meeting you with so many others, so that the tableaux are varied out of a monochrome, and I have you in various lights.

I have hung the pictures of you and Talcott near each other in my parlour, with Robert over against you. Wally's is suspended by itself. Dear boy, how can I give you up! But God has sent for him, and I feel that his claim is paramount, and am willing at times, but at others

would like to have it different, and have him back again. The sufferings of his last hours were great and prevented those around from ascertaining his feelings in view of death, or learning anything of his preparedness for the great change so suddenly coming on him. Sarah feels the bereavement as almost her first great grief; like the mourning of a mother for her first born, is a Bible metaphor for great sorrow. She is very low spirited and sorrowing; all looks gloomy and lonesome to her now, for she had clustered many fond hopes & plans around Wally, whose uprooting has been like severing limbs from the body.

We have been kindly greeted on our return, and have found most of our missionary friends in this region in good health, and their work prospering as much as we could expect. The great diversity of sentiments among them on some points demands no little forbearance in order to keep the bonds of Christian unity strong, for which the Baptists withhold themselves from communion, and declare that neither others nor their converts keep the law of Christ, there are others who will not even worship with their brethren because they wont sing Ronse's version of the Psalms of David, much more not commune with them. Some of the London Mission men baptise as a means of grace, & thus multiply the professed adherents of the cause, without knowing their conversion. But amid all these things the truth is preached I hope, & that has God for its support & reward.

Mr. Burlingame is here, and finds himself in a maze of perplexities and a multitude of counsellors. He is a cheerful, hopeful sort of man, & endeavors to be kind to all in particular. I think I shall not stay in the Legation very much longer, as the traveling about so much is becoming irksome, & I am not able to "wear the weather" as the Chinese say, like as I used to. The rest of a quiet home hereabouts looks inviting. Dwight is very well,

growing rather insolent & averse to exercise, but attends to his duties carefully, & will probably get a higher post as it opens. He is well reported of among people, & seems to be regarded as fitted for his duties, and bids fair to get property. He has left all his affairs connected with the estate of mother in Gardner's hands so entirely, that he cares but little respecting the details of the decision. His feelings towards Robert seem still to be hardish, but he restrains himself. We will not cease to pray for better.

Good bye for this, & peace / Affly Yours SW

[P.S.] We[']ve just heard of Bridgman's death.

米国の故郷に暮らす弟ロバートに宛てた書簡であり、マカオ 11 月 15 日の日付が付いている。先の SWW による公式書簡 10 月 11 日からは一カ月ほど経過していることになる。10 月 24 日に香港に到着したバーリンゲイムは、香港 11 月 14 日の公式書簡において、広東を訪問してきたと伝え、広東訪問に同行した SWW が、バーリンゲイムをマカオまで案内したものと思われる。

上掲引用書簡に言及されている「陽気で、楽観的で、誰にも親切である」、という初対面の印象は、好印象に見えるけれど、SWW は直ぐに続けて、これから先そう長いこと公使館勤務をしたくない、という心境を漏らしている。バーリンゲイムと SWW 二人の相談は、マカオから上海にまず移動し、そこに公使館を仮説する話になったようであるが、SWW としては愛着の深いマカオを離れたくない気持ちと同時に、それほど新任者の上司に魅力 (前出の回想文で言われるほどの "magnetism")を感じなかった、という気持ちさえ窺えるようである。

バーリンゲイムの香港 11 月 30 日公式書簡には、中国政府内部に対立する保守派と進歩派の動向を伝え、同時に公使館設置のために上海に出発する、と以下のように伝えている。米国国内で人望家として通っていたバーリンゲイムも、中国の言語・文化・状況をこれから学ばなければならない立場にあり、なにかにつけて SWW に頼らざるをえない。SWW にとって

は大きな荷物を背負ったことを意識している、と行間から観測できそうに思われる。このことは、後々に展開するバーリンゲイムの政策や言動の陰に、常にSWWの助言が存在している、つまりはバーリンゲイムの「合作政策」の真の立案者は、影のSWWであるのかも知れない、という仮説に私どもを導きそうである。

Hong Kong, Nov. 30th, 1861

Sir

I have the honor to inform you that in obedience to your instructions under date of Washington Aug. 28th 1861, I have taken the oath of allegiance required by the same, and caused it to be taken by S. Wells Williams, Interpreter and acting Secretary of Legation and by our Consuls, Wm. H. Carpenter and Willie P. Mangum Jr. and by vice Consul Gideon Nye Jr. I have also administered the oath to Commander Schenck of the Saginaw, who will cause it to be taken by those under his command, those oaths I forward for deposit in the archives of the department.

Since my last despatch there has been a Court revolution at Peking in which the old Council of Regency was overturned and all its members put to death or banished or degraded.

The Dowager Empress has been declared Regent and Prince Kung (brother of the late Emperor) is her chief Minister.

The party which has been overthrown, and rigidly conservative and was opposed to the relations established, by Treaty, with foreigners. And it is chiefly charged against them, in the decrees of their successful rivals, that having change of Hienping, they deceived him with reference to foreign questions last year when they pursued that "vicious policy" which brought foreign armies against their capital and led to the destruction of the palace of Yuen-ming-Yuen,

and that they kept him ignorant of the peace which had been made and troubled him and caused him to remain in the cold palace of Ye Ho until he sickened and died. It is also charged that they usurped power and falsely declared that they were invested, by the late Emperor with the administration of affairs during the ministry of his heir.

It is thought foreign interests will be conserved by this action of Prince Kung and his party in as much as they are strongly in favor of maintaining and extending peaceful relations with foreigners. I send you a paper containing all the facts in relation to the event at Peking.

I have learned through Chief Justice Adams of this place that in Oct. last he conversed with an American by the name of Robert living with the insurgents at Nanking who informed him that as the English Government had prevented Taiping from obtaining gunboats in England the rebels had sent to America and ordered hour, which were making and would be sent out next year. As this would be a gross violation of our Treaty obligations I call your attention to the facts.

I have visited Macao and procured the archive of the Legation and am now on my way to Shanghai where I intend to set up the Legation.

Yours truly / Burlingame.

Secretary of State

上掲引用書簡が重要な意義を持つ点は、北京政府内部の政変を詳しく伝えることにある。断るまでもなく、中国語の読めないバーリンゲイムがもっぱら頼りにしたのは、SWW 以外にいない。進歩派の恭親王との親交や協調関係が、北京において開始されるのに先立ち、SWW の見解に沿った形で情勢分析をして、親王に対する好意を最初から抱いている点に注目しておかなければならない。

着任を伝えた先の書簡に対する英国特命全権公使 Bruce の返書には、北

京 12 月 3 日の日付があり、英国と米国の外交代表の間に発展してきた協調関係に触れて、次のように述べているが、対中国の共同歩調も「合作政策」の一つの柱になった。

(Copy)

Peking, December 3rd, 1861

Sir,

I have the honor to acknowledge receipt of your Excellency's letter, informing me of your appointment as Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of the United States in China, and of your assumption of the duties of that office.

The cordial and friendly relations that existed between His Excellency, Mr. Ward and myself, during a very eventful period in China, have always been a source of much gratification to myself, and I can assure your Excellency that you will find in me a sincere disposition to continue those relations on the same footing with yourself. The interests of our two governments in this country are absolutely identical, and united action cannot fail to promote them.

I may state that the beneficial results of direct intercourse with the highest officers of this Empire are becoming more and more manifest in proportion as that intercourse is extended.

I avail myself of this occasion to express to your Excellency the assurance of my highest consideration.

(Signed)

Frederick W.A. Bruce

SWW の持ち帰った大統領署名入りの条約を北京で批准する儀式は、河川・運河に張りつめた氷の解ける春先まで実現できない。それに北京に赴

任するとしても、公使館の建物はなく、私邸にしても用意されていない。SWW もバーリンゲイムも家族持ちでありながら、とりあえずの上海行きでさえ、単身赴任にならざるえない状況にあった。上海到着を知らせるバーリンゲイム自身の公式書簡には、上海 12 月 24 日の日付があり、12 月 21 日に上海に到着したと知らせているが、この時点で SWW はまだマカオに留まったままで、同行していない。

先の書簡に言及された Breck は、寧波の米国領事であるが、太平天国の反乱軍の手に落ちたと知らせてきた。SWW の上海行きは、新婚の弟フレデリックと新婦キャロラインに宛てた以下の書簡に見るように、春先になってからになった。

Macao, March 13, 1862

My dear brother Frederick, and now I can say, dear Sister, whom not having seen feel like loving; much joy to be your both.

Three sisters have gone to the plains of Shinar, and I have seen neither, but that is not likely to prevent my earnest desires for their happiness of those whom I now write to, and their usefulness in the good work of the Lord to which they are called. However, I think if Frederic has been less in the way of people he knew, and a little more in bye-places, he would perhaps have come across one whom the Lord has kept waiting for him in U.S. as well as in Con'ple, and then belike I should have seen her, if I did not the other two. Sarah and I are much pleased to learn that you have come, at last, where in your view she was waiting; and gone on with her till you found Talcott & Cornelia waiting too for you both, and in good health ready to join on the journey to Mardin. God be praised for his great goodness to both of us in meeting our children well, while we were separated from them---a Mizpeh had been set up between us, as Jacob & Laban desired, and we have new reasons for thanking Him and greater stimuli to do more in His service.

I have written you twice since I arrived in October, once by way of Berrût, and again inclosed to Dr. Dwight at Con'ple, which you are not likely to receive very soon, if his confères there sent it after him to U.S. I don't remember much what was in the first; besides the incidents of the voyage & arrival & ack[t]. of yours from Utica about the division of the estate with Robert, and dividing my sorrow with you on Wally's death, for I don't keep a copy of my letters; nor in the other, besides referring to Bridgman's departure. I have been in the south of China since landing, and mostly at Macao, where I have found enough to busy myself. I expect soon to go north, yet I may not stay there very long. I have an idea that our new Minister Mr. Burlingame will not care to spend much time in Peking just yet, as he expects his family out before the end of the year.

April 10. I am on the point of starting for Shanghai, where I shall write you. Send your letter care of Bull Purdon & Co. at Hongkong. There is not much news of movement hereabouts, except the attack of the Taiping rebels on the settlement at Shanghai, but they were driven off, & I suspect will be forced to disperse. This old empire is effete, poor, & scared. She must be Christianized before much more can come out of her.

マカオに妻子を残したSWWの上海行きは、4月10日にマカオを出発する計画であるとしながらも、香港、寧波経由となったために、実際の上海到着は、4月末か5月初めになった。バーリンゲイムの12月24日到着から数ヶ月後になる。この間の全権公使滞在先は、公使館のないままに、当時の慣例となっていた有力な米国系商人の商館、具体的にはRussell商館であったと思われる。米国の上海領事館にしても借家であり、そこよりも、豪華な施設の整った商館の食客になる方が好ましく思われた時代である。

SWWの方も昔からの宣教師仲間の宣教師館で食客になっている。上海到着後も再び待機生活となり、この頃の私信に度々言及されている

Bridgman 未亡人のもとで世話になっている[103]。こうして米国特命全権公使と書記官・通訳の居住する場所が、上海市内でバラバラに散っているという事態も、今日的な視点から見れば多少奇異な感じを抱かせる。長期の上海待機は、全権公使一行を運ぶための米国軍艦ワイオミング号がなかなか到着しないためだった。それにマカオ 3 月 13 日付け前掲 SWW 書簡に述べられているように、妻子に先立って中国入りしたバーリンゲイムは、近く年内にも到着する予定の彼女たちを香港まで迎えに行く計画なのであり、たとえ北京訪問を近々果たしたところで、直ぐに上海へ戻らなければならず、北京行きをそんなに急ぐ心境にならなかったようである。

SWW の次の私信では、マカオに残してきた娘のソフィーに宛てた父親らしい文面のなかに、この間の事情を以下のように伝えている。5 月 19 日に続いて 5 月 26 日上海の日付が入っていることに注意したい。

Shanghai, May 19, 1862

My dear little Sophy,

Who wrote me such a pleasant note, and told me about the lilies and the flowers in the garden, and how she learned her verses, and all the other things, doesn't know how happy she made me. It was the first real letter she ever wrote me, and made me think of the days when Wally printed just such notes.

I sent you a note from Fuhchau, and after it had gone I went again on board the steamer to go on to Shanghai; we had pleasant weather all the way to Ningpo, a town about half way up, and there I saw Mrs. Mangum, who wished to hear about you. The robbers were at Ningpo, and people were afraid of them, and had run away out of the city. Not many days after, the English and French took

---

103未亡人は亡き夫を大変敬愛しており、夫の死去にともない一時的に米国へ帰国して、夫の伝記執筆のために私信等の収集を行って、伝記を書きあげたのちに、この書簡に見るように再び上海に戻ってミッション系の女学校の運営を再開した。SWW とは長年の親交があり、初期中国伝道に生涯を捧げた気丈夫な米国人女性ある。

the city from the robbers, and the people could then return to their houses in it. They found nothing in them, for the robbers had stolen everything, sometimes even taking the windows and doors to burn. In the steamer we had some women and children who were going away. They had been driven out of the city, and the fathers of some of them killed. It made me feel sad to see so many people driven away from their homes, and hear of their being killed and drowned. We ought to be thankful to God who takes care of us, and gives us homes.

Yesterday I saw Sylvia Purdon, and her father to-day. She was going off to a ship this morning to spend the day. There are several large ships close by the house where I live, and many small ones; the river is full of big and little vessels, and you can hear the whistles of the steamers.

In this house are twenty Chinese girls whom Mrs. Bridgman teaches every day. They can sing hymns in Chinese, and she teaches them to sew. One of them waits on the table, for a week, and the next week another one takes her turn; so they learn to do many things.

I am to start for Peking to-morrow, and shall try to send you a note from there. It is a long way from Macao, but the letters can go by the steamers, and you can write me another nice note. I hope you will teach Freddie plenty of verses, and help dear mamma ever so much. The blessed Jesus loves you when you try to mind her and make everybody happy, as you do.

Dear Papa

May 26th

This letter did not go when it was ready, because I did not

hear of the steamer in time, and so I can tell you of the funeral procession I attended this morning. About a week ago the English and French were helping the Chinese to destroy the wicked men who do so much mischief among the villages, burning houses, and killing the poor people, and had almost driven them away. The French admiral was in front and was killed by a shot hitting him in the breast. This morning he was buried and every body invited to attend the funeral. There were many officers and soldiers, many priests and boys, dressed each in their own uniforms, some with gold lace, swords and guns, some with square caps, long gowns and wax candles, and Chinese officers with feathers, buttons and big silk boots. In all there were two hundred people. They all went to the church where the priests read prayers, the band played music, the boys threw incense out of the silver censer, and the organ led the chanting. After all these services were finished, the procession went to the grave, and the coffin was put in; then the soldiers fired their guns over the grave as they marched by it, each one by himself; before this they had fired all at once. So there was end and all went home. The crowd around was very quiet.

Yesterday I heard Mrs. Bridgman's Chinese girls sing hymns, and some of them who love Jesus had come to the communion. Mamma will tell you what the communion is. They can sing Happy Island and a few other tunes.

子供に宛てて書かれた手紙であるので、太平天国反乱軍の悪行を「盗賊」とか「悪者」と呼んでいるけれど、1862年の上海とその周辺には、いつ攻め込んで来るかも知れない緊迫した状態に置かれていた[104]。民間の自営団

[104] SWWは最初から太平天国の乱に期待を抱いていなかったが、この私信に言及されているような末期的な現象を否定できないものの、民衆運動として持っている歴史的

が組織され、軍事訓練を実施したり、交替で見張り番に立ってもいる[105]。こうして軍艦を待つ間にも、思いがけない楽しい出来事もあったらしい。上海6月11日付けの妻宛て書簡の中で、こう伝えているからである。"The Japanese merchantman from Nagasaki has attracted some attention in port. I went on board with Mr. Seward, and found an old acquaintance, tho' I had forgotten him. She has 50 souls on board, & no foreigner." それから数日後に弟のロバートに宛てた手紙では、到着の遅れている軍艦だけでなく、北京までの遠路に展開する反乱軍の危険を述べて、どうにも動きが取れない状態にあることを以下のように伝えている。

Shanghai, June 14, 1862

Dear Brother Robert,

Your letter of March 18 came to hand at Macao in 60 days, but I only recd. it last week. I am much gratified to learn from it that mother's legacy has enabled me to aid the mission cause as much as $200, without any difficulty on my part. There is not much self denial in giving money coming in such a way, indeed; for I neither knew when it came nor when it went; tho' I am happy in going it such an end to serve. I am much obliged to you for your carefulness in looking after the Utica property, and as long as you are there it will be well enough. My only desire to bring it into a manageable shape in one body from a regard to contingencies; you have the power in your hands, and must act as you see circumstances require. I have no

---

評価を総合的に行う必要がある。参照、Lin-Le: *Ti-Pinh Tien-Kwoh, The History of the Ti−Ping Revolution including a narrative of the Author's Personal Adventures* (Beijing: Foreign Language Press, 2003), in two volumes.

105 英国系商人の一人、Charles Lenox Richardson (1833-1862)が、こうした反乱軍の迫る上海の不安定な商売に厭気を抱き、一時帰国するつもりで立ち寄った横浜において、生麦事件の犠牲者となる経緯と時代状況について、かつて拙書で述べたことがある。拙書『「幕末」に殺された男』(新潮選書、1997)。参照:「第六章　若き日のアーネスト・サトウ」pp.101-120 及び p.121.

desire to dispose of Grove's mortgage, so far as the actual investments goes; it is only in reference to the future management of such a piece of property in my circumstances, that I spoke in my letter of last winter. On the whole, I coincide with you that it would be better to let this remain for the present, even if you dispose of the Bank stock when it is at a fair price. The Olyphant's allow 7% on running a/c, and the bank stock don't bring that I suppose. I have no idea what is a fair price for the mortgage.

I cannot get your teapoys &c. here nearly as cheaply as in Canton, & have asked Sarah to see after them. The ships have pretty well sailed with season's teas, and there may not be an opp'y soon. The teapoys will be $5 a set in the shops, hadkfs about $10, & the other things as much more, say $30 to get the articles ready for shipping, and a few dollars duty & charges. I think Sarah will see to t hem soon.

Dwight is to go to Swataw to reside, and will be more comfortably situated there than at Whampoa in that he will be on land & not on water, otherwise there is not much to choose between the places. He seems to give satisfaction t so far as I hear, and the duties of the place are not onerous.

I received a letter from Mr. Gardner, stating his grievance in a plain way about the letters, and I think I removed the complaint, tho' perhaps not all the feeling. Perhaps the fire will burn out if there's o fuel. I have already requested him to see the preparation & erection of a tombstone for Wally, in order to show him that I've no hard thoughts, if there's no room for two similar stones, then arrange both epitaphs on one stone, or let me know how you think best before doing anything, as there's no hurry. As to what Mr. G may say about me, don't let it up long. Pray for him & forget it. Perhaps I gave him cause for some of it, unwittingly, and there has not been

time to explain. It must be that offenses come; let it be our care not to tumble on them.

I came up here a month & more ago, expecting to go to Peking soon, but have been hindered hitherto. The country is everywhere open now, but it is not over safe to travel extemporarily. This vicinity is a scene of rapine, bloodshed & suffering beyond description. What we now see & hear from commentaries of the liveliest sort on the descriptions given by the prophets of the carnage of ancient armies. These insurgents are not so easily caught, and the heat is too great for foreign troops to get out and try to inclose them. They may soon beleague this settlement & stop the provisioning, when the distress among the natives who have fled to it for protection would compel some sharp remedy to save the foreigners. Shanghai is now a foreign town to all interests, & the Frenchseem to be trying to appropriate most of it to themselves. Their objects in China are rather suspicious, & thro' the priests they will soon wield a powerful opposition to Protestants.

When the U.S.S. "Whyoming" arrives, I shall start for Peking, and may remain there till early winter. I hope to get back to Macao by new year's, and before indeed, for I am tired of this separation from wife and children, and shall endeavor to arrange in future so as to avoid it. I am disappointed in the detention in respect to being kept down here when the weather is most favorable for going to the capital, and thus prevents my return south. The whole of China is in a sad state; misgovernment, oppression and want are so combining to weaken it more & more, and apparently throw it into foreigner's hands, when its condition is likely to be worse for a while, tho' perhaps ultimately better. God's plans for the diffusion of the gospel involve many overturnings, and this country has been settled o its lees so long that the sediment is a dreadful of ignorance, idolatry

& impurity.

Please give my dutiful love to Aunt Seward, who claims our highest respect; I am glad to hear she is well, & that Alex & his wife are the better for their visit. I trust that you & your dear family will be kept together for mutual happiness and improvement. It is a difficult thing to train children, & we need constant help from the Spirit. Love to Abby and the children.

Yours affectionately / S. Wells William

P.S. I am glad to get newspaper slips, but I think those of local sort which may have some relation to the town or people of Utica more likely to be new. We get papers now from California sooner than New York, and every detail of the civil war is soon known. God mercifully grant that it may soon end & peace come.

上海 6 月 4 日の日付から、すでに一カ月余り、待機状態に陥っていることがわかる。生麦事件の英国人被害、上海のリチャードソンとクラーク、それに香港のボラデイル夫人の三人までが、この頃までに上海を発って横浜へ向かっている。

北京入りを急がなければ、運河の氷が心配される時期になってきている。バーリンゲイムには、信任状の手交、できれば皇帝の謁見、大統領署名の済んだ天津条約の正式批准、英仏露の外交代表に表敬訪問して共同歩調の政策を確認すること、外務省幹部とりわけ外務大臣・首相格の恭親王との協議開始等、盛りだくさんの日程が詰まっている。SWW にとっての最大関心事は、上司の住居を確保することにある。香港に向かっているというバーリンゲイムの妻子が、初めての中国生活を快適にスタートさせられるように、適切な屋敷を借りるか購入することが、SWW に与えられた第一の任務であった。マカオで待つ自分の妻子を迎えるための自宅も、あわせて準備に取り掛からなければならない。住み慣れたマカオや広東と勝手が違うばかりか、外交関係者と宣教師だけに北京居住が認められており、頼りにしたい商人たちの入京は、許されておらず北京手前の天津止まりであ

ったから、結局、北京での居住地探しは、もっぱら一人 SWW の中国経験と手腕にかかっていたといえる。

上に引用したバーリンゲイム公式書簡うち、最後のものには香港 1861 年 11 月 30 日の日付けがある。また、上海到着の 1861 年 12 月 24 日にも言及した。1862 年に入ってから書かれたバーリンゲイム公式書簡のうち、1 月 9 日書簡で英国艦隊司令官のホープ準提督による反乱軍鎮圧の動きを伝え、1 月 23 日付けで自身の寧波訪問、2 月 7 日書簡で Breck 領事からの反乱軍動向に関する報告に言及し、3 月 7 日書簡において中国政府の希望する軍艦と武器の購入が、H.G. Wards に委託されたことを伝えているし、更に 3 月 22 日書簡で中国政府の支払っている賠償金の分配について触れているだけである。北京入りの計画に言及されるのは、ようやく春先の 4 月 5 日書簡とそれに続く 5 月 3 日と 5 月 18 日の書簡においてである。出発予定日として伝えた 5 月 19 日には、再び書簡を送り、先に言及した賠償金の余剰金に関連して、米国人と中国人学生に文学と言語を教えるための高等教育機関を設置する資金にしたい意向を述べている。実際の出発は更に遅れを見せ、7 月 1 日書簡において、米国軍艦 Contest 号で出発すると伝えたあと、次の 7 月 24 日書簡でようやく 7 月 20 日の北京着任を知らせることができた。着任直後の動きには、恭親王との面談や親交等、バーリンゲイム伝記研究において重要な事項を含んでいるが、後続の別稿で詳論する予定である。

本稿の結びに SWW の動向について述べておかなければならない。上に引用してきた SWW 私信のうち、最後のものには、上海 1862 年 6 月 14 日の日付がある。私信の主な宛先は、妻子か弟ロバート、弟のフレデリックである。既に上で引用したマカオ 1861 年 11 月 15 日付け弟フレデリック宛て書簡に始まり、家族に伝えたい私的な内容の多い中に、時折、バーリンゲイムに関する言及が見られる。バーリンゲイムの名前もしくは米国公使、という形での短い言及がその大部分である。1861 年 11 月 15 日とマカオ 1862 年 3 月 13 日付け弟フレデリック宛て私信に続いては、天津 1862 年 7 月 9 日付け妻宛て書簡のなかで、上海滞在中に知り合いになった仏国全権公使夫人との縁で、北京到着後は、仏国公使館に一時的に泊めてもら

う、というバーリンゲイムの意向が伝えられている。次の妻宛て私信には、北京1862年8月7日の日付がついている。両者がようやく7月末までに北京へ到着できたわけである。SWWにとっては二度目の北京訪問となったが、最初の仕事は、言うまでもなく米国公使館の設置である。どの国の公使館も借地であり、そこに新築するか、古い屋敷を改装するか、どちらかの選択に迫られる。米国はこの点でも他の条約国よりも遅れをとっている。米国政府は借地借家の方針をとり、堂々たる建造物を建てたがらなかったようである。本稿冒頭に紹介した北京市内に建築の進む巨大な米国大使館とは、あまりにも対照的であり、隔世の感が深い。妻宛てのこの1862年8月7日付け私信では、公使館公邸で使用するバーリンゲイム家の生活用品を確保する手配をマカオの妻に依頼している。本稿最後の転写と引用は、これに続く1862年10月13日付け妻宛て私信であるが、北京生活の仮寓生活を報告していて、とりわけ公使館改装工事のために奔走するSWWの姿が如実に描き出されており、貴重な歴史資料の一つであると思われる。

Peking, Oct. 13, 1862

My dear Wife

The autumn is beginning to appear in every lineament of nature, the changing verdure, the falling leaves, the changeable weather, the chilling morning air, the dried crispy grass, the ripening fruit, all show how the time speeds there all on their course. Mr. Burlingame is now on his way from Tientsin I suppose, and will soon be here with his wife, child, & nurse, to take possession of his house. Then I shall be away as soon as I can, and hoping to reach you before the autumn at the south has passed into all who know its quality, and the last three months have on the whole borne out its reputation. I had hoped to be gone by the 15th but now there is no chance of that day; Mr. B. may be here tomorrow; I have not learned when he left Tientsin, for it is, in time, about 500 miles off, as it takes ten days to

get an answer, unless by special courier.

I wrote you a short note last week, returning a previous note, which had found its way back, after having gone as far as Shanghai, to Tientsin, and also sent a duplicate of the list of articles desired by Mr. Burlingame. The difficulties connected with correspondence between Canton & Peking are much greater than I expected, and there must be some let in the port office somewhere, that I don't know. The non-receipt of the articles sent for to you & Mr. Hitchcock will very seriously interfere with Mr. B. household arrangements, & if they don't come soon, I hardly know how they can reach here before next May. If we could have forseen [*sic*] the position here, then all provision could have been made for the contingency, before leaving Shanghai. Mr B.'s house gives satisfaction to those who have lived here, as likely to be a comfortable dwelling; there are four houses opening on a court[106], two larger than the others; three rooms in a long narrow building behind the largest & separated about 12 ft from it, serves as his bedroom & that of his child's nurse; four or five other rooms at its side, at right angles with the bedrooms, affords lodgings for servants, a kitchen &c., while on the third side are stables, & a garden on the fourth, not large or elegant, but better than nothing. Thus the courtyard is in the center, with its four houses defining its size, and the appendages environ it. Every house is one story; three or four rooms have board floors, glass windows have taken the place of paper ones, fire places of brick stoves, and a general foreign aspect of the original dirt and decay when it passed into our hands about six weeks ago. I could get along very comfortably in such a dwelling, with the climate of the last three months, but what defects would

---

106 北京市内で今でも多くみかける所謂「四合院」の作り方であり、北京の魯迅故居と同じである。

appear after a year's experience, more time is required. The drawbacks on living in Peking are the distance from the outer world of friends, those who speak one's language, with whom intercourse is carried on,---a chief inconvenience too if one cannot talk Chinese. The difficulty for a lady getting about the city & town, unless on horseback, is not small; her dress prevents all walking the streets, absolutely; and a chair is troublesome amidst carts, donkeys, wheelbarrows and crowds. A lady could get exercise on top of the city wall outside of her own house. Many things must come from Shanghai or Tientsin, [such] as shoes, bonnets, hats, and many articles of food, as condiments, wines, besides crockery ware in our style. The dirt which fills the streets and penetrates the houses to a considerable extent, especially during the dry winters, forms a real obstruction to exercise, and unless can be taken, spoils things on which it settles. The advantages of a bracing, clear, and healthy climate, with plenty of room outside the city[107] for riding, overbalance much of these discommodities. The variety of meats, fruits, & vegetables is greater and cheaper than elsewhere in China, and on the whole superior. The freedom of intercourse among the people, is also a boon to one who can talk with them, and the variety of dialects, nations, education, habits and religions to be met with, furnishes inexhaustible resources to a student and a missionary. The foreign society will doubtless increase rather than diminish, and half a dozen ladies living within the circuit of a mile could visit each other often enough to make it cordial.

---

[107] 北京在住の各国公使は、北京西方の西山八大処に点在する寺院を夏場の避暑地に使った。1860年代の一つの慣習になったほどである。SWWの好んだ寺は、尼寺であり、三山庵といったが、家族とコックを連れて出かけたら、夏場の3カ月ほどを過ごしてくる。自ら Tremont Temple と呼んで親しんだ避暑地の生活については、後続の別稿で扱う。

So I've told you about the matter of a residence in Peking as it strikes me after three months trial. It is not so pleasant a town as Macao, but its climate is better; its residences are not so convenient, but its provisions are cheaper. In every place in this world & situation in life, it is a composition of things, the pros & cons are different, they are set over against each other.

I've made a small collection of odds & ends here, most of them useless, ornamental and Chinese, and therefore I suppose eminently suitable for sending to American friends as mementoes of my visit to Peking, and acknowledgement of their unwearied kindness to us & our children when among them. It seems to me at times that I could send them all & each just such a lot as I have made. I shall have considerable freight to pay on the two boxes, most of one of which contains Chinese books, not many of course, or the [embrous] things would not go into one or two boxes. There are only four works, one of them a copy of the gazzetteer lost in the Intrepid.

I have been induced thro' the strong representations of Blodget to buy a mission house at Tientsin; it is a house which the English occupied, & will, he says, serve the mission very well, & if I purchase it, can be improved by degrees without fear of the school, family, family or congregation being turned out because a higher rent can be obtained. I have paid 3000 dollars or so for it, without having seen it, because there could be no delay till I reached Tientsin if it was to be secured. I hope it will prove to be a help to the mission, and long be occupied by faithful men, for my only strong inducement was this. No rental has been agreed on; this can soon be settled. It is rather odd that the first house I ever owned should be one I had never seen in a town where I shall probably never live; no place in this world can be too far off to do good in, if God shows the desirableness.

I hope this, which is probably my last from Peking, will reach you in as good health as it leaves me. I shall never again leave you so long, if my present notions are accomplished, both for your sake & the dear children. But try with God's grace to be faithful to them. I think you fail here, amidst the cares of company & householder wants. Be ever trying to tell your own fervor to Him who has loved us with an everlasting love. He may soon call us to separate forever in this world. My dearest wife, & darling Sophy & Fred, God bless & preserve you!

Aff[']ly Yours / Wells

(6)　2010年8月国際学会発表（長崎県立大学シーボルト校）、日文論文の中文訳

19世纪初期旅居澳门·广东传教士对日语的研究

翻译：山本周

I 罗伯特·马礼逊 (Robert Morrison: 17821～1834)

欧美人对汉语和日语的研究均源于天主教神职人员,其在当地的研究受到了中日两国锁国政策的影响,之后,19世纪初,新兴国家的耶稣教传教士开始继续了他们的研究。所谓当地，指的是澳门和广东。传教士们掌握了汉语后，有几个英美传教士开始研究使用汉字的日语,他们为了翻译圣经和布道,对学习日语倾注了莫大的热情。这一时期的汉语研究和日语研究始动于鸦片战争前夜的澳门和广东。首先值得注意的是,这几个传教士在研究汉语,但他们也在日语研究方面有所建树, 在此, 让我们以人物为中心展开话题。

与现在在大学学汉语不同,当年在既无汉语讲座亦无中国老师的伦敦或纽约,要想掌握汉语除了去当地学习外别无选择。第一个被派到中国的英国传教士罗伯特·马礼逊 1807 年 8 月 6 日星期五晚上刚到澳门就去拜访了乔治·T·斯通顿,因为斯通顿是英国东印度公司在中国当地办公室中汉语研究成果最大的一个人,虽然当地有很多英国人!在斯通顿所写的有关中国论的书籍中却未提及日语研究[108]。另一位中国通是约翰·法朗西斯·戴维斯。他的中国论(1852年)末尾在言及日本漂流民滞留澳门时,曾写道:

Already are hundreds of Chinese being transported from Hongkong to California; while some shipwrecked Japanese have been conveyed back from Mexico across the Pacific westward.[109]

Some of the interpreters attached to our consulates in China have undertaken the study of the Japanese language; and there will be teachers enough if Japan foolishly persists in excluding all her subjects who have been driven from the country by accident or necessity.[110]

---

108 Sir George Staunton: *A Complete View of the Chinese Empire* (G. Cathorn, British Library, No. 132, Strand, London, 1798).

109 Sir John Francis Davis: *China* (Longman, London, 1852, in 2 volumes), vol.II, p. 260.

110 Ibid., p. 294.

斯通顿告诉来到当地打算集中精力学习汉语的马礼逊说学习汉语存在著三大障碍。一是英国东印度公司,即使是同胞,因为传教与进行贸易的滞留目的不同,所以东印度公司不欢迎马礼逊留在当地。剩下的两个是: 先行进入中国澳门的天主教神父们的干扰和中国政府禁止教授外国人汉语的政策。马礼逊选择的对策是悄悄地住在美国公司地下室里,通过过与中国人相同的生活 (assimilation) 来坚持自学。这样艰苦的学习状况，与开港后的幕末横滨的情形相同,当地人教授日语和布教活动被严格禁止。

梅德哈斯特曾提及马礼逊对日本和日语的兴趣。

Both Drs, Morrison and Milne had long desired to get some acquaintance with the Japanese tongue, in order to ascertain whether present version of the Chinese Scriptures would do for that people.[111]

作为第一位编纂汉英词典的中国学研究者,马礼逊受到瞩目的事例有1837 年马礼逊号航行日本时发生的天保 10 年蕃社狱事件。马礼逊传记中有一段意味深长的关于日本的信简,引用如下:

[November, 1828] 29th.

I have sent to Japan an order for a copy of my Dictionary, to be given to t he translator Gonoski Kokizas. Mr. Burgher suggests that I should write a kind letter to him, and he will forward it..[112]

以上文中提到的巴赫是在长崎出岛荷兰商馆任职的医生,此人提供的有意思的消息是马礼逊遍的汉语词典正在被日本人翻译,译者之一有上文中出现的Gonoski。

---

[111] W.H. Medhurst: *China* (John Snow, London, 1838(, p. 341.

[112] His Widow: *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, D.D.* (Longman, London, 1839, in 2 volumes, vol. II, p.413).

Ⅱ. 梅德哈斯特 (Walter H. Medhurst： 1822～1885)

梅德哈斯特是继马礼逊之后被从英国派到东亚的传教士之一，他也是在当地自学粤语的同时学习日语,没有日本老师的直接传授，只是通过书籍自学,却取得了成果，居然编出了日语词汇集。 其作业始于 1827 年 7 月 20 日,时间在前文提及的马礼逊信简前后。在 1829 年 1 月 24 日由巴塔维亚(雅加达)寄往伦敦传教士总部的信中，他汇报了学习日语的情况:

去年二月,我得到了很多本日本书籍，承蒙对方的厚意,在我手头放了好几个月,使我得以充分使用,而且可以任意抄写.[113]

另外,相同内容的记叙在梅德哈斯特后来撰写的著作中也可以看到,摘要如下:

After copying these works, the author proceeded to the compilation of an English and Japanese vocabulary, which was afterwards printed. This little work does not profess to present a full and extensive development of the language, and enters very little into its structure or character: it is hoped, however, that it may afford some assistance to future labourers, endeavouring to investigate that rich and copious tongue, with a view to convey the treasures of divine inspiration into it. Without intercourse and conversation with the people, however, it was impossible to proceed further in the acquisition of the Japanese language, and the study of it gave way to more immediate and imperious claims on time and attention.[114]

前述寄往总部的信简中有 1829 年 1 月 24 日信件这样写道:"不能前往日本访问，也就是说不能与当地人进行面对面的谈话,神的意旨不能用日语表达,

113 拙著『波うちぎわの Satsuma 奇譚』(高城書房、2009 年)、p. 34.
114 Ibid., Medhurst, pp. 341~3.

日语学习难以进步,最近感到非常绝望.[115]”

至于梅德哈斯特编纂的英日词汇集,不过是本分类收集单词的小册子。1830 年在巴塔维亚石版印刷,现存于明治学院大学图书馆的同书上有平文的签名并记有 1859 年的字样。据说是平文 1859 年 7 月 1 日在去开港后的横滨赴任途中经过上海时,直接从梅德哈斯特手中得到的。对打算研究日语并编纂日英词典的平文来说,印刷了的日语教科书就只有这本词汇集了。

Ⅲ. 丘兹拉夫 (Karl Friedrich Augustus Gützlaff: 1803～1851)

生于普鲁士Pomerania的丘兹拉夫曾就学柏林神学院,1827年由荷兰传教士会派遣到东方传教。他有在巴塔维亚学过粤语和马来语的经历，为继梅德哈斯特之后的传教士之一。在新加坡、曼谷传教后, 1830 年移居澳门、广东，马礼逊死后，他充任了英国东印度公司的汉语翻译。

丘兹拉夫的中国论涉及在澳门、广东的居住经历，如下记简单明了的记述，在还未接触到日本海难船员的时代,这两卷书籍中对日语的研究未见其详。

Foreigners, who trade to China, and are residents, have usually a residence both at Macao and Canton. This is necessary, on account of health, and almost to all. For they are, at Canton, entirely confined to the factories, there being few streets where they are allowed to walk, and if they occasionally venture to walk into the country, they are exposed to the insults of the populace. Besides, European females, under the denomination of "barbarian women," are "not allowed to reside in the provincial city," and those gentlemen who have families, keep up an establishment for them at Macao.[116]

---

115 前揭拙著、pp. 36~7.

116 Charles Gutzlaff: *A Sketch of Chinese History, Ancient and Modern* (Smith, Elder and Co., London, 1834, in 2 volumes), vol. II, p. 377.

在东亚各地学习当地语言，虽然他被称为语言天才,但有时欠冷静,好像属于靠感情支配行动的类型。与他的自我感觉良好不同,周围人们对他的评价却不高,是个怪人[117]。

传教士在海外研究日语的历史到丘兹拉夫实现了划时代的转机,让梅德哈斯特感到绝望的没有直接向日本老师学习的机会,到丘兹拉夫时成为了可能。日本海难船员 (Japanese ship-wrecked sailors) 充当了他日语教师的角色。尾张·小野浦籍贯的音吉等三人 1835 年 12 月被送到澳门并由丘兹拉夫照管。之后的 1837 年 3 月,九州籍贯的力松等四人也来到了他身边,语言天才,热心传教的丘兹拉夫开始向他们认真学习日语,但是如海难船员的他们,并非可教书传业的老师。微三喂在他的亲笔书信中如是写道:

[SWW to an unidentified recipient at home: 1836/ 06/ 25]

There are three Japanese now staying at Mr. Gutzlaff's house who were brought from Columbia River via London, and are now supported at the expense of the English commission. One of them named Keokitch was sent on an errand to me to-day, and finding that he could speak broken English, I asked him as many questions as I could think up. He says that he comes from a small town about fifty miles (Chinese *li,* probably, a third of a mile each) from Jeddo. The town is called Sriwasi, most likely a small seaport producing rice and exporting it to the capital.[118]

即使如此,丘兹拉夫的日语能力还是有了很大进步,他的福音书日译本在新加坡印刷后于 1837 年出版发行[119]。

Ⅳ 卫三畏 (S. Wells Williams： 1812～1884)

117 Kenneth Scott Latourete: *A History of Christian Missions in China* (Che'en-wen Publishing Co., Taipei, 1974), p.216~7.

118 S. Wells Williams Family Papers, MS547, Yale University Library Archive.

119 都田恒太郎著『ロバート・モリソンとその周辺』(教文館、1974 年)、pp. 273~283.

热心研究日语的传教士们一直以欧洲派遣者居多,1830 年以来在澳门、广东开始出现了美国传教士的身影。1833 年 10 月底，卫三畏抵达澳门·广东时才刚过二十岁，被派到建在当地的传教印刷厂里当印刷工。本来他是个热心学习并打算进大学读博物学的年轻人,正因为如此， 他不仅学习汉语,还采集矿物、植物标本，广泛汲取有关中国的知识 ，编成了词典及中国总论。最近，在日本以陶德民博士（関西大学）、在中国以顾钧博士(北京外国语大学)为中心学界展开的对卫三畏的重新评价。

既是行者,又勤于笔耕，并给祖国的家人为了大量的书信。其中一封提到了丘兹拉夫照看的日本海难船员(见前文引述)。后来涉及日本海难船员及日语的书信为 1837 年马礼逊号航行日本时期，信中言及丘兹拉夫的日语能力,但对自己的日语学习只字未提。可以推断卫三畏的日语学习应该始于马礼逊号返航澳门·广东之后

[SWW to Father: 1837/ 07/ 02]

Macao, July 2, 1837

Dear Father,

.... To-morrow I expect to leave Macao in a short trip to Japan, in the old ship *Morrison,* in company with Mr. & Mrs. King & Dr. Parker. Gutzlaff has proceded us to Lewchew Is., where he has gone in H.B.M. Ship *Raleigh*.. The occasion is to return a parcel of shipwrecked Japanese sailors who have been Providentially cast ashore at Macao, and have been supported by charity here. Gutzlaff has acquired enough of their language from them to hold a conversation on most topics, and [with] them and him, we hope to make & tell a pretty good story....[120]

卫三畏的日语学习是在 1830 年代末到 1840 年代中期的七、八年间。这

---

[120] Ibid., S. Wells Williams Family Papers, Yale Univ. Lib. Archive, MS547; SWW to Father, 1837/ 07/ 02.

期间卫三畏代替丘兹拉夫照看因严格的锁国政策而不能回国的日本海难船员，每天，他们在印刷厂工作时,卫三畏都坚持学习两个小时日语。但是，他周围的日本海难船员陆续离开他独立生活,1845 年竟都走光了。也就是说他在此时中断了日语研究。1853 年，他参加了贝利提督的日本远征,同时被要求充任首席日语翻译，但他对自己的日语能力缺乏自信,所以一开始就拒绝了贝利提督的请求。另一方面，卫三畏缺乏自信的态度,也可以理解为他一直为大谦虚的性格。

后来在布朗回忆起过卫三畏的一段故事,从中可以一窥卫三畏不错的日语能力。

[S. R. Brown to SWW: 1860/ 12/ 24~25]

Kanagawa, 24, Dec., 1860.

My dear Williams

Your letter written shortly after your visit to Willowbrook, came to hand on the 17th inst. and I thank you very much for remembering me & mine, & for this new proof of your love. A ship, the "Daniel Webster," is to sail soon for San Francisco, & I must not fail to reply to your very welcome letter. I was talking with a very intelligent Japanese Dr. Hepburn's teacher, last night, he having come in to chat, & learn a little English as he often does of an evening, & he spoke of you! He told Mrs. Brown & me, that you landed at Yokohama with Commodore Perry, & that acting as interpreter, you spoke to the Japanese, on coming ashore, saying, **"Sa yu maku wo tore."** [*sa*=左 left; *yu*=右 right; *maku*=幕 cloth-hanging; *tore*=取れ take awa]. Take away the tents (or clothes-hangings, on the right or left, and that the Japanese were all amazed, & said, Isn't he a

Japanese? They could not believe that any American could so speak their language. He furthermore told us, that the portraits of Com. Perry, Capt. Adams, & Wiyurimas' (yourself) were taken by the Japanese artists, & that they were afterwards printed, & sold in good numbers, from Yedo to Miaco. The price of the pictures of each, was however, but ½ a tempo. Queer was this less complimentary to the persons, represented by the portraits, or to the artist? He tells me that he thinks he can get a copy of yours for me, at Yedo, & if it is to be had, I shall procure it & send it to you, as a memento of your first landing at Yokohama.

You must have had a delightful visit to Willowbrook. Mrs. Martin has given me a full account of it, as well as you, & we have lived over the scene in our imaginations. I am so glad that you could spend a week there, & talk to the people, my people, I still call them, in the such little church at the foot of the lake. I learn that the Rev. Mr. Dickson has received a call to become their pastor, & I strongly hope to hear that he has been installed there, as my successor. It will be exceedingly pleasant for both Mrs. Dickson & Mrs. Martin, Mrs. D. is a capital parstor's wife., and that is half the bargain. Dear old "Springside" you saw in its loneliness. That too, I hope has, an occupant, if not a new owner, by this time. I shall never return there to live, in all probability. It were better sold. My home, for the rest of my days, will, I trust, be in Japan.

25. Dec. 1860.

A Merry Christmas to you!

My dear Williams, & to all your family. A bright & beautiful day it is here where the sun rises. I am expecting Mr. Harris in every moment to give the children a frolic, & an entertainment with some Japanese legerdemain. Mrs. Brown is not very well to day. I have a bad cold, but otherwise feel well. Howard & an American boy from Yokohama have gone out for a short ride on horseback.

Julia is up to the elbows in chicken, or something like it in the kitchen.

Miss Adwanee is spending the week with the [Kevinses], not far off. Mrs. Jones, the wife of the Capt. of the Bark Macy & Louisa, of Brook Lane Long Island is with us, but who has I trust have been led to Christ since she came here some three months ago, & so is selling her house in order to depart. I have, of course, dismissed my teacher for the day, to devote it to writing some letters, & the festivities of the occasion. We & the Hepburns are to have a Christmas tree this evening, for the children, & a candy-pulls for the ladies. So have we planned on Christmas entertainments, & thus has the day begun, after breakfast & singing, at our family altar, "Brightest & best of the Suns of the Morning," [&c] with Julia's accompaniment on the piano. You may suppose us to be a happy

family, for we are. The [lines] have fallen onto us in pleasant places, so far as all on external circumstances are concerned, with the exception of that heathenism which surrounds us, & which we have come to endeavour to remove.

The year, the first year of our life in Japan, as a family is nearly at an end, the 29th inst will be the anniversary of the arrival of my family in Japan, and I must say, that in the review, & when contrasting our present prospects or condition, with what we anticipated they would be, one year ago, we have great reason to thank God & take courage. It has been a "year of grace," indeed to us. Our home is <u>verily</u> a <u>home</u>, though we are so far from the land your birth, & our dear friends in America.

I can see a great change for the better in our relation to the government officials since my coming here. Their suspecting seem[s] to have entirely subsided, though they knew what we are. At first we received [dominiliary] visits from the mayor, or head of police at Kanagawa, once or twice a week, with all his retinue. Officers from Yedo frequently came in to see the strangers. By their round about questioning, it was evident that they were apprehensive of some danger for our presence here. But now all this has ceased. Once in a month or two the above mentioned officer calles at our house to say "How d'ye?" & that is all. We find no difficulty in getting teachers now. We did at first. I observe, by the by, that somebody has written home, saying that my servants & teacher

have been taken from me, & not returned. This is false. One servant was taken out of the house last summer, because he had not been registered, & secured by one at the Honjîn, or town house. The Consul tried to get him back & failed. But I got him myself, which showed that I was not in ill-order with the Japanese authorities. They told me that if I would stand between them & the Am. Consul, so that he should not trouble, then, afterwards, they would return the boy to me, & get him properly secured, which they did. We find that Christian books in the Chinese language can be distributed, without exciting "animosity," or as yet attracting any attention on the part of the government. I presume a thousand vols of one kind or another have thus been put in circulation[,] many of them being sold, during the last twelve months.

Mr. Insley [Elia B. Inslee] from Ningpo, (Presb. Mission) is now here on a visit. He has distributed books all about in this vicinity, & met with no opposition. Of his outline of Ch. History, he has distributed about 300 copies. One man, who has read it, tells me that it is a capital book very intelligible, & that he knows from reading them that Romanists and Buddhists are much alike. They both worship images & both believe in purgatory, both worship that which is beneath them viz. their own, or the workmanship of other men's hands.

This man has read a good deal of the Bible, & related to his friends the substance of his readings from time to time. He has many friends among the

yakunins, and he says they all are delighted to hear the new things which he tells them. He says his own mind is becoming enlightened thereby, & his head softened.

We find that the usage of the Japanese sustains the adoption of the word shi"n for God. We shall have to use either that or the corresponding Japanese kami probably, in translating the Scriptures.

I have translated Lexilogus into colloquial Japanese, & am now going over it the third time. I intend to make a full index of all the words both in English & Japanese at the end to serve as a vocabulary. The sentences are arranged alphabetically, according to the first word in each. How to get it printed is the next question. Perhaps the Ningpo press can do it for me, am also reading Chinese books, a la Japanaesi. This must be done, in order to get hold of this language thoroughly.

I need not say to you that this language à sui generis, & an exceedingly difficult one to acquire. You are aware of this already.

I am moving on at a rattling pace, writing down just what first props into my head. You will perhaps find something in it to interest you though I despair of being able to gratify you as much as you have gratified me.

You speak of taking "higher ground" in regard to the missionary cause, than you once did, in your addresses to your countrymen at home. What ground is

that? You did not tell me. The only ground on which it has appeared to me to rest for many years past is as high as heaven, & the throne of the Redeemer. I am satisfied with this lofty basis. I presume you referred to some thing else that I have not apprehended. Please let me know your meaning.

I am called off to Dr. Hepburn's, (next door) to a Christmas gathering, a tree, a candy-pulling & so forth. I must go, though I love to talk with you [better]. My sheet is nearly full, however, & this must bring meto a close, if nothing else. Pray [present] our united kind regards to you with children. The Son keep you & send you back to this part of the world to work in his cause if it be his will. You will not forget to pray for us & for Japan.

Mr. Portman called on us today. He is remaining here with home hope of a appointment as a interpreter in a British consulate. I go to Yedo with Mr. Harris, on the 2nd of next mn (Du Vi).

Yours ever in the best [re]gards

S. R. Brown

[P.S.] I have not spoken of China. You will hear through the papers the news from thence. Sir Hope Grant, Admiral Jones are nowhere. There are 4 English war steamers & two French in the harbour.[121]

---

[121] Ibid., S. Wells Williams Family Papers, Yale Univ. Lib. Archive, MS547; SR Brown to SWW, 1860/ 12/ 24.

V．平文 (James C．Hepburn: 1815～1911)

正式的日语研究是从 1859 年 7 月 1 日开港后的横滨，由平文开始。其成果是庆应三年出版的《 日英语林集成 》,为最早出现的日英·英日词典。说到横滨的平文先生，他是至今仍在沿用的“平文式罗马字”的创始人，也是在日本人中知名度极高的医疗传教士。赴任日本之前，平文先在中国逗留了三年。1841 年至 1845 年间曾在澳门卫三畏家住了几个月， 受到了卫三畏夫妇的款待，可能也见到过在印刷厂工作的日本海难船员。卫三畏比平文资格老，两人一生中的友好场面，卫三畏在他的书信中也有提及。

后来的 1871 年至 72 年，平文和卫三畏一起在上海美国长老派教会印刷厂共事。平文为了《日英语林集成 》的再版,亲自到上海的印刷厂进行校正，查看印刷状况，指导现场工作。卫三畏也为在中国最后的工作，北京话词典的印刷而现场指导工作。

[SWW to Daughter Sophia: 1872/ 01/ 07]

Shanghai, Jan. 7, 1872

My dear daughter

…. Newyears was spent here in visits as it would have been in Peking, tho' I am not so well acquainted as there. Early in the day Dr Hepburn came for me, and in his carriage (he bro^{t}. from Japan) we went to Mrs Syle's & Fanshaws and other houses, till we had numbered 16 in all, including Mrs Macgowan's, Mrs Yates & Mrs Seaman, with Mrs Seward. Miss Fay has ret^{d}. improved in health,

and pleased to get back to China. Mrs Seaman was married shortly before I reached this, & was hen on her wedding grip to Canton. Her father's voice has failed, & he is off to Egypt & Italy, leaving Mrs. Yates to keep house for her daughter. I don't think Mr Seaman will go to a house of his own this year; he is now a partner, & so is Mr Pim & Mr Geary….

Your loving Father

S.W. Williams[122]

坐著平文特意从横滨运来的马车,二人新年伊始出去看望朋友家的女眷,一共转了 16 家，这后来成了佳话。二人为了倾力编就的汉语、日语词典的印刷，在长达几个月的时间里工作在上海传教印刷厂中。 纵观东亚语言的海外研究，由最初的书本上的学习，到向海难船员学习，最后到当地学习，正是通过这些阶段的学习研究，才结出了这些丰硕成果。

---

122 Ibid., S. Wells Williams Family Papers, Yale Univ. Lib. Archive, MS547; SWW to Father, 1872/ 01/ 07.

(7) 2010年9月発行, 日文紀要論文

日本開国に於ける澳門の歴史的位置に関する試論的考察[123]

A Triangular Approach to the Study of
the Historical Position and Role of Macau

---

[123] 2010年5月23日、24日、30日の週末三日間に、NHK放送大学大宮学習センターで8回の授業「澳門・広東から見た日本の開国」を担当した。その折りに準備し使用した講義ノートが、本稿の本体となったが、論旨と結論を同じにしながらも、多くの箇所に加筆訂正を施すことになった。

This paper is an attempt to view the opening of Japan from the historical perspective of Macau, which had long formed a point in the East Asian trianglular ports: Batavia, Macau and Nagasaki. The Old Japan used to be open to foreign traders till the Shogunate government adopted the isolation policy early in 17^{th} century, repeatedly issuing not only a ban against the incoming of foreigners, except Nagasaki and a few other minor ports, but also a ban against the outgoing of her people. Early in 19^{th} century and in Macau arose those a few tides of globalization movement on which S. Wells Williams, an American missionary-Sinologist (ABCFM)[124], apparently pivoted. One of the historical tides is the study of the Japanese language initiated by Morrison, Medhurst, sustained by Gutzlaff and S. Wells Williams, and presently expanded by Samuel R. Brown and James C. Hepburn in Yokohama. The other tide is the ship-wrecked Japanese sailors, who reached Macau to be sent to Japan. Williams was on board the mission boat, *Morrison*, carrying seven sailors back to Japan in 1837. Though the venture turned out to be a failure, he continued to study Japanese under the tutelage of those Japanese exiles who stayed with him in his missionary printing office. S. Wells Williams was asked by Commodore `Perry to act as his chief interpreter in the successful expedition to Japan in 1853 and 1854.

[124] "As perhaps the most noted missionary-Sinologist of his time, Williams was of indispensable value to Burlingame the novice." Samuel Soonski Kim: *Anson Burlingmae, A study in Personal Diplomacy* (Ph.D. dissertation, Columbia Univ., 1966), p.78.

1．　はじめに―――三本の二国間交流線

二国間の経済・文化交流に集中するだけに終始せず、多角的に、少なくとも三つの直線を結んでできる三角形の国際関係で見ていこうとする研究方法は、a triangle approach と呼んでよいであろう。ライデン大学 Leonard Blussé の著書 *Visible Cities---Canton, Nagasaki, and Batavia and the coming of the Americans* (2008)のなかで、その具体的な、しかも見事な展開を初見できた[125]。日蘭、日中、中蘭のそれぞれの交流直線が、三角形を形成し相互の糸を引き合う。東アジアにおけるオランダを中核とする人間活動の歴史的研究に係わるこうした多角的見方は、日本の開国というテーマの本稿でも応用できると考えた。

> I intend to discuss three port polities around one seascape within a rather limited time frame. Taking the port towns of Canton, Nagasaki, and Batavia as focal points of human activities around the China Sea Basin, I will compare the radically different and at the same curiously dovetailing maritime polities of the Qing empire, Tokugawa Japan, and the Dutch East India Companies in the second half of the eighteenth century.[126]

ＶＯＣ（オランダ東インド会社）の東アジア貿易拠点となった三地点（バタビア、澳門広東、長崎）の成立過程は、1557 年に澳門、1567 年から広東、1571 年に長崎、1619 年よりバタビアで、それぞれ始まっている。

---

[125] Leonard Blussé: *Visible Cities---Canton, Nagasaki, and Batavia and the Coming of the Americans* (Harvard University Press, Cambridge, 2008).
[126] Ibid., p.9.

その三角形の貿易・交流関係のなかで、ＶＯＣが、表舞台の主人公であると見るなら、歴史の影にあって目立たないけれど、いわば裏舞台で一貫して暗躍したもう一人の主人公が実在した。中国の鎖国政策に飽き足らず、密貿易に走ってでも海外進出をはかった活発で団結力の強い福建省出身の船主や華僑たちに、Leonard Blussé は瞠目するのである。

国家的な戦略としての貢物貿易 (tribute system)や鎖国政策 (exclusion policy) の内部崩壊を華僑は意味する。単に外圧による鎖国政策の破棄に集中しがちな従来の視座とはちがう、現実主義に立つ新しい見方の提示であると考えられる。

> China's seaside border and its overseas connections have been studied by historians mainly from the viewpoint of the "official mind" of the Chinese imperial administration. John King Fairbank's work on the tribute system is based on those foundations, and his students have more or less followed in his wake---with the exception of John Wills, perhaps, who in his more recent writings about Sino-Vietnamese relations admit the shortcomings of this approach. As a result we are saddled with a very one-sided view of the past, largely built on presumptions about how affairs along the coastal border should be conducted, according to the central government, instead of what they were really like. The doyen of the study of early imperial China, Hans Bielensteain, in his recent publication *Diplomacy and Trade in the Chinese World, 589-1276*, reaches the same conclusion when he boldly states that "a tributary system centered on China did not exist."[127]

鎖国下の中国歴史に暗躍した華僑は、同じく国を閉ざしていた徳川鎖国

---

[127] Ibid., p.11.

体制のなかに類似を見い出せない。国情が異なるのである。北京の中央政府に比べ、江戸の幕府は、同じ国内南部にしても、強力な監視体制と抑制力を維持できていた。

薩摩藩による沖縄の実質支配にしても、華僑による商業資本の海外展開とは、趣を異にしていた。江戸幕府の鎖国政策は、全国隅々に至るまでそれだけ執拗に厳守されていたと思わる。日本全国どこを割っても金太郎飴なのである。そんな同一性の国情の中から、内部崩壊が起きるとしたら、華僑の例のように自発的で、進取な気性に起因する形態ではなかった。漂流民という非内発的で消極的な運命に起因する形態になった、と言えるであろうか。

鎖国政策の終焉をもたらす結果において同じでありながらも、清王朝と幕府とでは、華僑と外圧の結合、それに漂流民と外圧の結合、という点において国情に大きな違いが認められる。

2.　東洋貿易前線基地の争奪戦

欧米諸国による東洋進出が、澳門、広東、長崎、バタビアに拠点を見い出すまでの過程について最初に述べておきたい。

ギリシャ人によるアレクサンドリア経由の地中海貿易が最初に発達した。これに関連して注目すべきは、アレクサンドラリまでの陸上ルートにおいて、沿岸と陸路を使い物資を運んだ主役が、イスラム教徒のアラビア人やムーア人の商人・船乗りたちである点である。

東アジアまでの遠路を一気に進めず、彼らは、アラビア海・インド洋・東南アジア海域に補給基地を点在させ、砦や町それにモスクを各地に築いた。以下に Frederick Charles Danvers の述べるように、コーランと武器を左

右の手にした進出であった。今日まで東アジアの多くの国々に、イスラム教徒の根を張った浸透作用の源がそこにある。

> At the time when the Portuguese first reached India the Indo-European commerce was entirely in the hands of the Arabs. After the death of Mohammed, the Arabs began to promulgate his doctrines with the sword and to extend the dominions subject to their sway. The rapidity of their successes stands unrivalled in the history of mankind. Having subdued Persia and Egypt, the Greeks were cut off from intercourse with Alexandria, which has for a long time been their principal resort for Indian goods. The Arabs soon appreciated the enormous advantages derivable from Eastern commerce, and entered upon the pursuit of mercantile enterprise with the same ardour which had characterized their efforts as warriors.[128]

したがって、ポルトガル人による澳門形成にいたる東進過程において、最初のうちは、ルートに詳しい先行者たち（ギリシャ人、アラビア人、ムーア人）の情報や案内に頼るほかなく、主として陸路を使った。1487 年 5 月 7 日にリスボンを出立した使者がいる。João Peres Corvihão と Affonso de Paiva である[129]。

二人が辿ったルートを見ると、バルセロナ、ナポリ、アレクサンドリア、カイロ、アデンに進む。そこから後者は、異教の異郷地に孤立して難渋すると聞くキリスト教の一派 Prestor John 宮廷を探し出そうと、生存先として囁かれてきたエチオピアに達した。当時は Zeila からそう遠くない場所に置かれていた Prestor John 宮廷（またの名前 The Prete と言った）を実際

[128] Frederick Charles Danvers: *The Portuguese in India---Being a History of the Rise and Decline of their Eastern Empire*, in 2 volumes (First published in 1894; reprinted by Asian Educational Services, New Delhi, 1992). Vol. 1, p.25.
[129] Ibid., pp.29-31.

に目の当たりに確認できた。

香料ルートの探索のためにインドへ向かった前者は、やはり Prestor John 宮廷に立ち寄ることも果たしている。沿岸貿易と陸路によるこうした東洋進出には、現地部族や先行者のアラビア人やムーア人との平和的交渉と武力衝突が予想されたので、他方には、新しいルートしての海路を模索することになった。海上シルクロード(The Marine Silk Road)と呼ばれる交易ルートである[130]。

リスボンから最初に派遣された海路遠征隊は、Bartholomeu de Diaz であった[131]。50 トン余りの小型船二隻と食糧補給船一隻で構成され、1486 年 8 月に出帆したという。最大の功績は、喜望峰を遠望できたことにある。アフリカ沿岸を南下するうちに、上陸こそ果たせなかったものの、インド洋に開かれた岬を確認した Diaz は、これに「怒涛の岬 (Cabo Tormentoso)」[132] と命名し、国王にそう報告した。ところが、先見の明のあった国王 King João II は、「喜望峰」と改名するようにと命じた。バスコダ・ガマ船長の São Gabrirl 号による喜望峰到達、インド洋横断、カルカッタ到着という海上シルクロードの大発見は、Diaz から更に 10 年ほど経過して成功した。ガマがリスボンに帰還できたのは、1499 年 9 月 18 日になった。

3. 初期外国人居留地生活

ガマの朗報は、16 世に入ると、ポルトガルにとって大航海時代の勢いを加速させた。新参者の進出に抵抗する先行者との間に、攻防戦がインド沿

---

130 *Zheng He and the Marine Silk Road* (澳門大学澳門研究中心、2005)。
131 Danvers (1992), pp.32-4.
132 Ibid., p.34.

岸各地で展開した。とりわけポルトガル国王からインド総督に任命され、1509年11月5日に就任したAffonso de Albuquerqueは、最初にアラビア半島Ormuzの制圧につづき、インドGoaの重要性について、国王宛書簡に次のように内容で訴えている。

> Before starting on this enterprise Albuqueque wrote to Dom Manoel, from Cananor, under date the 17th October, 1510, pointing out the great importance of Goa as regards the safety of India, and expressed an opinion that without holding possession of it the Eastern dominations of Portugal could scarcely be maintained. In the first place, he observed, the European carpenters, fitters, and artisans, after one year's sojourn in these hot regions became no longer men, whereas the natives of Goa were splendid shipbuilders and workmen; secondly, Goa, with large number of ships, would ever be a source of danger to the Portuguese Indian possessions, since it was in the hands of the Turks, who were always ready to embark on warlike undertakings, and were, therefore, an everlasting menace to the Portuguese trading ships when making for the island of Anjediva, Goa, he remarked, was situated on several islands, was immensely wealthy, and possessed a grand harbor, which afforded shelter to shipping from whatever quarters the wind might be blowing[133].

Ormuzや Goaは一例にすぎない。武力による制圧の後には、強力な砦をそこに築き、ポルトガル人は、独自の基地をインドから東南アジアに点々と増やしていこうとする。それにしても本国のポルトガルの人口に限りがあり、貿易・軍事拠点の構築と維持のために、東洋まで送り出せる青年兵士の数には、おのずから限界が生じた。例えばGoaの町を長期的に維

---

[133] Ibid., pp.100-1.

持するにはどうしたらよいか。それに市民生活の充実には女性の役割が欠かせない。思案した Albuquerque の採用した方法は、次のように説明されている。ポルトガル人の青年軍人と現地女性との結婚を促進することによって、混血次世代を増やすことにあった、と要約できるであろう。

> On his return for the recapture of Goa, Albuquerque brought with him the women he had carried away when the Portuguese were driven out of the place. As soon as affairs had become tolerably settled again at that port, he had them converted to Christianity and married them to Portuguese men. No less than 450 of his men were thus married in Goa, and others who desired to follow their example were so numerous that Albuquerque had great difficulty in granting their requests. Albuquerque, however, extended the permission to marry far beyond what he was authorized to do, and he took care that the women so married were the daughters of the principal men of the land. This he did partly in the hope of inducing them to become a Christian. To those who were married Albuquerque allotted lands, houses, and cattle, so as to give them a start in life, and all the property which had been in the possession of the Moorish mosques and Hindu pagodas he gave to the principal church of the city, which he dedicated to "*Santa Catherina*." Albuquerque experienced much opposition in thus establishing himself in Goa, and more particularly in consequence of his giving so many permissions to marry[134].

同じポルトガル系居留地、澳門に於いてもこれと類似する結婚が進展した。ところが後続して東アジアに登場する新興国、それもプロテスタン教会系のオランダは、ＶＯＣ社員と現地女性の結婚を促進していない。次世代誕生政策を採用しないときに、海外拠点の維持には別の問題が自然に発

[134] Ibid., p.217.

生した。

レオン・ブルッセの受賞作品『辛苦な縁――17 世紀の植民地離婚劇』（1997）では、「唐ゆきさん」やVOCの長崎出島生活に言及して次のような意味のことを述べている。それは長崎特有の現象でなく、バタビア、澳門等、オランダ人青年の暮らす東アジア初期居留地に於いても、類似する形態の独身生活が横行していたと推測できる。

> 酒を飲む、料理を堪能する、ビリヤードで遊び、読書、音楽。それから会社とは別に、少しばかり自分なりの商売もこっそりとする。これくらいしかできないけれど、時間つぶしにはなった。それでも何かが不足していて、十分な退屈しのぎにならない。1641 年に平戸から長崎出島に商館が移されて間もなく。商館長は長崎奉行に或る助言を求めてみた。どうしても閉鎖的な出島生活では、夜になると役人や使用人が、みな翌朝まで帰宅していまい、商館員だけが取り残される。なんとかこの孤独生活を解決したいが、良い案はないだろうか、と相談したらしい。『出島に誰一人女性という女性はいなくなるのですから、一体、私たちにお茶を入れてくれる人は誰であるとお思いですか』と質問したという[135]。

こうして正式に許可されることになる出島出入りの日本人女性の愛と悲哀を描き出そうとした小説が、吉村昭の『ふぉん・しいほるとの娘』で

[135] Leonard Blussé: *Bitter Bonds---A Colonial Divorce Drama of the Seventeenth Century* (translated into English by Diane Webb, first published in Dutch by Uitgevrij Balans, Amsterdam, 1997; the English edition, published by Markus Wiener Publishers, Princeton, 2002). p.8. オランダ語の otenbaar［オテンバール］から日本語「おてんば娘」が生まれた、と著者は指摘する。

ある[136]。帰国したシーボルト (P.F. von Siebold) からの書簡を受け取った場面が、次のように描かれているのを見ても、歴史小説家の執筆意図が分かる。

> 彼女は、再び伯父の家に閉じこもってシーボルトのことを考えぬようにつとめたが、七月に入って間もなく画工デ・フィレニュフェの使いの者が出島からやってきて、彼女に小さな木箱をとどけてくれた。
>
> 箱の中には、シーボルドからお滝とお稲にあてた手紙が入っていた。それは拙い文章であったが、日本語の片仮名で書かれていた。シーボルトは、日本に滞在した六年の間に日本語の習得につとめ、片仮名と簡単な漢字を書くこともできるようになっていた。
>
> お滝は、息をのむようにして文字を眼で追った。
>
> ニチニチ、ワタクシカ、オマエ、マタ、オイ子の、ナヲ、シバイシバイ、イフ
>
> その文章は、「日々、私は、お前、また、おイネの、名を、しばしば、言う」と読めた。
>
> お稲の眼に、熱いものがつきあげてきた[137]。

先に言及したAlbuquerqueによる次世代誕生作戦と、オランダ式単身赴任者対策は、根本的に性格を異にしていて、海外統治方法の違いを例示している。海外拠点の街づくりには、更にもう一つの形態がる。母国人女性と

---

136 吉村昭著『ふぉん・しいほるとの娘』(上下2巻、新潮文庫、平成二十一年二月二十五日八刷)。

137 同上書、上巻、p.418. 『古賀十二郎——長崎学の確立にささげた生涯』(長崎文献社、2007年) の中の第四部第八章「吉村昭の作品との関係」(pp. 199-238) に於いて、歴史小説家や伝記作家に提起されている悩ましい問題は、史実と私的資料の扱い方、それに作家の創作意欲と良心に関わるものである。熱心に史実を探究しても、専門の歴史家でないのであるから、多少とも事実の誤認や見落としは避けられないものの、作家の良心とテーマは貫かなければならないと思った。日本人漂流民を扱った三浦綾子の『海嶺』は、史実の太い輪郭を守りながら、作家の意図するテーマである音吉や岩松なりの求道とか神的籠を想像裡に肉付けできているので、史実・資料・創作の関係を考える上で、ふさわしい作品と言える。

の正式な結婚がある。これについてはバタビアに赴任した初期総督 Coen などは、1619 年の本国宛 VOC 宛書簡に於いて驚くべき現象を以下のように伝えた。

> When Jan Pieterszoon Coen found Batavia in 1619, he wrote to the collective directorate of the Company, the Heren XVII (Gentlemen Seventeen [of the VOC]), that he would like a couple of shiploads of "marriageable young women"; four to five hundred Dutch girls from ten to twelve years of age, accompanied by a few older ones. "Without women the male sex cannot exist," he wrote. Otherwise how could the population grow? It was as though he had ordered a shipment of wombs. A contemporary tells us that the garrison of Batavia welcomed the first shipload of "young women" on board the East Indiaman *'t Wapen van Hoorn* as they a shipment of "stewed pears." Coen had his opinion of these ladies, and re recorded in his next letter to the Heren XVII: "It was an ungodly bunch who made a lot of trouble, and some of them even behaved worse than the stupidest beats, causing horror and outrage among many of the natives, who not seeing any other, better women, thought that the entire Dutch nation must be just as godless, unreasonable, and ill-mannered as these creatures." In the following years as well, according to Cohen's successors, the supply of "livestock" from Holland remained woelly inadequate, both in quality and quantity.
>
> At some point in the 1630s, the Heren XVII resolved to try a different method. They decided that henceforth, "the following the example of the Portuguese," the colonies in the Indies must be supplied with women from Asian stocks. With an eye to cultivating a loyal citizenry, the colonial authorities now began to encourage marriages with native women. "The Indies are too large for us to possess alone, and this country is too small to send out the great numbers of people required by colonization," wrote the Heren XVII with suspicious modesty. It was obviously time to take a

> different tack. Resolutions were passed that discouraged as much as possible the sending of Dutch girls---"they do not produce any enduring fruit"---and encouraged the influx of Asian women "with whom one can produce clever, robust children who survive."[138]

東洋進出に乗り出した先行者のポルトガル人であれ、後発者のオランダ人であれ、旧教と新教の教義による最初期アプローチを異にしつつも、前進基地の維持にあっては、結果的に辿った選択の道は同じであったと言えるであろう。現地女性との結婚を促進し、増加する混血次世代に、忠誠と繁栄を託したわけである。ポルトガル系都市澳門[139]、それにオランダ系都市バタビアにだけにとどまらず、マニラに於いてもスペイン系父親と現地女性との間に、次世代形成が進展した。政策に沿った形での促進である。澳門、バタビア、長崎のうち、断るまでもなく例外は長崎である。それでも個々には日本人女性とポルトガル人との間の結婚が、排除できるものではなかった。C.R. Boxer は次のように伝えているからである。

> As for the Portuguese, they were forbidden to reside permanently in Japan, and only allowed to come to Nagasaki for purpose of trade. During their stay in the port, they had to henceforth [after 1623] to lodge with the non-Christian inhabitants of the town, and could no longer reside with their coreligionists, who were still numerous in Kishu despite the increasing severity of their persecutors. Not only so, but men who were married to Japanese women were compelled to leave their wives and girl children behind, taking only their sons, "which rigorous edict of the Emperor caused a great and pitiful outcry between those husbands and wives of fathers and children who were thus forced to separate one from another," as a sympathetic Hollander wrote in 1624. At the same time Japanese trading

---

138 Ibid., Leonard Blussé: *Bitter Bonds,* pp.14-15.
139 "The Macanese," *Review of Culture* (Intutituto Cultural de Macau, 1994).

junks were forbidden to employ Portuguese pilots, thus ending a practice who had been not only common but obligatory for native shipping bound for Indo-China and the Philippines some twenty years before… Thus in practice there were always some Portuguese left at Nagasaki the whole year round, although their movements were closely watched and they were often treated little better than prisoners[140].

4. 澳門に先立つ中国沿岸拠点

Mammon は、「富の神」とか「強欲の神」として英和辞典に訳されている。God はキリスト教の「父なる神」である。海外進出に乗り出したポルトガル人は、相対する価値観に動かされ、これら二つの異なる「神」を追い求めた。喜望峰に達しない頃から、アフリカ沿岸の占領地で黒人奴隷と金を買いあさっている[141]。同時に Prestor John 教団の救出作戦に乗り出すとか、黒人のキリスト教帰依にも熱心であった。Mammon と God の二頭神に仕えるポルトガル人商人と宣教師の背後には、イエズス会の日本活動に典型的に表れていたと、C.M. Boxer は一例を挙げて述べている[142]。

インド Goa を 1510 年に占領して足がかりを作ると、現在のシンガポールに近い Malacca を 1511 年 6 月中旬頃に制圧し[143]、1517 年には中国海域に入った。San-shan 島（または St. John、上川島）に入港する。1552 年にそこでザビエルが他界したように、未だ澳門は形成されていない。

140140 C.R. Boxer: *Fidalgos in the Far East 1550-1770, Fact and Fancy in the History of Macau* (Martinus Nijhoff, Hague, 1948), pp.101-2.

141 Ibid., Danvers, vol. I, pp.22-25.

142 Ibid., Boxer: *Fidalgos in the Far East 1550-1770,* p.68.

143 Ibid., Danvers, p.222.

Among the captains who accompanied Lopo Soares de Albergaria to India, three---viz., Ferão Peres de Andrade, Antonio Lobo Falcão, and Jorge Mascarenhas, were under the instruction to proceed to China with the view of opening up a trade with that country. The governor selected Fernão to command in this enterprise, and he, accompanied by one Thomé, started from Goa on this service in February, 1516. This expedition proceeded as far as Pacem, when, finding the monsoons unfavourable to their further progress, Peres went back to Bengal. From thence he sailed to Malacca, and leaving there again in August, he arrived off the Bay of Cochin China, where the fleet lay for several says, but as the winds were still contrary he returned again to Malacca. Fernão Peres left Malacca once more to Pacem, where he took in a cargo of pepper, with which he returned to Malacca. Starting thence again, in June 1517, with seven ships, he made a fair voyage to the "Islands of China," and anchored off Veniaga (Tamão, on the north-west coast of the island of Shang-ch'wan, a renowned harbor, to which foreign and Chinese merchants resorted for the sake of disposing of their respective investments) about eighteen leagues distance from Canton[144].

そのほか更に、中国沿岸に北上を繰り返すあいだに、ポルトガル交易船は、現在の上海や台湾に近い寧波（Ning-po、Liampo）にもしばらく安定的な寄港地を築いた。中国、シャイアム、ボルネオ、琉球等、各地からの貿易船で賑わう港街がそこに出現した。とりわけ日本との間の交易が始まる 1542 年種子島発見からは発展の一途をたどり、二つの教会、市庁舎、

---

144 Ibid., pp.337-8.

二つの病院、それに一千軒の住宅を擁するまでになったが、詰らない乱暴な事件のために処罰されて、1545年からはすっかり衰退した。そこで代わって登場するのが、澳門（Macao, Macau, 澳門）の順番となる[145]。

5． 居座り組による居留地形成

寧波を失ってからのポルトガル商人は、香港・澳門・広東の海域に点在する島々に寄港地を求め、そこから広東との間の交易を展開した。ザビエルの亡くなった小さな島もそうした寄港地の一つであった。他にも1549年以来ランパカオ（Lampacao）や後年のアヘン島リンチン（Lintin）もある。六百人前後のポルトガル人が、前者に常時住んでいた、とイエズス会神父が本国に知らせている。1554、1555年には前者の島から三隻のポルトガル貿易船が日本に向かった。バスコ・ダ・ガマの息子は、こうした形で四度も日本に渡っており、先に1552年には鹿児島湾口の山川湊に入港している。

徳川の時代に入るまでは、こうして日本は開国していたのであり、外国船の日本渡来、それに大型和船の海外渡航が、盛んに行われていた。日本交易に欠かせない交換物資は、中国産の上等な絹と日本産の銀であった。それでポルトガル商人としては、なんとしても中国の南部に足がかりを欲しいところである。

澳門居留地の形成は、軍事的な侵略や外交的な条約によらず、必要に迫れたポルトガル商人の「居座り」と、中国南部の地方政府の黙認という形で、1557年に発足した。中国側が黙認したのには、give & take の相互利益

145 上海市歴史博物館等編『中国的租界』（上海古籍出版社、2004）。

があったからである。海賊船に手を焼いてきた中国役人にとっては、同じく倭寇の被害に遭遇するポルトガル船が、沿岸の防備に協力してもらえるというのであれば、内心ありがたい (arigato / obligato)存在として魅力的に見えたためである。それは最初のきっかけだけであり、旺盛かたんな倭寇と商売熱心なポルトガル人商人との間に結託や雇用さえも、後には見られるようになる。後発のオランダ艦隊の提督などは、以下のような観測を記録しているほどになる。

> A couple of years later, the Dutch admiral, Cornelis Matelief de Jonge, was cruising off the Kwangtung coast and fell in with a Wako junk, whose crew he describes as follows. "These Japanese were all brave men and looked like pirates, as indeed they were. They are a very determined race, for when they see that they will be overwhelmed by the Chinese, they cut open their own bellies rather than fall alive into the hands of their enemies and be tortured to death. This was not Matelief's first experience of Japanese determination. His failure to take the Portuguese stronghold of Malacca in the previous year was due largely to the bravery of a Japanese contingent serving with the scanty garrison.[146]

澳門周辺の海域に群がる日本人や中国人の海賊が、増えるにつれて、地元の中国政府役人は、日本人の排除に乗り出したこともある。1613 年のことである。

> The juxtaposition of Chinese, Japanese, and Portuguese at Macao was also a source of acute embarrassment to the last named, who were

[146] C.. Boxer: *The Christian Century in Japan 1549-1650* (University of California Press, 1951), pp.268-9.

confronted with another untimatum from the Kwangtung provincial authorities in 1613. It was presented in the name of Viceroy Chang Ming-hang, and one of the paragraphs ran as follows: "You must not harbor Japanese. Since you are Westerners, why do you employ Japanese when you have Negro slaves to serve you? In this way they multiply. The Law ordains that when there are to be found anywhere, they are to be killed out of hand; yet you persist in harboring these people, which is like rearing tigers. I went to the port where I saw many and ordered their immediate expulsion to the number of ninety or more. I ordered this act to be engraved in stone. Now that they are expelled, you may live quietly, but I fear that though these are gone you may bring others. When you go thither to trade, you must not bring back any, either great or small; and whosoever does so will be punished according to Chinese law by having his head cut off."[147]

6. 澳門盛衰と日本人

澳門繁栄の基盤は、16 世紀中頃から始まる日本との貿易によって形成されるが、鎖国によって締め出される 17 世紀中頃までの僅かな期間でありながら、莫大な富をもたらした。澳門史研究家の一人、C.R. Boxer が、その著書 *Fidalgos in the Far East 1550-1770* に於いて、中国製絹と日本産銀について最初に触れている。「日本製絹の方が、中国製絹よりも高い評価を当然のことながら受けている今日からすれば、不思議に聞こえるかもしれない。16 世紀にはこれと全く反対の事情にあった。日本の裕福な階級の人々にとっては、中国製生糸や絹織物をより好んだ。これと良く似たケー

147 Ibid., Boxer: *The Christian Century*, p.299.

スは、英国製綿製品である。スペインやポルトガルでは、自国製の綿もありながら、英国製綿がより好まれた時代なのである。」[148]

澳門繁栄と日本貿易に関する初期英国人旅行者の観察記録も興味深い資料である。1585 年から 1591 年にかけて東洋を旅行した Ralph Fitch の残した記録であり、第三者の立場からポルトガル人の日本交易を客観的に述べていると思われる。

> When the Portugales goe from Macao in China to Japan, they carrie much white silke, Gold, Muske and Porcelanes: and they bring from thence nothing but Silver. They have a great Carake which goes thither every yeare, and shee bringeth from every year above 600,000 crusadoes; and all this silver of Japan, and 200,000 crusadoes more in Silver which they bring yearly out of India, they imploy to their great advantages in China; and they bring from thence Gold, Muske, Silke, Copper, Porcelaines, and many other things very costly and gilded.[149]

それよりも少し後に日本に登場する英国人の William Adams (三浦按針) が[150]、同じような観察を記しており、本国宛書簡の中で日本との交易を次のような言葉で勧めている。「英国商人が中国との交易関係に入り込めましたら、莫大な利益に与れるはずです。ロンドンの東インド会社は、わざわざ金貨や銀貨の送金をしてこなくても、中国製の絹を日本に売れば、日本では豊富な金や銀を簡単に入手できますからね。」[151]

---

148 Ibid, Boxer, *Fidalgos in the Far East 1550-1770,* p.6.
149 Ibid.
150 かって海洋王国の名前を欲しいままにした英国では、次世代の青少年を対象に書かれた海洋冒険小説の宝庫とも言えるが、William Adams の伝記には次のものが広く読まれたようである。William Dalton: *Will Adams---The First Englishman in Japan---A Romantic Biography* (James Blackwood, London, n.y.).
151 C.M. Boxer: *The Great Ship from Amacon---Annals of Macao and the Old Japan Trade,*

C.M. Boxerによれば、この同じWilliam Adamsは、将軍家康から受けた信頼を頼りにして、後発者の英国人を擁護するあまり、先行者のポルトガル人やスペイン人の排除を画策するようになる。ポルトガル商人や宣教師の締め出しが、ここにも始まっているのである。

> This year [1613] also saw the appearance of a third European nation in Japan, where Captain John Saris of the Clove founded an English trading post at Hirado in June. The English were not destined to prove very dangerous commercial rivals to the Portuguese; but William Adams who had by now become the confidential adviser of Tokugawa Ieyasu on foreign affairs. Adams was a strong Protestant and used his position to foster Japanese fears of the subversive activities of the Roman Catholic missionaries. This was more unfortunate for the Portuguese and Spaniards, as their most influential representative, the Jesuit Padre João Rodrigues Tçuzu, fell into disgrace with Ieyasu in 1612, and was exiled by his orders to Macao.[152]

10年ほどの僅かな期間で日本との交易から、自主的に撤退することになる英国。それにつづき鎖国政策によってポルトガル商人たちは、日本からの追放を余儀なくされるが、澳門自体は衰退の下り坂を辿ることになる。そんな中にあって新しい発展要素が出現してきた。「広東方式」（Canton System）と呼ばれる中国独特の貿易方法である[153]。広東十三行の商館生活を半年、残り半年は本国に帰国する、という厳しい規律の上に成り立つ貿易関係であったので、帰国せずに澳門で半年暮らす各国商人の居住者の数

1555-1640 (Centro de Estudos Historicos Ultramainos, Lisboa, 1959), p.3.

152 Ibid., p.82.

153 Paul A. Van Dyke: *The Canton Trade---Life and Enterprise on the China Coast, 1700-1845* (Hong Kong University Press, 2005).

が増加した。他方ではバタビアの重要性が増した。

日本から締め出されたのは、澳門のポルトガル系商人やマニラのスペイン系商人ばかりでなく、二つの「神」のもう一方に従うカトリック教会神父たち、それに日本人の信徒とその家族多数を含んでいる。1636年にはポルトガル人と結婚していた日本人女性と子供たち、総勢で287人が追放されて、澳門に移り住むことになった。澳門の日系住民に生まれた子供のうち、John Pachecoは、1668年3月8日の誕生であり、神学校で学んだのち1694年に聖職者の列に加えられたが(to be japanized)、1725年4月4日に他界している[154]。この日系神父が日本語を話せたかどうか分からない。

澳門に残る世界遺産の一つ、1640年完成のThe Church of the Mother of Godの正面壁（façade）は、祖国での迫害から逃れてきた日本人信徒が建築に協力した痕跡を残していることで広く知られている[155]。澳門に日本的名残を留めているものは、澳門形成期の繁栄基盤、建造物、それに墓石だけでない。澳門に渡った日本人女性との結婚による混血澳門人 (the Macanese or *filhos da terra*)の社会が存在した、とする以下のような見方もある。

> For Álvaro de Melo Machado (1913), the Macanese are the fruit of crossings with Japanese women and with women from Malacca, and at least recently, with Chinese women as well[156].

16世紀半ばから17世紀半ばにかけての約1世紀の間に、澳門に出現していた日本人街は、今日、どのような痕跡を残しているのであろうか。例えば食べ物である。日本語に入ったポルトガル語の「パン」のように、現

---

154 Manuel Teixeira: *The Japanese in Macau* (Instituto Cultural de Macau, 1990), p.27.
155 Ibid., pp.9-14.
156 Ibid., "The Macanese," *Review of Culture* (1994), p.14, p.60n.

地の言葉に溶け込んだ日本語は残っていないのであろうか。上掲引用文の著者 Álvaro de Melo Machado が例示しているものは、魚の澳門料理 *Furusu* 位のものであるらしい[157]。

澳門日本人街に於ける日本語自体の衰退振りを明らかにしていると思われる一つのエピソードを Fr. Manuel Teixeira が伝えている[158]。1685 年に起きた出来事であり、ここにはキリシタンと漂流民が、歴史的に遭遇している点でも興味深い資料である。

> On March 10th, 1685, a Japanese junk was discovered stranded at Macareira Island (formerly Dom João Island), near Macau. When the Portuguese authorities went to investigate the junk, they also discovered 12 Japanese sailors who, on their knees and with raised arms, begged the Portuguese to save them. They were frightened and hungry. On board the junk 74 bales of tobacco were found. They were taken to Macau for questioning but it was impossible to understand them. The Japanese were afraid that they would be killed by their Portuguese captors, instead they were given plenty of food which they ate ravenously, as they were starving. In the meantime, an elderly Japanese lady was found and she was brought to speak to the Japanese. She, however, was unable to understand what they

---

157 Ibid., p.47.

158 澳門に奉職中の Teixeira は、タイパ島までの長い橋を歩いて渡るのが日課であった、と聞いていたけれど、澳門滞在の記念に発行された次の小冊子には、実際に橋の上をあるく神父の写真が掲載されている。また、澳門に在住した日本人に関する研究分野では、この Teixeira 神父のほかに[「文徳泉神父——作者及作品 *Father Teixeira the Man and his Work*」(1992)]、澳門大学日本語センターに勤務されておられた福岡出身の宜野座伸治先生がおられるくらいであり[「澳門物語」(澳大日本研究中心、1999 年)]、とりわけ戦中の澳門在住日本人に関する資料を英国公文書館で探索し研究したいと言われていたけど、惜しくも志半ばで他界されてしまった。

> were saying initially, as she had forgotten her native language. Slowly, she was able to understand their story. The Japanese had lived in Ise, in Japan, and had lived in a street called Kamijashiro. The captain, whose name was Tafek, was the owner of the sailing vessel. The names of the members of the crew were: Tarobe, Gempachi, Ginzabro, Diyomu, Shoza, Yafek, Sankiro, Jero and Jubi[159].

厳しい鎖国政策下の日本に向けて澳門から発信した漂流民の帰国計画は、後述するように、1837 年のモリソン号が最も広く知られている。上掲引用文で Teixeira の伝える日本人漂流民は、長崎に無事に 1685 年 7 月 3 日に送り届けることができた。言うまでもなく、日本に恩を売って、貿易再開の糸口をつかみたいのが、出資者の澳門在住ポルトガル商人の隠された意図であった。漂流民を受け取ったことは、モリソン号との大きな違いであり、しかし貿易再開の希望を絶たれた点で、両者は共通している。ポルトガル人が長崎貿易から締め出されて 47 年になり、それにモリソン号日本渡来に先立つこと 150 年余りの出来事である。

1685 年と 1837 年の漂流民送還計画は、わずかな具体例にすぎず、長くつづいた鎖国体制のもとで、澳門に移送されてきたものの、帰国の果たせない夢を抱きながら、異郷の地で他界する運命の漂流民がその後も続いた。

小説『海嶺』下巻に於いて、三浦綾子は、帰国できずに澳門で暮らした日本人の街と、死後の埋葬地に関連する場面を描いている。いずれもそれなりに歴史的根拠がありそうに思われるが、澳門史の英文文献には、詳しい言及を未だ確認できていない。断るまでもなく小説であるのだから、作者の創意や想像が加味させているに違いない。

---

[159] Ibid., Teixeira: *The Japanese in Macau* , pp.59-60.

「五人はいつしか石畳の細い通りを歩いて、セント・パウロ寺院跡に向かっていた。細く曲がりくねった石畳の道である。両側に人家が並び、八百屋、小間物屋、陶器店、薬屋などが目につく。
「『ここが日本人町です』
「ギュツラフが岩吉たちに言った。」[160]
「ギュツラフ婦人に教えられたとおりに、坂を登っていくと低い平らがあった。大きな菩提樹が幾本かり、仏桑花の花がここにも群れていた。日本人の墓と言われる墓地は大きな墓地の片隅にあって、日本風の石碑が立っていた。」[161]

二、三十もあるという日本人墓の墓原が、倭寇のものなのか、日本人町の住民のものなのか、小説の説明だけは判明しないが、これとは別に、日本から追放されて澳門で他界したキリシタンの墓が多く残されている。

7. 追放されたキリシタンの埋葬

1560年にイタリアに生まれて1577年にイエズス会に入会、東洋伝道のためにリスボンからゴアに向かい、1581年4月8日に到着した神父ニコラオ(Fr. Nicolao)は、高名なマテオ・リッチ (Mateus Ricchi)とともに澳門へは1582年8月7日に到着している。その後、神父は、1583年7月14日に澳門を発ち、長崎到着が7月25日になった。画業を得意とする同神父は、1601年に有馬で絵画クラスを開き、1603年から1613年まで長崎で別の美術学校を運営した。キリシタン迫害により、神父は、日本人の弟子たちや

---

160 三浦綾子著『海嶺』上中下（角川文庫、平成二十年）、下巻 p.78.
161 前掲書、p.130.

信者を伴い、1614 年澳門に難を逃れ、1626 年 3 月 16 日に他界するまで美術学校を澳門で開設していた[162]。

師に同伴するか、相前後して澳門まで渡来した日本人弟子たちのなかで、Mancio Taichiku は、早くも翌年 1615 年 1 月 20 日に異郷の地で亡くなり、聖パウロ聖堂内の聖ミカエル聖壇近くに埋葬された。帰国できない状況下に置かれた弟子ばかりであったので、他にも Pedro Chicuam (1622 年 11 月 28 日死亡)、Tadeu (1627 年 11 月 16 日死亡)も、多くの日本人信者たちと同様、聖ミカエル聖壇近くに埋葬された[163]。

ニコラオ神父の日系弟子たちのなかでも、活躍して最も有名になった画家には、Jacob Neva またの名を Jacob Nuia（中国名 Ni Yi Cheng）がいる。中国人の父親と日本人の母親の間に生まれたハーフであるが、1579 年日本で生まれた。神父のもとで西洋絵画を学び、澳門、後年には北京で活躍した。イエス・キリスト、聖母マリアを描かせたら当時、右に出るものがいないほどの腕前となり、マテオ・リッチなどは、聖母マリアの絵を中国皇帝に献上したほどである。1638 年 10 月 26 日に澳門で他界し、他の日本人画家たちの眠る聖ミカエル聖壇近くに埋葬された。

1638年になると日本から追放された287人の日本人男女が澳門に到着した。その多くは死後同じく聖パウロ聖堂に埋葬された[164]。

日本に帰国できずに澳門で他界した日本人街の日系住民、それに日本から追放されたキリシタンとその家族、日系混血児は、徳川幕府により次第に強化されていく厳格な鎖国政策とキリシタン禁制の犠牲者である。開国と帰国を待ち望みながら異郷の地で死んだ。日本開国の動きを自発的に行動に起こせないまでも、彼らの実在と生活は、外圧に頼る欧米諸国出身の

---

162 Ibid., Teixeira: *The Japanese in Macau* , pp.15-6.
163 Ibid.
164 Ibid.,

商人や宣教師の関心を集めずにはおかない。

しかし他方では、こうした悲運を招いた一つの原因に、彼ら欧米諸国の商人や宣教師の内部対立、覇権争いを指摘しなければならないのである。すでに一つの例として William Adams を挙げた。

東洋進出の先行者であるポルトガルとスペインは、同じカトリック教会に属しながら、国同士でも、更に教会内部においてさえも、フランシスコ派とイエズス会との間に激しい対立が起きている。夏目漱石の恩師で、日本歴史研究家のジェームス・マードックによれば、日本における抗争は、ほとんど短剣で争う死闘に近い熾烈な性格であったという[165]。

> The simple truth of the matter is that, from 1594 down to 1614 at least, between Jesuits and Franciscans in Japan it was all but what war to the knife, just as it was in Paraguay a few years later on. No amount of Church historianizing will suffice to conceal that truth from anyone who takes the trouble to spend some little time over the respective letters sent by the rival Order and Society to their respective headquarters. Even in the very midst of throes of the persecution of 1614, Franciscans and Jesuits---both supposed to have been evicted from Japan---fell into the most unseemly strife over the appointment of a Bishop (Çerqueyra died in 1614) who had no longer any diocese to left to him.[166]

それに海外伝道活動の資金は、Mammon 崇拝者の商人にだけ頼るのでなく、イエズス会では、本来的に矛盾し合うはずの Mammon と God を奇妙な形で結合させようとしたことも、外部に混乱や対立関係を生みだす結果

---

[165] 夏目漱石著「博士問題とマードック先生と余」『東京朝日新聞』（明治 44 年 3 月 6 日～8 日）。

[166] James Murdock: *A History of Japan* (Routledge & Kegan Paul, London, 1949, in 3 volumes), vol. 2, pp.490-1.

となったと言えるであろう。

後発者の英国とオランダは、プロテスタン信仰の国柄であり、カトリック教会に属する先行者との間にも対立が生じてくる。こうして旧教国同士の間、教団同士の間、更に加えて新教国と旧教国の間、新教国同士の間、商人と宣教師の間、というように日本を舞台にするだけでも、時代の推移とともに対立と抗争が展開したのでは、平和裡の貿易関係を日本との間に維持することが、どの欧米諸国にとっても難局を伴いがちであった。

こうした対立構造は、日本の鎖国政策を生み出す原因の一つになったけれど、やはり鎖国政策をひいた中国、それも 1807 年に澳門・広東へ到着した英国人宣教師ロバート・モリソン(Robert Morrison: 1782-1834; Grave No. 141) の置かれた状況にも鮮明に現われている。

8．　ロンドン宣教師会の中国派遣第一号ロバート・モリソン

広東方式に従い澳門で半年を送る欧米人は、時代の推移とともに、国籍も多彩となり、人数も増加した。広東の商館自体、十三行(十三の会社)と呼ばれたように、大ざっぱに言えば十三カ国の欧米諸国から渡来した国策会社や個人商会が、それぞれ国別に各商館で半年を暮らしながら、中国人豪商を相手に商談した。長崎出島がそうであるように、中国貿易の唯一開かれた公式ドアは、広東の十三行でしかないのであるから、広東に欧米諸国の商人や商社が群がるようになる。これは時代の推移ともに自然な発展であった。旧教国のポルトガルやスペインに肩を並べて競い合う新教国代表の商人たちの中で、威勢のよい英国人とオランダ人、つづいて頭角を現したアメリカ人、それにスウェーデン人、デンマーク人、ドイツ人等に加えて、ユダヤ人やインド人商人まで登場するようになる。

なかでもインドを掌握した英国東インド会社と英国個人商人たちは、いまだ香港を占領しておらず、広東と澳門に中国貿易の前線基地を置き、中国市場から絹ばかりか茶を大量に仕入れたい状況に傾斜していく。対比的な二つの「神」を追い求めるのは、カトリック教国ばかりでなく、後続する新教諸国の場合にも、やはり類似の現象を呈することになる。絹や茶の代金を銀貨や金で支払う代わりに、インド産アヘンによって支払を済ませるMammon商人。他方には、単独で中国伝道に乗り出したモリソン宣教師。この構図は余りに対比的に見える。モリソンは1807年9月4日に着任して、25年ほどの滞在の間に中国語独学、辞書編纂、聖書中国語訳を完成させるが、1834年8月1日に澳門で他界した。

1807年9月4日に澳門に沖に到着し、9月7日に広東入りしたモリソンを待ち受けていた対立構造。それは主に三つの柱から成り立っている。三者に対する油断のない警戒が必要となった英国東インド会社の社員、カトリック教会の神父、それに中国政府の役人、の三者であったから、プロテスタント宣教師の第一号として現地に、単身で潜入したモリソンは、三者に対する不断の警戒が欠かせなかったようである。広東から本国のロンドン伝道協会本部に宛てた第一信に付させた住所が、広東の米国商館であったり、もともと中国渡航そのものが米国経由になった点からして、母国の英国東インド会社による中国伝道の妨害があったためである。Mammon追及の側に立つ英国東インド会社は、God追及者のモリソン宣教師の中国渡来を迷惑に思っている。米国側商人はこの点で違っている。以下にはモリソン伝第一巻から、貴重な内容である第一信を引用し、書簡資料そのものに対立構造について言及させることにする。

Canton, Sept. 7, 1807. American Factory

My dear Sir

By the good hand of God upon me, I am at length brought to the place, whither your wishes and prayers have followed me. In 113 days from the time of leaving the coast of America, the ship Trident anchored in Macao Roads. In the Indian Ocean we experienced very heavy gales of wind. But 'the Lord on high is mightier than the noise of many waters, year, than the mighty waves of the sea.' He brought us safely through. I have detailed in a diary the circumstances of the passage, and will follow it to Mr. Burder [of the London Mission Society]. Last Friday evening I went on shore at Macao, and unexpectedly found there Sir George T. Staunton [Chinese-speaking Interpreter for the British East India Company], and also Mr. Chalmers [Chinese-speaking Interpreter for the British East India Company]. I waited on the latter the next morning, and presented to him Mr. Cowie's letter of introduction. Mr. Chalmers said he wished me success with all his soul, 'but,' added he, 'the people of Europe have no idea of the difficulty of residing here, or of obtaining maters to teach.' He then mentioned the circumstance so generally known, that the Chinese are prohibited from teaching the language, and that under the penalty of death. However, he at last said that he would converse with Mr. Roberts, Chief of the English Factory, and also with Sir George. I then waited on Sir George, and presented Sir Joseph Bank's letter. Sir George spoke likewise of the difficulty of the attempt; reminded me that the Company forbade any person to stay but on account of trade, but promised that he would do what was in his power. The residence at Macao is especially difficult, owing to the jealousy of the Romish bishop and priests.

This morning I waited on Mr. Carrington, Chief of the American Factory; he offered me for the present a room in his house, which I accepted; but he and Mr. Milnor, to whom I had also letters from America, thought that I should be more retired in the residence of the latter, Mr. Carrington the Consul's house being much frequented. For the present, therefore, I shall

reside with Messrs. Milnor and Bull, Supercagoes for the ship Trident, in which I came out. Here, from the knowledge which I at present possess, I shall not only live more retired, but also at less expense. It would be impossible for me to dwell amidst the princely grandeur of the English who reside here.

I hope the Company's servants will not feel it their duty to put any stumbling-block in the way of my continuance. There is something to fear from the jealousy of the Americans and English. They are by no means cordial. Till the arrival of Mr. Chalmers and Sir George at Canton, which will be in about a month's time, I will, in my room, apply to the study of the language from my books. It appears at present, that £200 per annum will scarcely cover the expense of living here, exclusive of any fee to a teacher of the language. Mr. Lake, from Pulo Penang, is, I understand, at Macao, and purposes to return to England with the Company's ships, only one of which has yet arrived[167].

この書簡を使って澳門生活の開始を説明するAustin Coatsは、他の追加資料に基づいて、二、三の興味深いコメントを付けている[168]。前掲引用文で名前の挙がっているMilnorとBullは、米国系商社の荷受人であり、十三行のうちthe Old French Factoryと呼ばれた商館に入っており、モリソンは、その建物のなかでも地下室の一室にひっそりと暮らしたようである。更に、英国東インド会社の社員のような贅沢三昧の王侯貴族的生活を好まず、当初は使用人さえ置かなかったようであるが、十三行生活者は市場に自ら出向き買い物を禁じられる状況に置かれていた。いくら地下室の慎ましい生活者であっても、こうした現地事情のために、数日後には、やむなく五人の使用人を雇う羽目になる。料理人、給仕のボーイ、雑役夫、近パ

[167] Mrs. Morrison: *Memoirs of the Life and Labour Robert Morrison* (Longman, Orme, Brown, Green, and Longmans, London, 1839, in 2 volumes), vol. 1, pp.152-4.

[168] Austin Coats: *Macao and the British 1637~1842---Prelude to Hongkong* (Oxford University Press, Hongkong, 1966), p.109.

ラドール、それに中国語教師。前掲引用文に於いて、これでは予算内に生活費を収められない、と述べているのは、こうした十三行特有の生活スタイルを避けられない事情を示唆していると思われる。

9． 新教徒墓地の新設[169]

澳門に在住する新教徒の増加にともない、専用墓地の必要性が高まる。最初のものは、十八世紀後半に設置された旧墓地、ミーゼンバーグ丘墓地(The Meesenberg Hill Cemetery)であったが、澳門半島の北方の端に位置している丘であり、もともと澳門在住のオランダ人一家の家名に因んだ場所である。土葬であった。英国での伝統的な埋葬方法を現す表現に、5 feet deep がある。二百年前の澳門に於いても同じに、人間の背丈よりも深い 180 センチもの穴を掘り下げた。モリソン夫妻の死産した長男ジェームスは、そこに最初に埋葬された。

モリソン博士の夫人メアリー(Mary Morrison: 1871-1821; Grave No. 142)は、名門の出身であったが、医師 John Morton を父に持つ名門の出身者であったが、北アイルランド駐留英国軍の軍医総監に就任する予定の父親にともない、長い休暇のために一家で澳門に八カ月を過ごす間に、モリソンと 17 歳で結婚した。南国澳門の気候は、お産に向かう母親の神経を苦しめノイローゼに陥ったために、長男の死産、つづいて 1812 年に誕生した長女（Mary Rebecca Morrison）と 1814 年誕生の二男ジョン(John Robert Morrison: 1814-1843; Grave No. 143)をつれて英国へ帰国している。五年の滞

---

[169] 澳門新教徒墓地の調査・補修・保存に尽力したのは、Lindsay and Mary Ride 夫妻であった。丹念な調査の結果を数点の著述にまとめているが、なかでも重要なものがは次の二つである。Lindsay and Mary Ride: *An East India Company Cemetery---Protestant Burials in Macao* ((Hong Kong University Press, 1996). Lindsay and Mary Ride: The Voices of Macao Stones (Hong Kong University Press, 1999).

在の後に体調の整った夫人メアリーは、1820年に澳門へ戻ってくるものの、一年足らずのうちにコレラを患い身籠ったまま、1821年6月10日に他界した。

残されたロバート・モリソンの建立した妻の墓石には、次のような文章が彫りこまれている。"SACRED to THE MEMORY of MARY, WIFE OF ROBERT T. MORRISON DD, Who, erewhile anticipating a living Mother's joy suddenly, but with a pious resignation, departed this life after a short illness of 14 hours, bearing with her to the GRAVE her hoped-for child."

英国東インド会社では、これを契機に澳門新教徒墓地の新設に踏み切った。それには幾つかの理由がある。一つには、モリソン自身が、その頃までに会社と地域社会で、深い尊敬を集める人物になっていた。中国語研究の第一級権威者、それに会社の重要な中国語通訳の役割を担う。それにモリソン夫人が名門の出身でもあったためでもあろう。

既に言及したように、新設墓地の片隅にモリソン家の墓が数基並んでいる。妻メアリー、旧墓地から移された長男、モリソン自身それに次男ジョンのものである。この墓地全体が、モリソン屋敷の趣を呈しているように感じられる。モリソン家石棺の他に、正面入口の左側には瀟洒なモリソン・チャペルが慎ましく佇んでいる[170]。更に、公園のような墓地内の小道を歩いていくと、生前からモリソンと交流のあった人々の墓石と、次々と出会える。

大きな石棺や墓碑の合間に、時々、ひときわ小さな墓を見出すことがある。その一つに刻まれた墓碑銘から、ひときわ鮮明に輝き出ている文字が、印象的であった。モリソンの友人宣教師メッドハースト夫妻の名前(Walter

170 モリソン記念礼拝堂については次の小冊子が詳しい。Jean Crouch-Smith, BJ Lofland, Clarice Nobbs and Merryl Uebel-Yan: *Macau Protestant Chapel---a Short History* (Oriente, Macau, 1996).

Henry and Ann Isabel Medhurst)が記されていたから、最初に目にした瞬間は実に驚いた。本人のものでなくて、澳門でおそらく命名されるまでに、1854年11月9日早死した娘の墓石である(Grave No. 35)。

澳門在住のモリソンにしても、バタビアに長く在住してきたメッドハーストにしても、漢字を独学して、広東語を話せるまでになる。次には同じ漢字を使うと聞く日本人のために、伝道活動を始動させたいという募る思いが抑えられなかったようである。日本語の学習に関するかぎり、十九世紀前半は十七世紀前半のキリシタン迫害時と大違いの状況下にあった。五百人単位の日本人街が実在した時代相からは、すでに二百年近く経過している上に、日本の厳しい鎖国政策の下にあって、海外で日本語を教えられる日本人の在住者なり、その子孫は皆無といえた。実際にこの墓地に日本人の墓はない。

海外に於ける日本語学習や日本学の始動は、日本の開国を見る新しい視点として重要であろう。開国は武力だけで実現できない。日本語学習・日本学に至る道程には、モリソン、メッドハースト、ギュツラフ、ウィリアムズたち、主として澳門在住の新教徒系宣教師による脈々たる努力が先行した。この澳門墓地は、日本開国に向けて進む彼ら先行者たちの夢譚を語りかけてくるようだ。

ロバーツ (Edmund Roberts: 1784-1836; Grave No. 88)は、ペリー提督の艦隊に先立って、米国政府が、極東諸国と外交関係を結ぶために、1832年に派遣した特使である。シャイアムとの条約締結に成功した後に一時帰国してから、日本に向かうために1835年3月に再遠征のために出発した。1836年3月に下船した澳門で、当時蔓延していたコレラに罹り、1836年6月12日に他界して澳門新教徒墓地に埋葬された。Ride夫妻よれば、同墓地の

なかで最も重要な米国人の墓であるという[171]。それと同行したキャンプベル (Archibald S. Campbell: No.89)も、特使と相前後して1836年6月3日に同じ病魔に倒れて、澳門墓の上司の横に埋葬された。

ペリー提督の日本遠征艦隊に参加した数々の軍艦からは、1849年頃から1852~1857年に至るまでに、10名ほどの関係者や乗組員がこの墓地に埋葬されている。John P. Griffin (c.1814-1849; No.64), Valentine Swearlin (1822-1849; No.65), John F. Brooke (1790-1849; No.68), Thomas A. Denson (1828-1852; No. 5), Daniel Cushman (1828-1852; No.7), Joseph Harold Adams (1817-1853; No.38), John Dinnen (1826-1855; No. 17), Washington F. Hickman (1821-1853; No. 23), John P. Williams (1822-1857; No.23), Henry Davies Margessonn (1823-1869; No. 165)。日本開国に至る道は茨の道であった[172]。

1836年に澳門で死去した米国特使ロバーツにつづき、日本開国に向けた次の動きは、その翌年、民間人それも澳門の宣教師たちを中心に構成されたモリソン号の派遣である。民間外交による平和裡に、幕府との間に理解と友好を推進したい意向から、誤解を避けるつもりで一切の布教用資料や武器を携帯しなかった。そのかわりに親善の証として、澳門に集まってくる日本人漂流民、この時は、音吉等七名を母国に送り届けようとした。

那覇に寄港した後で、浦賀に向かうが一向に相手にされず、やむなく鹿児島湾口の根占、山川に向かい、結果的に砲弾によって追い払われている。澳門に漂流民を連れ帰った通訳役の印刷宣教師ウィリアムズは、その後、自分の印刷所に彼らを住まわせて、印刷所で働いてもらう傍ら、数年間にわたり直に彼らから日本語を学んだ。十分な日本語学習とは言えないまで

---

171 Ibid., Ride, p.88.

172 拙著「澳門新教徒墓地に眠る日本物語」(『埼玉女子短期大学研究紀要』14号) pp.81-102。

も、こうした努力が、後年 1853、54 年のペリー提督による日本開国交渉に於いて、米側の首席通訳に抜擢される起因となった。

モリソン号の日本渡来は失敗に終わったけれど、幾つかの点で日本国内に重大な影響を残すことになる。一つには、渡辺崋山や高野長英等の当時トップクラスにあった開明的インテリが、巻き込まれることになる「モリソン号事件」に発展したこと。もう一つには、幕府による海岸防備それに鎖国政策の強化を促したことである。七名の漂流民ばかりでなく、何組もの漂流民が澳門に送られてきており、異郷の地で日本開国を待ちわびている。

10. 多彩な澳門の人物像

澳門新教徒墓地に関連しては、多彩な澳門人物の名前の刻まれた墓石に出会う。香港・上海の出現以前に、澳門は、西洋と中国・日本と接点に位置する唯一の国際都市と言える役割を担い、そこには冒険商人たちも群がってきた。1602 年創設のオランダ東インド会社は、1729 年に広東での交易を許される。独立戦争後の米国からは、1784 年に澳門に入港した Empress of China が、先鞭を切っている。時代の波に乗った欧米新教徒国の商人たちが、広東方式の交易のために、澳門というポルトガル系カトリック都市に、次々に足場を築いていった。国策会社のような東インド会社による進出の隙間には、民間の冒険商人も暗躍を始めた。母国の東インド会社の庇護を受けるか、そうでなければ、他の外国政府の代表であるかのように、「商人領事」の肩書を手にしては広東十三行の一つに潜りこむ冒険商人たちが続出した。

英国系冒険商人のそうした商人領事のうち、ビール兄弟 (Daniel Beale

Senior; Daniel Beale Junior, No. 160; Thomas Beale, No. 159)とマニアック（Charles Magnia）は、トリオで共同経営に乗り出し、プロシア領事をタライ回しにして勢力基盤を作った。1825年にはトリオの内で残っていたマニアックが、帰国することになり、アヘン貿易の権利を新進の英国系商社ジャーディン・マセソン商会に売却する。その後、日本開国を受けて横浜に英一番を開設する頃には、同商会は、巨万の富を中国で得て極東でナンバー・ワンの実力を蓄えるまでに成長した。医師出身のジャーディンも在広東・デンマーク領事という商人領事の隠れ蓑を使った。長崎のグラバー商会は同社の代理人である。

ほかにもクロケット (John Crocket: 1786-1837; No. 87)もアヘン商人であり、生前の富を象徴する大きな四角い石柱は、墓地のほかのものを圧倒している。

リュングステッド (1759-1835; No. 60)は、1798年にスウェーデン東インド会社の船で中国に渡来した古参株であり、母国の在広東領事を務めるうちに、澳門の歴史に詳しくなり、体験や見聞をもとにした澳門史の著作で今日まで親しまれている。

ナピア卿 (Lord William John Napier: 1786-1834; No. 164)は、英国東インド会社の解体後に、英国政府の任命を受けて、中国貿易の監督官に就任することとなり、1833年から澳門・広東に居住していた。日頃から敬愛する同国人モリソンの傍に、死後に埋葬されることを希望していた。1834年10月11日に過労死したあとに、その遺言が執行された。

チャーチル卿 (Lord John Spencer Churchill: 1797-1840; No. 133)は、英国貴族の出身である。東インド洋に配備された英国軍艦の船長となり、中国遠征隊に加わっていたが、1840年6月3日10時に、澳門沖合に停泊中の艦上で病死した。堂々たる石塔様式の墓石には、スペンサー家とチャーチル家の家紋が二つ刻まれている。

幕末維新の横浜や日本を描いた画家として、ワーグマン、ビゴー、メンピスの名前と作品が知られている。澳門の画家といえば、英国人チナリー(George Chinnery: 1774-1852; No.40)をおいて他にいない。画家として澳門の絵画的顔が、チナリーであるとすれば、澳門の日常生活模様を日記や書簡に活写した文学的人物には、米国人女性なら訪問者のハリエット・ロー(Harriet Low: 1809-1877)、米国人男性であれば在住者の宣教師ウィリアムズ (S. Wells Williams: 1812-1884)の二人を挙げるのか適切であろう。

ハリエットは、米国セーラムの裕福な名家の出であるが、米国商社ラッセル社主席パートナーの叔父夫妻に伴い、恐らく結婚相手を探しに澳門に登場した。チナリーに肖像画を描きてもらうなど何かと可愛がられた。楽しい生活を数年送ってからは、米国人銀行家と 1836 年にロンドンで結婚する。しかし商売の失敗を繰り返す夫が、アル中患者となってしまい 44 歳で死亡してからは米国に戻り、実兄に貰った家で子供たちを育て他界した[173]。

ロンドン生まれのチナリーは、若い時から画才を認められ、ダブリンの裕福な地主の娘と結婚した。自分ほど醜い男はいないと自認する美の追求者は、妻の醜悪さに耐えきれず海外へ逃亡する。1825 年 9 月に澳門にまで辿り着くものの、妻の追跡の手はゆるむことなく生涯つづき絶えず、妻の出没に慄いていた。画家らしく借金癖がなおらず、それでも子供のような純な気持ちを失わず、彼の変人奇人ぶりを愛するフアンに常に居た[174]。

---

[173] Nan P. Hodges and Arthur W. Hummel, ed.: *Lights and Shadows of a Macao Life---The Journal of Harriet Low, Travelling Spinster* (The History Bank, Woodinville, WA, 2002, in 2 vols).

[174]『東方印象——銭収利絵画展』(香港歴史博物館及香港美術館、2005)。

１１．日本開国と澳門の米国宣教師ウィリアムズ――1837 年、1853 年・1854 年の日本渡来

ウィリアムズは近代中米関係史上、重要な人物である、と北京外国語大学の顧鈞は述べて、最近の中国における再評価を伝えている[175]。1812 年 9 月 22 日に米国ニューヨーク州のユーティカ ((Utica, New York Sate)に生まれ、1832 年 7 月に米国海外伝道協会（ABCFM）による広東伝教団の伝道印刷工として正式に任命された。1833 年 6 月ウィリアムズは中国へ出発、10 月に Canton (広東、但し現在は広州市）に着き、その後、40 年間にわたる長い中国の暮らしが始まった。最初の 20 年、彼の主な仕事は英文月刊雑誌『中国叢論 (*The Chinese Repository*)』の印刷と編集にあった。1837 年には伝道船モリソン号で、日本人漂流民七名を送還するために、那覇、浦賀湾と鹿児島湾を訪れるが、鎖国の壁は厚く、砲撃されて空しく澳門に漂流民を連れ帰るしかなかった。

モリソン号による日本人漂流民の送還劇については、数通の書簡を本国に宛てて、ウィリアムズは書いている。いずれもエール大学図書館のウィリアムズ家族自筆文書コレクションのなかに収められており、未刊のまま長く眠っていた。以下にはその中の一つである父親宛自筆書簡の判読結果の当該部分を掲載しておきたい。

[SWW to Father: 1837/09/10]

Canton, Sept. 10, 1837.

Dear father,

I wrote you a short letter from Napakiang in Lewchew dated in July, which was sent home a few days since; the next day Aug. 29, after it left we

---

175 拙著『国際理解』(高城書房、2010 年)、pp.70~71。

returned, having been altogether unsuccessful. The men whom we took were also brought back, for they said, that so decided was the rejection that their lives would be in great jeopardy if they reappeared in Japan.

I do not wish just now to go into particulars, except to say that we all returned in safety, having had a very pleasant passage. Mrs. King was somewhat ill from the heat & bilge water. A short account of it will soon be published, and then you will know all…

As ever Yrs aff.[ly]

S. Wells Williams

[P.S.] I will send you much fuller details next opportunity[176].

[Per] [*Himmaleh*]

前掲引用文に言及されているように、澳門に連れ帰った日本人漂流民の世話は、それまでのギュッツラフに代わって専らウィリアムズの担当となり、伝道印刷所に仮寓しつつ、印刷所の仕事を手伝ってもらうほかに、彼らから日本語を学ぶ日課となる。澳門・広東に於ける宣教師による日本語学習は、こうしてモリソン、メッドハースト、ギュツラフを経てウィリアムズに移るのであるが、モリソンとメッドハーストには日本語教師はおらず、ギュツラフとウィリアムズの時代になって、日本人漂流民という日本語教師を得られるようになった推移に注目したいものである。日本開国に向かう準備の一つが、このようにして日本語学習という形で澳門・広東で進行しているわけであり、その中でも、ウィリアムズの果たした中軸的な

176 Yale MSS547/Series I. Correspondence, Samuel Wells Williams Papers.

役割を再認識しなければならないであろう。少なくとも澳門に戻ってからの数年間、午前中の二時間程度を日本語学習にあてている。

[SWW to Father: 1838/04/10]

April 10, 1838

Dear Father,

I add a supplement to my letter of March 15, to tell you that I have sent the odd numbers of the Reprint of Blackwood & other Magazines which you sent me for three years to Mr. Jesse Talbot to be bound. I have written to Mr. Winston to get the few missing numbers if he can from the publishers, and hand them to Mr. Talbot, who has been requested to procure them to be bound in the cheapest manner possible. There are also two Dictionaries in the bundle to Mr. T., which cannot be bound here substantially on acct. of the frailty of Chinese bamboo paper and, and therefore I have sent them also. Will you when you are in New York be so good as to pay Mr. Talbot for the charges his is at for binding? The Magazines are perhaps not worth binding, & I do not care much if they never come back, as I have read them enough: but a friend now & then likes to borrow. The Dict^ys.^ are to be put up in ½ Russia.

I send you a painting of the Mandarin Duck of China, which was given to me by my neighbour Mr. Beale on purpose to send to you. I send also drawing of four other birds, all of which are in his aviary, and I can secure their correctness. They are painted by a Chinese artist, who has been taught by Mr. Beale and others, and who does credit to his instructors.

The little book is the 2^d^., 3, & 6^th^. chapters of St. John's Gospel in Japanese, which I have put together with the assistance of one of the Japanese whom we brought back. It may be a curiosity to you to see the language of this most secluded people, as it is a good pleasure to me to study

it. The Chinese Characters on the last page are his advertisement. It is sent for the friends at home, not to be trumpeted over the country. One of these poor men goes to America with the ship which carries the letter; he is 18 years old, the youngest of the seven, and I have become quite attached to the boy. His name is Rikimatz which means strong fir.

With much love to all at home, & abroad / Aff. Yours

S. Wells Williams

ウィリアムズの日本語教師は、学問のない船乗りか漁民であったから、しっかりとした日本語を学べたわけでないにしせよ、直接に耳で聞き、口で話しながらの学習であるのだから、文書のみで独学したメッドハーストよりは、学習の好条件に恵まれていたと言える。それも数年間のことであり、お気に入りの力松にしても、オリファント商会の船でニューヨークへ渡っているように、次々と身近な日本人漂流民は、ウィリアムズの近くから姿を消してしまう。それで 1845 年頃になると誰一人もいなくなり、それはそのまま日本語学習の中断を意味した。

ウィリアムズは、1853 年と 1854 年、ペリー提督の首席日本語通訳としてペリー艦隊に同行して日本遠征を果たした。ペリー提督による熱心な説得を澳門で受けたウィリアムズは、それほどの自信を自分の日本語に持ってないものの、日本開国のためにこの際に役に立つならという思いで渋々、首席通訳の役目を引き受ける運びとなった。1837 年のモリソン号による日本渡来での悔しい思い出を晴らしたい気持ちは、この間に、ずっと彼の胸

の内に生きていただろう。ペリー提督に協力を請われた時に、自信がなさそうな対応をしたのには、日本語学習の長い中断を意識したためである。

エール大学に保存されているウィリアムズ自筆原稿のうち、Box 30 にはペリー艦隊の日本訪問を記した日誌原稿がある。*Journal: trip to Japan with Commodore Perry 1853-1854* と題されている。日誌の冒頭にペリー提督の訪問と依頼を詳細に伝えているので、貴重な資料と言えそうである。本稿では自筆原稿から判読した転写テキストを一部掲載しておくが、これまでに例えば息子のフレデリックによって活字化されたものと、若干テキスト上で違いがある。出来る限り原文に忠実にここでは活字に起こしたつもりである。

On the 9th of April, 1853, I received a request from Commodore Perry to accompany him to Japan as interpreter, he wishing to have me ready by the 21st on which day he intended to sail. On his reaching Canton, I had an interview with him, and learned that he had made no application to the Secretaries at Boston respecting assistance of this sort, nor informed them of his intentions; he said that this never occurred to him, for he had repeatedly heard in the U.S. That I wished to join the expedition, and would be ready on his arrival in China to leave. Dr. Bridgman was with me at this interview, & we spoke of various topics connected with the enterprise taken in hand to improve the intercourse with Japan, from which we inferred that this first visit this year was intended to chiefly ascertain the temper of the Japanese in respect to the propositions which would be submitted to them. At any rate no hostilities were determined on, except, indeed, to repel an attack or actual aggression, for many vessels of the squadron had not reached China yet,, and he wished to make an experimental visit first. He added that he had refused to employ Von Siebold as interpreter because he wished to keep the place for me,---doubtless a compliment to me, but not

very wise in him, so far as efficient intercourse with the Japanese went.

In conclusion, I told him that unless I could get some person to take charge of my printing-office, I could not possibly leave Canton. At the next meeting of the mission, held April 20th, it was concluded that Mr. Bonney leave his station at New Town and find somebody to take the house if possible, and take charge of my printing-office while I was absent; he intended, if possible, to get Mr. Beach or Mr. Cox, if not both, to occupy the house, but in this he failed.

I went to see Com. Perry the next day, and told him that I would go with him till October, and could not be ready to leave before the 5th to 10th of May, in consequence of the various matters necessary to be attended to. It was recommended to him to get a lithographic press in order to assist in promulgating the wishes of the American people & let the people know what we had come for; to this he agreed, & I purchased an iron press of Mr. Lucas for $120, which I hope will be a good outlay. I stipulated too, that I should not be called on to work on the Sabbath & should have comfortable accommodations on board ship. Moreover, I stated to the Commodore that I had never learned much more than to speak with ignorant Japanese sailors, who were unable to read even their own books, and practice in even this imperfect medium had been suspended for nearly nine years, during which time I had had no one to talk with; he therefore must not expect great proficiency in me, but I would do the best I could. In my own mind, I was almost decided not to go at any rate on account of the little knowledge I had of Japanese literature and speech, and am now sure that I have been rightly persuaded by friends to go. It is strange to me how attention has been directed to me as the interlocutor & interpreter for the commander of the Japanese expedition, not only from people hereabouts but from the United States; while we are here, speculations as to the propriety of leaving Canton in this capacity, a letter comes from Plattsburgh, desirous Sarah to come home with the children, for that her friends had heard that I was to be absent

two years to act as interpreter in Japan. I certainly have not sought the place, nor did I expect more than to be consulted as to the best mode of filling it.

On Monday evenings, we had a pleasant meeting at my house at monthly-concert, where all were present; the expedition to Japan was particularly commended to the prayers of all interested in the furtherance of the Gospel. Dr. Hobson read an extract from the "Chronicle" respecting the change in the policy of the Queen of Madagascar, showing that the persecution suffered by the Christians there for many years was to cease, & full liberty likely to be granted them thro' the powerful influence of the heir-apparent: & the son of the prime-minister, both of whom had become favorable towards Christianity. Mr. French remarked that this association at this meeting of Japan & Madagascar, reminded him of the last monthly-concert he attended in America, at which they were both brought to notice, and particularly prayed for; & the happy change in the last made him hope that a favorable result might follow this attempt on the latter. May God in his infinite mercy grant that this expedition be a means of advancing the latter-day glory, when the heathen shall be the people of Christ, and then I shall be rejoiced that I have gone with it. At any rate, a beginning must be made in breaking down the seclusion of the Japanese, and I hope this attempt will be blessed to that end.

All my preparations being made, & my teacher appearing with his baggage, I left Canton, May 6th, in the steamer for Macao, to join the "Saratoga," and sail to Lewchew. I was greatly annoyed in getting aboard to find that the lithographic press & materials were not there; but it came down by fast boat before sailing, for I found that Capt. Walker would not sail till Tuesday, in consequence of the want of bread, and Mr. Bonney forwarded it on Friday evening. I spent a few days at Macao very pleasantly, and on the forenoon of Tuesday, the 10th of May, I set foot on board ship, & sailed on the evening of the 11th nearly sixteen years since I

> left in the Morrison for the same region. Of my fellow passengers there, Mr. King, Mr. Gutzlaff, Capt. Ingersoll, and three of the Japanese, are dead. It was mentioned by Com. Perry that I had a strong inducement to go with him from having been in that ship, as the inhospitable treatment received by the "Morrison" was to form one of the reclamations of the present visit. How vast a change has happened in the polities of China since that cruise, in opening her principal ports and commencing a freer intercourse with her people; when we returned in Aug. 1837, not a port on the Chinese coast was accessible, and nothing known of their capacities.[177]

上掲引用文には、幾つかの興味深い事実を発見できる。不在中の印刷所の仕事をしてもらえるように代わりを探さなくてならないこと。1837年のモリソン号との比較をしつつ、関係者の死去にふれて感慨深かそうであること。それに妻の書いている宛先不明、日付不明の書簡が、息子フレデリックのまとめた伝記に引用されているけれど、それは、ほぼ上掲のウィリアムズ書簡と同じ内容であることが分かる。「ペリー提督からは、強い要請が示された。そのうえ、中国に在住する外国人が、声援を送ってくるので、ついに承諾したウィリアムズ氏である。しかしながら、これほどの重責を果たすには、そう決意するにあたり、極度の遠慮と、能力不足の自覚が、付随していた...[中略]...『ウェルズは、ペリー提督と一緒に出発しましたが、彼自身（それに私の）意向に逆らってのことでした。[178]』

日本語だけに頼って大事な通訳の役目を果たせない、と自覚していたウィリアムズの最少した補助策は、上掲引用文に出ているように、my teacher すなわち中国人の書家を同伴することであった。漢文での通訳が可能にな

---

177 Yale MSS547/Series II. Box 30, *Journal: trip to Japan with Commodore Perry 1853-1854*
178 フレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ著、宮澤眞一訳『清末・幕末に於けるＳ・ウェルズ・ウィリアムズ生涯と書簡』(高城書房、2008年)、p.215.

るばかりでなく、通達や条約文の清書には、中国人の書家の活躍する場面が予想されたためである。1853 年にはアヘン患者の老人を伴ったことが、以下の引用文で分かる。次回の 1854 年には、日本人役人の間に人気を集めた若い文人の羅森を連れていった。

激しく揺れる船。体調が崩れる。僕の中国人秘書、謝（Shie）老人と僕は、ここ 2 週間、ほとんどベッドに寝た切りである。衰弱して、ふらつく。老人は、アヘンを使えないものだから、はげしい衰弱を感じていた。大揺れ、吐き気、室内の窒息状態。[中略]。本日、気の毒な老師、謝が、水葬された。那覇に到着してから、まったく体力回復の見込みが立たず、あらゆる手を尽くしたものの、気力も食欲も衰退するばかりだった。アヘン吸飲者の道具一式を持参したものの、アヘンの方は全く持ち合わせがない、と繰り返し言い張っていた。絶対に僕は、アヘンを吸わせないので、彼は、小さな丸薬を使った。それはなんだ、と尋ねたら、『養命丸』と呼んでいた。数個の丸薬を大きな玉に丸めて飲み込む。とても人間の姿とは思えない。亡霊のような虚魂状態を呈したが、それは悲しい光景だった。モゴモゴと口ごもり、独り言やうめき声を漏らす。内容は、家族のことか、ときには金銭問題であったりした。最後に寝ていた彼の布団に、例の養命丸、アヘン烟罐、多量の固形アヘン、愛用したアヘン煙管等と一緒に遺体を包みこみ、それに帆の布をかけて縫い合わせて海中に投じた[179]。

1858 年、伝道協会を脱退したウィリアムズは、初めて北京に開設された米国外交代表部 (The First American Diplomatic Legation in Beijin)に所属することになる。1858 年、米国全権公使に伴い天津に赴き、『中米天津条約』の締結に尽力した。実際に北京生活を家族と一緒に開始したのは、1862 年以降になった。1856 年から 1876 年までの 20 年間に、米国全権公使の不在中に、代理公使を 7 回も経験するが、1877 年には通訳・書記官の職を辞し

---

[179] 上掲書、pp.220-1.

て、母国で待つ家族と一緒に晩年を過ごすことになる。

東洋研究に秀でた学者を輩出したエール大学に招かれ、ウィリアムズのために中国学の初代教授ポストが開設された。1884 年 2 月 16 日、エール大学のあるニューヘイブン (New Haven)で死去する。ウィリアムズの著作には、中国語学習入門書、中国地図、各種の中国語辞典、開港地ガイド等のほかに、未だに刊行されて読まれている名著の誉れ高い『中国総論』がある。英国人では中国研究の嚆矢がモリソンであり、米国人ではウィリアムズである、と最近の中国学者の間で評価が高まっている。中国学の権威、それに中美外交、日本開国のみならず、それに中国伝道、ウィリアムズのキリスト者としての貢献も忘れることはできない。米国聖書協会の会長に推薦されている。

長男のフレデリックは、母校エール大学で主に西洋史を教えた。日本人の優れた歴史家で、エール大学教授に就任する朝河寛一が、博士論文を準備するにあたり、指導教官を務めている[180]。父親の伝記のほかに、ウィリアムズの日本遠征記、北京遠征記を編集した。

12. 結びに——ウィリアムズの中軸的役割

17 世紀前半に於ける徳川幕府の鎖国政策導入は、約二百年にわたり日本を孤立化させ、難破した外国船の救出とともに、難破した日本人船員の帰国を厳禁した。中国開国に導くことになる阿片戦争の火種が、澳門・広東に長く燻ってきたように、日本の開国という歴史的転換期は、同じ澳門・広東に於いて準備されていたと言える。

周到に準備して日本に渡来したペリー提督は、単に黒船の武力で威圧することで、日本開国を取りつけたわけでない。その点では中国開国にあたっ

---

180 矢吹晋著『日本の発見——朝河寛一と歴史学』(花伝社、2008 年)。

た英国が、戦争手段に訴えたのと、大きく違っている。日本開国に於いては、武力的威圧のほかに、宣教師たちによる日本語の研究という視点をもう一つ持つ必要がある。日本開国に先立って早くから澳門で、日本語研究が始まっている点に注目したい。教師役は難破した日本人船員であり、ギュツラフとウィリアムズがその先鞭役となった。開港後の横浜で開始される日本語研究は、ブラウンやヘボンの努力によって本格化するけれど、横浜居住に先立って、ブラウンにはマラッカ滞在、それにヘボンにはアモイ滞在という中国時代があった。いずれも先輩格のウィリアムズの世話を受け、文字通り同じ屋根の下で数か月を過ごした時期があり、場所は澳門なのである。

中国と日本の開国、中国語研究と日本語研究、恵まれない人々に対する人道支援、こうした大きな時代の流れは、ウィリアムズの澳門生活を中軸に展開していることが、エール大学図書館に眠る未刊の自筆書簡や日記の調査判読によって指摘できた。

(8)　2009年3月発行　紀要英文論文

A STUDY OF S. WELLS WILLIAMS' EARLY LETTERS

IN COMPARISON WITH HIS SON'S TRANSCRIPTION

エール大学図書館では、自筆原稿部門において、サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（以下でＳＷＷと省略する）の自筆書簡や日記などを中心とする膨大な資料「ウィリアムズ家文書コレクション」（ＭＳ５４７）を所蔵している。父親の伝記をまとめ上げる際に、息子でエール大学の歴史学教授フレデリックが、もともと収集管理したものである。本稿ではこのフレデリックによる父親の自筆書簡が、どう削除されたり、追加・改変されたかについての糸口を探ろうと試みた。

最初に第 2 章で、1889 年版の翻訳と私自身の読みを仔細に比較したのち、第 3 章では、1833 年前後の同じ時期に、伝記に省かれた未刊自筆書簡の８通について、判読した結果のテキストを初めて公表することで、コンマ・語句・文章・段落のみならず、書簡そのものの削除されたことの意味を問い直してみたいと考えた。

Chapter 1 Early Autograph Letters of S. Wells Williams

In writing his father's biography, *The Life and Letters of Samuel Wells Williams* (注 1), Frederick W. Williams collected and compiled a large number of SWW correspondence which now forms the special collection of the Williams Family Papers (MS No. 547) at the Yale University Library (注 2). A biographical study necessitates us to focus on some critical moments in the life of our subject, whoever it may be. Particularly in the case of our subject here, one of such moments visited him in the early 1830s, when we find him attending a private institution for higher education in

1831, in the meanwhile in 1832 being proposed to work for China missions, and finally on board the ship Morrison (注 3) from New York to Canton in 1833.

He made the decision to become a missionary printer in China at the age of 18 years, and his 19th birthday was celebrated on board the ship.

A number of scholars have explored the collection of SWW autograph letters at Yale. Among them Jonathan D. Spence can be one of the earliest and eminent explorers (注 4), followed by De-min Tao of Kansai University in Japan (注 5) and Gu Jun (注 6) of Beijing University of Foreign Languages in China. As far as the transcription text of SWW correspondence is concerned, however, there has been produced almost nothing except what Frederick did in his biography. An increasing interest in SWW as printer, missionary, linguist, Sinologue and diplomat apparently cries for the annotated transcription text, either partial or in full scale, of SWW autograph letters and diaries. Simply because under the current circumstances we have no choice but either explore the original manuscripts on the spot or rely on the printed text of Frederick's transcription in his father's biography.

We must remember that Frederick made the transcription over 100 years ago, when "life and letters" used to be very popular in the Anglo-American publishing world. One remarkable example in the connection of SWW is Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison in two volumes, (注 7) a compilation by his second wife of her late husband's correspondence. Many of then biographers were not aware of such a criterion of precision and completeness as can be seen in excellent modern biographies, like Michael Holroyd's Bernard Show (注 8).

Without waiting for Lu Xun's very interesting classification of biographies in his novel *The True Story of Ah Q* (注 9), the Frederick's is an official biography10, and that

well-documented, academic, balanced, conscientious, consistent and readable. In spite of assigning such a praiseworthy judgment Frederick as an author is no exception, and made mistakes in more than one way (注 11). In the next chapter I am going to try a minute comparison between one autograph letter and its printed transcription by Frederick, and in the meantime refer to his other transcription. In the final chapter I am going to print my own transcription texts of those 8 autograph letters, belonging to the critical period, 1832-1833, which are not included in the Frederick's biography.

Since SWW's handwriting is rather easy to recognize and read, it does not cost us such a hard and patient labour as in the case of his colleague, Elia C. Bridgman (注 12).

Chapter 2 A Frederick W. Williams' Transcription Text Compared with its Originals

The following in this chapter is one of those 19 early autograph letters belonging to the particular period between November 23, 1831 and November 6, 1833, which are preserved and classified by the Yale University Library, as the 9/9/80 Addition Box No.1. Most of them are so-called family letters, being addressed to S. Wells Williams' father (12 pieces), mother (2 pieces), parents (2 pieces) and sister (1 piece). The rest of them includes one letter to Anderson of the American Board and one letter to his engraver friend called Tibbs.

We can see that the 19 letters were mailed at three different places: Rensselaer Institute, his school in Troy; Utica, his hometown; New York, his port of departure to China; Pacific Ocean, on board his ship Morrison; Canton, his destination. An

abridged list of all the 19 letters, either printed in the biography or unpublished, is given as follows, the square-bracketed B and the numbers that follows it referring to the pages of the Biography. Among the 19 letters only the eight letters which are indicated in bold letters in the following list are chosen for transcription, mainly because of their having been unpublished but also on account of comparison with the Fredeick's transcription.

SWW-Father: 1831/11/23 [B33-34]

SWW-Father: 1831/12/24 [B36]

SWW-Father: 1832/01/21 [B36-38]

SWW-Father: 1832/03/07

SWW-Father: 1832/04/23 [B39-40]

SWW-Father: 1832/06/01

SWW-Father: 1832/06/18 [B41-43]

SWW-Father: 1832/7/03

SWW-American Board (Anderson): 1832/07/20 [B43-45]

SWW-Father: 1832/10/29

SWW-Parents: 1833/04/02 [B48-49]

SWW-Father: 1833/05/02

SWW-Father: 1833/06/01 [B51]

SWW-Mother: 1833/06/10 [B50]

SWW-Friend(Tibbs):1833/06/26

SWW-Sister (Sophia): 1833/07/04

SWW-Father: 1833/09/24 [B51-53]

SWW-Father: 1833/11/06 [B64-65]

SWW-Mother: 1833/11/13.

The following text is a complete transcription of SWW's letter to his father (William Williams), with editorial changes on the part of Frederick shown in the square brackets.

Especially important to observe is the underlining in the text, that indicates his deletion: exclusion to start with a trifle like a comma and then involving a word, a phrase, a long passage and a whole letter.

SWW-Father: 1833/11/06 [B64-65]

Canton, November 6, 1833.

I have been here a week, and in that short time (注 13) have seen enough of idolatry (注 14) to call forth all the energies I have in their behalf.(注 15) A city (注 16) which at all [a] (注 17) reasonable calculation, must contain as many inhabitants as all the State of New York, having a great extent of [which has its enormous] (注 18) influence in the empire, [Empire—] (注 19) a city like this demands a deal of [Christian] (注 20) labor. Take a position at the gate of one of the streets, leading from thence into the suburbs, and the [The] (注 21) tide of beings which flows through it, [any one of the city gates here] (注 22) is like the deep current of a powerful river.

To pass across it (注 23) you must sail down a ways ["sail down a-ways"], (注 24) before you can reach the other side of a street six or eight feet wide. This flood is continual, and once to see it [once in it], (注 25) all scepticism vanishes concerning the population of China. And (注 26) to take [China. To take] a circuit through [thro'] (注 27) one of these streets about eventide, and see the abominations practiced against the honor of Him who has commanded, "Thou shalt have no other gods before me,"

and not be affected with a deep sense of the depth to which this intellectual (compared with the rest of the east) (注 28) people has sunk, that man cannot be [is impossible to] (注 29) a warm Christian man. The number of incense sticks, burning in every shop, at every corner, on every door post and every threshold, (注 30) and indeed in every place, where room can be found, is so great as to raise a cloud of smoke over the city, and almost to blind the eyes, when walking in the streets [abroad] (注 31) at such times. And is not such a mass of fellow immortals entitled to deep commiseration? [commiseration, to] To large & [and] combined effort? (注 32) They are an easy people to work upon (注 33) where their prejudices and government do not interfere. By this I mean (注 34) where government does not in a manner make the prejudices. Many of our usages are (注 35) looker at much more favorably, are even beginning to be followed. Does not this show that the wall of separation is about to crumble. By this time, you will have read Gutzlaff[']s voyages, and that will show you more on this head.(注 36)

Along with this letter, I have sent two tracts in Chinese, the smaller one containing Scripture extracts, the other a school book for girls. And what I want to direct the attention of the friends of the mission to in Utica, is the cheapness, with which these books can be manufactured. The small one can be furnished in any quantities, after the blocks are paid for, at one cent a [per] copy. This includes paper, silk, and ink, and many thousands of them have been distributed among the natives. It is a good object for the benevolence of the children of your Sunday schools to be exercised upon every scholar and send one of these heralds of salvation to an ignorant heathen and by the blessing on high, save an immortal soul, Mr. Stevens had a letter of sixpences, some 8 or 10 dollars, sent out by an infant girls' school, and how many the Sabbath schools in Utica sends. The large [other] can be furnished for about [at] a cent & [and] a half. It is [half, and is] of the same size as the Bible, which is in twenty-one volumes, of half an inch thickness , all these can be furnished for one dollar & five cents. [volumes, sold at one dollar and five cents.] Yes the whole word of God can be made in this language including blocks, & paper for this small sum. How many of this Books of Life will you send to these heathens.

I have sent these two, as a specimen of the cheapness, the quality and the manner of Chinese books. They [sic] They [These books the Chinese] receive willingly, and read them in all probabilities [appear to read]. To make these [them], natives are employed, [;] the first convert [(Leang Afa)] was made by reading the blocks he was cutting. While they are printing and cutting, they have a frequent opportunity of teaching the contents. He [Leang] is now engaged in making books as fast as proceed [he can], and has distributed many thousand of the scriptures [many thousands]. A short time since, there was an examination of literary candidates in Canton, and more than 25,000[twenty-five thousand] came to the examination.[came.] Leang Afa got some coolies to take his boxes into the hall, and there he dealt out the word of life as fast as he could handle them, to intelligent young men. This he did for three days together. When he did this, some eighteen months ago, he got bambooed. [together, but when he repeated the attempt eighteen months later, he got bambooed.] Thus the word is [Thus is the word] being put before their eyes, and they are [already] somewhat acquainted with its contents [with it] in this vicinity. Leang-Afa [Leang Afa] is a venerable looking [venerable-looking] man, about fifty years old. His [old; his] countenance expresses benevolence and [benevolence, and] at first view, you are prepossessed. Do what you please with these tracts in Utica, only don't publish them. I am well & all here are so. Give my remembrance to all, and may your prayers ascend for my usefulness & the advancement of God's kingdom.

Yours affectionately. S. Wells Williams.

[envelope: addressed to] William Williams, Utica, Oneida Co., N.Y.

I send you along with the books some nos. of the Repository. Let all that want read but for monthly, concert &c. I have sent some to Mrs. Aikin. And theirs to Mr. Frazurd and give him my receipts. I shall continue to send you one. If you come across any work on China in English or French, I should like it very much. Give my love to mother & the letter enls.

Reading through the above-quoted transcription, with additional annotations and underlines, we may notice various ways of changing the original text on the part of our biographer. As for one of the minor changes, like a comma, we observe about 10 instances of their deletion. This change is permissible maybe, but since SWW appears to prefer an occasional break in a sentence, putting in a comma, for example, something is lost on account of comma-deletion. A word, a phrase, a sentence or even a passage is sometimes cut or changed by Frederick, who sounds like having tried to improve his father's writing. This is very hard to say Yes indeed or Oh No. The following transcription of six letters are made by me just to prove that the SWW's writing style has its own natural flow, which, I am sure, is not so bad as it is.

We can notice different levels of Frederick's editorial modification, starting from such a minor change as deleting a comma to stepping on to paraphrase and choice of documents. To give an idea of minor or major changes in textual reading, a minute examination of the first passage should be enough, as shown in the notes.

Chapter 3 Transcription Texts of S. Wells Williams' Six Unpublished Early Letters

No. 1. [SWW-father: 1832/03/07]

Rensselaer School, March 7, 1832.

Your arrival at the school on Wednesday afternoon was an event that I had been long expecting. Although it was four days sooner than I had anticipated, yet it was so much the more pleasant. As you observed in your letter, that you found me apparently happy, I think as I can say, that I am very well

contented as respects the school; only if the Professor was indeed a true and sincere professor of that heaven born religion which he disregards, I should be more pleased. But God is here, as He is every where, and I have every opportunity to hold endearing, and as I trust, sincere communication with that precious Saviour who is ever near. And there is no place or time that I so much long for as the sun when I am alone with God & the Bible. When you are here, you will recollect that the Professor complained of a severe cold, and that perhaps he would be unable to return the next morning. Then the next morning came, he consented that three of the students, (Mr. Boyd, Hill & myself) should take a short excursion to Coeymans to settle a geological fact and collect all the petrifactions we could find.

As this time was the best we could have, on account of the delay attendant in printing his genealogical txt. Book, we stayed at the father's of one of the students, and were hospitably entertained by him. Nothing could have been kinder than our treatment; all was so free, so open. Moreover, the exercise was good, after a winter'a confinement, and add to that the advantage of such a tour, when entering the study of Geology, I, for one, am very well satisfied with spending 3/- for such a tramp. From our representations to the Prof., for we could bring hardly any specimens with us, he thinks that we have found several new species.

His bill for tuition &c. to the beginning of the present season is as follows.

Board from Nov.23, to March 7. 15 weeks @$2. · · · · · · · · · · · · · 30.00

Tuition for four Sub-Terms · · · · · · · · $2.62 1/2 · · · · · · · · · · · 10.50

Sundry incidentals, as use of instruments,

models, lecturing, etc. etc. · · · · $1. · · · · · · · · · · · · · 4.00

Surveying & Engineering, text book · .50

$25

For postage, washing, wood &c. I have spent about $15.- During the summer I shall need Lindley's Botany, the wholesale price of which is 16/. The price at Paker's is 19/-. Also that Map of the stars

you so kindly promised me. I think, that if God spares my life & health, that I shall make considerable proficiency in the studies pursued here as Geology &c.

I have been appointed a kind of helper in all things, one whose business is to see to [erased: all] every part. The news of the wonderful dealings of God in Utica has given me cause to celebrate the goodness and long suffering of God, as exercised towards all who have been residents of that place, both Christians & sinners. Dwight, I do humbly hope & pray has in reality given himself away in an everlasting covenant. If my poor letter to him did any good, give God the whole glory, I shall improve your directions about writings to Thos., Leward & sister Sophia.

Having arrived here but a short time ago, from Coeymans, & having had a walk of 25 miles in a comfortable rain & snow storm, I will say good night, dear father.

In affection's bonds / S. Wells Williams

No. 2. [SWW-father: 1832/06/01]

Renss. Institute. June 1, 1832

Dear Father

I rec'd your kind letter of the 17th on the 27th and will now inform you that I have got the books, Gray's Chemist & Dve's Dictionary. They will be very serviceable to me during the course of Chemistry which we have just just commenced, and I would thank you very much for them. I got them at Parkers about a week since, and Wednesday I received a letter from Mr. Keeling informing me where they had been left. Does MHr. K. live in Albany? Or is he only on business.

If H. Ivson prefers answering letters by proxy, let him also, if the comparison is good, get married by proxy, as Bensparks did. As the chemical course has begun, my funds have all been expended to Dana, in buying substances, and the dollar I got of [a few illegible words] had lot pay borrowed money. I think from present appearance Nin got thro' the course for 10 dollars, but will try to do so for less. We

purchase the substances in a lot & can procure them much cheaper. The number of students is ten at present, and three more are expected.

I have not yet rec'd the box of clothing, but it is expected in soon. I hope the numbers of the Soc. of U.K. were in, as I stand in need of them. I do not think that I suffer Madame Flora to be unattended, but her ladyship is very versatile & cap[ri]tious in movements, often compelling me to dance attendance at her toilette at the rate of nine or ten miles every day or two.

Yours affectionately / S. Wells Williams

No. 3. [SWW-father: 1832/07/03]

Rensselaer Institute, Troy, July 3, 1832

Dear Father

Your kind communications of 22nd and 28th ult. were duly rec'd here. The reason I did not immediately reply to the former, was on account of the uncertainty of affairs both in the city and at the school. When I received the latter, I had then determined to write that day; so I would not wish to have it supposed that I wished to keep you in any anxiety, but as soon as the certain truth of affairs could be known, to inform you immediately. From several suspicious cases of cholera morbus having occurred in this city lately, most of the physicians imagine that it is here in propeia persona. The cases that occurred, however, have been those who were beastly intemperate, and the poor and ragged. They terminated fatally in twelve or sixteen hours. Still the health of the city is said to be as good as usual, and I do not now think that the school will discontinue at present. I should think it would be preferable to continue here till it became more decided at least.

With regard to the country thro' which the tours are taken, I have only to say, that they embrace every fact in geology & organized remains that is presented in this country of any utility; as well as many in engineering, botany, mineralogy & chemistry. The places where they are taken are to the

Connecticut river, Helderburgh Mts., south of Albany, Carbondale coal beds and New Jersey marl bed of the clay deposit[e]. They comprise many interesting localities, well worthy of visiting, and I should wish to take them much, believing that they will be useful & instructive. They begin to take the journey, on the 12th of September, two weeks after commencement on the 29th of August. Those two weeks were allowed to prepare.

The terms will close in six weeks from next Wednesday the 11th of this month, if the school continues. I should like to be at home much, but I think, as I said before, that this is the most profitable place for me. I am very well, and would take occasion to adore & bless our Heavenly Father for His fostering care over me in preserving my unprofitable life yet a little longer. Since I first came, I have not been sick at all; not missing a meal or an exercise. I imagine that it is as healthy here as at Utica.

S. Wells Williams

P.S. For what purpose would you wish me to go to New Haven this summer? Mrs .Haynes still continues in very feeble health. The $3 came safe.

No. 4. [SWW-Father: 1832/10/29]

Utica, Oct. 29, 1832.

Dear Father

Your esteemed letter was rec'd a short time since, and I shall always prize such, and endeavour to follow this advice. I have been constantly at work in the office for the week past the week past, the amount of work being so much that the other hands could not accomplish it all. I have not, as yet, begun to study; one reason is the quantity of work in the office, the other, that I wish to have you see at home whether it will be best for me to study at Bartlett's or Kingsley's. I think that at Bartlett's I shall make the most progress, but Kingley's is nearer home. However, until after election, I cannot study at all; all the spare time that I have, I employ in arranging my plants after the natural method.

If you have any spare time, I should like to have you call at Pike's the optician, at the top of Wall St. near Broadway, and see how much he charges for microscopes in boxes. I should be pleased to earn enough to get one, to have the assistance of it in studying botany &c.

Dr. Gray at the High School, has one he paid 1/20 for a most elegant one for use.

Bible Class was very full yesterday. Sunday before last, there were five teachers away.

Miss Brandish to be married this evening, and Miss Burchard has gone to Buffalo; two members gone from your class. The little folks are all well, and mind your grandmother in all things.

Yours affectionately, / S. Wells Williams

Are there any maps of the stars to be had?

No. 5. [SWW-Father: 1833/05/02]

New York, May 2, 1833.

Dear Father,

Having ascertained in Albany, that I could, together with my charges, come round by N.Y. & Providence, about as cheap and much easier than to go across, I address you from this place. Harriet & Cynthia are in good spirits & health. I have ascertained that the Morrison is to be in, perhaps in a week, perhaps in a month, and probably will not sail, under a month at the least. Mr. Olyphant has got my passport, but Winston says, he is not entirely determined to go to Canton. I shall go to Providence in the in the 5 o'clock boat Boston this P.M. In Albany, I purchased Ellis' Polynesian Researches of Little, and Carnes lives of eminent missionaries: Wiley says, you was looking Cuvier & Bigaloers Shedls, but did not purchase. I do not [know] whether to buy them or not, not knowing whether you procured them elsewhere or not. We missed Shepard at Saffords, fifteen minutes, he having gone to Waterford. Pray, dear Father, that I may have faith & grace, for I greatly need them.

Yours affectionately / S. Wells Williams

Love to all.

No. 6. [SWW-Friend (Tibbs): 1833/06/26]

Ship Morrison, Atlantic Ocean, Lat.34° W. Long 40° W. June, 26, 1833.

Friend Tibbs.

Whenever and wherever this letter of mine should happen to reach you, receive it as a token of remembrance. For your very acceptable letter of last winter, I should have returned you an answer: but I had not the time to write one, even as you were, where you begun to answer a previous one of mine. But, if our letters are unfrequent in point of time; they will be so much the more prized when received. At least, yours will be so, mine will, I hope, keep you in debt. There I am, rocking away on the blue ocean, even as you were once. I have said, My native land, good night, as you also did, and have seen nought but sky & water since.

We have had pretty pleasant weather since we were out, but have also had more calms than agreeable. Yesterday, were almost stationary, and rolled & rocked in fine style. A flying fish also came aboard, and I saw the first gull I have yet seen: we have "Portuguese men of war," sufficient to stock a army and "Mother Cary's chicken" are not wanting.

All these serve to full up the sameness, and occasionally after a little, variety to the tedium of a sea voyage, especially of one so long as ours. But we have a plenty of books, and of all kinds, so that I am not at all wearisome. Our mess consists of the captain, three mates, the supercargo and two passengers: so you will perceive we are not crowded, neither are we at loss for a variety. I have about passed the ordeal of seasickness. I was some troubled and the day before also. First I had to become accustomed to the rolling of the ship by a short, regular course, and then, when I was most well, I was taken on another tack, and forced to learn the pitching. Perhaps I may have a lesson again, when both become united. But patience is a good medicine, in such cases, and I am now nearly over it; for I soon found

that any other medicine was of but little use. We have had no fishing yet, tho' I did try to catch 2 small rudder fish, but was unsuccessful: they would not be captured. All the big fellows of fish have as yet remained out of sight and hearing. So you will learn that we have quite still times, except.g. [sic/excepting] always when the wind blows. Three flying fish were all that we caught that flew aboard.

Saturday has come again, making two weeks I have been afloat. We have had a calm, for the last three days, and it continues yet, and has been quite warm. All the numirous [sic/numinous] sea polypi swarm on the surface, and make a considerable variety from their curious forms We have not spoken any ships since the second day, but have seen several. The beauty of sunrise & sunset at sea, is almost worthy alone of a journey, to see. If you could do them justice in an engraving, I have no doubt you would be highly pleased. So rich, so splendidly colored and so evanescent: it is really beautiful. And I hear that they are more [sic] handsomer in the eastern seas.

For that card you engraved, I had no means of getting any to you respecting it except by letter, and I had no time to order. If I can find any thing in China, which I think you would be pleased with, you shall have some, as a reward to your taste in the designs, which, allow me to say, does you much credit, if your head continues to make such good ones, you ought not to want for customers. I should like to have a letter and anything else you are willing to send me, at least annually. If you got this in a twelve month, you will do well.

Yours truly, tho' far distant. / S. Wells Williams.

[P.S.: one illegible sentence]

No. 7. [SWW-Sophia (sister): 1833/07/04]

Becalmed for 2 weeks in Ship Morrison, Atlantic Ocean, in Lat. 31° 56 N., Long. 38°48 W.

July 4, 1833.

Dear Sister,

"Fourth of July has come!" methinks I can hear you say, "and to-day I shall not go to school; and we'll see all the sights, and have nuts & cakes in great plenty." How happy you will be, and how much you will enjoy yourself, I can well imagine, and to-day I shall be thinking of all the little folks at home, for it is a quiet, still place on a ship in a calm. A calm is when there is no wind, and the swell of the ocean makes the ship rock one side and then the other, as you can hardly stand up. And in the night, when the swell is very heavy, and comes on suddenly, first you know about it, you are sprawling on the floor, and the chairs are all tumbling about at a great rates. And if nobody gets hurt, we all laugh at the sight, and get into bed again. And when at meals, you will be sitting at table quietly, all so nice, and before you have time to hold on, you will slide along the cabin into one of the little bedrooms, leaving your dinner rather before you have eaten enough. It would be the same, if, while you were eating in the dining room, and without any hands, you were to be slidden through the hall into the drawing room, while at the same time, all the others were taking a slide, some with a cup of coffee, some with a plate and some without any things. Curious sort of folks they must be, you would say, that can't sit at table till they have done eating, and not slide away across the room in all ways, as if there was a snake on the table.

But I have forgot what I began to write about, telling such a long story about sliding away from table. By the time you will read this letter, you will have begun almost to think of next Fourth of July, so I will tell you what I should wish you to do on such a time. As you know why that is observed, you should be very thankful to our Heavenly Father for letting you enjoy so many blessings, and not putting your existence in China or some other heathen country. Just suppose God had made you a little Chinese girl instead of a little American one. As soon as you were born, if you was [sic] allowed to live, (for in that country they don't consider it criminal to murder infants) you would leave your feet put into close bandages, and teeth dyed black as soon as they began to come. Your mother would pretty quick

after this be looking out for some little boy, as a husband for you; this boy, however, you would never see, neither would you know who it was till married to him. As you grew up, you would be learned how to say prayers to dumb, paper & wood idols, and would also have to sit and make pictures or roll tea. You could not run out doors & play nor could you have any companions, without you had some sisters, for your brothers would live separate from you, as you would be all alone, nor could you go to school out of the house. Your father could be the only man you would see till you was married, for no other man is ever allowed to go into the women's apartments in the quarters. There would be no L. School, nor going to meeting, nor Sabbath day, for the only holiday they have, is one week about New Years. You could, as you became older, be instructed in cooking, (if you were not very rich,) and in learning by hearing, the prayers & forms of ceremony. No neighbors would come & see you, nor could you get a horse and carriage and take a ride, but would be carried on men's shoulders, shut up close in a palanquin. (You will find a picture of a palanquin in Calmet.) You could walk about a very little, your feet would get so tired, and perhaps then you would get a tumble or two. Now and then, you might hear a little news, but very seldom: no books, no tracts; no newspapers and, you see, and if you did, a very small chance if you knew how to read them. "O! I shouldn't like to live in China!" I can almost hear [a few missing words], and how thankful should you be that [a few missing words] do not. Pray to the little heathen girls in China, and when [you] have any money to spend, think of these little immortal souls, and send your money to give them the word of life. Would you not rather do this, than spend it for candy or toys, which you use up, and that is an end of them. Supposing you lay up all you get and when there is a chance offers, send it to them. Do you not think that you will have more pleasure, than if you had spent it? Try & see, and bless God that you have the opportunity.

Begin early to do good, and soon it will become a habit, which will be of great advantage to you. Never throw away your little time idly nor your money uselessly, and you will have nothing to blame yourself for. And when any of your little playmates are going to spend their money as before, tell them

how much it is to save and give it to the little heathen girls. Why you don't know how much good you may be the means of doing by beginning earlier. A dollar that you may send will buy a Chinese testament, and this will be for a whole family, who, after have read it thro' would copy it and then send it to their neighbor, who would do the same. They would "teach it to their children, and it might be the means of the conversion of a family or lives of fifteen or twenty souls. Would you have throwing away your dollar, or would you be sorry you sent it to the Heathen? If it did any good you would know it in eternity if you did not in their world, and if you did it from a vague motive, God would reward you. I, about whom you bring to God a memo written them & your affectionate brother also.

S. Wells Williams

[P.S.] This letter is for you and Edward, and when you write an answer, you must have something to me: all that you have to write, must be done carefully, and not scribbled. See how carefully you can keep those, two bows I gave you, till I shall come back? And then I can see how much you care about me. Remember to set a good example before the younger children, for you are with them very much and have a great influence over them. Help mother all that you can, and learn at school all your lessons. And as you grow older, endeavor to grow more & more useful, that all may see that you are indeed a disciple of Jesus. Remember all of the counsels of the mother who is in glory, and let her example do you good. You do not know how soon you may be called to follow her, and if young, may you be ready, & if old, let not death find you unprepared: So that if I should never see you again the face of my dear sister on earth, I may know that she is in the path of the just and that it may be so, I shall always pray.

[letter sheet enveloped and addressed to:] Miss Sophia W. Williams, Utica, N.Y.

No. 8. [SWW-Mother: 1833/11/13]

Canton, Nov. 13, 1833.

Dear Mother

I hope you will not take it as at all implying any dislike to writing or any forgetfulness that I have not written to you before this. Indeed, since I have landed, my time has been as much occupied as I could wish. And therefore, I have now taken a spare moment, and have produced this.

Not having taken an inventory of my clothes, when I left home, which ought to have been done, an[d] in all future cases I hope will not fail to be done, I have now sent you one. It comprises all that I brought from Utica, and not any of those I have had made here. Thin, summer clothes can be procured here at prices that put our tailors to the blush, and they are much better adapted for summer wear here; but to wear the same in Latitude 43° N. would make one quite chilly. A whole suit from neck to foot can be made that will not weigh much different from a pound & a half, and be all good clothes, fit to wear, not made of gauze.

The following list may be useful for reference, for consideration or for any other purposes, as the wardrobe that was made up for me was, I find, complete in all parts. To wit:

33 Cotton Shirts not including old ones nor those given to me

4 Line Shirts

3 Flannel Shirts

2 pair Flannel Drawer*

2 Flannel Wrappers*

*Without which I should have almost frozen on the passage, for the cold was very considerable, and the hail & snow we had increased it.

5 pair Thin Pantaloons, every piece of which was made so small that I could hardly wear them and if you had not sent some pieces which were left, would have in a measure useless 4 pair of Satinet Pantaloons

1 Frock Coat

1 Straight bodied Coat. The black one that I had made a short time before I came away, fell to pieces

during the passage, and is left aboard the ship.

1 Tustian Over All

1 Linen Over All or my old fireman's coat.

1 Velvet Vest.

18 pa. Cotton Stockings.

3 pair Woollen stockings. If you should ever be struck with the fancy of sending me any clothes, let woollen stockings be one of the items; for it is often cold enough for them. Send nothing cotton or linen, for you might as aptly send a cargo of ice to Greenland.

7 Summer Vests of many divers colors.

18 Towels, enough to supply the whole family for any indefinite period. Some are of good capacities, dimensions, and in case of necessity & poverty would answer for pillow cases.

4 Linen round-abouts. Grass-cloth is used here for that purpose, and it most admirable.

23 Loose collars: a most bountifully abundant supply, as I perhaps do not wear one oftener than once in a month. But they will be good to tack on to my shirts in case of necessity. There are of imaginable widths and sizes, but those that Mrs. Lightbody fit me the best. Give my sincere and respectful thanks to her for those and all her other kind attentions, which I blame myself now much for not having done in person. Hoping that she will continue still to remember me, notwithstanding my short-comings in respect to her, give her this acknowledgement of my sincere & hearty thanks.

8 False Bosoms, which will probably last me many years.

8 Pocket Bandana Handkerchiefs

1 White Linen one.

9 Linen Pillow Cases which together with

9 pair of Linen Sheets was furnished in the New York, and most terrible cold things they were too on the voyage.

7 Bombazine and Linen Stocks.

2 Gowns, which I hope not to have any use for this long time, & which completes a descriptive list of all that was furnished me. For a voyage of the length of mine, these enough of all things, except handkerchief sheets, pillow cases, thin coats & pantaloons I had to wear a coat till, it was hardly fit, and moreover collecting so much dirt, rots the clothes before they can be washed. We had not a rag washed. And if you or any one else in Utica should put up more clothes for whomsoever comes out to the east, never give him a leather trunk or less old than he ever wear.

The more old clothes he has, the less will be he dirty with tar (which is almost unavoidable) & escape having them pulled to pieces in washing. Tar or paint you know is very difficult to wash out, and on board ship, either one or the other is constantly about deck. All the cold clothes that can be comfortably worn, should be taken.

Notes

注 1. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, Missionary, Diplomat, Sinologue*, by his Son, Frederick Wells Williams. First published in 1889 by G.P. Putnam's Sons, New York. Reprinted edition published in 1972 b y Scholarly Resources, Delaware. Translations in Chinese and in Japanese published respectively in 2004 and 2008.

注 2. Williams Family Papers. Yale University Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, MS no. 547. Three series with an addition.

注 3. Olyphant, Morrison

注 4. Jonathan D. Spence, God's Chinese Son, The Taiping Heavenly Kingdom of Hong Xiuquan, New York: W.W. Norton & Co., 1996.

注 5. De-min Tao, "Yoshida Shoin's Encounter with Commodore Perry: A Review of Cultural Interaction in the Days of Japan's Opening," in 「東アジア文化交渉研究」別冊第1号 (2008 年3月), pp.63-79.

注 6. Gu Jun translated the SWW biography into Chinese. 『衛三畏生平及書信』(桂林：広西師範大学出版社、2004 年)

注 7. *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, compiled by his widow, in two volumes. London: Longman, 1839.

注 8. Michael Holroyd, *Bernard Shaw*, in 2 volumes, published by Chatto & Windus, London, 1988.

注 9. Lu Xun, *Selected Works*, translated by Yang Xianyi and Gladys Yang, published by Foreign Language Press, Beijing, 2003. "The True Story of Ah Q," vol. 1, pp. 102-154. "There are many types of biography: official biographies, autobiographies, unauthorized biographies, legends, supplementary biographies, family histories, sketches…" p.102.

注 10. Ibid. p.102, "There are many types of biography: official biographies, autobiographies, unauthorized biographies, legends, supplementary biographies, family histories, sketches…"

注 11. One simple case of his minor mistakes can be seen even in proof-reading. I found about 10 misprintings, like "March 10th " (for "June 10th", p.267), "refresment" (for "refreshment", p.409), "latter" (for "letter", 420).

注 12. *The Glimpses of Canton, the Diary of Eliah C. Bridgman, 1834-1838*, published by Yale University School Library, Occasional Publications No.11, 1998.

注 13. A comma deleted: 'short time, have seen' changed to 'short time have seen'.

注 14. A comma deleted: 'idolatry, to call' changed to 'idolatry to call'.

注 15. a phrase cut: 'I have in their behalf'.

注 16. A comma deleted: 'city, which' changed to 'city which'.

注 17. A word: 'all' changed to 'a'.

注 18. phrase replaced: 'New York, having a great extent of influence' changed to 'New York, which has its enormous influence'.

注 19. A comma and capitalization: 'the empire, a city" changed to "the Empire—a city'.

注 20. A word added: 'a deal of labor' changed to 'a deal of Christian labor'.

注 21. A sentence cut: 'Take a position at the gate of one of the streets, leading from thence to into the suburbs, and' shortened to start the next sentence 'The tide…'

注 22. A phrase added in order to paraphrase the preceding sentence: 'any one of the city gates here'.

注 23. A comma deleted: 'pass across it, you must' changed to 'pass across it you must'.

注 24. A quotation mark and a typhen added: 'sail down a ways' changed to ' "sail down a-ways" '.

注 25. An expression: 'once to see it' changed to 'once in it'.

注 26. A coordinate conjunction deleted: 'China. And to take' changed to 'China. To take'.

注 27. An abbreviation: 'through' changed to ' thro' '.

注 28. A whole phrase cut: 'intellectual (compared with the rest of the east) people' changed to 'intellectual people'.

注 29. A phrase replaced for a grammatical change: 'that man cannot be a warm Christian man' changed to 'is impossible to a warm Christian man.'

注 30. A phrase cut: 'and every threshold'.

注 31. An expression replaced: 'in the streets' changed to 'abroad'.

注 32. A few minor changes in one sentence: 'deep commiseration? To large & combined effort?' changed to 'deep commiseration, to large and combined effort?'

注 33. A comma deleted: 'work upon, where' changed to 'work upon where'.

注 34. A comma deleted: 'By this I mean, where' changed to 'By this I mean where'.

注 35. Not Frederick's but my correction.

注 36. The three underlined sentences are deleted.

第３報

研究成果（その他）

(9) 2010年11月講演会発表（鹿児島国際大学国際文化学部）、日文講演原稿

国際理解の四重奏

19世紀初期東アジア在住の宣教師による日本語研究を中心にして

Some Protestant Missionaries' Studies of the Japanese Language in Macau and Canton in the Early 19th Century

This paper purports to illustrate the development of the Japanese language studies, initiated by Robert Morrison and Walter Henry Medhurst in the early part of the 19th Century, carried on by Charles Gutzulaff and S. Wells Williams, all in Macau and Canton, and to be finalized by S.R. Brown and James C. Hepburn in Yokohama in the latter half of the century. They are all Protestant missionaries, either from U.K. or from U.S.

はじめに

専攻する英文学研究から横道にそれてしまい、薩摩と英国の関係、薩英関係史を調べ始めて 25 年ほどになります。この間に一つ痛切に感じたことがありました。二つの国の間の綱引きだけに終始しないで、三角形の力学で見ていきたいとする Triangle Approach の必要性でした。横浜・長崎・鹿児島の近代史に関わった英国人や米国人れに商社が、来日前に、上海・香港に滞在して活動しており、中国沿岸の開港都市に横浜形成の原型を求められる、と考えるようになりました。国単位では、英米、日本、中国、それから都市単位の視野のなかで、ロンドン・ボストン、上海・香港、横浜・長崎をそれぞれに結ぶ三本の交流直線、その関係からなる三角形の力学を考えるように傾いた次第です。

ところが、それだけに終わらずに、個人商人・商社による上海租界形成史を

探索しているうちに、上海・香港の先には、もっと古くから発展してきた澳門や広東の存在が、大きく登場して参りました。初期の上海や横浜で活躍していた英米系の商社のなかでも、最大手のジャーディン・マセソン商会などは、その発祥の地を澳門・広東に求められます。それに更に、同商会の前身にはトマス・ビール(Thomas Beale)がいて、結局、この不思議な人物のお墓を澳門新教徒墓地に訪ねてみたこともありました。

英国東インド会社に関わって、こうして澳門・広東にまで調査の視界に入ってきますと、次には長崎との関連で、バタビアまでも視野に入れて勉強しないといけない、と当然考えるようになります。ロンドン・ボストン、澳門・広東、長崎・横浜、それからバタビアまで加えたら、三角形どころか四角形を形成してしまいます。

これらの都市の関係史を探索するために、なによりも必要なのは、外国語の資料です。私の乏しい語学力と歴史知識でどこまで迫るものか、はなはだ心細いかぎりです。近代日本の国際交流史の探索を Triangle Approach によって進めるために、最低三ヶ国語、日本語・英語・中国語、もしくは日本語・英語・オランダ語を駆使できなといけないと思いました。学生・院生時代の若い時期に外国語をもう一つマスターしておけばよかった、と反省する昨今です。

英語だけの資料に頼ってきた私なりの triangle approach の探索について、今回は、日本語語研究という限定的なテーマ、それも東アジアに在住しながら現地で、独学した宣教師たちに絞ってお話しさせてください。

I　ロバート・モリソン (Robert Morrison:17821~1834)

欧米人による中国語研究と日本語研究は、ともにカトリック系の聖職者によって、それぞれ現地で開始されて成果をみたものの、両国の鎖国政策を受けたあとに、新興国のプロテスタント系宣教師による再開が、19 世紀初頭から現地でスタートした。現地とは澳門・広東である。中国語をマスターしたあとに、同じ漢字を使うという日本語の研究に、現地に居留していた英米の宣教師たち数人が、聖書の翻訳と伝道活動に先立って、なによりも日本語の習得に情熱を傾けることになる。中国語研究と日本語研究とは、あい前後しながらも、阿片戦争前夜の澳門・広東で始動していることに、まず注目したいのである。ここでは数人の宣教師による中国語研究に並行させる観点から、日本語研究の発達を人物中心にして跡付けることにする。

大学で中国語を学べる今日と違い、中国語講座も中国人教師もいないロンドンやニューヨークの状況下では、現地学習するしか、中国語習得の道はなかった。中国に派遣された英国人宣教師の第一号、ロバート・モリソンが、澳門に到着したばかりの 1807 年 8 月 6 日金曜日夕方に、ストーントン (Sir George T. Staunton) を訪問した。英国東インド会社の現地事務所に勤める中国語通訳のストーントンは、現地に滞在する大勢の英国人のなかで、中国語研究の第一人者

であったためである[181]。

現地に来ていながら、澳門・広東で中国語の習得に集中したい思いのモリソンには、三つの大きな障害のあることをストーントンから聞かされる。一つには英国東インド会社である。同じ国の出身者でありながら、貿易と伝道では滞在の目的が違うというので、モリソンの現地滞在は歓迎できないというのである。残り二つの障害とは、先に中国入りしている澳門のカトリック系神父たちによる妨害が予想され、最後に中国政府は、外国人に中国語を教授していけないと禁じていた。モリソンの選んだ対策とは、米国系商社の地下室にひっそりと暮らし、中国人になりすましながら同化(assimilation)しつつ、独学する方法しかなかった。こうした中国語学習上の困難は、開国後の幕末横浜に於いても、同様の状況にあり、現地人による日本語の教授や伝道活動は、厳しい監視のもとに禁じられていた。

日本と日本語に関するモリソンの関心に言及しているのは、メッドハーストである。

Both Drs. Morrison and Milne had long desired to get some acquaintance with the Japanese tongue, in order to ascertain whether present version of the Chinese Scriptures would do for that people[182].

---

181 Sir George Staunton: *A Complete View of the Chinese Empire* (G. Cathorn, British Library, No. 132, Strand, London, 1798).
182 W.H. Medhurst: *China* (John Snow, London, 1838), p.341.

漢英辞典の編集者それに中国学の第一人者として、モリソンの評判は、すでに日本に届いていたことは、1837 年のモリソン号日本渡来に端を発した天保10 年の「蕃社獄」を例に持ち出すまでない。モリソン伝記の中にも日本に於ける評判に言及した興味深い書簡の引用があるので、以下に引用しておきたい。

[November, 1828] 29th. I have sent to Japan an order for a copy of my Dictionary, to be given to the translator Gonoski Kokizas. Mr. Burgher suggests that I should write a kind letter to him, and he will forward it[183].

上掲引用文に言うバーファーは、長崎出島のオランダ商館に勤めていた医師である。この人の伝えてくれた珍しい日本情報とは、モリソンの漢英語辞典を日本人の手で翻訳中である、とのことであり、その翻訳者の一人が、引用文に出てくる Gonoski であるようだ。

II メッドハースト (Walter H. Medhurst：1822〜1885)

モリソンに続いて英国から東アジアに派遣された宣教師の一人、メッドハーストもまた広東語の現地独学につづいて、日本語の学習に取り組んでいる。日本人教師から直接に習うのではなく、専ら書物による独学であり、その成果は

---

183 His Widow: *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, D.D.* (Longman, London, 1839, in 2 volumes), vol. II, p.413.

慎ましいものであったにせよ、日本語の語彙集に現われている。先に引用したモリソンの書簡と前後する1827年7月20日に始まり、1829年1月24日の日付のあるロンドン宣教師会本部に宛てたバタビア発信の書簡のなかに、日本語学習の取り組みを報告している。

ところが去る二月のことです。私の手元にかなりの冊数で日本の本が入って参りました。相手の御好意によって、私の手元に数か月間、留め置き、好きなように利用してよいとのことでした。それに、どんなに筆写しても構わない、とも申されました[184]。

また、同じ内容は、メッドハーストの後年に著わした著書に、要約的にこう回顧されてもいる。

After copying these works, the author proceeded to the compilation of an English and Japanese vocabulary, which was afterwards printed. This little work does not profess to present a full and extensive development of the language, and enters very little into its structure or character: it is hoped, however, that it may afford some assistance to future labourers, endeavouring to investigate that rich and copious tongue, with a view to convey the treasures of divine inspiration into it. Without intercourse and conversation with the people, however, it was impossible to proceed further in the acquisition of the Japanese language, and the study of it gave way to more immediate and imperious

---

184 拙著『波うちぎわのSatsuma奇譚』(高城書房、2009年)、p.34.

claims on time and attention[185].

前述した本部宛書簡のうち、1829 年 1 月 24 日のものにも、「日本訪問を果たせないこと。つまり現地の人々と個人的に面談して会話する。このことなしに、神の言葉の一部分でさえも日本語に移せず、日本語学習をとても前進そうにない、と絶望的に最近では考えがちです」と述べている[186]。

メッドハーストの編纂した英和語彙集は、分野別に日本語の単語を収録した簡単な小型本に過ぎない。1830 年に Batavia で、石版刷りで印刷されている。明治学院大学図書館の所蔵する同書には、ヘボンの署名入りで、1859 年の年号が記されている。1859 年 7 月 1 日に開港された横浜に赴任する途中で立ち寄った上海で、ヘボンは、直接メッドハーストから入手したものらしい。日本語研究と和英辞典編纂に取り組みたい意向のヘボンとしては、活字になっている日本語の教科書といえば、この語彙集しか存在しない状況に置かれていた。

III　ギュツラフ (Karl Friedrich Augustus Gützlaff : 1803-1851)

プロシアの Pomerania 生まれのギュツラフは、ベルリンの神学校に学び、オランダ宣教師会から 1827 年に東洋伝道に派遣された。バラビアを本拠にして、

185 Ibid., Medhurst, pp.341-3.
186 前掲拙著、pp.36-7.

広東語とマレー語を学び始めた経歴の点で、メッドハーストに後続する宣教師である。マラッカ、バンコクで布教したあとに、1830年代には澳門・広東に移り住み、モリソンの亡きあと、英国東インド会社の中国語通訳を勤めるようになった。東アジア各地の現地を習得して語学の天才と言われながら、時に冷静さを書いて、情熱的に行動に走るタイプであったらしく、本人が思っているほど周囲からの評判は良くなかったらしい。変わった人物なのある[187]。

宣教師による海外日本語研究の系譜に於いて、ギュツラフは、画期的な転機を記している。メッドハーストが絶望的に述べていた日本人の教師役から直に学ぶ道が、ギュツラフにおいて初めて可能となったためである。日本人漂流民(Japanese ship-wrecked sailors)が、彼の日本語教師役となった。尾張・小野浦出身の音吉等三人が、1835年12月に澳門に届けられたのち、ギュツラフに預けられた。その後、1837年3月には、九州出身の力松等四人が、更に預けられることになる。言語学習の天才と言われ、伝道熱心なギュツラフが、本格的に彼らから日本語を教えてもらったことは、言うまでもない。但し、彼ら漂流民は、学問のある先生ではない。ウィリアムズの自筆書簡のなかに次のような言及がある。

[SWW to Unidentified Recipient at Home: 1836/06/25]

June 25, 1836.

There are three Japanese now staying at Mr. Gutzlaff's house who were brought

[187] Kenneth Scott Latourette: *A History of Christian Missions in China* (Ch'en-wen Publishing Co., Taipei, 1975), pp.216-7.

from Columbia River via London, and are now supported at the expense of the English commission. One of them named Keokitch was sent on an errand to me to-day, and finding that he could talk broken English, I asked him as many questions as I could think up. He says that he comes from a small town about fifty miles (Chinese li, probably, a third of a mile each) from Jeddo. The town is called Sriwasi, most likely a small seaport producing rice and exporting it to the capital[188].

それでもギュツラフの日本語能力は大きく前進して、福音書の日本語訳本をシンガポールで印刷して、1837 年に出版されているほどである[189]。

Ⅳ　ウィリアムズ (S. Wells Williams : 1812-1884)

日本語研究に関心を示したこれまでの宣教師たちは、欧州からの派遣者であったけれど、1830 年代に入ってからの澳門・広東には、米国系の宣教師の姿が見られるようになる。1833 年 10 月末に澳門・広東に到着したウィリアムズは、20 歳になったばかりであり、現地に設けられた伝道印刷所に、印刷工として働くために派遣された。もともと博物学を大学に進学したかった勉強家であったから、植物や鉱物の採集をするように、中国の言葉のみならず幅広く中国知識を集め、辞書や中国総論にまとめた。昨今では、顧鈞（北京外国語大学）を中

188 S. Wells Williams Family Papers, Yale University Library.
189 都田恒太郎著『ロバート・モリソンとその周辺』(教文館、1974 年)、pp.273-283.

心としてウィリアムズの再評価が、中国で盛んに進んでいる。

健脚家であるばかりか、健筆家でもあったので、主に母国の家族に宛てて沢山の手紙を書いている。そのなかの一つに、ギュツラフの預かっている日本人漂流民に言及した書簡を既に引用した。その後、日本人漂流民や日本語に言及している書簡は、1837 年モリソン号の日本渡来の時期に集中するが、ギュツラフの日本語能力に言及しても、自分の日本語学習についてはなにも述べていない。ウィリアムズの日本語研究は、モリソン号の澳門・広東帰還以降になって始まったと断定できる。

[SWW to Father: 1837/07/02]

Macao, July 2, 1837.

Dear Father,

.... To-morrow I expect to leave Macao in a short trip to Japan, in the old ship Morrison, in company with Mr. & Mrs. King & Dr. Parker. Gutzlaff has preceded us to Lewchew Is. where he has gone in H.B.M. Ship Raleigh. The occasion is to return a parcel of shipwrecked Japanese sailors who have been Providentially cast ashore at Macao, and have been supported by charity here. Gutzlaff has acquired enough of their language from them to hold a conversation on most topics, and [with] them and him, we hope to make & tell a pretty good story...[190]

ウィリアムズによる日本語学習は、1830 年代終わりから 1840 年代中ごろま

---

[190] Ibid., S. Wells Williams Family Papers; SWW to Father, 1837/07/02.

での七、八年間に限定されている。厳しい鎖国政策のために帰国できないでいる漂流民たちの世話は、ギュツラフに代わってウィリアムズの担当となる。

伝道印刷所で働いてもらう合間に、日々に時間ほどの日本語学習を継続できた。しかし、彼の周辺から離れて独立する日本人漂流民が、一人一人と続き、1845年頃には誰一人残っていなかったと思われる。それはそのまま、日本語研究の断念を意味した。

1853年にペリー提督から日本遠征に参加し、首席日本語通訳をして欲しいと依頼されたときに、ウィリアムズは、自分の日本語能力に自信を持てず、最初のうちペリー提督の申し出に躊躇する。他方では、ウィリアムズの自信のない態度は、いつもの謙虚さの表れ、として判断すべきであるのかも知れない。

というのも、後年の思い出話としてブラウンが、ウィリアムズに伝えた次のようなエピソードは、それなりの日本語能力を示唆していると思われるからである。

[BR Brown to SWW: 1860/12/24-5]

Kanagawa, 24, Dec. 1860.

My dear Williams

.... I was talking with a very intelligent Japanese, Dr. Hepburn's teacher, last night, he having come in to chat, & learn a little English as he often does of an evening, & he spoke of you! He told Mrs. Brown & me, that you landed at Yokohama with Commodore Perry, & that acting as interpreter, you spoke to the Japanese, on coming ashore, saying, "Sa yu maku-wo tore[左右幕を取れ]" Take away the tents (or

clothes-hangings, on the right or left, and that the Japanese were all amazed, & said, Isn't he a Japanese?[191]

V　ヘボン (James C. Hepburn : 1815-1911)

日本語研究の本格化は、1859年7月1日に開港された横浜に於いて、ヘボンによって本格化する。その成果は、『和英語林集成』の慶応三年出版によって実る。最初の和英・英和辞典の出現であった。横浜のヘボン先生と言われ、今日まで一般的に使用されている「ヘボン式ローマ字」の創始者として、日本人の間に高い知名度を残している医療宣教師である。日本に着任する前に、ヘボンには、中国滞在の時期が二年ほどあった。1841年から1845年にかけての短い期間ではあったけれど、澳門では数か月間、ウィリアムズの自宅に滞在して、夫婦で世話になっているから、印刷所で働く日本人漂流民を目撃していたかもしれない。ウィリアムズはヘボンの先輩格である。二人の一生の間に、なんども交友する場面が、ウィリアムズ書簡に語られている。

一例は、後年1871~2年、上海での交友場面である。ヘボンとウィリアムズは、上海の米国長老派教会印刷所（Mission Press、美華書舘）で再会することになった。ヘボンは『和英語林集成』再版の出版のために、自ら上海の印刷所まで赴き、校正と刷り具合を現場監督していた。ウィリアムズの方も、中国滞

191 Ibid., S. Wells Williams Family Papers; SR Brown to SWW, 1860/12/24.

在の最後の労作である北京語辞書の印刷をやはり現場監督するために、後からヘボンに加わっている。

[SWW to Daughter Sophia: 1872/01/07]

Shanghai, Jan. 7, 1872

My dear daughter

.... Newyears was spent here in visits as it would have been in Peking, tho' I am not so well acquainted as there. Early in the day Dr Hepburn came for me, and in his carriage (he bro^{t}. from Japan) we went to Mrs Syle's & Fanshaws and other houses, till we had numbered 16 in all...[192]

横浜からわざわざ運んできていたというヘボンの馬車に乗り合い、二人で、年始の挨拶に知人のご婦人方 16 名の自宅を廻ったという。愉快な話である。それに両者ともに、精魂を傾けて完成した中国語と日本語の辞書を印刷するために、数か月もの長い間、上海の伝道印刷所に詰めたというのも、現地滞在型の東洋語研究の系譜のなかに置いてみるとき、文書による学習、漂流民からの学習、最後に本格的な現地学習、というステップを踏んで進んできた大きな成果を意味し、将来への画期的な転機として結論できないであろうか。

192 Ibid., S. Wells Williams Family Papers; SWWto Daughter Sphia, 1872/1/7.

結びにかけて———ヘボン式ローマ字 (the Hepburn Sytem of the Romanized Japanese)

1866 年完成の『和英語林集林』では、日本語を横書きにして、左から右に書いており、そのときに日本語の読みを英文字につるために、初期のローマ字化が開発されている。母音字 (vowel letters) の「あいうえお」(a i u e o) と、子音字 (consonant letters)、たとえば「か行」「さ行」では、それぞれ ka ki ku ke ko、sa si su se so、となる。それが、「た行」になると、そう単純な組み合わせとならない。「た」は ta であり、単純であるが、「ち」は、ヘボン式ローマ字で「chi」と表記されており、後年の文部省作成ローマ字表記法の「ti」と違っている。なぜか。

ヘボンの採用した方法は、あくまでも現地学習に基づいている。現地の使っている日本語に英語のアルファベット (English alphabet)を同化させる (assimilation) 作業であったのだ。日本には英文字表記で ti に当たる音の発声がなかった。

たとえば、つい最近まで日本人は、tissue を「ちっしゅ」とか「てっしゅ」と呼んでいたらしい。tea も「ちー」だったり、「テー」であったりした。日本語には、英文字で ti とあらわす音や、それに発音記号で [ti:]とあらわせる音がない。「ち」(chi)なのである。

ヘボンは現地日本で身近に聴覚するあいだに、忠実な表記法を編み出た。それには、友人のウィリアムズをはじめとする中国在住の宣教師たちの試みてきた中国語表記法という先行研究が、なに者にもまして有益であった。日本研究

に先立って現地の中国研究があった。中日文化交流の成果は、こんな形にも現出している点に注目したい。また、現地学習、それも自主的な独学の大切さ、今日のわたしどもに教えてくれている。

(10)　2008年12月国際学会発表資料（マカオ大学歴史学部）

Americans in Macau and the Opening of Japan

--- Olyphant, King, Parker, Williams, and Commodore Perry ----

Xavier once wrote of the Japanese people that "I know not when to cease in speaking of the Japanese. They are truly the delight of my heart," and that "It seems to me that among pagan nations there will not be another to surpass the Japanese...a people who prize honour above all else..."[193] He returned to China in 1551 and died the next year at Sanchuan Island, very near Macau[194]. Then, for almost a century, the Japanese people continued to delight Portuguese traders of Macau as well, who are said to have obtained "the golden marrow of Japan" in exchange for Chinese silk and European commodities.

Macau thus gloriously began her significant relationship with Japan in the 16th century, but later from the 17th century onward, found herself forcibly excluded from Japanese trade over the two centuries of the Tokugawa Isolation Policy. This was partially incurred by self-defeating jealous rivalry not only among Catholic nations (Spanish and Portuguese) but also with the rising Protestant nations (Dutch and English). The pivotal position of Macau in Japanese foreign relations looked like being lost for ever, until gentlemen of various Protestant countries began to appear on the scene in Macau. However different they were in nationality or denomination, they seem to have [195]more or less shared with each other something resembling a cooperative or

---

193 Schurhammaer, Georg, SJ (1982) *Francis Xavier,* vol.4 (English translation), quoted by J.F. Moran in his *The Japanese and the Jesuits*, London and New York: Routledge, 1993. p.97.

194 "In 1552 and 1553, the indefatigable Duarte da Gama was again trading with his carrack in various Kyushu ports, whilst in between his trips he was a witness of the death of his friend Francis Xavier who died at Sanchuan (Saint-John's) island where da Gama was wintering in December 1552," C.R. Boxer, Fildalgos in the Far East 1550-1770, Fact and Fancy in the History of Macao, Hague: Martinus Nijhoff, 1948. P.30.

friendly spirit from the beginning. Dr. Robert Morrison's arrival at Macau by way of New York foretold a series of cooperative movements among Protestant residents, as the evidence of the Protestant Cemetery at Macau suggests.

Unhindered by the jealous rivalry found among Catholic people of different nationality and demonination, Protestant missionaries made another remarkable movement toward international cooperation in Macau, inspired by American missionaries who edited, printed and ran the monthly English magazine, *The Chinese Repository.* It actually turned out be a rallying point for American freedom and democracy for a variety of resident Protestant contributors of different nationality in Macau and Canton, such as Morrison, Walter Wedhurst, Ljungstedt, Bridgman, Charles Gutzlaff, King, Parker, and Williams.

Having these above-referred marks of cooperative movements in mind, it is much easier to understand the leadership of American missionaries and merchants residing at Macau in their first abortive attempt at opening Japan in 1837, well known in Japan under the name of the Ship *Morrison* Affair. In 1853 and 54, ten years after the first Opium War opening China to western powers, Macau was ready to offer a helping hand to Commodore Perry and his fleet, resuming her pivotal position in connections with Japan.

(11) 2009年9月国際学会研究発表（石家庄市河北科芸大学文法学部）、英文発表原稿

The *Chinese Repository* (1832-- 1851, Canton & Macau) and Its Historical Significance

--- a study of Japanese articles & opening of Japan ---

The open-mindness among the earliest Protestant missionaries to China is one of the basic factors which brought a successful career to this unique journal. Unique, in other words, rare and significant, in more than one way. We may call the first English monthly specializing in Chinese studies as a very rare phenomenon, on account of its being founded, supported and carried on for so long a period as 20 years in China. It lasted for 10 years before, and another 10 years after, the Opium War. The place of its publication is unique too. It was started and supported on that basis of "patterns of interaction and networks" of open-minded relationships (Rubinstein: *The Origins of the Anglo-American Missionary Enterprise in China*, p.83) which Robert Morrison had built among Protestant missionaries and resident merchants of different nationalities and denominations.

The two American editors of the journal in succession, E.C. Bridgman and S. Wells Williams, came to Canton for a long stay in order to learn the Chinese language on the spot, then apply their linguistic knowledge to the study of the Chinese civilization in general, and finally to crystallize their learning into their missionary project, that is the translation of the Bible into Chinese. So this journal is, in a measure, one of important by-products of their efforts. The Editor invited many a scholarly merchant as well as numerous missionary friends to write for them from the very beginning: among a variety of contributors we find Americans (Bridgman, Williams, C.W King, G. Nye, Dr. Hepburn and many others), Englishmen (Morrison, Medhurst), and other Europeans

(Gutzlaff, Bettleheim, and even the Swedish Consul).

Among all the contributors, Williams is a central figure as persistent student of the Chinese language, culture, society, religion and life. He complained his pen did not move so smoothly as he wished, but actually he was a prolific writer of articles, letters, and books. His scholarly enthusiasm and diligent approach is reflected in the very number of miscellaneous writings for the journal alone, which, as I found, is something about 150 pieces. Later on, in 1846, he had a chance to put all of his articles together into authorship of a monumental work, *The Middle Kingdom.*

The same scholar and best Williams specialist, Rubinstein, praised the book highly by saying that "It was, and remains to this day, an excellent introduction to China and its civilization. The book is now over one hundred years old and has been superceded by more modern works but few if any, of these are as an adventurous in scope or as comprehensive in coverage as the Williams tome," (Rubinstein, 'S.W Williams and the Middle Kingdom'). It is, therefore, no wonder that the journal has gained an ever-increasing attention and higher estimate among international scholars. There have been published two reprint editions so far in Japan, one recent edition in American, and we should like to welcome the soon coming publication of the first reprint edition in China, which has been prepared by Dr. Gu Jun, the Williams scholar in China.

Admittedly the *Chinese Repository* is a treasure house to international scholars of Chinese studies. At the same time, it was a wonderful surprise to find many interesting and instructive articles about Japan as well. I have made a comprehensive list of all the articles, notes, reviews and references which are relevant to Japan. It turned out to be so long a list that I could not ·help preparing for the today's meeting a selective list, which

you will find appended to this paper. Now shall we have a look at the list for a while and see what sort of writings they are?

The first mention of Japan in the journal, Vol. 1, pp. 109-110, was made in the review of the Medhurst's *Japanese Vocabulary* book published in Batavia. Interestingly enough, the reviewer, who seems to have forgotten his job was to review a book, diverges to another direction, as follows: "In situation, size, and local advantages, Japan is not very unlike Great Britain; and if she speedily receives those precepts of righteousness which alone can exalt a nation, she may, ere many generations have passed away, prove no mean rival of that western Queen of Isles" (p. 110). One of prominent features of the journal in relevance to its Japanese articles is evident here: "divergence" in the way of writing, the "evangelism" and the "open door policy" in the way of thinking, and "prediction of the future Japan."

The first full article on Japan is found in the Vol. 2, pp. 318~25. In this connection we should notice another feature in the writings of the journal: the "repetitive development in publication." The same theme is to be repeated in later numbers in the form of fully developed articles. In this particular case, the same subject, religion in Japan, is to be taken up again in Vol. 10, pp. 309~ 20.

Recurrence is also remarkable in several specific subjects like the Japanese language, products, voyages to Japan, history of foreign countries' intercourses with Japan, Nagasaki, Bonin Islands, Ogasawara, Lewchew; the ship *Morrison*, ship-wrecked sailors and Bettleheim's stay in Lewchew; as the appendix selective list shows.

Now; I should like to draw your attention to a couple of successive articles: "Remarks on the Japanese language" (Vol. 6, pp. 105~13) and "Lewchew kwo che leo:

a brief history of Lewchew" (Vol. 6, 113~8). The former article tells us that "It is time, however, for foreigners to consider the welfare of a nation so neglected" (p. 106). Another divergence here again, but the article indicates an ever-increasing interest of foreigners in opening the closed country. The latter informs us that "We may state here, however, that much of the information, contained in the preceding article, was obtained from those three Japanese.

「中国叢報」の日本関連記事: Articles & Notes on Japan and Japanese Culture in the *Chinese Repository* Vol. 1, 1832 ~ Vol.20, 1851.

Vol. 1 (No. 1, May 1832 〜 No. 12, April 1833).

pp.16-25. Signed article by Rev. Charles Gutzlaff: "Journal of a residence in Siam, and of a voyage along the coast of China to Mantchou Tartary".

pp.45-64. Signed article by Rev. Charles Gutzlaff: "Journal of a residence in Siam, and of a voyage along the coast of China to Mantchou Tartary". (continued from p.25).

pp.81-99. Signed article by Rev. Charles Gutzlaff: "Journal of a residence in Siam, and of a voyage along the coast of China to Mantchou Tartary". (continued from p.64).

pp.109-110. Unsigned review of *An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary,* by W.H. Medhurst.

pp.122-140. Signed article by Rev. Charles Gutzlaff: "Journal of a residence in Siam, and of a voyage along the coast of China to Matchou Tartary". (continued from p.99).

pp.180-196. Signed article by Rev. Charles Gutzlaff: "Journal of a residence in Siam, and of a voyage along the coast of China to Matchou Tartary". (continued from p.140).

pp.364-370, Unsigned article, "Intercourse of the Chinese with Foreign Nations," in which Japanese ambassies to China are mentioned.

p.423. Unsigned brief notice of Gutzlaff's Christian name, Keale, has been reported to Peking

pp.430-446. Unsigned article, "The Roman Catholic mission in China," in which Japan is mentioned.

Vol. 2 (No. 1, May 1833 ~ No, 12, April 1834).

pp.20-32. Signd article by Charles Gutzlaff, "Journal of a voyage along the coast of China from the province of Canton to Leaoutung in Mantchou Tartary,; 1832-23; by the Rev. Charles Gutzlaff."

pp.318-325. Unsigned article, "Religious worship of the Japanese."

pp.447-472. Unsigned article (by S. Wells Williams): "Imports and Exports of Canton", in which Japanese products, such as ambergris, aniseed stars, camphor, cassia, lacqured ware and Japan canes, are mentioned.

pp. 529-553. Unsigned review of the two books: "*Report of proceedings on a voyage to the northern ports of China, in the ship Lord Amherst*: extracted from papers printed by order of the House of Commons, relating to the trade with China. By H.H. Lindsay. London, 1833; *Journal of two voyages along the coast of China, in 1831 and 1832, the first in a Chinese junk, the second in the British ship Lord Amherst, with notices of Corea, Lewchew, &c.* By Charles Gutzlaff. New York, 1833."

Vol. 3 (No, 1, May 1834 ~ No. 12, April 1835).

pp.107-115. Unsigned article, "Early foreign intercourse with China," in which Mendes Pinto's visit to Japan is mentioned.

pp.145-160. Unsigned article, "Japan: its geographical situation, extent, and divisions; its mountains, rivers, lakes, climate, and natural productions; origin of the Japanese, their early history and

national character."

pp.177-184. Unsigned article, "Obituary notice of the Reverend Robert Morrison, D,D., with a brief view of his life and labors, "

pp.193-211. Unsigned article, "Japan: its government, laws, manners, customs, religion, literature, together with brief notices of its intercourse with foreign nations.", Sketch of intercourse with Japan

pp.385-386. Unsigned literary notice of *Select papers on the subject of expressing the languages of the East in the English (Roman) character*.

pp.406-416. Unsigned review of *Journal of three voyages along the coast of China, with notices of Siam, Corea, and Lewchew.* By Charles Gutzlaff."

pp.485-486. Unsigned article, "Journal of Occurences: Destruction of St. Paul's church at Macao, by fire."

pp.510-516. Unsigned article, "The Bonin Islands: their situation, production,, &c., as noticed by the Japanese in 1675, and subsequently; by Captain Beechey in 1827; more recently by a correspondent of the London Metropolitan; and in August, 1834, by Mr. Edwards."

pp.516-528. Unsigned article, "Universal peace; obstacles to it in the character and government of nations, particularly of China and Japan; with remarks on the means best fitted to remove the obstacles."

Vol. 4 (No.1, May 1835 ~ No.12, April 1836)p.

p.42. Unsigned brief notice of Siebold's *Fauna* of Japan

p.47. Unsigned article, "Journal of occrences; Death of Mowqua."

pp.72-82. Signed article, "Memorandom of an excursion to the tea hills, which produce the description of tea known in commerce under the designation of Ankoy tea. By G.J. Gordon," in which trip Gutzlaff joined."

pp.195-196. Unsigned review of Medhurst's *Translation of a Comparative Vocabulary of the Chinese, Corean, and Japanese languages: to which is added the Thousand Character Classic, in Chinese and Corean; the whole accompanied by copious indices of all the Chinese and English words occurring in the work.* By Philosinensis, Batavi [Java]. Printed at the Parapattan Press, 1835."

pp.406-411. Signed extract, "Extract from the manuscript journal of the Reverend W.H. Medhurst in the Huron, during her voyage along the eastern coast of China, in the summer and autumn of 1835."

Vol. 5 (No.1, May 1836 ~ No.12, April 1837).

pp.22-29. Unisigned article, "System of Orthography for Chinese words:—that of Morrison's dictionary imperfect; unsuitableness of English, and suitableness of Italian vowels, for an accurate orthographical system; application of the Roman alphabet, as used in Italy, with some modification, to the Chinese language."

pp.253-259. Signed extract from C.W. King's pamphlet on British intercourse with China.

pp.373-381. Unsigned article, "Proceedings relative to the formation of the Morrison Education Society; including the Constitution, names of the Trustees and members, with remarks explanatory of the object of the Institution."

p.480 Unsigned article, "Journal of Occurences; arrival of six Japanese at Canton."

Vol. 6. (No.1, May 1837 ~ No.12 April 1838).

pp.105-113. Unsigned article, "Remarks on the Japanese language: the subject but little understood; the character of the oral language; its different forms, and grammatical structure. From a Correspondent."

pp.113-118. Unsigned article, "Lewchew kwo che leo: a brief history of Lewchew, containing an account of the situated and extent of that country, its inhabitants, their manners, customs, institution, &c."

pp.209-229. Signed article by S. Wells Williams, "Narrative of a voyage the ship Morrison', captain D. Ingersoll, to Lewchew and Japan, in the months of July and August, 1837."

p.255. Unsigned article, "Journal of Occurences. Return of the Morrison from Lewchew and Japan."

p.339, Gutzlaff's small work in Japanese is mentioned.

pp.353-379. Signed article by S. Wells Williams, "Narrative of a voyage the ship Morrison, captain D. Ingersoll, to Lewchew and Japan in the months of July and August, 1837." (continued from p.229).

pp.381-387. Signed article by G Tradescant Lay, "Trade with China: a letter addressed to the British Public on some of the advantages that would result from an occupation of the Bonin Islands. By G Tradesscant Lay. London, 1837."

p.400. Unsigned article, "Journal of Occurances. Kingkwa's death."

pp.401-406. Signed article by Ingersoll, "Nautical observations, made by captain David Ingersoll, during the voyage of the Morrison to Lewchew and Japan, in July and August, 1837."

pp.406-417. Unsigned aricle (by S. Wells Williams), "Notices of some of the specimens of natural history, which were collected during the voyage of the Morrison to Lewchew and Japan."

pp.460-473. Unsigned article, "Sketch of Portuguese and Spanish intercourse with Japan, from its commencement in 1542 to their expulsion in 1640."

pp.553-562. Unsigned article, "Brief sketch of the Dutch intercourse with Japan from its commence, in A.D. 1600, to the present time."

pp.583-589. Unsigned article: "Notices of Formosa, gleaned from the works of Francis Valentyn. Published at Amsterdam, 1729. From a correspondent."

Vol. 7 (No.1, May 1838 ~ No.12, April 1839).

pp.61-89. Unsigned article, "American influence on the destinies of Ultra-Malayan Aisa. From a

Correspondent. (Conclusion of Article ii, No.1, vol.vii.)"

p.106. Unsigned ,note of Gutzlaff 's translation Su, a poet.

pp.217-222. Unsigned article, "English intercourse with Japan; a brief sketch of the attempts which have been made to carry on a trade with Japan by the English."

pp.290-301. Signed article by C.R., "Sketch of Spanish Colonial History in Eastern Asia; government of Labezares, Sande, Ronquillo, &c.; from A.D. 1573 to 1594. Continued from vol..vi, No.6. By C.R."

pp.301-310. Unsigned article, "The Second Annual Report of the Morrison Education Society: read 3rd October, 1838," in which is mentioned Mrs. Gutzlaff's school at Macao.

pp.462-477. Unsigned article, "Sketch of Spanish Colonial History in Eastern Asia; government of Das Marinas, De Morga, De Tello, &c. Continued from A.D. 1595 to 1624," in which are mentioned the Japanese pirates.

pp.490-499. Unsigned article (by S. Wells Williams). "Remarks on the system of Chinese orthography proposed in the Repository, vol. 6, page 479."

*536, Japanese in Manila

*546, Japanese leaves Siam

pp.550-551. Unsigned article on Education, in which is mentioned S.R. Brown reaching.

pp.588-594. Unsigned article, "Intercourse with Japan: notices of visits to that country by the Brothers, captain Peter Gordon; the Eclipse; and the Cyprus."

Vol. 8 (No.1, May 1839 ~ No.12, April 1840).

pp.70-77. Unsigned article, "Crisis in the opium traffic; continuation of the narrative, with official papers, &c. (continued from p.37)", in which is mentioned Mr. and Mrs. C.W. King's trip on board the ship Morrison on June 17th to see opium destroyed at Chunhow.

pp.84-94. Unsigned review (by S. Wells Williams) of Gutzlaff's "*China Opened; or, a Display of the topography, history, customs, manners, arts, manufactures, commerce, literature, religion, jurisprudence, &c., of the Chinese empire.* By the Rev. Charles Gutzlaff. Revised by the Rev. Andrew Reed, D.D. Two vols, pp.510, 570. London: Smith, Elder & Co., 1838.

pp.132-164. Unsigned article, "Description of the tea plant; its name; cultivation; mode of curing the leaves; transportation to Canton; sale and foreign consumption; endeavors to raise the shrub in other countries," in which is mentioned tea used in Japan.

pp.225-245. Unsigned article, "Course of tyfoons in the Chinese and Japanese seas, with a chart by Mr. Redfield; statistics and philiosophy of storms; Atlantic hurricanes; and observations at the Madras Observatory."

pp.273-282. Unsigned article (by S. Wells Williams), "Notice of an embassy sent from the Japanese princes to the pope of Rome in 1582."

pp.359-372. Unsigned review of "*The claims of Japan and Malaysia upon Christendom, exhibited in notes of voyages made in 1837, from Canton, in the ship Morrison and brig Himmaleh, under the direction of the owners.* In 2 vols. New York, 1839."

p.600, Unsigned article, "Journal of Occurrences. Seven Japanese sailors," taken from a shipwreck on June 6th, 1839, reported from Lahainaluna on Jan. 24, 1840.

pp.639-644. Unsigned article (by S. Wells Williams), "Illustrations of passages of Scripture, drawn from the manners and customs of the Chinese, " in which Luke vi, 38 is remarked for illustrating the dress of the Japanese and Lewchew.

Vol. 9 (No.1, May 1840 ~ No.12, April 1841).

pp.86-101. Unsigned translation (by S. Wells Williams), "*Ko Doii Dzu Roku, or, A Memoir on Smelting Copper, illustrated with plates.* Small folio, pp.29. Translated from the original Japanese.

pp.291-311. Unsigned article, "Notices of Japan, No. I. Appearance of the coast; regulations regarding intercourse with the Dutch. Derived principally from recent Dutch accounts of Japan, and the Gernman of Dr. Von Siebold."

pp.369-389. Unsigned article, "Notices of Japan, No. II. Nagasaki and its environs; visits of the Dutch thither; periodical journey to Yedo."

p.423. "Journal of Occurrences. The ship, Indian Oak wrecked on Lewchew"

pp.489-506. Unsigned article, "Notices of Japan, No.III. Stay at Yedo; audience with the emperor; return to Dezima."

pp.620-635. Unsigned article, "Notices of Japan, No.IV: Domestic life and customs of the Japanese, relating to births, marriage,s, funerals, &c."

Vol. 10. (No.1, January 1841 ～ No.12, December 1841).

pp.10-21. Unsigned article, "Notices of Japan, No.V.; political state of the empire, classes of people, laws, prisons, &c."

pp.25-37. Unsigned review of "*Memoirs of the life and labours of Robert Morrison.* Compiled by his widow. London, 1839. 2 vols. 8vo. pp.552, 544."

pp.72-84. Unsigned article, "Notices of Japan, No.VI.: anecdotes illustrative of Japanese character; the visit of the Phaeton; a conspiracy; a wrecked ship; a magistrate's sagacity, &c., &c."

p.120. Unsigned article, "Journal of Occurrences: Shipwrecked Japanese."

pp.160-171. Unsigned article, "Notices of Japan, No.VII.: recent attempts by foreigners to open relations with Japan; by Americans; by Russians; and by English."

p.171n. Unsigned article, "Notices of Japan, No.VII," in one of whose footnotes Japanese shipqwrecked sailors' many cases are covered."

pp.205-221. Unsigned article, "Notices of Japan, No.VIII.; character of the Japanese language; its

various syllabaries; poetry, science, divisions of time, &c."

pp.279-285. Unsigned article, "Notices of Japan, No.IX.; arts and manufactures among the Japanese; lacker-war, paper, commerce, tea, &c."

pp.309-320. Unsigned article, "Notices of Japan, No.X.; sketch of the religious sects of the Japanese, and principal particulars of the modern history of Japan."

p.688. Unsigned article, "Journal of Occurences: death of an envoy from Lewchew."

Vol. 11. (No.1, January 1842 ~ No.12, December 1842).

*244,. Six Japanese at Canton from Hainan

*255, Japan [196]visited by the Morrison

p.400. Unsigned article, "Journal of Occurrence: shipwrecked Japanese."

*598, Japanese pirates on Chinese coast

Vol. 12. (No.1, January 1843 ~ No.12, December 1843).

p.56. Unsigned article, "Journal of occurrences: shipwrecked Japanese."

*78-88. Treatment of wrecked in Lewchew

pp.109-110. Unsigned article, "Journal of Occurrences: shipwrecked Japanese."

pp.258-266. Unsigned review of "*The Life of St. Francis Xavier, of the society of Jesus, spostle of the Indies, and of Japan.* Written in French by Father Dominick Bohurs of the same Society. Translated into English by James Dryden, esq."

p.278. "Journal of Occurrences: five Lewchewans shipwrecked on the coast of Chekiang ," of whose mention was made on April 24^{th}.

*331, Envoy at Peking from Lewchew

---

p.448. "Journal of Occurences: death of the hon. J.R. Morrison, esq."

pp.456-464. Signed article by S.R. Brown, "The memory of the righteous. A funeral sermon preached on the 10th of Sept., 1843, on the occasion of the death of the hon. J. Robt. Morrison, member of the legislative council of Hongkong, and Chinese secretary to H. M.'s government in China. By the Rev. S.R. Brown, Tutor in the school of the Morrison Education Society at Victoria, Hongkong."

p.500. Unsigned article, "Journal of Occurrences: death of Howqua."

Vol. 13. (No.1, January 1844 ～ No,12, December 1844).

pp.150-161. Unsigned article, "Notes of a visit of H.M. ship Samarang, under capt. Sir E. Belcher, C.B., to the Batanes and the Madicosima groups, in 1843-1844."

p.168. Unsigned article, "Journal of Occurrences: shipwrecked Japanese."

pp.233-238. Signed article by the Rev. D. Abeel, "Notices of Among and its inhabitants: extracts from a Journal of the Rev. D. Abeel, at Kulang su," in which mention is made of Dr. Hepburn (p.236).

pp.337-357. Signed article by the Rev, W.C. Milne, "Notices of a seven months' residence in the city of Ningpo, from December 7th, 1842, to July 7th, 1843. Communicated by the Rev. W.C. Milne," in which the Japanese tribute-bearers and pirates are detailed (pp.353-356).

pp.369-377. Siigned article by Alexander Anderson, V.P., "Proceedings of the Medical Missionary Society in China, as exhibited by a report of its general committee of management, with reports of its medical officers, &c., " in which Dr, Hepburn opening a hospital in Amoy is mentioned (pp.372-373).

Vol. 14. (No.1, January 1845 ～ No.12, December 1845).

pp.156-171. Signed article by Robert Morrison, "Chinese Reminiscences, compiled from notes made by the late Dr. Morrison, in the years 1826-27."

*155. Ambassies from Lewchew

pp.465-471. Unsigned article, "The seventh Annual Report of the Morrison Education Society, with minutes of its meeting."

Vol. 15. (No.1, January 1846 ～ No.12, December 1846).

p.160. Unsigned article, "Journal of Occurences: B.J. Bettelheim will leave Canton for Liuchiu."

pp.172-180. Signed article by C.F. Winslow, M.D., "Some account of Captain Mercator Cooper's visit to Japan in the whale Ship Manhattan of Sag Harbor. By C.F. Winslow, M.D."

pp.179-180. Unsigned notice of reference to Japan and its inhabitants in the Chinese Repository.

pp.181-184. Signed article of J.C. Hepburn, "Report of the Dispensary at Amoy181, Hepburn reports hospital in Amoy, from the 1st of February 1844, to the 1st of July 1845. By J.C. Hepburn, M.D."

p.325. Unsigned article, "Journal Occurences: the U.S.A. Squadron," in which commodore James Bidlde and the bay of Yedo are mentioned.

p.576. Unsigned article, "Journal of Occurences: B.J. Bettelheim", in which is mentioned his letter dated Napa Hospital, Oct. 17th, 1846 as well as two Roman Catholic missionaryes staying in Lewchew.

Vol. 16. (No.1, January 1847 ～ No.12, December 1847).

p.54. Unsigned article, "Journal of Occurences: The Morrison Education Society", in which is mentioned the Rev., S.R. Brown and Mrs. Brown having left Canton on the January 4th on board the Huntress for New York., with their two children Julia and John Morrison and their three pupils, Ashing, Awing and Afun.

p.55. Unsigned article, "Journal of Occurences: From Dr. Bettleheim," reporting the receipt of his letter dated Napa Hospital, Liuchiu, Oct. 20th 1846.

*120, Japanese sailors in Ningpo

pp.569-584. Unsigned review, "*Three years' wanderings in the northern provinces of China, including a visit to the tea, silk, and cotton countries; with an account of the agriculture and horticulture of the Chinese new plants, &c. By Robert Fortune, botanical collector for the Horticultural society of London.* With illustrations. London; John Murray, Albemarle Street. Pp.406, 8vo."

Vol. 17. (No.1, January 1848 ～ No.12, December 1848).

Vol. 18. (No,.1, January 1849 ~ No.12, December 1849).

pp.23-32. Unsigned article, "Bibliogra;phical Notices of Works relating to Siam in the English and French languages," in which is noticed *History of Japan*, by Englebertus Koefer, 2 vols., folio, London, 1727."

pp.48-54. Unsigned article, "Protestant Missions in China."

p.224. Unsigned article, "Journal of Occurences: U.S.S., Preble sails for Japan."

pp.315-331. Unsigned article, "Cruise of the U.S. sloop-of-war Preble, commander James Glynn, to Napa and Nagasaki."

pp.402-444. "List of Works upon China, principally in the English and French languages: Sect. VII (pp.439-444) Works upon Japan, Cochinchina, Corea, &c."

p.666. "Journal of Occurences: English bark lost near Lewchew."

Vol. 19. (No.1, January 1850 ～ No.12, December 1850).

pp.17-50. Signed article by B.J. Bettelheim, "Letter from B.J. Bettleheim, M.D., giving an account of his residence and missionary labours in Lewchew during the last three years."

pp.57-90. Signed article by B.J. Bettlelheim, "Letter from B.J. Bettleheim, M.D., giving an account of his residence and missionary labors in Lewchew during the last three years. Continued from page

49."

pp.135-156. Unsigned article, "Japan: A Translation of the 12th Chapter of the Hai-kwoh Tu Chi, 海国図志 or Notices of Foreign Countries, illustrated with Maps and Engravings. Published at the city of Yangchau fu in Kiangsu, in the summer of 1847."

pp.206-220. Unsigned article, "Japan: A Translation of the 12th Chapter of the Hai-kwoh Tu Chi, 海国図誌 or Notices of Foreign Countries, illustrated with Maps and Engravings. Published at the city of Yang-chau fu in Kiangsu, in the summer of 1847.---(Continued from page 156).."

p.285. Unsigned article, "Journal of Occurences: loss of the English ship Larpent on Formosa."

pp.289-300. Unsigned article, "Notices of the Sagalien river, and the island of Tarakai opposite its mouth."

pp.404-406. Unsigned article, "Journal of Occurences: A meeting of foreigners", which was held to take into consideration the best means of procuring specimens of the different articles of the produce and manufacture of China for the Exhibition in London in 1851."

pp.509-510. Unsigned article, "Journal of Occurences: H.B.M.S. Mariner's visit to Japan."

*567, Trample on Cross

*601, Letter to B.J. Bettleheim from Governor

p.623. Unsigned article, "Journal of Occurences: A visit to Lewchew was made Oct. 3rd, in H..B.M. screw sloop, Reynard. Capt. Cracroft," which refers to B.J. Bettleheim's long stay there.

Vol. 20. (No.1, January 1851 ～ No..2, December 1851).

p.112, Unsigned article, "Journal of Occurrences: Loss of the British vessel Eamont on the east coast of Japan.,"

p.295. Unsigned article, "Paper money among the Chinese: description of a bill: historical notices of the issues of notes," in which is made a brief reference to paper money in Japan.

pp.500-506. Unsigned article, "Journal of Occurences: Loss of the French Narwal on Corea."

pp.509-511. Unsigned article, "Death of D.W.C. Olyphant."

pp.511-512. Unsigned article, "Death of the Rev. Charles Gutzlaff,"

pp.539-541. Unsigned artricle, "Protestant Missions among the Chinese: The Mission at Lewchew."

（12）　2010年11月月刊雑誌書評

書評：楠家重敏著『アーネスト・サトウの読書ノート』

（日本歴史学会編集「日本歴史」２０１０年１１月号、吉川弘文館発行　pp. 126-8）

［ 雑誌に掲載された書評に先立ち、以下のような別の角度を少し加味した原稿を最初に書いている。］

「まえがき」で著者が述べているように、「それぞれの時期にサトウ研究は進化をとげてきた。」確かに十年刻みで振り返ってみると、六十年代には名著『英国外交官の見た幕末維新』の岩波文庫版全訳書、七十年代と八十年代にかけては、全国的に好評を博した萩原延壽による名作『遠い崖』の朝日新聞長期連載、それに平成年代に入ってからは、年々「サトウ研究の研究基盤が次第に整備されてきた」と言えるであろう。

つい先ごろもそうである。サトウ縁の桜並木、時節柄その美しい夜景に包まれた英国大使館では、『外交官指南』第七版の再版出版を記念するパーティが開かれたばかりである。来日された編者のオックスフォード大学トリニティー・コレッジ学長ロバーツ卿夫妻は、外交官のために未だに有用なこのテキスト再版の趣旨についてスピーチされた。こうして枚挙の暇のないほどの勢いで「進化を遂げてきた」ように見える内外の流れの中にあって、本書は、アーネスト・サトウ研究の本格化を告げる労作、と位置付けられる。

扱っているサトウ生涯の時期としては、一八六二年から一八七二年までの十年間にあたるのであるから、一八四三年生まれ一九二九年死去に至る八十六歳の長寿人生、それに日本学者、外交官の全行程を辿っている伝記、例えば北九州大学の英人、ラックストンの近著とか、横浜開港資料館編纂の『図録アーネスト・サトウ』の家族史からすれば、サトウ生涯の中の僅かな時期に集中しているに過ぎないとも評せるであろう。その辺の事情を含め、「まえがき」に漏らした著者の次の言葉から、サトウ研究者の誰しも感じている心境が理解できる。「問題山積のこうした状況を一刻も早く打開して、筆者はサトウ研究をさらなる高みに発展させていきたい。「こうした願いから拙書を書いたのだが、依然としてサトウ研究の壁は大きい。」

健脚家それに健筆家で知られれるサトウの足跡を追い、行動と思考の軌跡を再現して今日的な評価を総括するためには、幾つもの壁を攀じ登る辛苦や、一つの高峰立った喜びを味わいつつ、そんな忍耐強い再チャレンジの繰り返しが欠かせないように思うのである。やがて幾つもの山頂を極めらたら、「サトウ山脈」の踏破が達成出来るかも知れない。八十六年のサトウ生涯を一人の単行する研究者の五十年ほどの研究生活のなかで、どこまで総括し実現できるであろうか。

著者の言うように、まさに「大きな壁がある」けれども、本稿の後半で論述してみたい寺門静軒に関連した寄寓先の武州兜山、根岸友山の私塾付近には、「吉見百穴」がある。百人の内外の学者が、それぞれに登頂したい高峰を担当し、百穴一つ一つに独自な研究成果を収めていけるのであれば、サトウ山脈の踏破は可能になるかも知れない。

本書の中核は、断るまでもなく、タイトル『アーネスト・サトウの読書ノート』に現われている。全体で五部構成であるけれど、序章の A Dilp0mat in Japan が三十頁に渡る中身の濃い論文内容であり、実際には序章まで加えた五部構成と考えたい。

序章に続く五部の構成は、第一部「初期活動」に於いて、『英国策論』をはじめとするサトウに日本学初動化を論じている。本書執筆目的が、日本学者の誕生と成長にあることを明解に意識化されているので、分かり易く納得できるスタートであると受け止められると同時に、本書全体に浸透する研究テーマが鮮明に打ち出されていると思う。

第二部の読書ノート、それに後続する英訳書・著作が第三部となり、本書の山頂を成している。最後の二つは、第四部の外交官活動と、第五部の関係資料であるが、共に山頂からの下山部分にあたる。サブタイトルに「イギリス外交

官の見た明治維新の舞台裏」と付いて内容を解説している理由は、主として下山部分の各種資料の調査研究にある。『通信全覧』を中心に「江戸幕府の外交文書に見るサトウ」を論じたあとに、英国公文書館所蔵サトウ文書(PRO30/33)のうち、太政官日誌の和訳草稿をリスト下の後で、著者は、「サトウの対日情意欲的な著者の視線は、各種資料に対して緻密であるうえに、網羅的であろうとして、次にはサトウの手紙と、収集した和書の行方について調査結果を述べたあとに、サトウ関係の英国外務省文書(FO262)の詳細なチェックリストを作成して読者に提供している。

最後の一章「サトウ関係年譜」では、以上の各資料を付け合わせる形で、一八六二年から一八七二年までの期間ではあるけれども、日ごとに対照させる丁寧な扱い方になっている。

『遠い崖』第九巻の「余話」に於いて、萩原延壽は、サトウ宛の父親書簡を紹介しているが、その一つは一八七一年五月二十五日付けの書簡である。「一般に最初の日本学者と言われているあなた」云々の文面がそこに見える(p.18)。父親の期待を背負い、勉学に努めるサトウの姿を思い描けそうである。年譜によれば一八七一年二月頃からのサトウは日々、漢文で書かれた書物を開き、判読した結果を英文の読書ノートに書き留めている。

これまでのサトウ研究者は、どうしても英国公文書館に視線を絞りがちであったので、ケンブリッジ大学図書館所蔵アストン・コレクションのなかのサトウ自筆読書ノートについて集中的に勉強してこなかった。アストン研究家の著者ならでは功績であり、嚆矢として歓迎できる。

一例を挙げてみよう。寺門静軒の漢文著作『江戸繁盛記』読書ノート書き出しには、一八七一年九月七日の日付があり、著者の言うように、サトウ日記と読書ノートとは、記入日の上で補足し合っている。日記では前日の六日に、Saigo

Kichinosuke dined.という短い一文だけを記しているものの、七日には日記の記載がない。それに九月七日に始まり、第一巻だけの読解を終える十月十一日までの約一ヶ月間、日記の中に『江戸繁盛記』への言及はない。

数日間の読書ノート中断が二回ほど発生している。旅行したり、それに月末の中断理由は別の翻訳に十日ほど辛苦したためと推測できる。吉原についての読書ノートを記す九月十五日には、料理屋で接客した芸者の名前を列記し、容貌を仔細に日記に書き留めている。いつもの癖である。

勤勉な健筆家サトウが残した様々な資料、とりわけ第一次資料を判読しパソコンに転写テキストを打ち込む。そんな基盤研究は欠かせない。筆者はサトウ自筆日記六十年分、三十九冊全てを判読し活字化する作業をようやく完了した。英単語数が一千万語に迫る膨大な転写テキストになった。後年に誰か読み通す人が出てくるものと予想し書き続けた節があり、それに応えられて良かったと思う。

著者には読書ノートそれにサトウ自筆書簡の判読と活字化をぜひ期待したい。

(13) 2011年3月国際研究会発表（北京魯迅博物館学術報告会）、日文発表原稿の中文翻译

魯迅著作的英、日文翻訳

翻 译： 魏 謜

故西村孝次[197]先生在他的著书[198]中将亚瑟·西蒙斯（Arthur Symons）[199]重新认识为古典主義式"简明"（即 dry）的形式美，他自己却曾是一名浪漫主義式"润畅"(即 wet) 的文学青年。他说，"那曾是多么浪漫派的季节啊！那是我们的，不，应该说是我的青春！比如英国文学史上所谓的世纪末期的东西，回想起来，我在多么浪漫派地阅读它们啊。""在我浪漫派的青春时代，我舒服的（gemutlich）[200]地解读冷静的(sachlich)[201]东西"。 浪漫主義式抒情与古典主義式形式美是两种思考方式，形成鲜明对比。令人饶有兴趣的是，它们不仅是研究英国文学的视角，而且在鲁迅作品的翻译方法中也有体现。由于译者翻译外国文学时发挥了个性，浪漫主義式译文及古典主義式。

译文令我深感不同。

下面我想以鲁迅文学作品（特别是短篇小说）的日译本及英译本为例，进行对比研究。尽管日译本中的对比不如英译本鲜明，我还是想先关注一两部作品的日译本，然后再比较英译本。

筑摩书房世界文学全集第五十四卷（昭和四十五年[202]刊行）翻译了鲁迅的短篇小说和随笔，译者是竹内好先生。另一版本是讲谈社豪华版世界文学全集第三十五卷（昭和五十一年[203]刊行），该书同样翻译了短篇小说和随笔，是由和田武

---

[197] 西村孝次 (1907-2004)，英美文学研究者，文艺评论家。

[198] 指西村孝次的著作《休み時間の英文学》(1981 年，青土社)。

[199] Arthur Symons （1865-1945），英国诗人，文艺批评家。与叶芝关系密切，著有《文学中的象征主义》。

[200] 德语形容词，意为令人愉快的、舒服的。

[201] 德语形容词，意为客观的、公平的、冷静的。

[202] 译注：即 1970 年。

[203] 译注：即 1976 年。

司先生及松枝茂夫先生共同翻译的。下面从短篇小说《孔乙己》（一九一九年三月）与《风波》（一九二〇年十月）中各截一段来对比。

和田武司、松枝茂夫合译《孔乙己》中的一节：

私は十二歳のときから、この町はずれにある咸亨酒場にボーイとしてはいった。主人は、お前は気がきかぬようだから、長衣のお客の給仕はつとまるまい、表の仕事でもするんだな、といった。表の短い上衣のお客は、心安く相手はできるが、グドグドロやかましいお客が少なくなかった。彼らはよく、黄酒が甕から汲み出されるところを自分の目でたしかめようとした。

竹内好译《孔乙己》中的一节（位置同前）：

私は十二歳のときから、鎮のはずれにある咸亨酒店に小僧にはいった。主人は、おまえは見るからに気がきかないから、上客相手の給仕はつとまるまい、表の方を手つだうように、と言ってくれた。表の絆纏階級の客は、応対には楽だったが、しつっこい分らず屋が少なくなかった。ともすると、酒を甕からつぐところを、自分で確かめないことには承知しなかった。

和田武司、松枝茂夫合译《风波》中的一节：

太陽はその最後の光線を収めて、水面にはひそやかに涼気が戻ってきた。空地では、一面に茶碗や箸を使う音がひびき、人々の背中にはまたも汗の玉がふき出していた。

竹内好译《风波》中的一节（位置同前）：

太陽はその最後の光線を収めおわった。水面にはひそかに冷気が立ちもどった。庭場では一面に箸と椀の音がひびき、人々の背中にはまたも汗の玉がにじみ出た。

两个译本都在忠于原文的基础上，致力于使用便于读者理解的日语文笔，以尽可能地将原作者鲁迅的意图传达给日本读者，这是自不必说的。然而，最终的译文却做不到完全一致，应如何看待这种现象呢？鲁迅的作品在世界文学全集中只占一册，买入整套全集的普通读者，是没有选择译文的余地的。而且，除了鲁迅爱好者，如果不是大学教师，几乎没有读者会像上面那样对比阅读两种译文吧。

对于国际理解，译本是不可或缺的途径。同时，即使是一般读者，也有必要理解译本之间存在重大的对比。在现实中，身为译者，当站在作者的立场上对待同样的问题时，确实也会将认真翻译作为自己的义务与责任。像这样，国际理解虽然只有四个字，却也包含了需慎重对待文本的重要一面。

然而，当回到两人的日译文本，并试着对其进行一些评论时，我就感到二者的译法都是“简明”而“dry”的。译者在自己的日语译文中剔除了“润畅的”、“wet”的部分，并和译文保持了一定的距离。这是很明确的。即使如此，如果硬要另选出更为“简明”的译文，则要属竹内好的译文。其更加简明，译者富有个性的语言世界可见一斑。相比之下，合译本的语言更加现代，也更容易理解，却也导致“解说味”更浓。

竹内好翻译的《孔乙己》中，使用了“鎮”、“小僧”、“上客”和“絆纏階級”等词。在年轻读者眼中，这些词汇可能显得陈旧。但与此同时，也有读者觉得，这个译本极其简明易懂。同样的地方，合译本则译为“この町”、“ボーイ”、“長衣のお客”、“短い上衣のお客”，在便于理解的同时，“解说味”浓厚。如果硬要套

用“dry”与“wet”的对比关系，那我们可以判断，竹内好的译本当属前者，而合译本则属后者吧。

关于这点，让我们进一步比较《风波》的两个译本。合译本中的“光線を収めて、水面には……”被竹内好译为“収めおわった。水面には……”，后者的日语表达给人更简明的印象。特别是在“収めおわった”的表达中，使用了接尾词“おわった”，我觉得效果很好。此外，“庭場”的译法不但比“空地”更贴近原文的“土场”，而且也让人感到简明。

更显著的对比现象出现在英译本中。如今在我所坐的暖炉旁，除了上述鲁迅作品的两册日译本，还放着两种英译本。一种是大家长期以来所熟悉的鲁迅著作英译本（全四卷），第一版由北京外文出版社于一九五一年出版，我手上的这套是二零零三年第三次印刷本。

这套译著是由杨氏夫妇（杨宪益与戴乃迭）合作翻译的。其中来自英国的杨夫人先行去世，留下杨先生独身一人。然而，在与初版相隔半个世纪的去年，即二OO九年十一月十三日，杨先生也逝世了。我听说，直到逝世前，九十五岁高龄的他还健康地与女儿一家住在北京后海附近的胡同院落中，可谓尽享天年。根据《中华读书报》等书评类报刊所登的讣告，可知除了全四卷的鲁迅译本之外，他还与他的英国夫人一起作为外文出版社的译者，将许多中国古典文学作品译成英文，包括《魏晋南北朝小说选》、《儒林外史》、《牡丹亭》等。从二十世纪六O年代初期开始，他们着手翻译《红楼梦》，并于一九七四年完成。这是他们享誉世界的翻译生涯中的一大成果。

我们可以将杨先生的生平勾勒如下：一九一五年生于天津，年轻时在当地的英国教会学校与大学学习英语，之后去牛津大学留学，研究希腊、拉丁文经典与英国文学。他于一九四O年代回国，曾在重庆大学等高校担任大学教授。战后在五十年代成为外文出版社的专职翻译。他为该出版社最先翻译的，就包括全四卷

的《鲁迅选集》英译本。

有意思的是，作为翻译家，杨先生为国家使命奉献终生，被世人誉为中国翻译界的"真译匠"，他却自嘲为"半生漂泊假洋人"[204]，堪称一名 Piao bo shi ren（漂泊诗人）。

北京鲁迅博物馆的黄乔生先生在去年年末，就杨先生的英译本，特别是全四卷的《鲁迅选集》写了一篇文章，落款为十二月三十日并在今年刊登在杂志上。黄先生是一位文学家，英文也同样出色，他能写英文论文，还出版过英国文学的汉语译本。鄙人不才，对于黄先生的成就在惊叹之余，唯有赞美。

逗留北京期间，我总是打车去鲁迅博物馆，这已经成为我的爱好。那个地方宛如沙漠中的绿洲，让人心灵沉静。我每周去一次，一般是在鲁迅生活过的四合院故居中散步，或是驻足于鲁迅书屋的书架前，抑或在鲁迅的大雕像前的长椅上吞云吐雾一番，博物馆里的展览倒是很少看。一日，我有幸结识了鲁迅博物馆研究员黄先生，他大学毕业后一直在鲁迅博物馆工作。其后，我去北京鲁迅博物馆的次数显著增加，除了鲁迅故居、书店、长椅、藤野先生胸像等地，我也时常流连于黄先生的研究室。

我不懂汉语，因此能够结识英语娴熟的学生、大学老师及像黄先生一样的研究人员或编辑，对我意义非凡。从国际理解的观点来说，半个世纪以来，我一直致力研究英国文学，如今我的努力在中国也可以派上用场了。相反，一些中国大学生想运用日语、学习日语，我们用英语聊了很多，我向他们说明了自己的意愿。也可能是出于这个原因，近来我开始意识到一种新的思维方式与方法论，那就是三角研究法（triangle approach）。在澳门大学召开的国际学术会议上，承蒙莱顿大

[204] 译注：杨宪益曾经自嘲道："卅载辛勤真译匠，半生漂泊假洋人。"

学[205]的包乐史[206]教授指教，从此我开始意识到这种方法。我的思考模式不再只由两国之间的相互关系构成，而是代之以中日、日英、英中的三边关系。鲁迅在短篇小说《明天》中，写到诊所、药店和自家正好形成三角形的三个角落，在这些细节中也存在三角形。

在国际理解的层面上，三角研究法十分重要。其实要想理解外国作家，如果能用原文的语言读透作品是最理想的。若是鲁迅作品，我很想用中文原文来读。如果不具备条件，那我一般是这么处理的。比如托尔斯泰的《战争与和平》、《安娜·卡列尼娜》，我会用英译本来阅读。竟也能读得很开心即使知道它们有日译本，我也总是提不起用日译本阅读的兴趣。而且，他的主要作品几乎都有英译本，也很容易得到，这种现状也让我更愿意选择英译本。

正如与北京的黄先生交流时会自然而然地使用英语一样，我读鲁迅作品也倚靠英译本。就连鲁迅的研究专著和传记我也是读英译本。单凭英语，我能把鲁迅的作品理解到什么程度呢？我认为这是一种国际理解的实验。借用杨先生的话说，我就是想以一介 “假洋人” 的身份来解读鲁迅。

举一个具体的例子吧。比如短篇小说《明天》中登场的三角形。两个日译本都是表达为“ちょうど三角形になっている”[207]，而杨先生的英译本译法和日译本也差不多。但是在新出的英国企鹅版中，译文的意思是“形成三角形的三个角落”[208]，用“三个角落”或“三个角”添加了少许描写，就有效地令读者产生具体的印象。这使得原文“正是一个三角点”中的“点”没有局限于抽象的“三角形”，而是传达出了

---

205 即 Leiden University，又译莱登大学。

206 包乐史，原名 Leonard Blussé，荷兰汉学家，华侨史专家。著有《Visible Cities》(Harvard Univ. Press, 2008)，浙江大学出版社已于 2010 年 11 月推出了该书的中译本。

207 此句日文意为“正好形成一个三角形”。

208 此句企鹅版的英译为“formed the three corners of a triangle”。

具体的印象。如果仅就这点来说，在四种译本当中，译文最贴切的当属企鹅版。

汉语原文、英语译文以及我的日语。这样的三角形在我——一个想靠英语来理解鲁迅的日本人面前形成。我到底能理解到什么程度呢？看来我只有在享受阅读的同时尝试努力了。除此之外，别无他法。

从鲁迅著作的英译事业来看，二〇〇九年度发生了两件大事。一件是刚才提到的杨先生的逝去，另一件是英国企鹅出版社推出了新的英译本。对于以外国人的身份尽读英文书的我来说，这件事具有划时代的意义。在该社美国公司的主页上，我曾看到有人留言，希望企鹅版图书中加入鲁迅的作品。由此可见，该译本的出版，是各国人民期盼已久的吧。

译者蓝诗玲博士(Dr. Julia Lovell)[209]在伦敦大学教授中国历史之余，还翻译现代中国作家的作品。企鹅版中收录的鲁迅作品都是短篇小说，而自传性随笔集《朝花夕拾》等随笔则未获收录。如果只看短篇小说，至此鲁迅的英译本已达三种。一九九〇年，夏威夷大学出版部门推出了由威廉·莱尔（William Lyell）翻译的鲁迅短篇小说英译本。早在一九七六年，该译者就出版了《鲁迅与现实意识》[210]一书。值得一提的是，书末附录中将鲁迅的两篇作品——最早的作品之一《怀旧》（一九一三年）以及《兔与猫》（一九二二年十月）也译了出来。然而，和普及率很高的全四卷的《鲁迅选集》及刚出的企鹅版不同，这个译本在三种英译本当中，是读者最难弄到手的，对此我感到遗憾。

和前面的日译本一样，我也要从杨先生的全四卷选集与企鹅版中摘出几段，对比一下二者的英文译文。我节选的段落和前面的日译本位置相同。两种英译本

---

[209] 蓝诗玲，原名 Julia Lovell，英国伦敦大学教授，中国文学翻译家。她翻译的企鹅版鲁迅作品名为《The Real Story of Ah-Q and Other Tales of China: the Complete Fiction of Lu Xun》(Penguin Classics, 2009)。

[210] 该书的英文原名是《Lu Hsun's Vision of Reality》，本译名是根据作者的日文译名翻译的。

译法各有特色，各具优点。在对比日译本时，我提到“dry”与“wet”的区别，这一点在英译本中体现得尤为明显。由此，日译本与英译本也形成了对比。

全四卷的《鲁迅选集》英译本第一卷《孔乙己》中的一节：

At the age of twelve I started work as a pot-boy in Prosperity Tavern at the edge of the town. The boss put me to work in the outer room, saying that I looked too much of a fool to serve the long-gowned customers. The short-coated customers there were easier to deal with, it is true, but among them quite a few pernickety ones who insisted on watching for themselves while the yellow wine was ladled from the keg.

企鹅版英译本《孔乙己》中的一节（位置同前）：

When I was eleven, I was taken on as assistant-barman at the Universal Prosperity, at the edge of town. But the manager said I looked too dull to wait on his prized long-gowned customers, and deployed me instead around the main bar. Though I found the regulars easy enough to talk to, they were also quite capable of making life difficult for me. They would insist on watching the yellow liquor being ladled out of its jar.

全四卷的《鲁迅选集》英译本第一卷《风波（Storm in a Teacup）》中的一节：

The sun had withdrawn its last rays, the darkling water was cooling off again. From the mud flat rose a clatter of bowls and chopsticks, and the backs of all the diners were beaded with sweat.

企鹅版英译本《风波（A Passing Storm）》中的一节（位置同前）：

The sun gathered up the last of its rays, the surface of the river stealthily greeting their departure with fresh, cold air. All along the mudbank, spines beaded with sweat as chopsticks clattered on bowls.

首先，当我们概括性地对比两个英译本与前面提到的两个日译本时，会发现两个日译本之间差异不大，两个英译本则差异明显。比起使用汉字的日语，要用欧洲语言去诠释同一中文原文，可能需要译者更多的发挥吧。在这里中日英语言上的三角研究法也是不可或缺的。

由此展开讨论，开始对比两个英译本，则可以把全四卷的《鲁迅选集》的翻译风格形容为"简明"、"dry"，而相比之下，企鹅版的译本是"润畅"、"wet"的。尽管我使用的"wet"和"dry"、"简明"和"润畅"是两组对比性词语，但由于它们只是为了单一层面的对比而进行的程度上的分类，因此并不像刚才介绍的误译那样具有绝对性。即使如此，在读者的印象中，两个译本的对比关系还是会成立。事实上，两个译本之间的确存在如此大的差异。

《孔乙己》的译文对比中，首先，关于镇口的酒店，企鹅版译为 town，全四卷的《鲁迅选集》则译为 the town。可以想见，企鹅版的译者并没有像竹内好一样有"鎮"的意识。如果只论这一点，在日本读者眼中，竹内好的译文是最容易接受的。不过，提起定冠词（the）的用法，杨先生的译文忠实地遵循了传统语法，而企鹅版则遵循现代对话的表达习惯。从中，两个译本也产生了新旧的不同，这是很自然的趋势。比如企鹅版有好几处都只在形容词前放定冠词，后面却不加名词。如"at the ready"，或"the queue became a great immovable"。

继续比较英译本的"伙计"、"长衫主顾"和"短衣主顾"，很自然地，企鹅版的译文更加贴近现代人，让人感到"润畅"。话说回来，企鹅版翻译"长衫主顾"时，

添了 prized（意为“珍视”）之类的解释性词语，我觉得这种译法效果很好。由此也可以看出，全四卷的《鲁迅选集》更偏向于“简明”、“dry”，企鹅版则偏向于“wet”的“润畅”感，二者形成对比。

另外，企鹅版采用了一种译法，十分有趣。那是孔乙己提问的场面。他问，茴香豆的“茴”字怎样写。店里小伙计的回答译文如下。此处，译者插入汉字以让读者更容易理解。这种译法，我未在其他鲁迅短篇小说的英译本中见过。Anyway, it's just 茴 hui, the hui for “return”, with the grass radical on top, isn't it?为了解释茴（hui）是“返回”的“回 hui”加上“草字头 the grass radical on top”，译者插入了汉字。我个人觉得这种译法很易懂，而且我每次去北京后海的中餐馆“孔乙己”时，在菜上来之前都要先点啤酒及茴香豆，因此企鹅版译者插入了让我很怀念的汉字，令我十分开心。译者是一名英国女性，她说不定也喜爱后海那保留传统风味的“孔乙己”的茴香豆我总有这种感觉，不知道有没有人和我一样。此外，小说中，孔乙己说“回 hui”字有四样写法，之后啰嗦地试图解释。那么，究竟是哪些写法呢？

对此，《鲁迅作品的乡土背景》（杭州出版社，二〇〇三年）的作者傅建祥先生指出，除了“回”、“囘”、“囬”这三种写法，还有一个如今不再使用的类似于“面”的文字“囲”。

顺便提一句，在汉语字典中，“回”字除了可以加草字头之外，还可以加“虫”“鱼”或“氵”。

下面的一小节译文是从《风波》中引用的，其鲜明地体现出了两个新旧英译本的对比。对于企鹅版，我刚才指出，它有误译，有“润畅”及译文为“流畅的口语体”的一面。到这一步，我又发现其翻译风格创造了极富诗意的生动的描写效果。

鄙人翻译的企鹅版：

太陽はその光線の名残りを集め終わる。川の水面は、去りゆく日光と別れの挨拶を交わす

つもりか、新鮮な涼しい風をこっそりと送り出す。庭場一面にそって、茶碗に当たる箸の音が響き渡る頃には、人の背中に汗の玉が噴き出す。

“去りゆく日光との別れ”（与渐渐消失的日光告别）这种表达，在两个日译本及杨先生的英译本中都看不到。虽然这只是众多表达中的一个例子，但可以认为，企鹅版的译者蓝诗玲那充满诗意的新英译为世界读者做出了巨大贡献。哪怕只看本节末尾的“茶碗に当たる箸の音”（碗筷相碰的声音）这部分，我认为如此评价也是合适的。其他日、英三个译本，都只是译为“茶碗と箸”（碗与筷）的声音，而蓝诗玲却形象且细致地译为“茶碗に当たる箸の音”（碗筷相碰的声音）。这种译法在企鹅版中四处可见，据此也能体会到蓝诗玲“wet”且“润畅”的表达效果吧。

与此相关，为了切实把握两个英译本各自的魅力和特色，还可以把此处用的两个译本的英文输入到 word 文档中比较总字数，然后从中分别选出使用频率高的单词进行比较。可以预见，企鹅版译本的字数一定偏多。这虽然缘于其和翻译风格“简明”的全四卷的《鲁迅选集》的英文比起来，采用了“解释性”的精细的译法，但并不是啰嗦铺陈的结果，而是源自凸显诗意及情景所不可或缺的富有个性的表达方式。

北京市百万庄大街的外文出版社在推出鲁迅作品及随笔的英译本之后，接着又于二〇〇〇年出版了鲁迅与许广平往来书信集的英译本[211]。杜博妮[212]的译文通俗易懂，在书信的间歇插入的解说长度适中，要点得当。说起英文的鲁迅传记，已经问世的有四、五种。继前面介绍过的威廉·莱尔（A. Lyell,Jr.）的《Lu Hsun's Vision of Reality》(Univ. of California Press,1976)之后，外文出版社又于一九八四

[211] 此书名为《Letters Between Two》，中文本作《两地书》。

[212] 杜博妮，汉学家，原名 Bonnie.S.McDougall。曾在外文出版社工作，并翻译过北岛、朱光潜及毛泽东等人的作品。

年推出了王士菁（Wang Shijing）著张培基译的《Lu Xun A Biography》。次年，北京新世界出版社推出了魏璐诗[213]所写的《Lu Xun---A Chinese Writer for All Times》。其后，在二〇〇二年，香港的中文大学出版社又出版了卜立德[214]的《The True Story of Lu Xun》。卜立德写的传记最晚出版，全书充满了强烈的方法论意识，可以说是学术性最强也最难懂的鲁迅传记了。

说起来，除了鲁迅作品、随笔的英译本以及上面提到的英文传记，今后我希望能看到两本书出版英译本。一本是鲁迅的侄女周晔写的《伯父的最后岁月——鲁迅在上海》（福建教育出版社，二〇〇一年刊行），另一本是鲁迅的挚友许寿裳的名著《亡友鲁迅印象记》（上海文化出版社，二〇〇六年刊行）。我很想把这两本书的英译本放在身边，慢慢用英文品读。

本书[215]提到的六个人中，鲁迅之外的另外五人都曾成为我写论文的研究对象。我以自己的方式，通过写论文、在国际会议上做报告或者出版传记的译本等方式，对他们进行了学术研究。

唯有本章的鲁迅是个例外。我不过是一名喜欢他的读者，而且还是一名英译本的读者，这点前面也提到过。阅读鲁迅只是我的兴趣。不过，如同美国女作家赛珍珠的小说，鲁迅的英译本也帮助我理解近代中国的社会及世情，带给我宝贵的阅读体验。

我从一开始就没打算对鲁迅进行英式的家族史研究。尽管如此，如果身边有

---

[213]魏璐诗，原名 Ruth F.Weiss，曾为中国长期从事对外宣传工作。1951 年到中国外文局做英文专家，1955 年加入中国国籍，1965 年到人民画报社任德文专家。

[214]卜立德，原名 David E.Pollard，英国人，汉学家。

[215]指作者的著作《国際理解の四重奏》(2010 年，高城書房)。全书构成如下：序章 英国世纪末诗人亚瑟·西蒙斯（Arthur Symons）；第一章 英国外交官萨道义（Ernest Satow）；第二章 美国文书传教士卫三畏（S.Wells Williams）；第三章 日本画家牧义雄；第四章 中国近代作家鲁迅；终章 美国驻华公使蒲安臣（Anson Burlingame）。本文原为该书第四章。

合适的机会，我还是想去和鲁迅有关的地方，特别是他的故居。然后站在现场，吞云吐雾一番。

我去过鲁迅在日本的留学之地东北大学，还去过他曾经执教的中国中山大学和广州市的故居，此外还有鲁迅的老家绍兴。我在上海去了上海鲁迅纪念馆与内山书店旧址的展览室。

上海郊外的鲁迅纪念馆坐落在安静的公园之中，参观者可以享受悠然散步之乐。我有幸在此参加了许广平（1898～1968）诞辰一百一十周年的纪念活动，仔细观赏了内容丰富的展览。那时的一件展品，是特别加入照片的纪念性出版物——上海社会科学院出版社推出的李浩著《许广平画传》。该书收录了许多鲁迅相关传记及图片集中所没有的珍品，是十分贵重的资料。

据说上海鲁迅纪念馆的周边一带以前住着许多日本人，其中原内山书店所在的地点，如今已经成为银行。在二层特别开设的陈列室中，摆放着与内山书店及鲁迅有关的日本旧书。我一边品茶一边观看了里面的展览。虽然只有一间小屋子，但能特意开辟出来做展览室，还是很难得的。在那里，我感受到沁入心脾的历史的气息。

中国全国共有五家鲁迅纪念博物馆，其中我最想去的要数位于鲁迅故乡绍兴的绍兴鲁迅纪念馆。因为无论如何，我都想看看像日本的水乡地区一样小舟荡行的“水巷夕照”。

然而，即使在北京，甚至在上海，绍兴对我而言都是可望而不可即的。

在接连几次往返北京的途中，这个夙愿终得实现。我得以参观了“鲁迅祖居”的厨房、鲁迅卧室、后院“百草园”以及特别小的私塾“三味书屋”。实际的风景与我从阅读得来的知识及想象常常不一样，至少“百草园”是这样的。在我想象的景色中，它附近应该有山，而且要更加辽阔才是。

此外，绍兴鲁迅纪念馆馆长陈勤先生听说我是从日本来的，就对我盛情款待，

把我领到《孔乙己》中出现的酒店“咸亨酒店”。馆长先生为人热情，脸上总是挂着笑容。

比起北京后海附近的酒店“孔乙己”，绍兴是鲁迅的故乡，因此我觉得在那里品尝到了更为古老而传统的饮食。不过那里的茴香豆比后海的酒店小一些。如果单单根据作品《孔乙己》来想象，我觉得北京后海的大粒茴香豆 (the broad beans) 更符合作品。然而既然是在鲁迅故乡吃到的“下酒物”，那么“咸亨酒店”的小粒茴香豆应该更接近鲁迅想要描绘的茴香豆形象吧。

鲁迅的故乡也是绍兴酒的原产地。如同《孔乙己》中的伙计将酒温到一定温度再拿给客人一样，我也请服务员为我做了“温酒”。我喝酒用的是质地厚重的碗，不知为什么，这让我想起了在诹访湖畔[216]的温泉浴场“片仓馆”[217]用过的碗，两者实在很相似。

我深信这是体验绍兴酒的千载难逢的机会，于是欣然领受馆长先生的好意。要想醉成孔乙己那样，要喝几杯才够呢？我决定拿自己做一回人体试验。

笑眯眯的馆长先生一碗接一碗地把斟了绍兴酒的碗送来。在桌上的空碗摞到第六个的时候，我的脚开始打晃，已经无法站着喝了。从旁监督的馆长先生下了指示，我方才停下酒来。

如同老迈的孔乙己，我总觉得自己也在“咸亨酒店”赊了帐。今后我还有机会重访绍兴吗？还是说，我是无缘与当时的监督人、绍兴鲁迅纪念馆热情的馆长先生重逢，而是与孔乙己踏上同样的道路呢？

---

[216] 诹访湖，位于日本长野县中部，冬季结冰，鱼类丰富，以诹访神社及温泉闻名。
[217] 片仓馆，建于 1928 年的温泉浴场，最初由片仓缫丝工业为其工人休憩而建。

魯　迅　翻　訳　雑　感

宮　澤　眞　一

研究発表・時・場所：　2011年3月11日10時~11時
北京魯迅博物館

一

アーサー・シモンズについて「ドライな抒情」と再認識するにいたった西村孝次先生には、「ウェットな」文学青年の時代があった。「なんとウェットな季節だったことか、ぼくらの、いや僕の青春は！　たとえば、イギリス文学史にいわゆる世紀末 fin de siècle なるものを、おもえばぼくはなんともウェットに読んでいたのだった。」「ザッハリヒなものをゲミュートリヒにうけとるとするウェットな僕の青春が。」

ウェットな抒情とドライな抒情という対比的な思考法。これが、英文学者の文学アプローチの研究姿勢に、現われているばかりでなく、魯迅作品の翻訳方

法にまで現われているように思われて、興味深かった。外国文学の作品翻訳にも、文学者の個性的な姿勢が打ち出されて、「ウェット」つまり「流れる」訳文、それに「ドライ」つまり「端的な」英訳の二種類のなかに、すくなからず対比的アプローチを感じさせる。

魯迅の文学作品、なかでも短編物語の和訳と英訳の具体例を挙げて、対比的に見ておくことにしたい。和訳では英訳ほどの大きな対比が見られないものの、最初に一、二の作品和訳に焦点を絞り込み、次に、後者の英訳を読み比べてみることにする。

二

筑摩書房世界文学全集五十四巻（昭和四十五年刊）は、短編物語と随筆を訳出しており、訳者は竹内好（TAKEUCHI)氏である。もう一つは、講談社豪華版世界文学全集三十五巻（昭和五十一年刊）であり、同じく短編物語と随筆を訳してあり、訳者は和田武司（WADA)氏と松枝茂夫氏の共訳である。短編物語「孔乙己」（一九一九年三月）と「風波」（一九二〇年十月）の二作品から一節づつ以下に引用する。

No. 1　魯迅著「孔乙己」

我从十二岁起，便在镇口的咸亨酒店里当伙计，掌柜说，样子太傻，怕伺候不了长衫主顾，就在外面做点事罢。外面的短衣主顾，虽然容易说话，但唠唠叨叨缠夹不清的也很不少。他们往往要亲眼看着黄酒从坛子里舀出……

和田武司（WADA）・松枝茂夫共訳「孔乙己」の一節

私は十二歳のときから、この町はずれにある咸亨酒場にボーイとしてはいった。主人は、お前は気がきかぬようだから、長衣のお客の給仕はつとまるまい、表の仕事でもするんだな、といった。表の短い上衣のお客は、心安く相手はできるが、クドクドロやかましいお客が少なくなかった。彼らはよく、黄酒が甕から汲み出されるところを自分の目でたしかめようとした。

竹内好（TAKEUCHI）訳「孔乙己」の同じ一節

私は十二歳のときから、鎮のはずれにある咸亨酒店に小僧にはいった。主人は、おまえは見るからに気がきかないから、上客相手の給仕はつとまるまい、表の方を手つだうように、と言ってくれた。表の絆纏階級の客は、応対には楽だったが、しつっこい分らず屋が少なくなかった。ともすると、酒を甕からつぐところを、自分で確かめないことには承知しなかった。

No. 2　魯迅著「風波」

太阳收尽了他最末的光线了，水面暗暗地回复过凉气来；土场上一片碗筷声响，人人的脊梁上又都吐出汗粒。

和田武司（WADA）・松枝茂夫共訳「風波」の一節

太陽はその最後の光線を収めて、水面にはひそやかに涼気が戻ってきた。空地では、一面に茶碗や箸を使う音がひびき、人々の背中にはまたも汗の玉がふき出していた。

竹内好（TAKEUCHI）訳「風波」の同じ一節

太陽はその最後の光線を収めおわった。水面にはひそかに冷気が立ちもどった。庭場では一面に箸と椀の音がひびき、人々の背中にはまたも汗の玉がにじみ出た。

どちらの訳本においても、原文に忠実でありながら、それでいて読者に分かり易い日本語文章に直し、作者魯迅の意図を最大限に日本人読者に伝えようと努力していることは、言うまでもない。それでいて全く同じ訳文でないのは、どう考えたらよいのであろうか。世界文学全集のどちらも一冊であるのだから、一括購入したはずの一般読者に、どちらの訳文を好むか選択の余地はなさそうである。それに、以上のように両者の訳文を比べて読もうとする読者は、魯迅愛読者ならともかく、大学教師でもないかぎり、まず皆無と言えるであろう。

国際理解に翻訳書は欠かせない手段ではある。同時に、このように重大な対比の側面を含んでいることだけは、一般読者としても理解しておきたいもので

ある。訳者なり作者の立場で同じ問題を捉えるときに、それだけ真剣な翻訳の取り組みを自分の義務や責任に課していることも、現実に存在している。ひとことで国際理解とは言っても、このように慎重に扱う重大な側面を含んでいる。

ところで両者の和訳テキストに戻って、多少のコメントを試みるなら、両者ともに「端的」で「ドライな」訳し方であると感じた。自分の日本語訳文に「流される」ような、「ウェットな」側面を排除して、訳者とその訳文との間に一定の距離を置いている。このことは明白である。それでもどちらが、より「端的な」訳文であるかと、再度あえて問うなら、竹内好（TAKEUCHI）訳文の方が、より端的であり、訳者の個性的な言語世界を垣間見せている。和田武司（WADA）共訳の方は、現代語的であって、より分かり易いものの、その分だけ「説明的」にならざるを得ない、と思われる。

竹内好（TAKEUCHI）訳の「孔乙己」には、「鎮」「小僧」「上客」「絆纏階級」を使っていて、若い読者層の目に、古い日本語表現という印象を与えるかも知れない。しかし同時に、極めて端的で分かり易い、と感じる読者もいる。和田武司（WADA）訳の同じ個所では、それぞれ、「この町」「ボーイ」「長衣のお客」「短い上衣のお客」と訳されているから、分かり易い、と同時に「説明的」である。あえて「ドライ」と「ウェット」という対比をここでも押しつけるなら、竹内好（TAKEUCHI）訳の方が前者、和田武司（WADA）共訳の方は後者と判断できるであろうか。

この点について更に「風波」の訳文比較を試みるときに、和田武司（WADA）共訳文の中では、「光線を収めて、水面には・・・」としているのを、竹内好（TAKEUCHI）訳文の「収めおわった。水面には・・・」としていて、こちらの日本語文章表現が、端的なイメージを与える。とりわけ「収めおわった」の表現のうち、「おわった」を使ったのは効果的と感じる。それに「空地」より

も「庭場」の方が、原文の「土場」に近いだけでなく、どこか端的な表現のように感じられた。

三

もっと大きな対比現象が、英訳書の方に見られるのである。今、私の座る炬燵脇には、上記の魯迅和訳書二冊のほかに、実は、更に二種類の英訳書が置かれてある。まず一つは、従来から私たちの親しんできたほぼ唯一の魯迅著述書の英訳四巻本である。北京のいわゆる外文局から、初版を一九五九年に出版していて、私の手元にあるものはその三刷二〇〇三年版である。

初版から半世紀を経過した昨年、二〇〇九年十一月十三日に、共訳者、楊夫妻（Yang Xianyi & Gladys Yang）のうち、英国出身の夫人に先き立たれ孤独な生活のなかにあった楊先生が他界された。告別式は十一月二十九日であった。九十五歳の老齢に達していても、つい先頃までは北京后海付近の胡同住居にあって、お嬢様の家族のもとで元気に暮らしていたと聞いていたから、天寿をまっとうされたと言ってよいのであろうか。「中華読書報」などの書評誌に掲載された死亡記事によれば、四巻本の魯迅翻訳書のほかに、英国系の夫人と一緒に、外文出版社の翻訳者として数々の中国古典シリーズを英語に訳出されているのが分かる。『魏晋南北朝小説選』や『儒林外史』『牡丹亭』『唐宋詩歌文選』が含まれている。その後に一九六〇年代初めに、『紅楼夢』の翻訳に取り組み、一九七四年に訳了するけれど、海外で好評を博した翻訳生涯の一大成果であった。

もともと一九一五年に天津で生まれ育ち、地元の英国系ミッション・スクールと大学で英語を学んでからは、オックスフォード大学に留学してギリシャ・ラテンの古典と英文学を学んでいる。帰国した一九四〇年代には重慶大学をはじめ、大学教授であったのが、戦後の五〇年代、それも外文局お抱え翻訳家業の手始めとして、魯迅選集四巻本の英訳に取り組んだもの、という経歴図を描けそうである。

四

世間的には現代中国翻訳界の「匠人」と評されながらも、翻訳家の国家的な使命に終身を捧げた先生は、「半生漂白假洋人」と自嘲されていた、というから面白い。実に、Piao bó shi ren なのである。

楊先生の英訳書、なかでも魯迅選集四巻本について、北京魯迅博物館の黄喬生先生が、昨年末、十二月三十日の日付で書いたものが、今年になって雑誌に掲載された。『海内及海外』黄喬生著「楊先益及魯迅著作英訳」2010年1月号、pp. 12〜6。

黄先生は実に英語の巧みな文学者であって、英文の論文を書き、英文学の中国語訳本を発表しているのが、私のようなものにとって、驚嘆であるばかりか、讃美以外の言葉を知らない。

北京に滞在しているときには、いつも私は、魯迅博物館までタクシーで行くのが楽しみになった。砂漠のなかのオアシスのように、どこか落ち着いた気持ちになれる場所である。週に一回は行くのであるから、大抵は、魯迅の暮らし

ていたという四合院造りの故居を散策するか、魯迅書店の書棚の前に佇むか、大きな魯迅彫像の前のベンチでタバコを吹かすかして過ごすので、博物館内の展示は余り見ていない。大学を出てからこのかた、ずっとこの魯迅博物館に勤務されてきた学芸員の黄先生と、或るとき面識を得る幸運に恵まれた。それ以来、北京魯迅博物館に通う回数はめっきり増えていき、故居・書店・ベンチ・藤野先生胸像のほかに、黄先生の研究室で過ごすことが多くなった。

中国語の知識がない私のようなものにとって、英語を駆使する学生や大学教員、それに黄先生のような研究者とか編集者の存在と友情は測り知れない。国際理解という観点で言えば、英文の読み書きばかりに集中してきたここ半世紀の努力が、このように中国で役に立っている。また逆に、日本語を使いたい、日本語を学びたい、という中国の大学生とも、随分英語で語り合い説明したものである。そんなこともあってか、このところトライアングル・アプローチという新しい考え方や方法論を意識するようになった。

二国間の往復関係に代わって、例えば中日、日英、英中に展開する三つの相互往復関係から成り立つ構造を考えるようになった。魯迅の短編物語「明日」には、病院と薬局と自宅とが、ちょうど三角形の三つの隅を形成している、という描写がでてくる。こんな些細なところにもトライアングルが成立しているわけである。

トライアングル・アプローチは、国際理解に於いて大切である。もともと外国作家を理解しようとするには、原文の外国語で読みこなせたら一番良い。魯迅作品なら中国語の原文で読みたいところである。それがそうならないときに、これまでの私は、例えばトルストイの場合なら『戦争と平和』や『アンナ・カレリーナ』を英訳書で読んできた。それで楽しく読めた。日本語に訳されていることを知っていても、どうしても和訳で読む気になれない。それに、大抵の

主要作品が英訳されていて、手軽に入手できる、という実際的な事情も手伝っている。

五

北京の黄先生との交流に於いて自然の流れで英語を使うように、魯迅の作品を読むのにも英訳に頼ってきた。研究書や伝記にしても同じである。英語にたよるだけで、どこまで魯迅の作品を理解できるものなのか。これは一つの国際理解の実験と思っている。楊先生の言葉を使わせていただくなら、「假洋人」の一読者として魯迅に迫ってみたい、と考えている。

一例を具体的に挙げてみよう。短編物語「明日」のなかに登場する三角形である。

No. 3　魯迅著「明日」

他虽是粗笨女人，却知道何家与济世老店与自己的家，正是一个三角点；

二つの和訳では両者ともに、「ちょうど三角形になっている」という表現であり、楊先生の英訳も、ほぼ和訳と同じ英文になっている。それが、新たな英国ペンギン版では、「三角形の三つの隅になっている」と英訳してあり、「三つの隅」なり「三つの角」という僅かな追加表現が、具体的なイメージを効果的に喚起させる。「正是一個三角点」とある原文の「点」は、単に抽象的な「三角形」の意味で終わらずに、具象的なイメージを伝えているように思われて、この場合に限定して言えば、四本の翻訳のうちで、ペンギン版が最も適切な訳文である。

中国語の原文、英語の訳文、それに私の日本語。英語に頼って魯迅を理解しよう、とする日本人の私には、この三角形が成り立つ。どこまで理解できるのであろうか。読書を楽しみながら、努力してみるしか方法はない。

二〇〇九年度は、魯迅著作の英訳という観点からみるときに、大きな出来事が二つ起きた。一つはすでに述べた楊先生の死去である。もう一つは、英国のペンギン出版社から新しい英訳が出版された。外国人になったつもりで、英書ばかりを追ってきたものにとって、画期的な出来事である。米国のホーム・ページにも、ペンギン版に魯迅の一冊を加えて欲しい、という意味のメッセージを読んだことがあり、おそらく世界各地で待望の書の出現となったであろう。

訳者のジュリア・ラベル(Julia Lovell) は、ロンドン大学で中国史を講ずるかたわら、現代中国作家の翻訳に携わってきた。ペンギン版に収録されている魯迅作品は、いずれも短編物語であり、自伝的随筆集『朝花夕拾』などのエッセイを収録していない。短編物語に関するかぎり、これで三種類の英訳が発表されたことになる。一九九〇年にハワイ大学出版局から短編物語の英訳を発表したウィリアム・ライエルは、すでに一九七六年に魯迅伝記的研究書『魯迅と現実意識』を発表しており、特記すべきは、同書の巻末付録にペンネームによる

魯迅最初期作品の一つ「過去の思い出」(一九一三年)、それに「兎と猫」(一九二二年十月)の二本を訳出していることである。しかし、普及率の高い四巻本選集や今回のペンギン版と違い、一般読者にとっては、三種類の魯迅作品英訳のうち、最も入手困難なものである。残念である。

六

和訳の場合と同様に英訳についても、ここで楊先生の四巻本選集とペンギン版から、和訳と同じ場面を英文のまま摘出する形で、対比を試みておきたい。いずれの英訳書にも訳し方に特色が出ていて、それぞれに優れている側面を持っている。和訳の対比で言及した「ドライ」と「ウェット」という側面は、和訳以上に英訳書で濃厚に現出していると思われ、この点で和訳と英訳の間にも対比が成立することに気付く。

No. 4 魯迅著「孔乙己」(上で引用した**No. 1**と同じ原文)

我从十二岁起，便在镇口的咸亨酒店里当伙计，掌柜说，样子太傻，怕侍候不了长衫主顾，就在外面做点事罢。外面的短衣主顾，虽然容易说话，但唠唠叨叨缠夹不清的也很不少。他们往往要亲眼看着黄酒从坛子里舀出……

四巻本選集第一巻（YANG）のうち英訳「孔乙己」の一節

At the age of twelve I started work as a pot-boy in Prosperity Tavern at the edge of the town. The boss put me to work in the outer room, saying that I looked too much of a fool to serve the long-gowned customers. The short-coated customers there were easier to deal with, it is true, but among them quite a few pernickety ones who insisted on watching for themselves while the yellow wine was ladled from the keg,...

ペンギン版（LOVELL）のうち英訳「孔乙己」の同じ一節

When I was eleven, I was taken on as assistant-barman at the Universal Prosperity, at the edge of town. But the manager said I looked too dull to wait on his prized long-gowned customers, and deployed me instead around the main bar. Though I found the regulars easy enough to talk to, they were also quite capable of making life difficult for me. They would insist on watching the yellow liquor being ladled out of its jar...(p. 32)

No. 5　魯迅著「風波」(上で引用した**No. 2**と同じ原文)

太阳收尽了他最末的光线了，水面暗暗地回复过凉气来；土场上一片碗筷声响，人人的脊梁上又都吐出汗粒。

四巻本選集第一巻(YANG) のうち英訳「風波 (Storm in a Teacup)」の一節

The sun had withdrawn its last rays, the darkling water was cooling off again. From the mud flat rose a clatter of bowls and chopsticks, and the backs of all the diners were beaded with sweat.

ペンギン版(LOVELL) のうち英訳「風波 (A Passing Storm)」の同じ一節

The sun gathered up the last of its rays, the surface of the river stealthily greeting their departure with fresh, cold air. All along the mudbank, spines beaded with sweat as chopsticks clattered on bowls. (pp. 63~4)

二つの英訳書と二つの前掲和訳書について、概括的な比較を最初に試みるとき、和訳書の二者が、相互に大きな違いを感じさせないことに気付く。英訳書の二者は、大きな違いを見せており、同一の中国語原文に対しヨーロッパ言語でぶつかるには、このように個性的な工夫が、漢字交じりの日本語以上に、必要になるのかも知れない。ここでも中・日・英の言語的トライアングル・アプローチが欠かせないようである。

「孔乙己」英訳については、少年の年齢をペンギン版で「十一歳」としている点は、四巻本選集の英訳、二つの和訳書、それに原文の「十二」と違ってい

る。違えた理由に対する訳者注がないので不思議に思い、ずいぶんと長いこと考えた。それで結局、おそらく日本の「数え年」と「満」の違いであろう、と考えるにいたり、出版社宛で訳者に問い合わせのメールを送ってみた。

大学教授と著作活動の多忙な中で、繊細で良心的な訳者は、私の問いに答えてくださった。出版社には中国文学専門の校閲者がおり、この年齢についても事前に、二人で相談していることがわかった。やはり西洋流に満で数えて、十一歳としたという事情が分かって安心した。

最後に私の方では、このような迷いを読者に与えないようにする改訂版に向けての対応策について考えてみた。魯迅のいう「十二歳」を数えの年齢である、と先ず前提しないかぎり、ペンギン版訳者の満「十一歳」は出てこない。こう前提するには、それなりに調べて、根拠を持ちたいものであるだけに、それなりに相当の時間と手間が判断までに必要になりそうである。

この際に最も簡単に問題解決する方法は、一つ。原作、他の三人の訳者と同じに、単に「十二歳」と訳す。そのような変更は、改訂版になると「印刷ミス」か「訳者の訂正」というように、読者に受け取られかねないので、避けたいところである。

やはり訳者と校閲者が、それなりの根拠を持ちながら、最初から「満十一歳」とした判断を尊重する方向が、一番良いと思われた。ただ訳者としては、出来るだけ訳者注を少なくしたい、という方針も述べている。読者に「よどみなく」読んでもらいたいという気持ちからである。それで、全体の注付けを見ても、ここに「満」「数え年」の注を新たに挿入することは、避けたいものであり、良策とは思えない。

最後的には、full という簡単な一語を 11 years old の前に挿入することを訳者に暗示させていただいた。full 11 years old という表現によって、「満十一歳」を

意図できると思えたからであり、幸い、訳者にも納得していただけたようである。繊細な詩的表現を繰り出せる翻訳家であるばかりか、謙虚な態度の学者であることを、メールのやり取りで知った。

七

このことから論を起こして、英訳の対比に進んでみると、四巻本が、「端的」で「ドライ」な訳し方をしているのに対し、ペンギン版では、「流れる」「ウェット」な訳し方と形容できそうに思われる。「ウェット」とか「ドライ」、それに「端的」とか「流れる」という比較用語を使ってみたところで、一面的な対比による度合いの分類であるから、ケアレスミスの場合のように断定的に性格づけられるものではない。それでも読者の受ける印象のなかで、対比構造は成立しまう。それほどの違いが認められるのも事実である。

「孔乙己」の訳文比較では、まず、町はずれの居酒屋について、ペンギン版英訳 (LOVELL)に town ないしは四巻本選集英訳（YANG）に the town とあって、ペンギン版訳者が、竹内好（TAKEUCHI)訳に見られる「鎮」ほどの意識を持っていなかったと思われる。この部分に限定してみるとき、日本人の読者の目に竹内訳が一番納得しやすいと感じられた。ただ、定冠詞(the)使用法に関しては、楊先生の訳文が伝統的な文法にきちんと従っているのに対し、ペンギン版では現代的な会話の表現法に従っていて、そこに新旧の違いが生じることは、自然な流れなのである。例えば、形容詞の前に定冠詞を置くだけで、名

詞が欠けている表現が幾つか見られる。“at the ready”とか“the queue became a great immovable.” (p.57) このほかに、ペンギン版(LOVELL)には、Medicine のなかに“a weeping Hua Dama” (p. 43)という、不定冠詞のような紛らわしい表現もある。

英訳における「小僧」「上客」「絆纏階級」に関する比較を更に進めていくと、ペンギン版の方が、当然のことながら現代的で、「流れ」を感じさせる。それにしても、「上客」のペンギン版訳では、prized 「大事にしている」という説明的な言葉を追加しているが、効果的な訳であると思う。ここでも四巻本選書の方が、どちらかと言えば「端的」「ドライ」であり、ペンギン版の方が「ウェット」な「流れ」という対比を確認できそうである。

もう一つ、ペンギン版だけが採用している訳法であるが、なかなか面白いと思った点がある。酒のつまみに出る茴香豆の「茴」という文字を書けるか、という孔乙己の質問の場間面である。店の小僧が次のように答えるなかに、訳者は、漢字を挿入して分かり易くしている。他の短編物語の訳文に見かけないことである。‘Anyway, it’s just 茴 *hui*, the *hui* for “return”, with the grass radical on top, isn’t it?’(pp. 34~5)。

茴(フイ *hui*)は「戻る」という意味の「回 *hui*」に「草冠 the grass radical on top」を付ける、と説明するのに、漢字を出ち出しているのである。個人的には分かり易いと思うと同時に、北京后海の中華料理店「孔乙己」に行くと、料理の来るまでの間待ちに、ビールに合わせて茴香豆をいつも注文するだけに、とても懐かしい文字を挿入していただけた、と喜んでいる。訳者の英国女性も、昔懐かしい味のする后海「孔乙己」の茴香豆を愛用する人かも知れない。そんな気がしてならないのは、私一人だけであろうか。それから孔乙己は、「回 *hui*」には四通りの書き方がある、とクドクドと説明しようとするが、どんな文字が

あるのか。

『魯迅作品的郷土背景』(杭州出版社、二〇〇三年)の著者傅建祥先生は、「回」「囘」「囬」の三つほかに、もはや使用されていない「面」に似た文字を挙げている。

ちなみに中国語辞書で「回」のつくりには、草冠りのほかに、編に「虫」か「魚」か「氵」が付いている漢字がある。

八

二つの新旧英訳の対比が、歴然と表れる訳文は、「風波」から次に引用した短い一節である。ペンギン版には、ケアレスミスに「流れる」ような側面と、「流暢な会話的」訳文の側面を指摘してきたのであるが、ここにきて、訳し方のそんなスタイルが、とても詩的な瑞々しい描写を生み出していく効果に気付くのである。

太陽はその光線の名残りを集め終わる。川の水面は、去りゆく日光と別れの挨拶を交わすつもりか、新鮮な涼しい風をこっそりと送り出す。庭場一面にそって、茶碗に当たる箸の音が響き渡る頃には、人の背中に汗の玉が噴き出す。

(LOVELL 訳ペンギン版拙和訳)

「去りゆく日光との別れ」という表現は、二つの和訳にも楊先生の英訳にも見られず、これは一例にすぎないけれど、ペンギン版訳者の訳者ジュリア・ラベルによる詩的なイメージに満ちた新英訳は、世界の読者に大きく貢献したと思われる。末尾の「茶碗に当たる箸の音」という部分に焦点を当てるだけでも、この評価は間違っていないと思う。他の英訳と和訳の三者が、単に「茶碗と箸」の鳴る音としているところを、「茶碗に当たる箸の音」とイメージ的に、しかも、きめ細やかな訳し方を散見するにつけても、ジュリア・ラベルの「ウェット」で「流れる」表現の効果が分かるであろう。

ときおり難しい文学用語、たとえば "the torments of poetic consonance" (Nostaliga, p.7)などを使うこともあるけれド、特に夕方の場面や状況の描写は、想像力豊かな訳者の詩的把握に優れている。

九

北京市百万庄大街の外文出版社は、魯迅作品と随筆の英訳出版につづき、魯迅と許広平の間で交わされた往復書簡集の英訳書を二〇〇〇年に出版している。ボニー・S・マックドガルの訳文は平易で読みやすく、書簡の合間に挿入された解説も適切な長さのうちに、要点を伝えている。英文の魯迅伝記は、すでに四、五点まで発表されてきた。上記した William A. Lyell, Jr.の *Lu Hsün's Vision of Reality* (Univ. of California Press, 1976)につづき、外文出版社からは王士

箐(Wang Shiquing)著張培基訳 *Lu Xun A Biography* が一九八四年に、それに翌年には Ruth F. Weiss による *Lu Xun---A Chinese Writer for All Times* が、北京の新世界出版社から発表された。その後、二〇〇二年になると、香港の中文大学出版からは、David E. Pollard による *The Story of Lu Xun* が出た。最後のポラードの伝記は、強烈な方法論意識のもとに書かれているので、もっとも学術的でありながら、かつ難解な伝記と言えるであろう。

ところで、作品・随筆の英訳書、それに以上のような英文伝記に加え、今後ぜひ期待したい英訳書の出版計画を二冊挙げておきたい。一冊は、魯迅の姪にあたる周曄の『伯父的最后歳月——魯迅在上海』(福建教育出版、二〇〇一年刊）であり、もう一冊が、魯迅の盟友、許寿裳の名著『亡友魯迅印象記』(上海文化出版社、二〇〇六年刊)である。両者ともに座右に置いて、じっくりと英文で読みたいものである。

拙書（『国際理解の四重奏』）に登場する六人のうちで、五人までの人物を多少とも研究論文の対象にしてきた。論文を書くとか、国際会議で発表する機会を持つとか、伝記の翻訳書を出版するとかして、私なりに学術研究を目指してきた。

本章の魯迅だけが例外である。愛読者、それも前に述べたように、英文の愛読者にすぎない。趣味の域を出でいない。ただ、魯迅の英文読書を通して、近代中国の社会や人間模様を理解する上で貴重な体験になったことは、米国女流作家パール・バックの小説と同じである。

英国式の家族史研究を魯迅について行う気持ちは初めからなかった。それでも、身近に良いチャンスが巡ってくるような折りには、魯迅縁の場所、とりわけ故居だけは訪れてみたくなった。現場に立ち、しばらく喫煙できた。

日本留学先の東北大学、一時的に教鞭をとった中国・中山大学、広州市の故居。それに上海では上海魯迅記念館と旧内山書店の展示室を訪ねることができた。

上海郊外の魯迅記念館は、落ち着いた公園のなかに設置されていて、のどかな散策を楽しめる。許広平 (Xu Guanping: 1898~1868) 生誕百十年の記念会に参加させていただき、内容の濃い展示をゆっくり観覧した。そのときの展示物、特に写真を盛り込んで編まれた記念出版物が、上海社会科学院出版社の李浩著『許広平　画伝』である。魯迅関連の伝記や写真集に見ることもなかったような珍しいものが、収録されている貴重な資料であると思われる。

上海魯迅博物館の周辺には、かつて多くの日本人が居住していたそうであり、なかでも旧内山書店のあった場所には、今、銀行の建物がたっている。その二階に特設されている展示室は、内山書店と魯迅関連の古い和書が陳列されてあり、茶を啜りながらゆっくりと拝見させていただいた。小さな一室ではあるけれど、わざわざ設けていただき、ありがたいことである。心に浸み込む歴史の味わいを感じた。

十

全国に五カ所ほどに設置されているという魯迅記念博物館のうち、なんと言っても故郷の紹興に設けられた紹興魯迅記念館に行ってみたい気持ちがあっ

た。日本の水郷地帯のように小舟の行き交う「水巷夕照」をなんといっても体験してみたかったわけである。

それにしても北京、それに上海からでも、紹興への道は遠い。

数回の北京渡航をくりかえすあいだに、想いつづけていたら、いつか願いはかなうものである。「魯迅祖居」の台所とか、魯迅寝室、裏庭の「百草園」、それにいかにも小さな私塾「三味書屋」を見学できた。読書から得た知識とか想像と、実際の風景が違うことは多々起きることだ。百聞は一見にしかず、なのであろうか。少なくとも「百草園」がそうであった。どうしてか近くに山のある風景を想像していたし、もっと広大なものを思い描いていた。

それから「孔乙己」に登場する居酒屋「咸亨酒店」に、紹興魯迅記念館の館長さんが、日本から紹興に来たというので歓待してくださり、案内していただいた。どんなときも常に笑顔の絶えない親切な館長さんであった。

北京后海付近の居酒屋「孔乙己」と比べて、魯迅の故郷であるから、少しでも古風で伝統的な飲食を味わい得たものと考えている。しかし茴香豆は、后海の居酒屋よりも小粒だった。作品「孔乙己」から想像するかぎり、后海の大粒の方が、作品に似合っているように思われるが、地元で出される「おつまみ」であるからには、「咸亨酒店」の小粒のサイズが、魯迅の描こうとした茴香豆のイメージに、きっと近いものなのかもしれない。

魯迅の故郷は、紹興酒の原産地でもある。「孔乙己」のボーイが、適度の温度に温めてから、客の前に出すように、「温酒」をいただいてみた。厚手の湯呑茶碗で飲むのであるが、なぜか諏訪湖畔の温泉「片倉館」で使っている茶碗を思い出した。よく似ている。

二度と巡り合えないかもしれない折角のチャンスと思い込み、館長さんの御好意にあまえた。孔乙己並みに飲みつぶれるのには、なん杯ほど飲んだらよい

か、人体実験を試みることになった。

ニコニコ顔の館長さんは、次から次へと紹興酒の入った茶碗を運んできて下さった。六個の茶碗を重ね置きしたところで、立ったままで飲むのには、足がふらつきだしていた。行司役の館長さんの軍配があがり、私はそこで止めにした。

老いた孔乙己と同じに、私も又、「咸亨酒店」に借金を残したように思えてならない。再び紹興を訪れる日はあるのだろうか。当日の行司役、紹興魯迅博物館の親切な陳館長さんに再会できずに、孔乙己と同じ運命を辿るのであろうか。

(14)　2011年3月国際研究会発表（平文研究会）、英文配布資料

The Letters of Dr. James C. Hepburn and His Wife Clara to SWW

The SWW Family Papers at the Yale Univ. Library Archive, MS 547

No. 1 [Mrs. Clara Hepburn to SWW : 1853/ 11/ 26]

New York, Nov. 26th, 1853

My dear Friend

I cannot allow our friends Dr. & Mrs. Kerr to leave us without hearing at least a line to tell you that [we] still remember & love you. --- We often think & speak of you as [one] of our oldest & dearest friends in China, & [Dr.] Hepburn has often said he would write you, but he is so much taken up [now] all the correspondence devolves upon me, so if you will be satisfied [with] a line from me occasionally, you will be more likely to hear from [ ].

We watch your movements in China with a great deal of interest & any information of you is always most acceptable to us --- [ ] [ ] there will tell you that we had a report of your death, which deeply grieved us --- but our mourning has soon turned into joy. Pray you & my dear Mr Williams long be spared to your family & your [ ].

We are living very near the spot we were when you were [in] New York. Dr. Hepburn has built a house nearly opposite the we then lived in. He had an increasing practice, but it is among a [lot] of people that he does not at all like. I often wish he could [ ] it his duty to return to China. --- I cannot tell you how much I long to go back there. --- My health is so much better that I think [I] might live, so comfortably ~~there~~ as here. --- I trust we are [on] the path of duty in remaining here. --- We certainly have enough missionary work to do --- I suppose it matters but little to the Chinese when his lot is cast, so that he is doing his Master's work --- you have I suppose heard of our severe affliction in the death of our dear boys. --- He is nearly 18 months since. Yet our hearts still bleed, we have but one child left. Little Samuel whom I suppose you

remember. He is now nearly two years old.

I shall have to refer you to Dr. Kerr for any more particulars about us, as I have a very few minutes more to write. I think you will be pleased with these friends, & I hope they will form a great addition to your circle in Canton. --- They are plain, unassuming people, but I think improve much on acquaintance. Mr Preston I think not seen so much of. Walter Lowrie's brother [Kenben], has just offered himself to our Board of Missions, to go to China, or any other field they may prefer. --- He is a young man of fine talents, different in many respects from Walter, but a very fine character. --- I hope my dear friend if you can spare the time from your many duties that you will occasionally send us a line; tell us all about yourself & your family. --- We do feel a very deep interest in you, and in your [welfare]. --- Will you kindly remember us very affectionately to all our missionary friends. --- We have a brother in law in the Japan Expedition, Lieut. Brown. He is in the "Vandalia". He is a fine fellow. And I hope you will become acquainted with him.

This is not much of a letter to send so far, but it will show, that we do not forget you. May the God of Missions watch over you & yours. And make you the instruments of great good in China. the Doctor sends his best love to you & to Mrs Williams. Give my best love to her & accept a a [sic] large share for yourself from your ever affectionate friend.

Clara [M.] Hepburn

No. 2 [Mrs Clara Hepburn to SWW: 1858/ 12/ 27; New York; pp. 4]

New York, Dec. 27th 1858

My dear Friend

If I allowed the sense of shame which I feel to influence me I should not dare to write to you. But the memory of the ready pardon you granted me, & the kind, & good letter you wrote to me in reply to one I sent to you acknowledging my remissness as a correspondent encourages me to write again.

As I promised your good wife the other day that I would do---I wrote to you by my friend, Mr Bobbin, and in my letter recommended him to you good influence, but owing to painful circumstances he did not get to China & I suppose the letter never reached you. I cannot tell you how many pleasant memories have been revived, by the sight of Mrs Williams, & the pleasant talks we have had about China, & China people. I have lived over in memory the pleasant time we spent together in Macao, in the old house near the Custom house. How many of the pleasant friends then in Macao have passed away. We are almost all that are left. I often wonder how things would seem to me if I could return to China again. There have been so many, & such great changes, that I presume I should feel strange enough. You have properly heard of the effort we made two years ago to return to our chosen fields of labour. The Doctor thought he did all he that he ought to do to get back again. Our Committee thought best not to send us. Much to our disappointment---for he had made such arrangements that we could have been ready to sail at a very short notice.

I have no doubt but they acted conscientiously, whether wisely, I have not felt so sure. It seemed to me that the Doctor was far better fitted for usefulness as a missionary than some they send. His former experience---his knowledge of the language, & his ripened judgment all combined to prepare him to return, & to labour much more usefully than when his first went out.

As to my health neither the Doctor nor I had any misgivings about that. We thought, & still think, that it would have been as good in China as in New York. Sometimes I think we shall yet go back, but every year I suppose lessens the probability---. I shall feel it a great honor, & privilege if our only remaining child, shall be fitted for, & permitted to go in our place. I ask for him no greater honor. "The field is the world," & wherever we are we may labor for Him who died for us, and I suppose if His providence shuts us up to any one feet of that field, it is an duty to acquiesce. This I feel that I have been slow to do. I have never felt quite sure that the Doctor ought not to have tried some other means of returning.

We are pleasantly enough situated here, as pleasantly perhaps as we could be in the city. The Doctor's practice has never been very lucrative, but it is sufficient to supply our necessary wants. Our family is so small & Samuel so large that I have a good deal of my time to devote to [dragged], & Sunday School labor. The former has seemed to me more like direct missionary labor than anything I have engaged in since I came home. The children, most of them Romanists, are gathered from the dens & hovels of this great city, & are too poor to be in the Public schools. We teach them to read write, & sew. Help them to become cleanly, & to fit themselves for a better position---some of them have got good situations. You would be surprised how readily they commit scripture to memory, & what can amount of it they have stood in their memories. We hope it will be as the "seed sewn in good ground." We are not often interfered with by the pristhood. We try not to come in contact with their prejudices.

I do not want to have you leave your field of labour. You are now occupying a post of usefulness that few are fitted for, or could fill. With you love for the missionary work & [desire] to see the kingdom of our blessed Saviour extend I have no doubt you

will do as much for it in that position as you would if more directly engaged. I trust you may be very useful---I was talking with Mr Walter Lowrie about you on Saturday & he said he thought you were where you ought to be. May Lord bless you & make you a great blessing to China & her many millions. Should you come to the N.Y. none will give you a more heartful welcome than the Doctor, & I. Do forgive once more my seeming negligence, & write such as letter as you used to write. Tell us all about everything that you think would interest us. The Doctor is out or he would join me in love to you. We often speak of you. I am ever your affectionate friend.

Clara Hepburn

No. 3 [James C. Hepburn: 1859/ 11/ 02; Kanagawa; pp. 4]

Kanagawa Nov. 2, 1859

My dear Friend---

We rec[d] a friendly letter from you a few days ago, by the 'Powhatan'. I am glad you don't forget us, and will take a little trouble on our account, we are always glad to hear from you.

We are safely housed in Kanagawa. Perhaps you know the place. It is near the English Consulate, in the temple occupied a short time ago by the Dutch Consul. Its position is good, and as healthy as any in the neighbourhood, soil scanty, and somewhat elevate above the houses of the village.

The grounds around are beautifully planted with trees, most of them evergreens of the fir species, [astor vita] &c many of them stunted & contorted into various shapes. We are now sojourning in the priest's house attached to the temple. The temple we are

fitting up for a dwelling, and will be very comfortable. It is about 45 feet square. The grim idols & the paraphernalia of their service we have pushed aside into one corner. We have had many discomforts, and difficulties to meet, and my wife is very weak, most of it comes on her. Teaching our servant is one, ignorance of the language, another of our trials. We came poorly provided with furniture, and the house is very open & uncomfortable.

But with all we get along very well. We find our discomforts gradually lessening, and the future s more hopeful. We are beginning to talk some, manage to make our wants understood. We were made glad to day by the arrival of our dear old friend Brown, with Simmons & Hall. They left their wives in Y.H. Our house is big enough for them and gives them a room apiece. Brown will, I expect, fit up this house for himself & co. We shall all be in the same compound, a pleasant company, I trust of praying men, and mutual help. Wouldn't you like to be with us. We have been here only about two weeks. Haven't had time yet to think of study or letter-writing. All our time is consumed with servants, we have four – two too many, and carpenters. In a week, we hope to get into our own dwelling, and I trust will be more settled. But with all we are happy, and quite as comfortable, more so, than we expected, and have much to thank our Heavenly Father for. I am strong as ever.

My wife has not recruited as well, and has a poor chance of being any better at present. She is no better for her Shanghai sickness. I hope much from the cool, bracy air of the winter. What she needs now is rest, which it seems she cannot get. I had intermittent fever for some 10 days after I left S.H. I hope t may not return.

So far we have been entirely unmolested by Gov. Some officers made us a friendly call. There <u>seems</u> to be no more hindrance to our labors here than in China,

still we cannot judge from anything we have seen as yet. The officers and people all seem very friendly.

I hope you may have a pleasant voyage home, and a happy reunion with your family. May you soon come out again. We cannot spare you in this part of the world, so we mortals judge. May God bless you wherever you are. Write to us as often as you can find it convenient.

My wife joins me in love

Yours ever

J. C. Hepburn

No. 3 [Clara, Wife of James C. Hepburn to SWW: 1859/ 11/ 08; Kanagawa; pp. 4]

Kanagawa, Nov. 8th 1859

My dear Mr Williams]

Many many thanks for your kind note to us by the "Powhattan". Dr Hepburn has written to you, but I cannot like the letter go without adding a line.

Yesterday Mr Brown & company moved their effects here & are staying with us, so that I have my herds full, particularly as I have nearly all the cooking &c to do. It has been hard to get along & sometimes I have almost given out, but our servants are improving & so is our condition, & I think in time we shall live quite comfortably, but it will be a long time before we get servants trained as they are in China. We are daily making some progress in the language. We have been compelled to speak it. In a few days we shall move into our temple house. It will be very comfortable. Mr Brown will have the one we are in now for his family. As soon as we get out of it, he

will begin fitting it up. It is connected with the one we shall occupy by a covered way. How pleasant it will be to have such dear friends so near.

I wrote to Mrs Bridgman soon after we arrived here & hoped my letter would reach Shanghai before you left. I requested her to ask you to get some [an illegible word], a set of such straws & a back gammon board for my boy. The [an illegible word] I do not care to spend much money in. If you will get Dr Happer to pay you, I will settle the matter with him, & if you will kindly take the things home with you I shall feel very much obliged. I wanted two sets of the such straws, one set for Samuel & one for Charly Park. I hope you will have time to see our boy. If he knew when you were in N. York he would come, & see you. I trust you may have a very pleasant voyage home & find your family all well. Love to Mrs Williams. I hope when you return to China you will visit us in Japan. I am very glad I came. I think we have very much to encourage us. I hope the day is not distant when the Gospel shall have full course & be glorified. Write to us if you have time before you leave. We always love to get your letters.

With much love yours very

Affect[ly] Clara M. Hepburn

No. 4 [Hepburn, Dr. and Mrs., to SWW: 1874/02/16]

Yokohama Feb. 16, 1874

My dear Friend,

It has been on my mind ever since I returned to Yokohama to write to you, but I so soon got my hands all at work, and relapsed into my dog at the wheel manner of life,

that I left no time to be spent in letter writing, and thus it happens that instead of writing to you first as I had intended, your letter anticipated me. I was rejoiced to hear from you, and to know from yourself how you were doing. I am glad you have been able to finish that great work. God had indeed helped you day by day, and strengthened you. What a useful man you have been in your generation! all through the grace and love of our heavenly Father. May He still be with you, to strengthen comfort and enable you to do much more for Him in his vineyard. How pleasant it is for you to have your wife and Sophy with you. Nothing in this world so delightful. I know well what it is.

I have all my family with me now. My son was married the morning of the day we left Penn[a] to return to Japan. We have brought him & his wife with us, and we are now all living in the same house. It is very pleasant to have them with us. The one sorrow, however, that we have is that they do not love Jesus, and that there is this want of sympathy between us. Help us in our prayers for them.

Sam was doing but little at home, - only making a living for himself and thought he could do better out here; so we brought him. He is now a clerk in a mercantile house here, of which Rob[t]. Brown is one of the partners.

My wife has opened a school for Japanese girls. Teaches from 9 to 1 oclk; is very busy and very much interested. We have a nice Sunday school also; yesterday we had 47 children present, all Japanese. We have got "Jesus lives me" and "There is a happy land" in Japanese. It would do you good to hear them sing them. They have become so popular that we hear the children in the streets singing them; indeed while I was writing the above I heard a little fellow going along the street singing "as Yesu ware wo aisu". We have now two churches here organized on the union plan, one on Yoko[a]. and one in Yedo, with, in all about 100 members. My teacher is an elder in the one here,

and often preaches. He is a true Christian, and a most useful man. We have many delightful talks together, as we go through the Epistle to the Romans; which with his help I am now engaged in translating. I am now finishing the 15th chapter. It was not so difficult as I had expected to find it. I am going to make the translating of the N.T. my principal work; there seems to be no one else, just now, able to give himself to this work. Brown, since his leaving the Govt. school, is teaching a private school as a means of support, and has very little time or strength left for anything else. The Dutch Board to which he made proposals to return, declined to take him back on his terms. He has been suffering lately from a some cold, and has not been out of the house for some two weeks. He is now 65. His family are pretty well, though all complaining of colds &c. We have a very large missionary corps now in Japan, and still they come. We have in Yokohama alone 13 Protestant miss. men all married but 2; and 6 ladies, unmarried; Yedo has a large force. The A.B.C.F.M. has some 7 families in Osaka & Kobe. I think there are over 100 men & women, all told of Protest. Miss. in Japan. The Romanists have a large force also, of their best men, scattered at all the open ports, and what is remarkable, the Greek church, have a missn. in Yedo, under a very able man, who numbers over 100 disciples in his flock, so I hear. All sects & dominations are represented. The Am. Methodists have Dr. McClay of Fuchow, the Am. Baptists Dr. Nathan Brown, [avec] a Miss in Assam, and excellent man of, of about 65.

I never saw so many grey headed and grey bearded missionaries in any one place. The Canadian Wesleyans have also 2 good men, men of years experience. The Scotch churches are sending two men. The Ch. Miss. Sc. & Prf. S. of England have several men. So you see Japan is not likely to suffer for want of teaching. But we are unfortunately all cooped up in these treaty ports, and even there to the foreign quarters

so that we cannot even rent a room in the native part of the town. We hope this may soon be remedied, but as yet there is no prospect of it. We are just now troubled with a rumor of war in Kiushiu. There is no doubt a powerful combination amongst some of those southern chiefs and old samurai class against this Gov't. Large bodies of troops have been set down. There has yet been no fighting, that we have heard of.

Syle & family are all well. He still preaches in the Eng. Church, not however I believe to their entire satisfaction. He has one of his sons Louis here now, a clerk in Smith, Baker & Co's house.

My letter has become long, and yet I have not told you all about ourselves, nor anything about our delightful trip home. I will lean this to my wife, who wants to write some in this letter.

I believe we were to exchange with each other a copy of our Dictionaries. I shall be very glad to get yours, which I know will be more useful to me than mine could be to you. While in New York I brought out an abridged edition of my Dict. It is beautifully got up, in paper, type, size & binding. I also while there brought out through the A. Bible Soc. a bilingual copy of the Gospel of John, in the Roman letter for the Japanese. We have all the Gospels now translated, & three of them printed. Luke is nearly ready for the press. Brown is in Acts, Thompson has done the 5 books of Moses.

The Baptists are translating for themselves; they are hard put to it for a word with which to translate "immerse." I believe they have fixed upon hitasu which means not only to dip into water, but to soak!

Good bye my dear friend. May our covenant God and Father bless you & spare you yet to work many years longer in His vineyard. Give my love to Mrs Williams,

and Sophy, whom I have not seen, of whom I have heard much. Remember me to Martin, Blodget. By the way did you ever hear what a dunce your man Edkins made of himself when here by reading a paper on the Japanese Language before the Asiatic Society of this place? It is an extraordinary production. I have a notion that he was stirred up to it, by finding that the Japs. used the word Shin 神 for God. He advised us instead of Kami, to use the English word God, for the Divine Being, saying that Kami meant "the soul of ancestors". !!!

As every your attached friend

J.C. Hepburn

My dear Doctor & Mrs Williams

It was truly pleasant to hear directly from you once more, & to know that you were well, & once more settled in your home in Peking. Two years ago dear Dr., we were in Shanghai, & you & my good husband were working hard – how you are both through the great works which then occupied you. Truly our dear Father in Heaven has been very kind to you both, & to your families. I many times feared you would both sink under the work you had in hand, but in this, as in many other things, our Heavenly Father has been better to me than my fears. You have had your wife & daughter restored to you, & we are once more settled down, an unbroken family, in our little snuggery. We have a daughter now, a sweet young thing but little past 18. She is a member of the Pres. Church. Sam seems very happy, & we are happy in having these children with us. Our trip home was most delightful. The Hitchcocks & Mrs. Collins proved charming travelling companions. I enjoyed India very much; should have been only too happy to have spent another month there. We visited Singapore, Penang,

Calcutta, Seramore. In this latter place I was deeply interested. We stood in the pulpit where Marshmare & Cary had preached, but I must not linger. We visited Benares, Allahabad, Counpore, Luchnow, Agga & Delhi. Spent several days at each place, & greatly enjoyed visiting the beautiful ruins which speak so plainly of the wealth & greatness of India centuries ago. From Delhi we returned to Allahabad, & from thence went to Bombay, where we spent a week, then Imbarbred for Suez. We did intend going to Palestine, but Doctor H. had such a severe attach of diarrhea going up the Red Sea, which so weakened him that we feared to have him risk the fatigue & exposure. We went to Cairo, & spent a few days, & then to Alexandria, from whence we embarked for Naples. Here we spent ten days, & then went to Rome. We parted from our kind friends in Rome. They had to hurry on to Paris. The day after they left Dr. H. was taken quite sick, which marred our pleasure. I cannot touch upon all, or even a small part of what we saw, & enjoyed. From Rome to Florence & Turin, & then to Geneva. We spent a month in Italy, & a week in Geneva. It was too cold, & too foggy to go about much, still we managed to see everything of interest around this old city. Doctor Hepburn gained strength rapidly in that quiet spot. We went from thence to Paris. Mrs Hitchcock, her nurse & little girl were awaiting us here. Mr. H. having gone to New York with Mrs. Collins. We spent over two weeks in Paris. Truly it is a fascinating place. We found many old friends living there. Augustus Heard & family, Mr. & Mrs. Hunter & family &c. the time of our sojourn here slipped by all rapidly. We spent nearly a month in England, paid a visit to Edinburgh, but it was so cold we could only stay three or four days. Everywhere we found the kindest friends. In London we saw much of the Alcocks. They seem very happy, & haven't changed one bit. Amy Lowder looks delicate. Her mother says she has never

seemed well since the Conoly's death. We arrived in New York the latter end of April, & were kept constantly on the go until the 16th of Oct. When we started on our long journey until the 16th of Oct, when we started on our long journey the end of which we reached on the 30th of Nov. We had traveled since leaving our home in Yokohama some 30,000 miles, & had not met with a single accident. Do you wonder that we entered heartily into the spirit of the 103d Psalm? We spent three days with our dear old friend Mrs. Perit in New Haven. It was an unfortunate time for seeing many people for nearly everybody was away to the seaside or mountains. I trust you are both quite well, since your return to your Northern home. You must see many changes there, & was much grieved to hear of our dear Doctor Johnstones sad bereavement – hardly one year of bliss ere he was called to part with the treasure which made his home so bright. Please remember me affectly to Mr & Mrs Blodget, Dr & Mrs Martin, & any other friends. Accept much for yourselves & Sophy from

Yours affectionately

Clara [M] Hepburn

No. 5 [Hepburn to SWW: 1874/08/17]

Yokohama Aug 17, 1874

My dear old Friend,

I received your very good letter from near Singapore, and did not think I should be so long in answering it. It came just before my wife & made a tour into the country for health & recreation of some three weeks, and since I came back my hands have been more than full.

First about Mateer's Bill - I never rec[d]. any other acct. for making my book, than the item for "Printing and binding 3000 copies of Dict." - $5,110.00" . He did my work by contract, at so much a copy. I really forget how much that was, but it must have been $1.70 a copy, there was no bill for the different kinds of work included in the contract.

I was not in Yokohama when our account were closed, or it is likely some hot words would have passed between us. As he charged me for binding 100 copies which I sent in sheet to England & U.S. besides the many copies spoiled & returned on my hands by bad making up through omission of a whole form &c. But when I returned to Yok[a] I found my agent here had settled with him, and concluded to bear the loss as well for peace sake as perhaps the hopelessness of convincing him that he should refund the Amount to me. I am sorry that you should have any trouble with him, or anything to complain of. I have no doubt that intends to act honestly and fairly to all.

You are about getting home, according to the time you mentioned to me. I trust you have had a pleasant journey all round. Sophy no doubt had enjoyed it greatly, & you have been happy in seeing it, as well as in meeting so many of our fellow workers in the Lords vineyard.

You will not find much rest a [*sic*: at] home, indeed your labors will now commence, for the Christian people of America have itching ears in the subject of Missions, and have not yet got rid of the old feeling of "romance" about Missions & Missionaries, a modest man like myself has a hard time at home, he must either surprise or offend people at home whom he would fain have as his friends. I was indeed glad to get back again amongst the heathen, and enjoy myself much more in talking in Japanese to a heathen audience than I did in English to an American. You perhaps can

hardly sympathise with me in the matter, as you are already ready for every good word as well as work.

I am kept very busy, having to discharge the duties of both physician & clergyman. I preach two or three times a week in Japanese, besides doing my Dispensary work, and translating.

We – the S.S. translating Co. – have just got Romans ready for the press. Hebrews will also soon be ready. We have adopted a different plan in our work and will get on faster. We found the Com^{ees} worked very slow, - being nearly one whole year on Luke, and seven months on Romans, - so we take the work of individual translators, give it a slight revision of and have it published under the name of the translator. In this way we hope to get the whole Scriptures out in three or five years.

The evangelistic work is going on even more rapidly than we could expect, under the disabilities we labor under. – There are now nearly 600 baptized Prot. Christians in the country, and there are constant additions. If the Gov^{t} would give religious liberty to its people, and allow missionaries to live outside of the For. Concession, the work would go on much more rapidly. That old edict against Christians has never been formally rescinded, - though pretty much a dead letter.

I do not know how your Dictionary is selling in the country. I did what I could with Whetmore here to get home to import it. He seemed very backward about, why I could not surmise. I think all t he Missionaries have copies of it. It ought to have a good sale amongst the native scholars. I doubt whether the Chinese character was ever more used in this country than it is now, although the Japs affect to despise Chinese literature and everything thing else Chinese.

Dr. S.R. Brown & family have been out amongst the Hakone mountains for two

months. His health I believe is much better than it was a year ago. Mr Wylie made us a visit this summer. Mrs Muirhead is in Hakodate spending the summer. Miss Fay, Mrs Yates, Mr & Mrs Seward are also here, expecting to return to Shanghai in a few days.

My wife keeps pretty well, often complaining, we are neither of us a [*sic*/ as] strong as we were 5 years ago. My wife joins me in kind regards to Mrs Williams and Sophy, and much love to yourself –

I remain your [*sic* / yours] sincerely

J. C. Hepburn

[P.S.] Syle has given up his chaplaincy here and is now teaching a Gov^t^. in Yedo.

No. 6 [Hepburn to SWW: 1874/10/01]

Yokohama, Oct. 1, 1874

My dear Friend

I rec^d^ some time ago your very good and welcome letter of July 6^th^ written among the hills. Your letters are like yourself always loving and cheery, and come to us as a strain of delightful music, warming and elevating the heart. I must confess that I am naturally of a gloomy disposition with my thought and feelings too much concentrated upon myself and have not enjoyed the good gifts of our Heavenly Father as I should nor been grateful for the many blessings which He has so liberally bestowed upon me. I suppose you would be horrified to know that the happiest moment of all my journey around the world, was that in which I set my foot again in my little cottage in Yokohama! After the satisfaction of seeing places and things about which I had long

been reading and recalling the historical associations, my most abiding impression was one of disappointment and sadness, and I was always saying mentally, "vanity of vanities all is vanity"; and, "God only is great". The more I saw of man and the best he could do, the more weak and despicable he became in my eyes. So I am now quite satisfied, I have seen many of those works of man about which the world has boasted and exulted. I was not able to go into raptures over them, but turned away rather in disappointment at the weakness of man; and drawn nearer to God, who endured forever and who only does great things. This is just how I felt, and I was glad to get to New York, bury myself in the old Mission House for about 3 months, working hard to get out an abridgment of my dictionary, and then to get back to my work in Japan, all to the great disgust of my dear wife, who I believe now regards me as a kind of unnatural monster.

I rec[d]. a copy of your dictionary from Mateer, for which I return you many thanks. It is a valuable book and will doubtless superseded all other Chinese dictionaries. I am rejoiced that you were enabled to finish it. You ought now to take a good rest. Are you going home this fall? I have heard rumors to this effect, that you are going home, through Europe, without the expectation of coming back. What Mr Avery or any other N.S. Minister can do without your help or of some other missionary, is very little.

We are all filled with anxiety, and uncertainty as yet, about this war that seems so imminent between China & Japan. It will all depend upon the result of Okubo's Mission. You likely know what this is. We all regard it here, as most foolish. It is however in [wise] hands, and with one who makes the wrath of man to praise Him.

Our friend Brown has lately had a serious attack of Angina Restoris. He had been spending the summer on the top of the Hakone mountains, living for some two months

in the clouds and rain. He was taken with the above complaint soon after he got back to Yokohama, and is now at Kōbe, where the climate is drier than here, hoping to get well; but I hear the Drs there say he has fatty degeneration of the heart; if so, I fear we may not hope for much more work from him.

Our work goes on with good success. We have lately organized a church in connection with this mission, of 18 members. The other church under Ballagh, of the Dutch Mission, numbers some 70 members.

I am busy, being one of a S.S. translating committee which meets four afternoons in a week; have my Dispensary open twice a week, which I always open with a talk on some Gospel subject; and two services on Sunday. I feel as if I were doing now true Missionary work, though I have reason to know I am also working and helping my Miss. brethren through my dictionary, and translations. I lately translated the "sweet sad story of the cross", into Japanese. It takes well and is much read by them.

We are longing for the day when we shall be permitted to scatter, and live amongst the people wherever we please. We are still confined to the foreign quarters of the treaty ports. We have not by any means as much liberty as the missionaries in China. Dr McClay of Fuchow China, now resides amongst us, the head of the M.E. Mission, and Dr. Nathan Brown, an old missionary from Assam. Few mission fields have so many old grey heads men. We get on very harmoniously. The only difficulty has arisen from some of our hot headed and not wise members, trying to force us all into one world of union, - a hopeless task, and one only attended thus far with the opposite result. With kind remembrances to Mrs Williams, & love to Sophy, I remain as ever your affectionate friend

J. C. Hepburn

No. 7 [Mrs. Clara Hepburn to SWW: 1877/ 04/ 28 & 1877/ 05/ 04; Atami & Yokohama; pp. 6]

Atami April 28th 1877

My dear friend

I always wonder how it is you write such neat, nice looking letters with your nervous hand, & weak eyes—mine, with a hand weak, but not weak as yours, are always such scrawls---never mind they serve to assure my friends of my love for them, & the delight I take in the letters I receive from them---one thing or another has obliged me to defer answering your most welcome letter of Jan. 22nd, until now. When we were getting ready to come out here I bundled up all the unanswered letters which have been accumulating for some time past, & brought them, & greater freedom from interruption than I can have in Yokohama. The pile is growing beautifully less, & it has been pleasant to have quiet chats with dears, & far off friend. Among the letters I sent out by our son since we have been here was one from your brother in Utica, asking Doctor Hepburn to make some purchases for them. This he will be very happy to do when he returns, & feels strange. Will you please, drop a line to your brother, & ask him to send a Bill of Exchange for just the Amount he would like expended, & assure him we will try, & use the money to the very best advantage—just before leaving Yokohama I had an order for four hundreds dolls worthy of things. The gentleman send me a hill to cover that amount, & I hope to sell it to such good advantage as to pay for some pretty things not mentioned in his list. Dr. Hepburn will feel greatly obliged if you will advise your brother in this matter. He wants to write, but is not at all well.

We are here hoping the rest, change, & baths, may improve his general health, which is far from what it ought to be. He has sufficient much all winter with his back. We thought it was rheumatism, & that as the spring came on it would wear away, but on the contrary it seemed to get worse, & he had numbness in his legs & other symptoms which gave us no little anxiety. The Doctors now fear there is some serious spinal trouble, an affection of the spinal cord, & ordered him to give up work. As this is not easy to do when in the midst of it, we persuaded him to try three or four events in this country. We come here about fifty miles from Yokohama, because it was the most quiet, comfortable place we could find at this season of the year. Atami is quite celebrated for the hot spring, or geysers. Perhaps you remember the description of it in Sir Ruther Alcock's book. I feel very much as if I was living over a boiling pot. The stone which Sir Rutherford had elected over the parincipal geyser, as a monument of his visit still remains. Mr Green, of our mission in Tokyo, is with us, & he, the Doctor have talked, & preached to large audiences of Japs, nearly every evening since they came here. The last time there must have been 175 or 200 people—all eager, attentive listeners. We have distributed many copies of the gospels, & many tracts, both here & in a neighbouring town, to which we were invited by the Mayor, who, spending a night here, heard for the first time the blessed gospel. There is no difficulty now in finding work wherever the missionary may travel over this land. The greatest barrier now is the difficulty of speaking this language correctly & intelligently. I often say oh for the gift of tongues. I often have to let the printed page say what I long to say, but which my imperfect knowledge of the language debars me from doing.

I was so pleased with what you told me of the pleasant home your good wife had made ready for you in New Haven & of your all being once more after your long

separation a united family under the roof. I suppose ere this one building has flown from the nest as your brother mentioned in his letter that Sophy was, to be married in April. I think your lot dear friend has been cast in an pleasant place. I love New Haven. I know you will find work to do there for the Master may our dear Father in Heaven bless you in all things & ways. He has allowed you many years & China & made you there the instrument of great blessing. You can & I hope will be made the same where you now are, even if the <u>chair</u> we have sometimes talked about should never have a bottom put in it.

Yokohama May 4th. [1877]

I returned home a few days since. Dr Hepburn & Mr Green are still in the country. They have gone to a more mountainous region, & find the air much more invigorating. I am already beginning to look about for the curios your brother wishes. I hope we shall have them ready to send home by the June ships, & he will then get them in the Fall & much cheaper than if sent by mail steamer. Tell him we will let the amount of the bill he sends cover the expenses of boxing, shipping &c. Olyphant & Co. have no house here. He is evidently under the impression that they have. Do you ever go to see my dear old friend, Mrs. Perit? She will be so glad to talk with you. She is 83 or 84 years of age, but unless very much broken since I saw her, wonderfully bright, intelligent & springtly for her years. I want you & Mrs. Williams to see much of her---please remember Dr. H. & me most kindly & affectly to her & her brother Mr Coit, who lives with her. Accept much love for your dear wife & yourself from me & mine & believe me as I always am your old & long tried friend

Clara M Hepburn

Sam & Clara are well & send much love to you.

[P.S.] The Mr. Barter's left to day for Shanghai. He takes place in the consulate. We hear Mr Seward is likely to be sent to Eng. as minister---won't he like that?

No. 8 [Mrs Clara M. Hepburn to SWW: 1877/ 07/ 04 & 1878/ 01/ 05; Yokohama; pp. 5]

Yokohama Sept 4th 1877

My dear Friend

I thought the last mail could certainly have taken my reply to your most welcome letter of June 29th, but I was unavoidably prevented from writing, & I dare say had I written long letter could have shared the fate of one Dr Hepburn wrote to your brother, as well as others that were ready, & yet never left. As the Doctor was starting to the P. Office with the letter a lady friend came in & said the steamer had gone—to our dismay we learned afterwards that it did not get off for another twelve hours,—that had he posted the letters, as he was starting to do, they would have been in ample time. I hope your brother will like the purchases we have made for him. There were not at the time any great variety of bronzes, for the price we named to select from. The porcelain was the greatest we could find after looking through many shops. The box which Doctor "Hepburn" carefully packed with his own hands, is now on board of the "Etta Laring". She will shortly sail for New York. Your letters dear friend are always a real comfort to us---they are always the bearer of bright, cheering words. The Doctor, & I often this last year have felt that inability you speak of to do much that we would like to so. I was much amused a [ ] morning since, when Dr. H. said to me so soberly "it seems to

me Wife you have aged very fast of late." I did not deny the fact, for I could not have done so truthfully had I been inclined, but I asked if he thought he looked, & felt as as [*sic*] young or younger---I ask him if he don't look in the glass now & then. He does not deny doing that, but says he forgets immediately how he looked. I have always loved to repeat to him Brown's lines---Would some gift could get ye, "&c. I am happy to say his health is much better than it was. He has done a good amount of work this summer. Has translated the 1st & 2nd Epistles to the Corinthians, & on dispensing days has seldom had less than one hundred & eighty patients to prescribe for. This is very fatiguing, & he always comes home looking very weary. He preaches in Japanese in nearby every Sunday. There has been a perfect exodus of missionaries this summer, & we have been almost the only left in town. Some have not returned yet. Some have not returned yet. The Bible comdisbanded in June & Dr Hepburn has worked alone with the native assistants. Dr. S.R. Brown went off in May in the U.S. Alast," which was sent by the Admiral to look after a ship wrecked crew in Damssice Straits. The vessel was back long ago, but Dr. B. is making a tour of China from Hong Kong to Peking. His family rented their house furnished & have been in Nikko all summer. D.C. Greene & family went to Kioto & Arima in June & have not yet returned. I sometimes wonder if this dropping all of one's work for two or three months in the year is necessary in a healthy climate like this. We have had a most delightful cool summer, & a very healthy one. Mr Fisher has brought & moved into a very comfortable house on the bluff not far from us.

Your pleasant mention of the commencement & of old familiar names called up many memories of the friends of bygone days---just think of your meeting Gnl Dickenson. If you see him again please give our love to him. Dr Hepburn & I wish to

express our hearty congratulations on your appointment as professor in Yale college. Yale, we think, is most fortunate in having such a man. I hope the chair you are to occupy is bottomed strong with gold. Mercy you be spared to occupy it many years.

Thank you for telling us so much of your dear Sophie's marriage & reception in England. I am sure but Grosvenor's family must love her. Mrs Yates made me quite jealous by writing to me that you had sent her a photo. of Sophia, taken in her bridal attire. Please crush the green eyed monster by sending me one too? I don't like to envy any one. Won't you send me one of Mrs. Williams to put besides yours? I never separate in thought, & don't like to in my Album. I hope your son is doing well. I hope he will study a profession---even if he don't follow yrs. I believe if I had a dozen sons I should want them all to be doctors. Sam & his wife are very well & happy. They move back to their own little cottage next month. I must lay down my pen. My hand has quite given out to write when you can. Dr Hepburn joins me in expressions of warmest love for Mrs. W. & yourself.

Always yours affectionately

Clara M. Hepburn

[P.S.] I wrote to dear Mrs Perit ten weeks ago. Please remember us most affect^{ly} to Mr & Mrs. Burrows if you see them. Did their little one live---I have never heard---Mrs. B. promised to write & let me know. Tell them we enjoy the Shaker rocking chairs ever so much.

No. 9 [Mrs Clara Hepburn to SWW:1878/ 01/ 25; Yokohama; pp. 6]

Yokohama Jan. 25th 1878

My dear Friend

I do not often attempt letter writing in the evening, but it is so quiet & as we are not likely to have any interruptions I am tempted to have a quiet chat with you. We are sitting in our cozy dining room. A cheerful fire in the grate makes the room warm, notwithstanding the cold without. Doctor Hepburn has on his slippers, & is sitting in the Shaker rocking chair, given to us by Mr Burrowes. He greatly enjoys this chair. It is one of the luxuries of our home. My heart is often filled with grateful emotions as I enjoy this pleasant, quiet home. How kind our Heavenly Father is, & how faithful to all his promises. I am so glad you have seen us in this home, & I wish Mrs. Williams could have been with you when you made us that little visit, which we so much enjoyed. I think when I last wrote to you that Sam, & Clara were living in Tokio. To their delight, Sam's office was removed to Yokohama early in September.

They stayed with us a month while their house was being repaired. Now they are again in it, & every happy they seem to be. We are all so glad you were able to take one mean with them. If we could see them humble, devoted Christians our cup of blessing would overflow. I often ask & wonder why that quiet blessing is withheld. I cannot doubt [the] the covenant keeping God. His promises cannot fail, & thought my faith is often sorely tried because this desire of my heart is delayed I will trust Him to the end.

I think it must be the fullness of joy to see one's children not only professing Christians, but real earnest workers in the [one illegible word] vineyard. Our lives here move on with little change, or variety from month to month. Our work is always about the same. Doctor Simmons insisted so strongly that Doctor Hepburn should close his dispensary for the winter that he most reluctantly yielded about three weeks ago. I

think he has suffered less pain in his back since. During the year 1877 he treated over six thousand patients in his dispensary. Most of them very poor people. It is a sore trial to him to give up even for a season. This department of his work. It is a source of unceasing gratitude to him that his head is no way affected & that he can go on with the translating work. The committee is now revising the translation he made last summer of the Epistles to the Corrinthians. They work at this in the morning—in the afternoon he translates by himself with the help of his native assistant. He has just finished that Epistles to the Thessalonians & is now working on Ephesians. He still has the preaching service in our native church. Our hearts have been greatly cheered by the large reinforcement of young missionaries we have had within two or three months. All able men, & women, who give promise of being faithful, efficient workers. Three married men, & one single lady. Mr Knox, son of D^r Knox of Elmira, is to be our colleague. Mr Winn, a nephew of D^r S.R. Brown, & Mr Alexander are for the Tokio Mission. We have now eight organized churches in connection with our mission, & two ordained native pastors. We need more. The work, & new fields open up almost more rapidly than we are prepared to occupy.

D^r Brown has quite recovered from the illness he had after his long journey. He is now a grandfather. Robert's wife has a little daughter born this evening. They have been living for some months here in Yokohama, but I think as soon as Mrs. Brown is well enough they intend returning to China. Did you know Mr Robt. Lilley, Agent for the Scotch Bible Society? He has been living in Japan for sometime past. About a year ago he married & brought here a very nice American lady. She gave birth about a week ago to a little daughter, took cold the day after its birth, & died this morning of Pneumonia. It will be very sad for her father for his heart was bound up in her. Her

remains are to be sent home to him.

I want to thank you ever so much for the picture of Sophy. What a lovely looking bride she must have been. I am glad she is so happy in her marriage. I should like ever too much to have a photo of your dear wife & son, & then I should have the whole family.

My heart has ached for my friends, the Gilmans, & dear Mrs Perit, in the great sorrow which has ~~just~~ come upon them. I cannot comprehend how one brought up by such godly parents, & making such professions as ~~he~~ W.C.G. did could have been so carried away. All his sisters are my friends. If I can I will write a little note, & ask you to hand it to Mrs. Perit.

There is an old book I have long been wanting to get. Will you kindly make enquiries whether it can be had in New Haven, Tales of the Regicides, I think, by Miss Bacon. I believe it was published in the "Tales of the Puritans". I shall be so glad if you can get, & send it to me, & will gladly pay whatever the price may be. I have been often in the house occupied by Governor Leet, & in the cellar where he concealed the "Regicides" from their pursuers. My father was a direct descendant of the Governor. Dr Bacon's family was not in New Haven when we were at home. We saw them for a few moments in Guilford, where they were spending the summer.

Doctor Hepburn joins me in much love to Mrs. Williams &

Yours affectionately

Clara M. Hepburn

[P.S.] Please remember us most kindly to Mr & Mrs Burrowes when you see them, & their little one a son, or daughter?

No. 10 [Mrs Clara Hepburn and Hepburn to SWW: 1878/ 05/ 18; Yokohama; pp. 4; "Hoping, working"]

Yokohama May 18th 1878

My dear Dr Williams

I have two favors from you to acknowledge, both of which gave me, & mine great pleasure---the first, your good letter of March 19th---the 2nd, the book I have so long been wishing to own. Your letters are always read by the Doctor & myself with the greatest interest---whatever concerns you, & yours, dear old friend, & all that you write us we shall always love to hear. We love to hear of your children, & their happiness. I trust your dear Sophie may long adorn the position she is called to fill, & make happy the home, of which I am sure hr worthy husband considers her the light. I trust your Fred, & these may be gathered in answer to your prayers into the fold of Jesus. That is the one great blessing we are daily asking for our children. They are all children of the convent, & God's promises are sure---sometimes my heart sinks at the delay. I long to see no children spending & being spent for Him who has done so much for them. I long to have them enjoy what only the Christian can enjoy, the love of God in their hearts, & a sense of His favor & blessing.

For the book you kindly sent me I am more grateful than I can tell you. I read it first when I was about eleven years old, but have never been able to get it since. The Gov. Leet spoken of in the tale of the Regisides, was my puritan ancestor. The house in which he lived is still standing, or the cellar of it. It was sold when he removed to "Leet's Island", & has been in possession of the family to whom it was sold ever since. When I was in school in Guilford I often visited there & when I was at home five years

ago I went to see the two maiden ladies who are living in it. Accept many thanks for the book of the trouble you must have taken to get it for me. With much love to Mrs W. &

Yourself Yours affect[ly]

C. M. H.

Dear D[r].

My wife has come to me holding up her poor hand that scratches of so many letters and saying "that it has completely given out," and that "I must finish this letter to you." Well! for her sake as well as for yours I come to rescue, but I have as little space left to say anything in, I don't know how to being,--- You will see by the papers, that a set of fanatical Japs. out of love to t heir country and from patriotic motives, have assassinated Okubo, Minister of the Interior, and one of the best men in the Council after they had committed the deed, they went singing a national hymn, & delivered themselves up for punishment!---some 6 or 8 men. They tried to kill Iwakuma some 3 years ago, but failed, and about the same time they killed Kido.

The Govt. is dismissing all their foreign employers. They have now but few left. D[r]. Murray goes at the end of the year, [Beeder] this summer. Syle holds on a little longer, his contract not being up. M[c]Carter is now attached to the Chinese Legation in Yedo at a good salary, and I think, not much to do.

Christian work in this country is prospering rapidly. The Presbyterian bodies have united---viz. The Scotch, Am. Reformed, and our own,---into a strong body, called 耶蘇一致教會 Jesu itchi kiyōkai,---The Presbytery is called chiu-kai, 中會, the shō-kai 小會 being the session and the 大會 the synod,---thus following the Jap. mode. The

Episcopal bodies of the Am. Apisola, the S.P.G.'s & C.M.S. have also united, and bring out one prayer book. Connected with our Chiu-kai we have 4 ordained native pastors, and some 13 licentiates, and some 25 theolog. students---and some 800 nat. Christians!

The N.T. testament translation gets on slowly---Brown, Greene & myself are still hammering away at it, 4 days in the week. We are just finishing 2^d^ Corinthians, and hope to finish the whole in 18 mos. or 2 years.

Brown's health is bad,---suffers much with some cardiac trouble,---his working days as well as my own are drawing to a close; and oh, then to be able to say with that glorious apostle, "I have fought a good fight, I have finished my course, I have kept the faith, henceforth there is laid up for me a crown of righteousness which the Lord shall give in that day."

Good bye, my dear old friend; may God bless & comfort you

J.C. Hepburn

P.S. Give our untied love to Mrs Williams and your son.

No. 11 [J.C. Hepburn to SWW: 1879/ 06/ 09; Yokohama; pp. 6; "Translation nearly done"]

Yokohama June 9^th^ 79

My dear Friend,

I received your very welcome letter of May 6^th^ on the 6^th^ inst., just a month after it was written! how the world moves! What will it be 100 years hence? I am exceedingly sorry for the loss of your plates---what a heavy loss and trouble inflicted on you, for so little gained to themselves. What a revelation of poor human nature, how

low it has got! I rec[d]. some time ago the pamphlets on the "term question" & the paper on the "Chinese question," and return you my thanks for them, and for your kind remembrance of me. I have no doubt you are doing a good work, for the Master still,---I hope your eyes are holding out.

I am still at work on the N.T. Our com[ee.] still meets as usual at Brown's study. It's numbers are reduced to day to two only, D[r.] M[c]Calay & myself with two native assistants. The two other members of the Com[ee.] Brown & Greene are both absent. Greene has gone down to Osaka to attend the annual meeting of their mission and will be absent a month,---our old friend S.R. Brown is a great invalid. He has been suffering and troublesome affection of the bladder. He suffers almost constant pain and uneasiness; which interferes with his sleep; and unfits him for any kind of work.

He has not been in Com[ee] for some months. He is just now in Yedo, spending a few days with a friend. He has become very thin, and pale,---I expect his work is nearly done. Mrs Brown keeps very well,---as also Hattie who is the only child now with them, except Robert's wife & child. Robert is in China, what he is doing we don't know. We are now revising my translation of "Jude". After that we have only Revelations---translated by Brown & Collasian by Green, to revise, and we shall have finished the N.T. We hope to finish before the 1[st] of Sep[r]. Greene expects to make a visit to U.S. this fall with his family. I am also preparing a Romanized edition of the N.T., writing off in the roman letter. This will be a great convenience, not only to all missionaries, but I doubt not to many Jap[s.] It brings the N.T. into so small a compass compared with what is possible in the Jap. character. I have had to give up my Dispensary, owing to lameness in my legs. You know what a great walker I used to be; but alas! that is all past, walking is now painful to me,---I force myself to walk as far as

Browns, but have to ride home, & this is the most I can do,— In all other respects I am as well as ever. My trouble is purely nervous, and affection of the lower part of the spiral marrow & seiatic nerves. I hope to get well of it, under favorable climatic conditions. I think it is owing to this peculiar climate.

I may come home e're long, or go off to Europe, or someplace else; haven't made up my mind yet, and don't want to---there is so much to do here, our young men, however, are coming on in the language finely, and Mr Knox, who took the place of Loomis, helps me much, having taken the church off my shoulders.

Annie Washington was married a few [weeks] ago to a young Scotchman by the name of Ewing---a very good match for both. He is a teacher in the Jap. Gov^t^. school in Yedo.

Lyle's contract with the Jap.^se^ has expired. They have offered him another engagement to teach at Kioto, at $100 a month. I have not heard whether he will accept. If not, he will likely return to U.S. He & Mrs L. are well. M^c^Cartee goes home this summer. He has been, as you probably know, connected with the Chinese Legation at Yedo, as English assistant. He has had but little to do,---& his relations are not the most pleasant with his fellow officers. His going home will be mutually satisfactory. What can he do at home?

The Christian work is progressing rapidly in this country. I think our being confined to the treaty ports, has been no serious disadvantage. It has compelled us to centralize our work, and carry it on through native agency for the most part---in and out stations. That old samurai-military class, thrown out of employment, or rather deprived of their means of subsistence, by the restoration of the Mikado, we find wonderfully prepared by the Providence of God, for our work—most, of not all, our

native pastors & preachers & students are of this class. Both in social position and education & ability they are the best class of people. They are still the governing power,---and they are the most ready to hear and embrace the gospel. How different from the corresponding class, the literati in China! They are a turbulent set of men, restless agitators, and progressive withal who have controlled and given character to the political & social changes which have taken place in late years in this country. There are more daily newspapers published in Yedo now, than there are in London! The old samurai are at the head of all this---they are fast driving this government into a democracy. The Gov[t]. has had to fetter the press, fetter public debating and popular assemblies---they were running wild, heading into anarchy and ruin. I don't think any government has had so many grave and difficult questions to face, and settle in so short a time, as the Jap Gov[t]. and come out of it so well.

But dear old friend, there would be no end of my talk---so I must stop.

My dear old wife, is not very well. We are both getting old, and beginning to think our work is nearly done.

My Dictionary will ere long be wanting a new edition, but I shrink from the labor, of it. I would like to get some younger man associated with me in it---but who can I get?

Verbeck is still in Cal[a]. Ballagh, Miller & Stout of the Dutch Mission are all at home, but intending to return.

My son & wife are well & living nearby. My wife joins me in kindest remembrance to Mrs Williams, and yourself.

Affectionately yours,

J.C. Hepburn

[P.S.] I send you a Yokohama paper, to supplement my letter.

(15)　2010年9月国際会議研究発表（瀋陽市東北大学）、　英文発表原稿

The Western Hills near Beijing

--- A Study of S. Wells Williams & other Foreign Residents Resorting There in the Summers of 1860s and 70s ---

(1)

This is an unusually hot summer, they say; we are suffering from the heat in almost any part of the globe. On his arrival from New York at Macau in the autumn, 1833, S. Wells Williams (1812~84) found the climate there comfortable. He came to like the southern China climate very much, telling his father in one of his early letters, dated Canton December 16, 1833, that:

"Here, the thermo. hardly below 50° yet it is considerably cool, and the Chinese have just begun to pile on clothes as their way is, one above another, till they got so stiff with cotton-stuffing, & batting, buckram & fur & woollen, that they can hardly walk; here also, brown & blue have been exchanged for white and a small fire is more comfortable than none at all."[218]

In another letter, dated Canton September, 1835, Williams tells us his way of spending the summer in Canton, commenting on the summer temperature there:

"Our 'below zero' country [Utica, New York, his native place up in the north] as you say, is contrasted sure enough with this climate. Here all our dress does not weight more than a couple of pounds or so; we sleep between two coolness; and then take a fan to bed, inside of the musquito curtains, which are hung around the bed for safety. The

[218]SWW (SWW) to father, dated Canton 1833/12/16; the SWW Family Papers of the Yale Univ. Archive.

thermon. is about 88° or 92° the twenty-four hours."[219]

Much later on, in 1847, SWW tried his best to persuade his fiancé, Sarah, whom he wanted to take to the southern part of China as his wife, reassuring her of much comfortable climate there in this way:

"You speak of the heat affecting you, & prostrating your energies so as to render you useless or at least unwilling to make any exertion, and so I have it here. I never felt it so hot in Canton as I have in New York... The heat at Canton is, to be sure, longer continued, but it seldom rises above 86° or 88° in summer, in winter falls about to 35° & 40°, rendering fires & warm clothing agreeably pleasant, but not changing the color of vegetation.... The ladies who have gone to China have usually enjoyed health, and almost none of those who have died have been carried off by any disease referrible to the climate...., but so far as my own experience & observation goes, the climate is good. Mrs. Diell was there some time, & can speak on this head"[220].

As late as in 1853, just before his departure to Japan accompanying the Commadore Perry's Expedition to Japan, he had made arrangements for his wife and children a house in Macau, and told her in his letter dated May 10, 1853, that "Perhaps you may find it too hot to stay in Canton till June 1st & inclined to leave earlier."[221] S. Wells Williams who wrote these letters was one of the early Protestant missionaries sent out to the southern part of China by the American Board (ABCFM) as a missionary

---

219 SWW to father, dated Canton 1835/09/25; the SWW Family Papers.

220 SWW' letter to fiancé, Sarah Walworth, dated 1847/ 07/ 14; the SWW Family Papers.

221 SWW to wife Sarah, dated On board ship, 1853/05/10; the SWW Family Papers.

printer in 1833. He stayed on in Canton and Macau, for nearly 20 twenty years. He studied the Cantonese first of all while printing and editing the English monthly, the *Chinese Repository*. When he got a sabbatical leave in 1845, he stayed in New York 76 months, in order to write the well-known book of his, *The Middle Kingdom*, the very first and lasting authority of the American studies of China and her people.

After the intermediate period in the mid-1850s, while first serving Commodore Perry as the chief Japanese interpreter to open the door of Japan in 1853~54, and then accompanying the American mission in 1858~9 to the Chinese court as an Chinese interpreter, Williams was invited finally to move to Beijing in 1860 as the Chinese Interpreter and Secretary of the first American Legation in Beijing, and resided there for another twenty years. His life-long stay in China over 40 years, therefore, can best reflect the ways of early foreign residents' acclimatization and their life style, especially in summer, in the northern as well as the southern parts of China.

(2)

Although Williams found his life of Canton comfortable, he much preferred Macau to Canton, for a number of reasons. One of them was due to the climatic difference. In Macau he could enjoy the cooling breeze from the sea. He used to enjoy walking early in the morning there. Another was the social climate, for he could have benefits of the foreign community, including female residents' society as well as the Portuguese

cultural environment.

The foreign residents of Canton, all of them being male merchants, they were likely to regard Macau fondly as a comfortable summer resort in order to escape their more or less confined way of living within the narrow lot of foreign factories (十三行街). In their minds there seemed to be more benefits of the freedom and soft breeze in Macau than in Canton.

When Williams started living in Beijing in early 1860s, he found a number of disadvantages there. One of them was relevant to the foreign community. The then Chinese Government allowed nobody but missionaries and diplomats to live in Beijing. Williams used to enjoy the company of such American merchants as Nye, Olyphant, King in Macau. No foreign merchants in Beijing. Another disadvantage was a housing. Williams had to buy a lot and build a huge house on his own money, thus preparing the American Legation house for the first resident plenipotentiary, Anson Burlingame, as well as his own house. Another disadvantage was due to his residence in the midst of Chinese citizens.

Now let's listen to his early reactions to all these disadvantageous aspects when he turned a leave from the life of Macau and Canton to that of Beijing. In one of his letters to his younger brother Robert in Utica, he wrote in the midst of the summer of 1862:

"You think I ought to tell you something about Peking, but descriptions fail woefully where there is so little in common with what you've seen.... But the noisome streets, stinking pits and scavengers, dusty ways and lothsome beggars, seen when one

descends from the wall and goes thro' other [enceinte], takes, away the pleasure of the impression and brings one back to the reality of heathenism: it also makes one more thankful for what Xty has done for us."[222]

Another reference to the experience of his first summer in Beijing is found in his letter to his wife Sarah written just a week later as follows:

"We are still living at the French Legation, but Mr. Burl^{e}. intends to going up the Hills to relieve Kleczkowski of some of us for a few weeks, while I stay to look after the house repairs; however, I think B. will never go there, he is too inert. As soon as the house is habitable, I shall leave, if I am alive & well, and go south. I have every inducement to hurry the workmen therefore. The cholera is nearly gone, and all foreigners have been spared, of whom there are 80 in Peking."[223]

This letter is an interesting document in more than one way, but especially in the sense that our subject today, the Western Hills, was first mentioned by Williams in his unpublished letters.

Further reference to the summer resort near Beijing can be found in a book, *The Attaché at Peking* (1900), written by A.B. Freeman-Mitford, whose memoir of his experiences at the British Legation in the 1860s Beijing contains many interesting descriptions of his "temple life" [224]in the Western Hill.

We see that, just as foreign residents of Canton had resorted to Macau habitually

---

[222] SWW to brother Robert, dated Canton 1862/08/01; the SWW Family Papers.

[223] SWW to wife Sarah, dated Peking 1862/08/07; the SWW Family Papers.

[224] A.B. Freeman-Mitford: *The Attaché at Peking* (Macmillian, London, 1900), p.99.

during their summers in 1830s, 40s and 50s, the first resident corps de diplomatique looked for a likely summer resort in 1860s and 70s, and found it in the eight temples of the Western Hills, 14 miles away from Beijing, so that they might evade the heat, dust, epidemic cholera and squalor, which mostly likely disturbed them in the Old Peking life during summer time.

(3)

At the beginning of each summer in 1860s and 70s, resident foreign diplomats and missionaries used to haunt the Western Hills. Williams apparently missed a chance to stay in one of the temples there in 1862, but from 1863 on almost every summer he went up to Hills with his family and missionary colleagues, such as Rev. Blodgett and Mrs. Bridgman, to stay at one of the eight temples there. His summer life there eventually became one of the most cherished memories of his long stay in China. In order to illustrate the typical way of life he came to develop at this particular temple, let's listen to what he said in his words. As early as in the summer of 1864, he wrote in his letter to his brother Frederick, dated "Temple west of Peking called Chang-ngan-sz, or Monastery of Perpetual Quiet, Aug. 12, 1864:

"We are spending a month or two at a temple about 14 miles W. of Peking, situated at the base of the Hills, which commence the plateau of central Asia. It forms one of a group of eight separate monasteries cared for by 20 priests or more in all, and in the

lowest down; the Russian, Am. & French ministers occupy others higher up the hill, embosomed in groves of trees and affording extensive views of the plain toward Peking. Ours is spacious & clear, but not so new as some of the others; it contains three terraces within the wall, & has 8 or 10 different buildings altogether arranged around two courtyards that contain many trees…

"Among the trees in the compound, are six specimens of the white pine, of which is, I am told, over 500 years old; this tree is covered with a white bark nearby in the outmost branches, as white as if the whole trunk had been white washed like the bit I send you; the bark flakes off like the shellark hickory, & this keeps the tree constantly white, and fresh. It is truly a fine tree, & has been introduced into England & France, where I am inclined to think it will not show such a white trunk, because of the humid climate compared to this. Other trees are jujube plums (here called dates) persimmons, peaches, docurts (Sophora) arbor vitœ, crape myrtle (Lagerstroemia) walnuts, and firs, besides flowers and pots containing gold fishes. It is a pleasant summer retreat from the dust & smell of Peking, & we have rejoiced in clambering the hillsides and breathing fresh air for six weeks. The region hereabouts is nearly bare of woods on the hills, but the groves of trees around the graveyards are large. All this region is cultivated like a garden."[225]

A special feature of the temple, 長安寺 founded in 1504[226], is its spaciousness, while it has such an unique tree as Williams noticed it in the above-quoted letter, a white fir tree. His botanical pursuit is noticeable as well, and we know that he found a few

---

[225] SWW to brother Frederick, dated 864/08/12; the SWW Family Papers.

[226] See the guidebook, XI SHAN DA GHU, published by the 北京西山八大処公園.

new species of fungi and plants, such as "*Sambucus Williamsii*" and "*Panicum Williamsii*" in the summer of 1864, near Beijing[227]. We may be allowed to make a further remark here on his botanical interest belonging to his earlier period: during his visit to Japan he had discovered a few new species, such as "*Clemantis Williamsii*" on April 20th, 1854, in Simonda[228]

It took a few summers, however, before he finally spotted his favorite temple. Eventually, among the eight temples he developed his fondness to a particular temple, a rather small one in size, named 三山庵 founded in 1151, which he liked to rename in English as Tremont Monastery. The letter was addressed to Olypant, and dated Tremont Temple among the Hills West of Peking, June 10, 1867:

"We have called the old monastery, where I am spending a few weeks with my family, the Tremont Temple, because its Chinese name has that meaning, the *San-shan-ngan* exactly corresponding to Tremont Monastery. It forms one of eight Budhistic establishments which the devotion of former generations has left on this hillside, rising one above the other to a height of 600 or 800 ft. above the plain; they are now neglected or just kept up by a few devotees who make a holiday in the spring time or other time, and call it religion. Some of them were endowed by imperial bounty and show a lavish expenditure where every brick and peck of mortar must be carried high up the hill; but no emperor or grandee has been here to stay for a long time, and this year & last every available room has been taken up by foreigners, who escape the dust & heat

227 Emile Bretschneider: *History of European Botanical Discoveries in China,* 2 vols. (Sampson Low, Marston Co., London, 1898). Vol. 2, p.680.
228 Ibid., vol. 1, p. 389.

of the city. Mr. Burlingame occupies the large one above this, & Alcock the one below, while the Spanish minister de Mas has taken another. The climate is so dry that there is little decay, and the walls remain much as they did 150 or 200 years ago. The few repairs needed are done usually by foreigners, and we pay something for rents besides. Altogether, the advantages of these secluded retreats are numerous, and we are happy to avail ourselves of them."[229]

The above quotations from the letters written by Williams in Beijing tell us that not only his boss, Anson Burlingame, but also the French Legation represented by Kleczkowski, the Russian minister, the Spanish minister and the British minister, Rutherford Alcock, all resorted to the Western Hills, which became something like a summer resort of our age.

Williams is not the only one foreigner who fondly remembered about their sojourn there. A.B. Freeman-Mitford was a member of the Alcock's British Legation, and before ending this paper I should like to invite you to listen to what he wrote in a charming way:

"Pi Yün Ssŭ 7th July 1865

"You will see by the date of this that we have beaten a retreat from the dust, heat,

[229] SWW to friend, G.T. Olyphant, dated Tremont Temple 1867/06/10; the SWW Family Papers.

and filth of the city, and that our 'villegiatura' has begun. Indeed, Peking was becoming insupportable. The thermometer when we left was at 108°in the shade, the highest degree which it has reached these three years, and I was heartily glad to turn my back upon the Legation gates.

"The plain between these hills and the town is very beautiful. It is thickly studded with farmsteads, knolls of trees, and tombs, which are always the prettiest spots in China, for as a balance against the dirt and squalor in which they pass their lives, the Chinese choose the most romantic and delightful places for their final habitations. The soil is wonderfully fertile, and yields two crops in the year, so that usually the plain bears every appearance of prosperity; but this year, owing to the excessive heat and drought, the first crop has failed, and the fields are parched and burnt up.

"The hills west of Peking are the Switzerland of Northern China,. They are not very high nor extraordinarily beautiful, but there are some very pretty gorges and valleys, richly wooded, and at any rate the air is fresh and pure. Every gorge has a perfect nest of temples, built by the pious emperors of the Ming dynasty and the earlier Tartars, for which good deeds the *Corps diplomatique* at Peking cannot be too grateful. Properly speaking, according to the rules of their order, the Buddhist monks are forbidden to receive any money for hospitality which they offer to strangers, so when the Chinese go to stay at a temple they restore or beautify some part of it as a return; but we prefer paying a few dollars, and in spite of their statutes the arrangement seems to suit the monks as well it does us."[230]

---

[230] A.B. Freeman-Mitford's *The Attaché at Peking* (1900), pp. 87-9.

(16) 2012年3月国際研究会発表 (平文研究会)、英文配布資料

Morrison, Milne and Medhurst:

A Note on Protestant Missionaries' Early Attempts at Forming and Applying the Metalic Moveable-Types in China

1 Robert Morrison (1782～1834)

Mrs. Eliza Morrison, who compiled her husband's biography out of miscellaneous sources, writes that "The Journal of the voyage from New York to Canton appears to have been lost. The defect is tolerably well supplied by the following extracts from letters, which were probably copies, or nearly so, of his daily journal." [Mrs. Morrison's Memoirs, Vol. I, p.140]. One of the letters, though addressed to an unknown recipient, announces his approach to Macau: "August 29, Chinese Sea---You perceive that I now approach the land to which I am sent. We hoped that we should today have reached the island of Macao; but very light winds and calms have detained us." [Ibid., p.151].

After so vast a expanse of space and time as 113 days from the time of leaving New York, Robert Morrison finally set his first step on the peninsula of Macau on Friday, the 5th of September, 1807, "and unexpectedly found there Sir George T[homas]. Staunton [1781～1859]." [Ibid., p.153]. When he waited on Staunton, with the Sir Joseph Banks' letter of introduction in hand, Sir George "reminded me that the [British East India] Company forbade any person to stay [in Canton and Macau] but on account of trade, but promised that he would do what was in his power. The residence in Macao is especially difficult, owing to the jealousy of the Romish bishop and priests." [Ibid., p.153].

So Morrison had no choice but to move on to Canton under the title of an

American merchant as well as in the disguise of a Chinese costume, and arrived at the American Factory there on September 8th. All the difficulty he experience on his destination in China indicates his mission. The London Missionary Society had given Morrison, their first missionary to China, the general instructions dated London, January 20, 1807, before his departure to China by way of New York.

> "We trust that no objection will be made to your continuing in Canton, till you have accomplished your great object of acquiring the language. When this is done, you may probably, soon afterwards begin to turn this attainment into a direction which may be of extensive use to the world: perhaps you may have the honour of forming a Chinese Dictionary, more comprehensive and correct than any preceding ones; or the still greater honour of translating the sacred Scripture into a language spoken by a third part of the human race. If it should be expedient that you remove to Canton, the place to which you may remove may be decided by your discretion." [Ibid., 96]

Among many testimonies written or carved, the Morrison graveyard [Ride, pp.229-233] at one corner of the Protestant Cemetery in Macau bears an important testimony to his accomplishment of three major duties during over 25 years' stay in China: 1st, his mastery of the Chinese language; 2ndly, his application of it to the compiling a Chinese Dictionary; 3rdly, his translation of the Bible into Chinese.

As for the first duty, namely, his learning of the Chinese language on the spot, Morrison owed much to Staunton, who eventually turned out to be his predecessor in

two ways: the mastery of the Chinese language and the job of interpreting and translating for the British East India Company. As early as 12th October, 1797, when he signed his book, *A Complete View of the Chinese Empire*, for publishing next year in London, Staunton had written his observations of the Chinese language on the spot:

> "It is evident that the Chinese language has neither been derived from, nor mixed with any other. At Canton, indeed, it has been found necessary to publish an English vocabulary in Chinese characters, for the use of the native merchants, who thereby learn the sounds of English words…
>
> "The Chinese characters are so many sketches, or abridged figures, and a sentence consequently becomes a string of metaphors. The auxiliary particles of colloquial conversation are, however, excluded, and on these accounts the study of the language is difficult. As it is made up of hieroglyphics, we may easily conceive how the acquisition of Chinese words can engross most of the time of their men of learning. But enough of the language may be acquired by foreigners for ordinary purposes and converse; and further improvements must be the result of capacity and application." [Staunton, p.447]

A modern reader may perhaps wonder why almost no mention was made of ways how to print the results of their hard labours either by Staunton or the London Missionary Society or Morrison. This is the first stage of missionary activities in China, and the way of printing belongs to the second stage in the 1820s.

2 William Milne (1785〜1822)

When the London Missionary Society decided to send their second missionary to China, their choice was William Milne, who grew up as an orphan since 6 years old. Milne had picked up those rustic skills of a shepherd and carpenter which he was to take the best advantage of in his later missionary work in China, especially in the practical field of labour, printing. Ten years after his early death in Malacca, E.C. Bridgman, the first American missionary in China, commemorated him by writing a lengthy sketch of the life and labours of the late Milne in one of the early issues of the English monthly, the *Chinese Repository*:

> "Respecting his [Milne's] first application to the committee [of the London Missionary Society] at Aberdeen, who were to decide whether he should be accepted, and should prepare for the [missionary] work, there is an authentic anecdote told, too characteristic of his life spirit to be suppressed. When he first came before them, his appearance was so rustic and unpromising, that a leading member of the committee said, 'he object to recommend him as a missionary, but would not object to recommend him as a *servant* to some mission, provided he were willing to go in that capacity.' When this proposal was made to Milne, and he questioned upon it, he immediately replied with a most animated countenqance, 'Yes, Sir, most certainly; I am willing to be anything so that I am in the work." (Bridgman, p.318)

"In fact he became a helping hand to Robert Morrison, especially in working

out the method of printing his predecessor's labourious works. William Milne with his newly-married wife arrived at Macau opn July 4th, 1813. The same fate with Morrison awaited them: "After a few days's residence, to leave Macao in 24 hours…

"According to views which had long been cherished by Dr. Morrison, a station was needed for the mission, as a centre of communication and action, and where Christian books might be safely published, Dr. Milne was selected to locate, at Malacca, the hitherto unsettled mission." (Ibid,, p.320)

Milne's valuable work in Malacca was the translation of thirteen historical books from the Old Testament as well as writing tracts in Chinese: "He wrote also in Chinese not less than fifteen tracts, varying ten to sevnty [*sic*] leaves" (Ibid., p.323). The more important work that he accomplished there, unmolested by the Chinese authorities, was relevant to printing. Milne printed the Chinese works of his own by means of the traditionally Chinese method of wood-block printing. This is why we may rightly like to honour him as the first missionary-printer in China. Joseph P, McDermott of Cambridge University, in his recent study on *A Social History of the Chinese Book* (2006) seems to guarantee this this idea: "My interest in Milne's work is not due to its rarity and originality but to the quality of analysis of issues that have long bedeviled the study of Chinese book history." [McDermott, p.14]

Milne believed in the availability, efficiency and economy of adopting the traditional wood-block printing, which led him set up his Malacca press in that style. He took the trouble to take a number of Chinese carvers and workers including Leang Afa from Macau to Malacca. His life was too short for experimenting with new forms

of printing.

3 Walter Henry Medhurst (1796〜1857)

Walter Henry Medhurst was sent out to China by the London Missionary Society in 1816. According to McDerment, Medhurst was "a missionary-printer successor to Milne." (Ibid., 16). Medhurst appears to have been chosen on account of his professional skills and experience as printer, though he shared with his two predecessors, Morrison and Milne, the difficult situation of staying in Canton and Macau as well as the three given duties. Medhurst stayed on in Batavia on the Java island, where he lived among Chinese immigrants to study their language on the spot and to evangelize Christian doctrines to them. In 1837 the missionary press of the *Chinese Register* printed for publication one of the results of his hard study, "Huk-keen Dictionary", whose printing process S. Wells Williams, a newcomer, was in charge of. Medhurst' second duty was to apply the linguistic knowledge for useful purposes, and he is now most prominently remembered for his patient attempt at improving Morrison's Bible translation.

Alexander Wyle (1815〜1887) in his informative article, "The Bible in China", left us with a rare description of Medhurst's devotion to the new Chinese version of the Bible, especially in connection with the inter-denominational Committee of Delegates.

> "In the summer of 1847, the work of the several local Committees being in an advanced stage, a general Committee of Delegates from the several ports was

convoked and met at the house of Dr. Medhurst at Shanghai in June. With the exception of a few months the same year, during which there was a cessation, the work was continued without intermission till the 24th July, 1850, when the New Testament was brought to a complion, and the labours of the Committee ended. Day after day the Committee met at the house of Dr. Medhurst, the President, aided by the co-operation of four or five native scholars, some of them men of superior qualifications…

"Our sessions occurred daily, opened with reading a portion of the Sacred Scriptures and prayer, and extending from 10 o'clock A.M. to half-past 3 o'clock P.M. The method of proceeding in Committee was to consider verse by verse, word by word, allowing each individual opportunity to propose any alteration that he might deem desirable. The several members of the delegation had their native tutors with them, three of whom continued with us for six years in our daily sitting, rendering most valuable assistance. Each day before adjournment, the portion of the Scripture to be considered at the next meeting was specified, and a rough draught of its translation offered by the Chairman, so that each member might duly examine and compare the same." (Wyle, pp.103-4)

発表初出一覧

2008年4月1日~2011年3月31日　研究継続期間

(1) 2011年2月2日作成　日文報告

科研費研究の総括的報告

(2) 2011年2月2日作成　英文資料

The Out Letters of S. Wells Williams　at the Yale University Library Archive: A List

(3) 2010年4月出版　拙著から日文論文の抜粋

米国文書伝道師　S・ウェルズ・ウィリアムズ

(『国際理解の四重奏』「第二章　米国文書伝道師　S・ウェルズ・ウィリアムズ」、高城書房、2010年4月18日発行、pp. 61~84)

(4) 2012年3月発行　紀要日文論文

避暑地としての北京西山八大処：1862～1868年

(『埼玉女子短期大学紀要』 No. 23、2011年3月31日発行)

(5) 2010年3月発行　紀要日文論文

アンソン・バーリンゲイム伝記研究（一）

(『埼玉女子短期大学紀要』 No. 21、2010年9月30日発行、pp. 243~277)

(6) 2010年7月発行　学会発表論文集から抜粋の中国語論文

１９世紀初期旅居澳門・廣東傳教士對日語的研究

(『東亜漢學回顧與展望』長崎中國學會創刊号、2010 年 7 月 24 日発行、pp. 346~52)

(7) 2010 年 3 月発行　紀要日文論文

日本開国に於ける澳門の歴史的位置に関する試論的考察

(『埼玉女子短期大学紀要』 No. 22、2010 年 3 月 31 日発行、pp. 117~149)

(8) 2009 年 3 月発行　紀要英文論文

A STUDY OF S. WELLS WILLIAMS' EARLY LETTERS

(『埼玉女子短期大学紀要』 No. 20、2009 年 3 月 31 日発行、pp. 11~31)

(9) 2008 年 12 月国際シンポジューム発表　英文原稿

Americans in Macau and the Opening of Japan

(澳門大学歴史学部主催　Americans, Macau and China,　2008 年 12 月 8 日~9 日)

(10) 2010 年 11 月発表　講演会資料

国際理解の四重奏

(鹿児島国際大学国際文化学部講演会、2010 年 11 月 17 日)

(11) 2008 年 9 月国際シンポジューム発表　英文原稿

The *Chinese Repository* (1832-- 1851, Canton & Macau)

and Its Historical Significance

(日中人文社会科学学会主催　石家庄市河北科技大学文法学部　2008 年 9 月)

(12) 2010 年 11 月月刊雑誌書評

書評：楠家重敏著『アーネスト・サトウの読書ノート』

(日本歴史学会編集「日本歴史」２０１０年１１月号、吉川弘文館発行、pp. 126-8)

(13) 2011 年 3 月国際研究会発表、日文発表原稿の中文翻译

鲁迅著作的英、日文翻訳

(北京魯迅博物館学術報告会、2011 年 3 月 11 日開催、北京魯迅博物館図書館会議室)

(14) 2011年3月12日国際研究会発表、英文配布資料

The Letters of Dr. James C. Heburn and His Wife Clara to S.Wells Williams

(平文研究会成立會、杭州市浙江大学人文学院歴史系中国古代史研究所、2011年3月12日開催)

(15) 2010年9月国際研究会発表、英文発表原稿

The Western Hills near Beijing

(瀋陽市東北大学・第二回中日文化比較シンポジューム、(2010年9月9日~10日開催)

(16) 2012年3月国際研究会発表、英文配布資料

Morrison, Milne and Medhurst: A Note on Protestant Missionaries' Early Attempts at Forming and Applying the Metalic Moveable-Types in China

(平文研究会成立會、杭州市2011年3月12日開催)

２０１１年3月１４日　中国杭州市

研究代表者　宮　澤　眞　一
埼玉女子短期大学

科研費研究課題番号：　20520270